
あずさが通る！

antipas group

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あずさが通る！

【Nコード】

N0971W

【作者名】

antipass group

【あらすじ】

人間観察が趣味というヘンな女の子、倉下梓に巻き込まれていく人々の数奇なストーリー。九州の片田舎は熊本県を舞台にして、無意味に繰り広げられる心理話。人なら誰しも考える…心の中の深いところにある不思議なコト、哲学的なコト、小難しいコトを残さず解き明かせっ！！

人間観察 vol.01 (前書き)

熊本大好きなんです、先日久しぶりに行ったら、新幹線開通の影響でしょうか、駅前がガラリと変わってて驚きました。この話は昔の熊本駅前だと思って下さいね。

人間観察

高川千佳はいつも僕を無邪気な目で見てこう言う。

「なあなあ、なんか面白い話してー」

「もうなにもネタがない。どれだけ話させりゃ気が済むんだよ」

「だって、緒山の話はいつも面白いんだもん」

彼女は僕が誕生日にあげたピンクのスヌーピーのキャップを振って、宙を見ながらそう言った。

「帽子ありがと。着こなしが難しそうだけど」

「おう。昔同じ帽子を被ってるいい女がいてな。たまたま同じなの
が売ってあったから、買ってきたんだよ。そいつは上手く着こな
してたよ」

「…は？」

彼女は一瞬だけ不機嫌な顔を見せると、すぐにニンマリな笑顔を取
り戻しこう言った。

「じゃあその女の話聞かせて」

しまった、と思いつつももうすでに諦めている自分がある。

なんたつてこの高川ときたら、一度自分が興味を示した話は、なん
としてでも聞こうとするからだ。溜息をつきながら、

「話長い上にオチもないし、第一つまらないぜ」

と言う。そんなことはお構いなしに、彼女が目をキラキラさせて、
大きくウンウンと頷くのもいつものことだった。

昔、僕がまだ浪人してた時の事だ。予備校はたいいてい駅の近くに
ある。僕が通う予備校は放任主義だったので、みながマイペースで
勉強する。当然、ほとんどの人は予備校に行かず、近くの駅とその
周辺のお店やゲームセンター、ファーストフード店や本屋さん、駅

周辺に置いてあるベンチなど…いくらでもある人が居付きそうな場所
所で遊ぶことになる。

「あかんやん」

即座に高川が突っ込みを入れる。

「でもまあそんなものなんだよ。帰ってから勉強するんだわ」

「予備校の意味ないやん」

「もちろんたまには行くけどね。そんでな…」

四月。JR熊本駅は、田舎の駅とはいえ県庁所在地、人通りは多い。二浪目が決定した春、いつものようにバカメンバーが群がる。全員が予備校の初日の講義登録に来た人間だ。実はほぼ全員が、そこそこ頭がいい。しかし、医大や有名国立・有名私大狙いの人間は現役時や一浪目の時に受かった大学を馬鹿にして、もう一年頑張ればもつといい所にいけるはずだ…と考えて、もう一年勉強する選択肢を選ぶのだ。もちろん予備校周辺で遊ぶライフスタイルが居心地いいから…という理由が全く無いわけではない。今が面白い上に、未来にも希望が溢れているから、この選択肢が最良のものだと考えるのであった。

僕が通っていた予備校は超大手だから、県内各地から人が来る。予備校において、そこには学年というものは無い。先輩も後輩も同じ授業を受けることになる。高校は別でも、小学校や中学校の時の同級生、高校の時に一度きり遊んだだけの余所の学校の人、話にだけは聞いていた友人の友人…など、本人も予想だにしない出会いや再開も少なくない。

四月も半ばを過ぎて、大学に受かって抜けていった二浪の代のメンバーを、新しく入った一浪の代のメンバーが補充し、グループが形成される。紹介に紹介を重ねて誰かの友人、誰かの知り合いという伝手があつて、普段つるむグループが出来上がる。そうして少しずつ対人関係がこなれていくのである。

彼女を初めて見たのはそんな時…春の時期だった。

駅に隣接するゲームセンターの二階には大きな窓があり、そこから駅前すべてを展望できるのだが、最近いつも駅のと真ん前の植え込みを背にして座っている女の子がいる。しかも可愛い…ということ。グループの中で話題になっていた。年のころは同じくらいで、可愛いだけでなく、ファッションが奇抜なので、とにかく目立つ。茶髪の「ち」の字もないほどの透き通るような黒髪で、全くクセのないストレート、長さはセミショート。目はとても大きく、口は小さい、背丈は百六十センチくらいで、細身で色白、胸はそれほど無かった。

「お前は巨乳が好きなのか？」

「別にどっちでもいい。胸の大きさを判断したりはしない」
高川はホツとした表情で胸を撫で下ろす。わかりやすい奴…。

ファッションは毎日くるくると変わる。ほつそりしたジーンズ、綿パンの時もあれば、スカートは丈が長い時も短い時もある。同じ服を着てるのを見ることはないくらい、服装は毎日変わる。奇抜でお洒落、とにかくルックスが目立っていた。

「同じ服着てるの、見たことないってのはお前も同じだが…」

高川を見ながら言う。高川は、自慢げな表情をしてフンと鼻を鳴らす。彼女も異常なほどの衣装持ちだった。しかし、高川とその女の違う点、それはその女の方がジャンル・バラエティに飛んでいるという点である。普通ファッションには、その人のセンスや好みが出るものだ。高川だと、一発でこういうファッションが好きなんだな、とわかる。服は変われども高川のセンスで統一されているからだ。しかし、その女の毎日の服装からは、ファッションセンスは感じられるものの、あまりにもジャンルが飛びすぎていて…なんというか、異常だった。

そんな中でも、いつも身につけているものもあつた。カバン…赤い皮のランドセルや黒い編み上げブーツがそうである。これらはさすがに毎日とは言わないが、かなり高い確率でいつも身につけていた。赤いランドセルといつても、もちろん小学生が持つようなものではなく、ちゃんと大人用にデザインされたブランド物だったのだ。…今までの人生の中でも、その女以外が身につけているのを見たことがないほど…稀少奇抜であつた。彼女は名前を知られるまで「赤いランドセルの女」と皆から呼ばれていた。このことから誰の目から見てもランドセルが一際目立つたパーツであつたことがわかる。

しかし、面白いというか…解せないのはルックスだけではない。赤いランドセルの女は一日中、駅前の植え込みのそばにしゃがみこんで、駅前を通る大勢の人々を見ている。じつと見ているのだつた。誰かを待っている様子でもなければ、誰かを探している様子でもない。ただ見てるだけである。その姿をゲームセンターの二階から見ている僕らは、まったくもって何をしているのか予測することもできず、

「あのコは一体毎日毎日何をしてるんだらう？」

「なんであんなにコロコロ服装を変えるんだらう？」

「でも本当に可愛いなあ、名前はなんだらう？」

…などと、いろんな意味で注目の的になつた。

ゴールドデンウィークも過ぎた五月の半ばあたり、いつも通り、好きな講義に顔を出したあとは、たまにはいいかと自習室に行き、そこそこの時間勉強した。退室して廊下に行つて、連絡事項や成績上位者が張り出される掲示板を、何の気もなしに見ると…自習室で一緒になつて連れ立っていた平沼君という一浪のメンバーがこう言つた。

「こいつらは一日どれくらい勉強してるんだらうな…。家森君も入つてるわ。彼…全然勉強してないのに」

笑いながら、少々嫌味つたらしくそう言う。家森君というのは、二浪メンバーとして予備校に在籍しているのに、ほとんど講義にも、その周辺の溜まり場にも顔を出さず、普段何をしているのかわからないという。メンバーの中でもなかなかレアな人だった。ラ・サール高校という国内でも上から数えて何番目という、超成績優秀進学校の落ちこぼれであった彼は、医学部狙いのため、少々成績上位者リストに貼り出される位では志望大学には受からない。

「腐ってもラ・サールだよな。高校で落ちこぼれて毎日遊び呆けててもセンターで七百取ってくるからなあ……」

あまり意味のない会話だな、と思つて予備校を出ようと階段の方を向く。…目を疑う光景がそこにあった。赤いランドセルの女が、予備校の廊下を歩いてこつちに向かってくるのだった。

人間観察 vol.01 (後書き)

どんどん更新していきますので、読んでやってくださいませ。

人間観察 vol.02 (前書き)

梓さんは横分けなので前髪はナイです。

本日の服装は、真っ白でフリフリが付いた少々ゴシックな感じのシャツに、黒いヴィジュアル系アーティストのようなロングスカート、黒の編み上げブーツと赤いランドセルはデフォルトのまま、今日はゴスロリ風の服装だろうか。まるで人形のようなだった。漆黒でまっすぐのストレートの髪も合わせて様になっている。一瞬戸惑いながらも…話しかけるわけにもいかず、擦れ違っしかないと思っただ瞬間、また一つ驚くことが起きた。

「倉下じゃん。久しぶり、元気!??」

平沼君が、普通に赤いランドセルの女に話しかけるのである。あれあれ?と軽く動転しつつも平静を装い、その場に第三者としていようとすると、彼女は僕をチラッ見たあと、平沼君の言葉に、

「元気元気!沼ちゃんも元気そうじゃん!また一緒だね!あ、その髪型かっこいいねー」

と、かなりテンション高めの大声で返答した。

植え込みのそばでしゃがんで、…どちらかというと暗めの表情で、そこに行く人を見続ける彼女からは、まるで想像できない言動だった。しかし、彼女が浪人生で同じ予備校生だったとは…まったく知らなかった。灯台下暗しとはよく言ったもんだ。全然予想できなかったなあ…などと考えていると、

「最近どう?」

とか、

「ちゃんと勉強してる?」

とか、

「高校の時の友達と会ってる?」

など、差し障りのない会話を済ませた彼女は、平沼君にこう言った。「この人、新しいお友達?早く紹介してよ」

赤いランドセルの女は、こっちを見てニコニコしながら、まだかまだかという感じで、頭を左右に小刻みに揺らしている。

「おうおう、紹介するよ。こっちは緒山先輩。三巻先輩を通して予備校で知り合ったんだ。緒山君、こっちは倉下、高校の時の同級生で俺と同じ一浪」

「倉下梓です。よろしく」

と右手を差し出す。

イメージの違いからか、展開の早さからか、少々戸惑いながらも、「よろしく」

と言つと、彼女は、笑ったまま

「握手わあ〜〜?」

と言い、こちらの手をつかんでブンブンと上下に振った。さらに戸惑いながらも…、

「はは、面白い人だ」

と笑つて、なんとかコメントすると、彼女は、

「そうでしょう!わたし面白いの」

と、ニコニコしながら、

「面白い人だけど、今日は勉強すんの!二人ともまたね!」

と言つて、自習室のほうへ歩いていった。

「変な女でしょ?」

笑いながら平沼君が言った。

「だなあ、同級生だっけ?」

と、少々興味があつたし、もう少し彼女の情報が欲しいと思つた僕は、平沼君に話をさせようとさりげなく話題を振る。

「うん、中学も一緒。高校なんて三年間同じクラスだった。物怖じしないっていうか、男になら誰に対してもあんな感じで親しくしてさ、まったく人見知りなく話しかけるんだよね。でも女子からは…女子とはほとんど話しないからすげー嫌われてたわ。ま、でも当の本人はそんなの気にもしてないって感じだったけど」

「へえ、ファッションは奇抜だけど可愛いじゃん。そんであの人な

「つっこい性格だったら、モテるでしょ？」

「中学や高校の時は制服しか見たことなかったから知らなかったけど…あいつ、ファッションもイってるねえ…ていうか、緒山君ひよつとして惚れた？」

笑いながら彼はそう言う。そして、

「でもあの娘はやめといた方がいいよー、趣味もやばいからねえ」と続けた。

「別に惚れてはいないけど、趣味がやばいって??？」

「そう、人間観察」

「ん??？」

「だから趣味が人間観察」

「???:人間観察ってなに？」

「言葉そのまんまだよ。人を観察して、その人が何考えているかとかを予想して楽しむんだってさ。俺には全然理解できないんだけど、本人曰く最高に楽しいらしいよ」

「…なんだそれ。初めて聞いた」

「だしよ。だから変わった女だって言ってるじゃん」

…そうか、じゃあ朝から夕方まで、駅前の植え込みにいたのはそのためだったのか。確かにここ、JR熊本駅は県内で最も多種多様な人々が行き交う場所のうちのひとつだと言える。JR熊本駅は電車の乗り場だけではない。バスやタクシー、路面電車の乗り場も隣接している交通機関のターミナルだ。老若男女問わず、地元の人も外の人も、学生も社会人も、日本人も外国人も、みんなが利用して、様々な人がごった返す。人を観察するのならうつつつけの場所だな、と思った。

「人間観察ねえ…」

「なにそれ。この話、昔のあなたの女の自慢話になるわけ？人間観察とか意味わからん」

高川は一気に不機嫌な様相になり、そっぽを向きながらブツブツと

言う。どこにも自慢はないでしょうが。と思いつつも、一応断りを入れる。

「結末その一、僕と梓は付き合っていない。付き合っていないどころか、デートすら一度もしていない」

「結末その二、梓とは何年も連絡を取っていない。今後会うこともないだろう」

こうして、結末を部分的にバラしておく、人は最後まで話を聞きたがるものだ。僕に何かしらの好意を抱いていることから出るのだろう、高川の嫉妬の気持ちも、今は梓とは何の関係もないという安心感で抑えられる。高川は気持ちがすぐに表情や態度に出る。無邪気でとてもわかりやすい。案の定、

「ま、聞くまでもなくわかってたけど。あんたがそんなにモテるわけないもんね」

と、セリフとは正反対に、ホッと安心した表情になる。

「まあそんな話だよ。その女…梓がその帽子を被ってたのさ」

「うええ〜そんな気持ち悪い女が付けてた変な帽子なんていりませんー」

などと、憎まれ口を叩きながらも帽子を手放す様子は無い。本当にわかりやすい。梓とは正反対だ。…これで話を切り上げて帰りたいと思ったのだが。

「はよ続き話せ」

「……」

やはりこうなる。これもいつものことだ。

梓は、僕や平沼君を通して、僕らがよくつるんでいるグループに仲間入りした。平沼君の言ったとおり、彼女は誰に対しても物怖じすることなく、積極的に親し気に話しかける。それに対する対応は人それぞれだが、趣味が人間観察だと言われると、その反応を見て楽しんでるように見えなくもない。彼女はとてもアクティブに、気持ちを表情や態度に表しているように見える。そして、それに誰

もが好意を抱いた。

身につける服は奇抜で、行動はテンションが高くて、たまに意味不明。総合すると変な女だが、話をしていて面白いし、一緒にいて楽しい。あっけらかんとして、素直でいい奴で可愛い…というのが大方の人が持つ彼女の印象だった。

彼女は誰にでも親しく話しかけ、本当に星の数ほどの男友達が多かったが、その中の誰とも男女の付き合いはしていないし、親友と言えるほど深い話をした人もいない。かといって、上辺だけの付き合いだけというわけではなく、人という時は本当に楽しそうに話して遊んでいるのだった。

そうして一、二か月も経つと、彼女に付き合いってくれと告白した友人が数人出てきたが、彼女はいつも…、

人間観察 vol.02 (後書き)

当時はビジュアル系全盛だったので、ゴスロリは今とはちょっと違ったカンジでした。

人間観察 vol.03 (前書き)

梓さんはモテてましたねえ。

「あー、本当にごめん…あなたのことは好き。でも私…特定の人と男女のお付き合いはしないって決めてるの。それって…言えば、みんなが友人で恋人みたいなもの。とても変な考え方もしれないけど、今の付き合いで満足して欲しいんだ。本当にごめんね…」

といった感じで、薄っすら涙を浮かべながら申し訳なさそうに謝る。いつものハイテンションな彼女からは想像できない表情とセリフを前にして、男には今の関係を壊したくない、いつも天真爛漫にしている様子を泣かせたくない、という感情が生まれ、

「わかった。じゃあこれから仲の良い友達でいよう。でも俺はいつまでも待つてるから…もし気が変わったら…」

といった風の台詞を残して、今まで通りの関係に戻るのである。

何度かこういった話が噂として聞こえてきた。平沼君が彼女のことを色々と知っていたのは、ただ単に中学校の六年間を一緒に過ごしたせいであり、特別に親しかったからではない。いわば僕らと同じレベルの付き合いだったのだが、知り合ってからの方が膨大だったことにより、彼女のいろんな面を見てきたせいである。

僕らとつるむ時間も増えたが、駅前の植え込みのそばでしゃがんで人を見続けるという、彼女の特異な行動も以前と同じく行われていた。昔は一日中ずっとだったが、今でも毎日三時間以上はそうしている。これに対して、

「お前、なにやってんだ？」

と、駅前を通りかかった友人が話しかけると、彼女は決まって、

「人を見るの！人を見るのっておもしろいんだよ。一緒にどう？」

と言うが、ご一緒すると、特に話もせず本当にずっと人を見続けているだけなので、退屈さとその場の雰囲気になんとも耐えられず、皆退散するのだった。従って駅前の植え込みにいる時はいつも彼女一人で

ある。

時が経つにつれて、僕は彼女に惹かれるようになった。男女としての付き合いが三割くらい、残りの七割は、なぜ彼女はこんなに変わってるんだ？なぜ毎日ファクションをくるくる変える？人間観察ってなんだ？その意味は？その目的は？といった、彼女に対する知的好奇心だった。

先に結末を言ってしまったせいもあって、高川は大人しく話を聞いている。彼女ですら、梓の言動の意味が気になるらしい。

梓のことを深く知るなら…当然、植え込みにいる時に話しかけたり、その様を観察するのが一番効率がいいだろう。二人つきりになって、なにか話も聞けるかもしれない。

夏期講習も始まり、まともな受験生ならそろそろ遊ぶのを止めて集中しないとやばくなるという時期のある日、ゲームセンターの二階の大窓から、植え込みのそばに彼女がいるのを確認して…彼女のところへ行った。

今日の彼女の服装は、真っ白のワンピースにピンクの木製のサンダルと、これまた真っ白くて大きなつばの帽子、その帽子にはピンクの長いリボンが結んであり、余った端は風に揺れてヒラヒラしている。赤いランドセルはデフォのまま、毎日数時間も外に出ているためか、肌は少々日焼けしていた。彼女は僕を見るなり、

「あつぢい〜今日やばいねー、地面がじりじりしてるよ」

と、眉間にしわを寄せ舌を出して、手のひらで顔を仰ぎながら、ワンピースの胸元をパタパタさせている。僕は、

（丁度いいな、打ってつけた…）
と思つて、

「暑い。超暑い。ていうか、こんなにクソ暑いのお前は外で何やってんだよ？自習室でも行こうぜ。涼しいし」

と、さりげなく彼女の目的を聞いてみる。回答はもちろんデフォル

ト通り。

「人を見てるんだよ。私、人を見るのが好きなの。自習室じゃなくてここにいない？暑いけど。滅茶苦茶」

と、本当に暑い暑いという表情でこっちを見る。∴別にここで深く聞くのも変じゃないだろう。

「なんで人を見るのが好きなんだ？こんな暑い中で∴何時間もやることじゃねーだろ」

彼女はうつすら微笑むと、

「人を見て考えるのが好きなの。面白くない？色んな人がいるんだよ。ここには！」
と言った。

「どこでも色んな人はいるよ。∴でも、そんなに面白いなら僕も人を見てみようかな」

僕は彼女のことを知るため∴、このクソ暑い世界の下、彼女と一緒に人を見ることにした。

「へっへっ、きっとハマるよ〜！」

彼女は「やった！」という表情で、植え込みのそばにしゃがみこむ。僕はすぐそばのコンクリの花壇の淵に腰掛けた。ちょうど右斜め上から、しゃがんだ彼女を見下ろす形になる。人を見出した彼女は、ほとんど話さない。こちらからの問いかけにもそっけなく答えるだけで、他の友人たちがこうしている彼女を放っておくのも無理もないと思った。

数日間同じようなことを繰り返したが、そのうち彼女がいない間でもそこにいる機会を作り、彼女が何をしているのか、何が面白いのかを理解するため、彼女と同じく行き交う人を見続けた。そうしてると遠くから彼女がやってくる。

今日の彼女の服装は、胸に *antipass group* と書かれた白地のロケットシャツに、ベルボトムジーンズ、テンガロンハット∴という相変わらず滅多に見ないような格好だ。両腕や首にはかなりの量のアクセサリが付いていて、動くたびにジャラジャラと音

を立てている。もちろん黒い編み上げブーツと赤いランドセルはデフォルトのままだ。

「んん?? 緒山君、何やってるの?? こんなに暑いのに」

彼女は微笑みながらそう言う。

「人を見てるんだよ。…人を見るのは楽しいんだ。良かったら一緒にどう?」

と笑いながら言うと、

「えー、どうしようかなあ?? なんか退屈そう…… だから一緒にする!」

と、ニコニコしながら植え込みのそばにしゃがみこんだ。腰の辺りにもついている大量のアクセサリがジャラジャラと地面に当たる。

それからさらに数日後を境目に、彼女との間にいくつか会話が出てくるようになった。

今日の彼女は、真っ黒いタンクトップにいつもの赤いランドセルと編み上げブーツ、ブラックジーンズに、先日同様ブレスレットやネックレスを大量に付けたファッションで、まるで八十年代のロッカーか、バイク乗りという服装だ。

「ほら、あの人見て。あのおじさんスーツでしょ。昼にスーツで駅を歩いてるってことは…当然仕事でしょ。旅行カバン持つてる…多分出張中ね。だから熊本の人じゃない。スーツはちよつと汚れてるし、ネクタイも少し曲がってるから、何泊かして帰るところかな。大荷物だったら送るだろうし…送らずに荷物を持つてるってことは二、三泊くらいかなあ。指輪してるから結婚はしてるよね。こんな時間から帰るってことは、だいぶ遠方の人だと思うわ。飛行機使わないんだから、遠くても関東くらいね。暑さのせいかもしれないけど、不機嫌な感じ…。とぼとぼ歩いてるし、出張の成果はあまりなかったのかな。それとも家庭の問題かな? あのからいの年代の人って大変そう。怪訝な評定して歩いてる人がほとんどなの。ちよつと早足なのは、電車に乗る為かなあ? ちよつと特急が来る頃だし、そ

うだったら…やっぱり熊本の人じゃないなあ」

そう言つて、矢継ぎ早に続ける。俗に言うマシンガントークだ。

「人つて言うのはね、心を外に映し出すものなの。そこにいるだけで心の情報を外に振りまいているわ。私はそれを汲み取つて推測するのが好きなの。そこにいるだけでもたくさん情報を振りまいてるんだから、面と向かつて喋つたりしたらもう大変！ボロボロと自分の心をこぼしちゃう。当然、その人が知つて欲しいと思つてれば、いっぱいいっぱい見えてくる。でも、逆に隠そうとすれば隠そうとするほどこぼれちゃうんだ」

「…じゃあ、どうすれば隠せるんだ？自分の気持ち」

「本気にならなければいい。人は本気になればなるほど、心の情報を外に振りまく。本気で嘘をつけばつくほど、その人の心情が見える。本気で行動すればするほど、外から心が見えやすくなるものだわ。当たり前だけど、九十九パーセントの人が普段から本気で生きているわ。どうでもいい事をする時、自分を偽る？偽らないでしょ？人は普段から正直にしているもの、本気で生きているものなの。都合が悪くなったり、自分が他人に心の情報を渡したくないと思つたときに嘘をつく。でも逆にそういう時こそ、危険を回避するため本気で必死になつて嘘をついてるんだから、とてもわかりやすいんだ」

彼女は別にこちらを見ることもなく、しゃがんで背を向けたまま淡々と話す。

「本気でなかつたらわかりにくい。例えば、薬やお酒で酔つ払つて人は見えないわ。それが本気か嘘か、私にはわからない。お酒のせいで本音が出たのかもしれないし、酔つた勢いで心にもないことを言つてるかもしれないね。心に障害がある人や、認知症のお年寄りの人とかのことも見えないんだ。普通に一緒にお話してるようなんだけど…見えないんだ…。もちろん、わかる時もあるんだけど…。あ、じゃあ…」

彼女は台詞を中断すると、ほどよく遠くを歩く少年を控えめに指差

して言った。

「じゃあ、あの子はどう見る？日焼けしてラケット背負ってるから、バトミントンでなくテニスよね。ジャージに熊本高校で書いてあるから、現役高校生でテニス部ね。夏休みだし、制服じゃないし、試合かなんかあるのかなあ？でも一人で行って試合するのはあまりないよね。ジャージ少し汚れてる…お昼だけど、もう帰るところかなあ。家はどこだろう？学校を経由したとは限らないわ。熊本駅を利用するってことは、よほど遠いのね。ご苦労様だわ。表情が怪訝なのは暑さと疲れのせいねきつと」

予想、予測、推測、推理、空想、憶測、妄想…そう分類できるであろうことを、彼女はしゃべり続ける。彼女はその少年を五、六秒ほど見ただけだ。

「そうかもしれないけど…ほとんどが確認不可能じゃないか」

「そんなことないわよ」

言うと、彼女はバツと立ち上がった。

「ね！ついてきて！早く！」

「????」

僕が戸惑って、

(なんだなんだ一体???)

と、思ってる隙に彼女は走り出す。かと思つと、五メートルほど先で急に立ち止まる。

「どうした？」

追いついて、彼女に話しかけると、彼女は額を押さえて、

「あゝやばい、立ち眩み…。ふふ…視界が真っ白だわ。倒れたら後よろしく！」

「なんだそりゃ、大丈夫か??」

「うー、意識が…」

と呟いて…十秒くらいたつたつや否や、

「戻った!!!」

と言って走り出す。アクセサリがジャラジャラと音を立てる。駅の

階段を翔け登って、駅構内の二階まで走る。それを遠く目にしながら、

「まったくもって変な女だ」

そう呟くと、僕も急いで彼女の後を追った。

人間観察 vol.03 (後書き)

そう言えば梓さん、モテる秘訣はルックス2割、社交性8割だって
言っていましたねえ。

人間観察 Vol.04 (前書き)

高学歴に憧れます。

二階に上がると、彼女は誰かと揉めているように見えた。ビュンビュン走っていたためエスカレーターを上がってきた人と衝突したらしい。小走りでそこまで行く。よく見るとぶつかった相手は、テニスラケットを背負った。先ほど見ていた少年だった。

「本当にごめんね、お姉さん急いでて…前見てなかったの」
少年は逆に申し訳なさそうに

「いえ、こちらこそぶつかってすいません」と謝っている。

「あああ、バトミントン？のラケット…かな？大丈夫？傷付いてない？」

「あ、テニスです。ぶつけてもないし、大丈夫だと思います。」
わざと間違い、訂正させて回答させる。…上手いと思った。

「大丈夫だったらいいんだ、私もテニスやったことあるんだよ。難しいよねえ。今日は試合かなんか？」

彼女は少年とは目を合わせないで、自分の服装を直すような動作をしながら言う。とりあえずは自分の服装のことの方が大切だけでも、自分のせいでぶつかったので、相手に気を使って相手に関する話題を振るという素振りをする。沈黙しては場が気まずくなるから、なにかしら喋らなくてはと思い、とっさにテニスの話題を振ったという感情を、焦った様子とともに表情に出しながら。…上手いと思った。

「いや、別に…ただの練習だったんすけど、ちょっと体調が優れなかったんで、早く帰らせてもらっただんです」

「そっか、そんな時に…不注意でごめんね。家はどこ？近くだったらバイクで送るけど…」

バイクとか乗れるんかコイツ？？と、心の中で呟きながらも、その服装と合わせてなんら違和感のない言葉である。家の大体の場所も

わかるうえに、自然な流れでの質問だ。：上手いと思った。少年は彼女の言葉を遮って、

「いや、ちよつと当たっただけですし、平気です。家は八代で：少し距離あるんで：電車で帰ります。なんか気を使っていたらいて：わざわざすみません」

「そっか、八代じゃ少し遠いかな。ごめんね、気をつけて帰ってね」少年は一礼して、バッグから定期入れを出すと、改札の方へ小走りで行っていった。

「今のは結構当たりの方かな」

「：私の方」

僕はただ：普通に感心して返答する。

「いや、たいしたもんだ。見方も聞き出し方も：なんとというか自然だったし：ていうか、驚いた」

彼女は人差し指を立てて、得意げに話を始める。

「そんなに勢いよく当たったわけでもないのに、よろけて：その瞬間は怒った顔したの。だから体調が悪くて不機嫌だったのは本当だと見るわ。私がすぐに謝ったから、怒りも消えちゃったって感じ。」

もともと礼儀正しい子だと思う。家が八代で熊高てことは、かなりの高成績よ。それでいてスポーツまでやってるんだから、いいところのお家だと思うわ。擦れた感じもなかったし、言葉使いもしっかりしてるし、いわゆる優等生タイプね。それだけにプレッシャーもあるように感じたけど、疲れはそのせいもあるのかな。ラケットの可愛らしい感じのキーホルダー見た？バッグに付いてた：。あれってどうみてもプレゼントよねえ。たぶん彼女さんか、彼を好きな女の子に貰ったんだと思うわ：。で、それバッグに付けてるってことは満更でもないってことよね！？新しかったし、青春真っ只中って感じ？」

彼女はそう言って、キヤーと照れ笑いしながら頬を両手で押さえる。

「緒山君はどう見た？」

僕はただ呆けて傍観してただけで、何も見えていない。何もわか

らない。

「ていうかお前…、バイク乗れんの？」

彼女は僕の問いに答えず、とぼとぼと歩いて、下りのエスカレーターに乗った。下に着いて誰にと言うわけでもなく、ボソリと呟いた。

「わたしって…自転車も乗れないのよね」

そのままいつもの植え込みまで歩く、二人とも定位置に戻った。彼女の右上から言う。

「…練習しろ」

数週間の間、彼女と似たようなことを繰り返した。彼女はたまに自分の見方が気になる人がいると、おじさんであろうが、お姉さんであろうが、子供であろうが構わずに、道を尋ねる振りをしたり、切符の値段を尋ねたり、いきなり目の前で倒れたり、知り合いと間違えた振りをしたり…、時には何の理由もなしに、唐突に話しかけたりもした。そうして自分の見方を確かめていたのだろうか。僕はただそれを見守るという感じの毎日が続いた。

夏も終わりに差し掛かろうとしたある日、グループの中でも一際目立つ、プロレスラーのような体格を持つ九綱君に話しかけられた。なんでも彼は、進学校卒業ではあるが、ずいぶんと名の通った不良グループに属してたらしい。彼は僕に、

「緒山さんは、梓と付き合ってるんすかね？よく一緒にいますけど僕は笑いながら即座に返答する。もちろん彼も梓と面識はある。」

「いやいや、付き合ってるだけなんだわ。本当に全然そんな関係じゃないよ」

僕がそう答えると、彼は改まって言う。

「いや、自分、梓にちょっと気があるんすけど、先輩と付き合ってるとかあったらアレなんで、一応話くらいはしとこうと思って確認しただけなんすよ。すんません」

不良というのは礼儀正しい。なにかと自分の考える筋を通して、物事にけじめをつける。彼が一浪目で年下で良かった、と思いつつ、「梓と僕は…みんなと同じでただの友達だし、何も気にすることはないよ。なんて言えばいいのかわからないけど…、頑張ってね」と、内心ビビってるのを悟られないようにしつつも、優しく相手の神経を逆撫でしない、かつ年上の立場を保てるであろう言葉をかける。

心の中で思う。梓に恋すると大変だ…。今まで何人か…彼女に恋をした人を見てきたけど、つきあうことは不可能なんだ。彼女は誰に対しても、二人きりで遊ぶことやデートのお誘いにOKはくれる。とてもすんなりと。でも恋人関係やHは決して許さない。それは九綱君も僕も例外じゃない。今まで何人も男が、同じ運命を辿ったことか。

東大合格間違いないという超成績優秀者も、バスケットかバレーだかで全国に名を馳せたようなスポーツマンも、流れるようにギターが弾けてインディーズデビューするから受験はやめるというバンドマンも、ものすごい男前な上に喧嘩が強いらしい元不良も…みんなダメだったという噂を聞いた。皆が皆、彼女との関係を、親友や恋人というレベルまで持つていくことは出来なかったそうだ。

「僕はどうだろう…？」

九綱君にはああいっただものの、まったく恋心がないかというところではない。日々二人で人を見ては話をすることを積み重ねた今、以前抱いていた彼女への思いは、恋心と知的好奇心が五分五分か、恋心が若干強いというものになっていることに気付いた。

「僕が告白したら…付き合ってくれたりするのだろうか。…そりゃ、デートくらいは受けてくれるだろう。デートは誰とでもしてるみたいだし」

九綱君と話をした日から、こつこつとした思いが日に日に強くなっていった。

…それから数日後くらいかな。その日、梓は透けるように白いシヤツに、黒いネクタイ、黒いキュロット、頭にはシルクハットという出で立ちで現れた。もちろん編み上げブーツと赤いランドセルはデフォルトのままである。駅前の植え込み近くの定位置に、僕ら二人でいるのもいつも通り…。彼女は人を見ている。僕は彼女をデートに誘ってみようかと、ここ数日の間ずっと考えていて…言い出せてなかった。今もそのことばかり考えている。…しかし、今日は違った。人間誰しもなんか調子がいい日や、すんなりとしゃべれる日というものがあるものだ。僕にとっては、今日がちょうどそんな日だった。

何の前置きもせずに、本当に唐突に、僕はいつもの定位置、彼女の右上…コンクリの花壇の淵に座ったままで、彼女に話しかけた。

人間観察 vol.04 (後書き)

シルクハットで…。スラッシュみたいな感じでしょうか。

人間観察 vol.05 (前書き)

ヴィジュアル系音楽全盛期の頃の話ですから、梓さんもそんな格好が多いのです。少しだけ流行を読んでいた傾向はありました。

「ね……」

「うん、いいよ。いつにしようか？」

彼女は、僕がしゃべり出した瞬間、本当に第一声を発した瞬間、こちらを振り向きもせずにごう言った。これは今でもはっきりと覚えてる。僕は、

「ねえ、梓、よかつたら今度どこか遊びに行かない？…普段、土曜日とかは暇？」

と言うはずだった。が、それは遮られた。しかし、会話そのものは成立している。彼女は僕の問い掛けに返答している。まだこの世には存在していない、僕の心の中にだけある問い掛けに、彼女は返答した。面食らって、色んな考えと感情が頭を過ぎった。

(…そうか、彼女は駅前を通る人だけを見ていたわけじゃない…。僕も平沼君も、九網君も他のグループの皆も…すべて見られていたんだ。…なんでこんな簡単なことに気付かなかったのだろう…。人の歩く様のみだけでも、その人の心情まで推理してしまう彼女だ…。これだけ一緒にいて、言葉も幾度となく交わした僕のことなど、完全にお見通しというわけだ。…ていうか、大体僕は彼女を見ていない。彼女を見てはいたが…彼女を見れてなかった。彼女の心の中は、何一つわかっていない……。…っていうか、まずはこの場を收拾しなければ……)

焦っていたのは覚えているが…気が動転したのか、負けん気を起こしたのか、それは覚えていない。ハッと我に返り、彼女を認めまいとして、不思議な表情を作って…状況すべてを否定すべく返答をする。

「…ん？どうした？何を言ってる??？」

「私、土曜日は空いてるよ」

彼女はまるでお構いなしといった感じで話を進める。…こいつ、曜

日まで当ててきやがった。僕はさらにそれを否定する。

「土曜日？ いったい何の話？？ 僕はただ、そこを歩いているお婆さんの見方を… 梓に尋ねたかっただけなんだけど…」

彼女はここで初めて、僕の方を振り返った。その表情はいつも通り。薄っすらと笑って、首を傾げてこっちを見ている。

「なんだ〜！ もう！ 私… 全然間違っちゃった。あーもう！」

「な、何と勘違いしたんだ一体？？」

僕は冷や汗をかきながらも、できるだけ平静を装って、何事もなかった振りをした。しかし、そうしつつもたくさんのことを考えて、だんだん恐ろしくなってきた。人は基本的に、心の中を覗かれるのを嫌う。誰も人に秘密にしておきたいことはあるし、知ってほしくないことがある。彼女と親しくなってしまうえば、それはすべて見抜かれてしまう。… そう、すべてがだ。彼女は、

「私、てつきり緒山君が… えーと、その…、ほら…」
と、言いにくそうに… もじもじしている。

僕はこれだけ長い間彼女を見てきて、この時初めて彼女を見た。

初めて本気で… 彼女を推理した。こっちの行動と思いはすべてバレた。いや、すべてバレていた。それでいて彼女もこの場を收拾しようとして動いている。僕が誤魔化したのを見抜いた上で… それに合わせ、てくれている… と、そう感じた。そう、彼女の今の台詞と態度は、この場を收拾させるための演技だ、… でも、もうこの演技に乗るしかない。… ていうか、今の僕が思っているこの思考からしてバレている。現在進行形で、僕は彼女に見られている。

（なんてこった…）

彼女は自分の感情を容易に隠すことが出来るし、僕は彼女ほど彼女を見る事が出来ない。逆に僕は感情を隠す術に長けていないうえに、彼女は僕を容易に見透かすことができる。現在進行形でこちらの考えが漏れている。… イヤだ。非常にイヤな気分だ。

「そついう時は、帰って休むといいよ…」

彼女は優しい表情と口調でそう言った。… 冷や汗があふれる。

「なんか体調が悪そうに見えるよ、緒山君…」

僕はこれ以上何もしゃべれない…喋れば喋るほどボロが出て…見透かされる…。途端に恐ろしくなり、この場にいればいるほど、事態は悪くなり続けると考え、僕はろくに返答もせずその場を立ち去った。…恋心などすべて塵のように一気に吹き飛んで…、あとには彼女を恐れる心と、彼女に負かされた、彼女に見透かされた…という気持ちが残った。

そして、それ以来、彼女とは疎遠になった。

「へ〜、不気味な女ね。不思議でもあるけど」

高川は、

「やつ」

と、買ったジューズを僕に放り投げる。

「いやー、生きてきてさー、あれほどなんと言っか…自分が考えることを言い当てられたのは、後にも先にもないよ、ホント」

「人間観察恐るべしやな。ていうか、この帽子、気味が悪くなってきたんだけど！」

語尾を上げて、否定的に話すわりには付き返す素振りもない。

「まあ、確かに…冒頭から言っている通り、変な女なんだわ。でも梓のファッションセンスは皆が認めたもんだし、その帽子は梓にも負けないファッションセンスの持ち主の高川さんにしか、プレゼントできないね。ほんと、ある意味すごい賞賛の品だわ、それ」

彼女はデレデレして、

「えへへー」

という表情を満面に浮かべて、僕から目を逸らす。ホントわかりやすいなこの娘は…。梓と違って。

「まあでもぶっちゃけ、千佳ちゃんの方が若いし、可愛いし、全然イケてるんだけどね」

これだけわざとらしい台詞でも、彼女は真っ赤になって照れながら上機嫌になる。

「あーもう、あんまりこつち見んといて。うざいからもうー!!」
彼女は恥ずかしさと照れのあまり、両手で顔を覆っているが、顔がニヤつきまくってるのがわかる。そうして顔をもっと赤くして指で前髪をくるくるといじっている。心と顔と動作がリンクしてやがる。
…まあ、普通は誰でもそうか。

「で、オチは？」

ジューズを飲み干して、彼女はそう言った。

「いや、だからこの話オチはないよ」

「じゃあ続き話せ」

「…はい」

もう秋も半ばに差し掛かったかなという日、僕は平沼君と駅前を歩いていた。

「そう言えば…、九網君、倉下に告白して振られたそうだけ」

平沼君が言う。

「マジで？…あ、そういやあの人に相談っていうかさ。梓と付き合い合ってるのか？とか聞かれたことがあったよ」

「あれ、緒山くん、付き合ってた？」

「いや、全然。ただるんでただけだよ。…あいつ、変わってるよなあ」

平沼君は大笑いした。

「だしよ、だから最初からそう言ってるんじゃない。あいつは普通に話す分はいいんだけど、一線を越えて親密になるもんじゃないんだよ。緒山君も一時期親しげだったもんね、身に染みてわかったでしょ」

彼はまだ笑っている。

例の一件からむこう、梓とはほとんどつるんでない。もちろん会えば普通に話すし、笑いもするが…駅前の植え込みのそばの定位置に行くことはなくなった。彼女は、今でも長時間に渡りそこにいる。そこで人を見続けている。…結局、彼女については何もわからず終

いだったが、それは他の誰もが同じことだった。平沼君でさえ、今や彼女の思考については、僕よりも知らないだろう。たぶん…。

あれから、僕も梓ほどではないが、人を見る…ようにしている。…幾分かは人が見えるようになった。その人の様子から、言動や思いを推理し、言葉の裏を探り、細かい行動の基点となる心を探ろうとする癖がついた。…それは、好奇心だとか、梓に負かされたという悔しさから来るものではなく、ただ単に自分の心の中のプライバシーを守りたいという自衛の心から来るものだった。…梓にはすべてがバレている。彼女を避けていることも、彼女を恐れていることも、そして…おそらく、僕がどれほど人のかを見えているのかということも…。

彼女だったら、必要さえあれば…僕のことはいとも簡単に見透かせるだろう。今でも一度会うだけで…少し話すだけで、最新の僕の心を見透かせるはずだ。…なのに、こちらからは彼女の心を見透かすことはできない。まるで起き抜けの寝ぼけた時に見る、深い霧がかかっている朝の風景のようだ…。彼女の存在は感じるのに、彼女の意図も感じるのに…、それが何かはつきりとわからないといった感じだった。

(…人を見る…か…)

現に今の平沼君の台詞も、かなりの情報を含んでいる。彼も先日の僕と同じくらい、梓と近くなつた時期があつたのだろう。経験からくる「身に染みて」だろう。梓に関しては、彼は僕の先輩であり…同類だ。賛辞と警告の感謝を込めて、

「まったくもって君の言うとおりだったよ。本当に身に染みた。変な奴で…まあ、いい奴と言えば、いい奴なだけだね」

と、言った。平沼君はまだ笑っている。今の言葉で…彼もまた、僕が見抜いたということを見抜いただろう。

駅前の南側に差し掛かると、前からレアキャラが歩いてくる。ラ・サールの落ちこぼれの家森君だ。彼には夏前くらいから、大きな問題があつた。彼は二浪目に入ってから、三回ほどしか登校してい

ない。家にもいないらしい。どこで何をやっているかは、僕の知る
ところではないが、三巻君や九綱君に聞くところによると、パチス
ロや麻雀にハマっては、友人勢に借金を重ねて、さらにギャンブル
を行っているらしい。さらには会う度に、俺は空手の三段位を持っ
ているだとか、ギターは十年やっていて、家にはヴィンテージのギ
ブソンのレスポールが何本もあるだとか、入学時はラ・サールでも
トップクラスの成績だったとか、色々と前には聞いたこともない
ような大きいことを言う傾向にあった。特に一浪の人に対して、先
輩風を吹かすかのように、そういう大ボラを吹いた。

夏前くらいのある日、そういつた大げさな話を聞くに堪えなくな
って、三巻君や九綱君やその他のグループで中心的な存在になっ
ている人たちが、彼を呼んで説教をしたのだった。

人間観察 vol.05 (後書き)

若い時って、変な見栄はって奇妙な嘘つく事ありますよね。しょうもないどうでもいい感じのことだ。

人間観察 vol.06 (前書き)

熊本駅前のミスドって、昔とちょっと位置変わってませんか?? 駅側に近づいた気がする。

僕もその場にいた。はたから見れば、ちょっとしたいじめの現場に見えたかもしれない。しかし、内容はいたってシンプルで、

「ギャンブルは身を滅ぼすから程々にしろ」

「借りた金はちゃんと返せ」

「見え透いた嘘はつくな」

などといった、正当なものだった。

「空手三段だったら、今三巻と殴り合いやってみろ、三巻は中学から今まで空手やってて、全国の試合にも出たことがある経験者だが、それでも三段は持っていない。相手にとって不足はないし、三段を持つてるお前だったら、一方的に殴られることもないだろ？」

と、グループの中心的存在である山村君が言う。

「もちろん、どっちかが大怪我しそうになったり、危なくなったら止める。喧嘩じゃない」

と付け加える。三巻君が、

「よっしゃ来いッ」

とTシャツを脱ぎ捨て、ストレッチをしだすと、家森君は土下座して、

「ごめんなさい、嘘です。全部嘘です」

と言って謝った。

こうしたことがあり、今でもグループ内で、多少煙たがられていた。だが、予備校生とはいえ、二十歳前後のいい大人である。その一件以来は、みな会えば普通に話すし、あいつはどうしようもない奴だとは口々言うものの、彼に対して表立って嫌がらせをしたり、文句を言う人はいなかった。お説教の前よりは、人付き合いはマシになっただろう。ラ・サール高校卒業は本当のことだし、昨年センターで七百超の点数を出したのも本当のことだ。

「生まれついでのエリートゆえ、高校時代に挫折したときに、大き

く屈折してしまっただらう。ある意味、可哀相なやつだ」とは山村君の談だ。

「緒山君、平沼、おはよう、久しぶり！」

その一件は、数ヶ月前のことなので、家森君ももうギクシヤクした感じは見せない。

「よお、ラサール、相変わらず余裕だな。今年は自信有りだな？」僕がそう言うと、彼は、

「いや、ダメだね。三浪街道まっしぐら」と、笑いながらそう返す。

「ダメじゃん。先輩。気合入るって！まだ間に合うから」

平沼君がささず突っ込む。

「いやいや、ダメだね。相変わらずパチスロやってるしね！スロットも受験も、勝ち目ないねえ」

「ダメだって先輩。ていうか、借金返してしまったの？マジでやばいよ！スロットは」

「とかこんなこと言っていて、センター七百以上普通に取るからなコイツは。ホント、嫌な奴だ」

今にして思うと、台詞には少々トゲがあるが、こういう口調が挨拶になるような間柄なのだ。言葉には裏もなく、みな会話を楽しんでいる。そこに誰かが、僕の後ろをドンと突き押した。

「やつほ〜！！三人とも元気??？」

「痛つたいな！！誰だ！つたく!？」

…梓だった。今日の彼女の服装は、薄いピンク色の中国の人民服のような上下、髪をアップにしている。もちろん編み上げブーツと赤いランドセルはいつも通りで、漆黒でストレートの黒髪も変わらな
いままだ。

「誰やねん。こいつ？」

家森君がボソボソと平沼君に耳打ちする。

「誰やねん。…て、なんで関西弁やねん！私のこと忘れたんかいな。しまいにやおっこんでしっかし!?!」

相変わらずテンションは高い。もちろん、家森君と彼女は初めて話している。二人とも予備校へはほとんど来ていない…、会う筈もなかった。顔を合わせること自体、おそらくは初めてだろう。

「緒山君でしょ、沼ちゃんでしょ、う〜ん、あれね？知らない誰かさん…？名前はなあに？私はあずさ、倉下梓！」

「なんだこいつ…」

家森君は明らかに退いていた。僕はハッと我に返り、彼女を見た。

…はつきり言っつて、ただのハイテンションのバカな女にしか見えな
い。彼女はこうしている今も、対象を見ているのだろうか…。平沼君が、

「はいはい…」

と、呆れ気味に紹介する。

「こっちは家森君、ラサル出の天才だけど…スロットにはまってる大バカさんだ。こっちは梓、俺の同級生で…あ〜なんと云うか、ただのバカだ」

「…なにそれ！？…なんかムカつく紹介の仕方じゃん？沼ちゃんだけは私の味方だと思っつたのに！！」

彼女は兩人差し指を口に入れ、左右に思いつきり広げて舌を出す。

「び〜〜〜〜、ふーんだ！アホー！！」

「変な女だ…」

家森君はストレートに本人の前で感想を言った。

「だろ？僕（俺）もそう思う」

僕と平沼君の台詞が被る。彼女は、

「ま、いいや。今日私、急ぎの用事があるの！三人ともまたね！！」

そう言っつて、瞬く間に市電の乗り場の方へと走り去っていく。

「超変な女だ」

家森君が彼女の評価を訂正する。

僕らもそれに、うんうんと同意して頷いた。

それからちよ〜うど一週間。今度は予備校の階段で平沼君と一緒に

なつた。

「よお緒山君、もう帰るところかい？」

「ああ。これ以上勉強するとどっかおかしくなっちまう。ミスドでお茶でも飲んで帰るよ」

「じゃあ、俺も帰ることにするよ」

「いいのかい？今追い込んだかないと、暮れに苦労するよ」

「まー、今日一日くらい大丈夫っしょ」

連れ立ってミスタードーナツに入る。ここに来れば、いつもグループの中の誰かと会えるもんだが、今日はもう夕方も過ぎて、辺りも暗くなつてゐることもあつてか、誰もいない。みんなゲームセンターのほうへ移動したんだろう。平沼君がふと言つ。

「そついや、こないだ家森君と梓会つたじゃん？あれから家森君大変らしいよ」

「たいふえん??」

オールドファッションを食べながら返答する。

「おー、あの晩な、梓から電話がかかってきて、家森君の電話番号教えて欲しいつて言うんだわ。別に男の番号だし…いいでしょつて、何の考えなしに教えたのがダメだったんだな。それから家森君、梓に電話されっぱなしで、付きまとわれてるんだつてよ」

「あのあじゆさが??そりゃふえずりゃしいな。はれにへもほこかていっしえん引いふえいるほにな。はいつは」

「…いや。何言つてるか全然わからん。…食べ終わつてから話してよ。…そんで、家森君からさ、苦情と文句の電話がかかってきて大変だったよ。最近じゃ、夜の九時から朝の九時まで、文字通り一晩中電話してるらしい。かかってくるだけだから、電話代はかからないんだろつけど、そりゃもう怒つてたよ…。つたく俺、本当に悪いことしちやつたな」

梓は自分から電話をかけることは滅多にない。用事があつても、なるべく会つて話そうとする。誰かが彼女にかければ、時間の許す限りは喋つてるらしいが…。

「あの梓がねえ…なんか、にわかには信じられない話だな。家森君の話だしな」

「でもメリツトのない嘘だからな。俺はモテるんだぜって嘘？…でもないでしょ」

「だなあ。初対面の時、本気で退いてたもんな」

グダグダと喋って、僕はミスドを後にした。

「もし家森君に会うことがあったら、平沼が悪いことした、反省してたって伝えてよ」

「うん、わかった、言うておくよ」

それ以来、駅前の植え込みのそばで、梓がしゃがんで人間観察をしている姿は見なくなった。

人間観察 vol.06 (後書き)

オールドファッション、美味しいですよねえ。

人間観察 vol.07 (前書き)

もう一度受験生やってみたいもんです。

彼女は家森君と知り合ってから、植え込みのそばには一切行ってないようだった。植え込みのそばにはいないが…、彼女を見る回数は一気に増えた。彼女は、ある日を境に、予備校に登校してくるようになった家森君と、いつも一緒にいた。

彼女の今日の服装は、まるで喪服のように真っ黒なロングスカートとシャツである、プレスレットやピアス、ネクタイまで黒い。たまにお洒落でかけている伊達メガネまで黒縁だ。いい加減…いちいち説明しなくてもわかると思うが、黒の編み上げブーツと、漆黒の髪はさらにブラックを統一させ、赤のランドセルのみ、黒以外の色で、点一色際立っていた。家森君とはいつも一緒に、片時も離れることがないという様子だった。僕や平沼君や他の皆と会えば、普通に話すが…、それも家森君がそこにいればの話で、彼がそこを立ち去ると、

「じゃあまたね！」

と言って、

「うきと〜待ってってば〜!!」

と、家森君のそばまで走っていく。うきとは雨樹人、家森君の下の名前である。僕、そしておそらく平沼君も…この数日の間に、二人に何が起こったのか知りたいと思った。しかし、同時に…そこには立ち入ってはならないという予感もした。

「べつたりだな。あれじゃ、家森君と話すことも出来ない。倉下に話しても何も話さんだろうしなあ」
平沼君がそう言う。

「いいさ、二人の問題だし…僕らには関係ない。そして何より受験直前だぞ」

時は十一月末。センターまで一ヶ月半、私大受験まで二ヶ月半。受験生にとっては、人生を左右する…文字通り寝る間も惜しんで勉強

する期間だ。

「夜に家森君に電話しても繋がらない。おそらく倉下と話してるんだろつが…まあ、確かに俺らが関わることじゃないな」
平沼君はそう言った。

ほど遠くに…黒の中の赤い点として、彼女の後姿が見える。…僕はその後姿を、いつまでも見据えていた。しかし、彼女の思想のほんの切れ端すら…読み取ることは出来なかった。

数日後、少し遅れた昼食を取った後、予備校に行こうと駅前を歩いてると、家森君が現れた。後ろから走ってきたらしい。…梓は見当たらない。彼一人だ。彼は唐突に、
「緒山君、ちよつといいかな？」

と、息を切らしながら、焦った感じで問う。…彼の思惑が見える。

…梓のことだ。梓のことで、何か僕に相談したいんだろつ。…平沼君は自習室にいて捕まらなかつた。彼女のことを相談するなら、僕か平沼君だと前から思っていたに違いない。…ここでやっとチャンスができたというわけか。梓のことを聞くチャンス…。

「別に…構わないけど、どうかしたか？」

「ここじゃまずい。電車に乗ろつ。往復の切符代は出すし」

と言って、

「頼む。お願い。…まじで」

と、切符売り場の方へ…彼は立ち止まる暇も出さず、グイグイと僕を連行する。

ずいぶん切羽詰ってるな、と思った。…知的好奇心はある。情報も欲しいと思い、僕は彼と銀水行きの普通列車に乗った。

「電車の中なら大丈夫だ…と思う。…あいつは異常だ。どこにいてもついてくるし、別れた瞬間に電話してくる。ミスドでトイレに行つてくると言つて、窓から抜け出してきた。万札以外は…電話も、財布も、カバンも、持ち物全部テーブルに置いてきたから、電車に乗るまでくらいの時間は稼げたはずだ。君が通るのを見て、抜けて

きたから…電車に乗るまでは二、三分しか経ってない。うまく撒けたはずだ…」

言いたいことだけ全部言ってもらって、後で疑問点をまとめて話すのが一番効率がいいな。僕は家森君の話に合わせて、しばらくはうんうん、と頷いていた。

話を総合すると、

・梓は初めて会った日の晩に電話をかけてきて、それ以来ずっと付きまとわれている。

・梓は、夜は家に帰っているが、その間はほとんどの時間電話で話している。

・なぜか嘘がばれる、居留守もばれる、彼女の前ではまったく嘘がつかない。

・なぜ俺に対してだけこういう態度なのかわからない。尋ねても話をはぐらかして答えない。

・好きだから付き合ってくれと何度も言われたが、了承してない。

・最初こそ満更でもないと思ったが、今は恐ろしい。彼女も怖い、九綱はもつと怖い。

・できることなら、彼女の相手を九綱にでも代わって欲しいくらいだ。

・彼女と離れたたり、電話で俺の声を聞いていないと大泣きする。そうなる手が付けられない。

・いつも物凄い額のお金を持っている。駆け落ちしようとか何度も言われた。

・とにかく俺のことを聞いてくる、最初の数日間は一、二日十時間以上は質問攻めだ。

・気付いてみれば、俺自身はなにも彼女のことを知らない。

「あいつはいつたいたい何者なんだ？俺と親密な関係になって、何がしたい??」

散々喋った後、吐き捨てるように彼は言った。そんなこと……はつきり言つて、こつちが知りたい。

「いや、正直わからない。僕が平沼君が彼女について詳しいと思つたんだろつが、残念ながら、彼女について僕が知っていることと言え、人間観察が趣味だから……感というか、推理が異常に鋭いということくらいだ。彼女の前では嘘がばれるというのは同意見だ。それに彼女については何もわからないというのは、僕らも同じなはず。……君なら身に染みてわかると思うけど……」

以前、平沼君に言われた言葉を引用する。家森君は変に納得した。そうだろう、そうだろう……梓のことを探れないのは、彼も同じに違いない。

僕は電車に揺られながら考える。はつきり言つて、この接触や会話自体、彼女の予測の範囲内に違いない。家森君のこれだけ切羽詰つた態度は、本気の中の本気だ。この彼の形相を見ていれば、いつか彼がどうにか逃げ出して、誰かに接触して相談するという予測なぞ、梓は当の昔に立てているはず。……彼女なら……あの時に、家森君に初めて会つたあの時に、僕が平沼君に接触すると予見していたとしても驚かない。ここでの会話ですら、大方の予測が付けられているだろう。……そして、相手が僕だと言うことも。彼女は今頃、予備校に行つて、平沼君の所在と僕の不在を確認しているだろう。本気で家森君を捕まえたのなら、僕に電話してくるはず。……泳がされてるな……きつと。ここは下手なことを言つて、家森君に知恵を付けないほうがいい。彼女の目的がわからない限りは危険だ。係わり合いになるべきではない。……しかし、目の前で必死になっている家森君を放っておくのも気の毒な気が……。いや、僕では彼女を出し抜く……彼女を上回る手段を思いつけるとは、到底思えないな……。

だが、ここで彼女と勝負したい気持ちが一気に吹き上がった。

「家森君は……このまま電車に乗つていつて、どこか行く当てが無いか？高校は鹿児島だから、南だったらあったかもしれないけど……」家森君は両手で抱えた頭を開放して、ジトリとこちらを見た。

「このままどこかへ逃げて、センターまで行方をくらませばあるいは…もちろん彼女が知る由もないところじゃないとダメだけど…」

「…長崎に叔父がいる。バレるかな？」

「なるべく遠い関係の方がいいな」

「遠い関係の親戚に、いきなり居候させてくれって言うのか？」

「仕方ないじゃん。金か心に余裕があんなら、カプセルホテルや野宿の方がいいんだけどね」

「あ、一つあった…お…」

家森君の顔がほころんで発した言葉、僕はそれを即座に制止する。

「わかるだろ？僕が行き先を知れば、明日の朝にでも彼女に見透かされる」

「…そうか、そ、そうだな…。なあ、お前も一緒に逃げようぜ」
ようやく彼は笑顔を取り戻して、そう言った。

電車はもう銀水に着こうとしている。普通電車なのに…随分話し込んだもんだ。

電車はガタンガタンと揺れて、荒尾に着いて静かになった。小学生くらいの子供が数人乗り込んでくる。その子供を無意識に見てしまった。学校帰りの時間帯だ。でもランドセルは持ってない。学校にJRで通うのか？今日は平日…この時間帯に、荒尾から銀水行き
の電車に乗るといふ子供達の状況を、僕は見透かすことが出来なかった。…梓なら言い当てるだろうか。

まだ対抗策があるのか？と言いたげな表情をした家森君の顔が目に入る。…僕もいつの間にか随分と見えるようになったもんだ。僕は答えた。

「…無茶言っな。もう何も無いよ」

家森君は、驚いた表情をして言った。

「いまお前、梓みたいだったぞ。…やめろや、びつくりするじゃねえか！」

…イヤなことを言われてしまった。

銀水で彼と別れる。彼の表情は明るく、笑顔で僕に礼を言う。察

するに、かなり適切な行き先があるのだろう。僕は彼と別れて、そのまま銀水出の電車に乗ろうとして気付いた。

「……ちえっ、帰りの電車代貰うの忘れた。…ったく」

予想通りだ。次の日の朝、予備校の一時限目が始まる前に、教室で僕は梓に捕まった。

今日の彼女の服装は、毎度お馴染み編み上げブーツと、今は教室の端に置いてある赤いランドセル、黒に黄色のラインが入ったアディダスのダボダボのジャージの上下に、金の太いアクセサリを腕や首にかけている。青黒の帽子もアディダスだ。詳しくは知らないが、ヒップホップとかラップをやってる黒人さんみたいな格好…といった感じだろうか。彼女は僕を見るなり駆けてきて、僕の胸倉を掴んで、目を見開いてこう言った。

「雨樹人はどこ!!!???」

…まるで喧嘩が始まりそうだ。他の予備校生の注目の的になっている。

人間観察 vol.07 (後書き)

梓さんストーリーカーですねえ。

人間観察 vol.08 (前書き)

今センターとか受けたらどうなってしまっんでしょ。怖い怖い。

(… ったく、恥ずかしいな)

と思つて、彼女を見る。彼女は何も偽っていない。本気で僕を問い質す裏表のない台詞…。彼女が言っていた見抜きやすい本気の姿…。それがそこにはある。だが、彼女は見ている。僕を観察している。そこまでわかるようになった自分をクスリと笑った。

「何がおかしいの？」

少々落ち着いて彼女はそう言った。こっちの目立つのが嫌だという意図を見透かした。さらに自分が見られて、心を読まれたのではないかという予測を立てたからか、彼女は十秒も立たないうちに冷静さを取り戻した。こうなってしまうえば、僕が彼女に勝る要素は一つも無くなる。

「昨日：銀水行きの電車に乗って、銀水で別れた。その後、彼がどこへ行ったかは知らない」

僕は必要最低限の言葉を発した。嘘ではないから表情に違和感はないはずだ。いや、あつたとしても、彼女なら今の台詞と表情から真偽はおろか、昨日何があつたかを読み取り、すでにどうすれば家森君に会えるかを考えているだろう。

彼女は振り返って、教室の端に置いてあるつた赤いランドセルを持って、一番後ろの席に座った。すぐに教室を出て行くだろうと思つた僕にとつて、それは意外な行動だった。そして、

「あなた達に迷惑かけてごめん…。でもこれが私なの。私の人生なの」

と、泣きそうに…震える小声でボソつと言つて、テキストを机の上に広げる。

僕は瞬間彼女を見た。やはり…何も見えない…。そしてその次の瞬間、どう足掻いても僕の得になるような事は起こらないと判断して、即座に彼女を見るのを止めた。

一時間半の講義が終わり……チラリと後ろを見ると、彼女はすでにいなかった。おそらく彼女は……僕を後ろからずっと見ていただろう。

そして、僕が持っている大方の情報を見抜いたか、若しくはなにかしらの手段を思いついて、予備校を後にした……そのどちらかだろう。

僕が家森君に知恵を付けたこと、家森君が知る限りの彼女の情報を僕が持っていること、センターの前後まで行方をくらましていること……できれば、これらを知られたくないために正直に電車と銀水のことを言ったのだが……どこまで見抜かれたかを、あの時の彼女の表情から見ることはできなかった。見ようとすれば、かえって藪蛇になっただろうし、そうでなくとも見る自信はなかった。最初から教室にいた平沼君が話しかけてくる。

「一体、あいつどうしたんだい？大丈夫か？」

僕は無表情で答えた。

「家森君と会えなくてイラついているんだろ。……彼、遠くへ逃げたんだ」

「そりゃ、梓……逆上するな」

彼は納得した感じでそう言って、二時限目の教室へ向かった。

それからしばらく経って、街がクリスマス一色になったある日、僕は九綱君に呼び出された。ゲームセンターの二階である。今や僕は……こういうわかりやすい人の行動は、手に取るように見えるようになっていた。梓と家森君の件で情報が欲しいのだろう。

（わかりやすいな。彼は……）

と、思つてゲームセンターの二階に行くと、案の定、

「わざわざ呼び出してすみません。用事ってわけでもないんですけど、先輩って、梓と家森さんのことなんか知ってますか？ちょっと前からべつたりつるんで……梓は周囲には付き合ってるって、言ってるみたいなんですけど」

と、彼は苛立たい様子で、僕に問いかけた。

あれから家森君の姿はもちろん、梓の姿も見ない。なんの情報も

入って来てないし、どうなってるのか、皆目見当もつかない。梓が必死で探しまわっているか、すでに見つけて二人でどこかにいる可能性だつて十分考えられる。…別にいちいち九綱君にすべて話す必要はない。

「いや、知らない。梓が付き合ってるって言いふらしていること自体、初めて聞いたよ」

「ちょっと…自分、梓や家森と話したいとか思ってるんですけど、そうしても別に先輩はどうもないっすよね？」

「僕は第三者だし、関係ない…冷たい言い方をするわけじゃないけど、好きにすればいいよ」

「三巻さんも山村さんもそう言っていました。俺は前に梓に…特定の人と、男女の付き合いはしないと心に固く決めてるって言われたんですよ。こっちも遊びで惚れてるわけじゃないんで…、とりあえず説明くらいしてもらっても、バチ当たらないっしょ？」

そう言つて、
「とりあえず近日呼び出すつもりなんで。一応、緒山さんには話通しとこうと思つて」

と続けた。僕は、

「うん、後悔しないようにすればいい」

と答える。…知的好奇心がないわけではない。どうなるのか見てみたいという気持ちと、関わりと口クな目に合わないな、という気持ちで半々だった。九綱君が梓に絡んでどうなるのかなんてまるで読めない。後日、平沼君に軽く話すと、

「いや、それは係わり合いになりたくないねえ。この切羽詰まった時期に」

と、笑いながら言っていた。彼は東京の有名私大を受けるから、センターの受験予定はない。センター組より余裕があるはずの彼でもこの発言だ。それが賢いのだろう。確かに関わってもなんの得もない。ただの厄介ごとにすぎない。

数日後の晩、九綱君から電話がかかってきた。

「例の日、今月の二十七日っすから。梓を呼び出しました。ゲーセンの二階っす。講義も年内最後なんで、キリもいいかと思って。面倒ごとと気持ちの整理は全部片付けてから、新年迎えたいですしねえ」

彼は笑いながらそう言った。

「先輩も梓に言いたい事とかないっすか？ぜんぜん居て構わないんで、よかつたら来てくださいよ」

「気分次第かな…勉強が手につかないようだったら行くかなあ」

「先輩、三浪でもいいじゃないっすか、俺と一緒に来年も遊びましようよ」

「…馬鹿言っな。人生かかっ取る」

と、反射的に言っつて口をつぐんだ。あぶねー、電話の相手は九綱君だぞ。言葉には気をつけなくちゃ。ブン殴られちまうよ。その後は言葉に注意して、煽てつつも先輩としての立場は守つて…電話を切つたのだった。

「あんたよう喋んなあ〜〜〜関心するわ」

自分で話せつっつとしてこれだ…。

「自分で話せつっつとしてこれだ…つたくお前は…」

高川の前では気持ちを偽らない。梓とは正反対の意味で、気持ちを偽る必要がない。…人間関係とはこうありたいものだ。人間正直が一番、変な見栄も意地もはらないし、偽らない。これが一番だ。こういう人間関係が周囲と築ければ、きつと幸せを感じるだろう。

(梓…、お前は今どこでどうしている？幸せになっているのか？)

と、心に思うと、すかさず高川がニンマリ笑つて突っ込む。

「あんたいま、その女のことと当時の思い出振り返って、思い耽つてたでしょ」

…こんなパツパラ娘に見られるとは…あいも変わらず、僕はガードが緩いなあ。こりゃ、今でも梓には会えないな…と思う。

「今のところ七十点…!!」

「はあ??」

またこのパツパラ娘は何を言い出した?

「話長いけど、そこそこおもしろい。これでオチがおもしろかったら九十点あげるよ!」

彼女はパラパラっぽいヘンな踊りを踊りながら話の続きを迫る。この娘はたまに意味もなく踊り出す。

「あのなあ、お前は何度いったらわかるんだ??この話にオチはないって言ってるじゃんか」

十二月二十七日。ここまで試験までの期日が迫ると、予備校の雰囲気も大きく変わる。自習室や講義室には人が溢れ、皆が真剣な眼差しで勉学に励む。最後の追い込みをしている人と、最後の足掻きをしている人に分かれる。

今年の一浪の代で最も可愛いと言われる、熊高卒の朱里ちゃんも、いつもより十倍は真剣な眼差しで、自習に取り組んでいた。天地がひっくり返るほど可愛いみんなのアイドルである彼女を一目見ようと、自習室に行く取り巻き勢も、彼女の真剣な態度に触発されて勉強し始めるほど、受験生の勉学の様相が激しい時期である。

平沼はそこで勉強していた。が、緒山、倉下、家森、三巻、山村、九綱の姿はなかった。…まあ、全員普段からたまにしか居ない。それでも、倉下と九綱以外の二浪メンバーは、去年の今頃はここで必死になっていたものだが…と違って、細身で長身、分厚いメガネをかけた自習室の監督は溜息をついた。

彼は、数十年間に渡ってここで受験生を見続けてきた。…若者はいい。夢と希望から創られる明るい前途がある。願わくば皆が納得いく結末になるといいんだが…。

「…だが、そうはいかんのが、受験というものなんだな」

人間観察 vol.08 (後書き)

ゲームセンターも最近はめっきり数が減りましたねえ。

人間観察 vol.09 (前書き)

年末の追い込み時期に…学費もバカにならんでしょーに。

当時、ゲームセンターでは、スパイクアウトという四人で協力プレイして遊ぶゲームが流行っていた。そこでは、僕と山村君、三巻君が遊んでいた。

「緒山ちゃん、余裕じゃん？この時期にゲームとか」

山村君が言った。彼とは中学生の同級生で、高校に入ってからも幾度となく遊んでいたこともあり、今でもかなり親しい仲だ。

「君も人のこと言えないでしょ」

「まあ、いまさらじたばたしたって変わらないしね。あとは運を天に任せてって感じかな。…三巻、なに死んでんだよ？」

「…今日はいかん。なんか調子悪い」

三巻君はタバコを吹かしながら、ギャラリーになる。九綱君は、落ち着かない感じで辺りをウロウロしている。他にもグループの間は何人もいた。梓とのやり取りを見に来た人もいれば、梓にふられた人もいる。何も知らずにただ遊んでいる人もいる。

そんな中、彼女は一段飛ばし&スキップ気味で、階段を昇ってきた。特に変わった様子もない。テンションは若干低めだと感じたが、それもあえて言えばというレベルで、言わば普段どおりだ。

今日の彼女の服装は、キラキラのラメの入ったサンダルに、細身のジーンズ、アルファベットの豪華なロゴが入った白いシャツに、茶色の毛皮のごついコートを着ている。アクセサリーも多く、サンダラスをかけている。これまで愛用し続けていた赤いランドセルは見当たらないし、編み上げブーツも履いてない。いわゆるギャルと呼ばれるであろう格好で、頭にはピンクのスヌーピーのキャップを浅く被っていた。漆黒の髪と色白の肌は健在で、それだけはギャルっぽい服装とギャップがあった。

僕と九綱君は緊張してただろう。固唾を呑んだ。彼女の表情は、キャップとサングラスのせいによく見えない。トレードマークの赤

いランドセルがないため、ひよつとして人違いかとも思ったが、その場にいる全員が、なぜか彼女を倉下梓だと判断した。場の雰囲気、彼女を梓だと主張したからだった。

一瞬場は沈黙した。が、沈黙を破って、第一声を発したのは意外な人物だった。

「ははっ、おめー絶対胸そんなに大きくねーだろ！??」

笑いながら、彼女にそう言ったのは三巻君だった。

彼女はサングラスをパツと外して言う。

「し、失礼じゃんっ！！成長期なの！！最近Cカップになったの！！！！」

三巻君は返す刀で、

「ねーよ、それはねーよ。元はAくらいだが。何詰めてんだよ」と、笑いながら言う。梓は、

「はああ！！???Bありましたー！！高校の時からBありますうう~~~~！！」

と、眉間にしわを寄せて、三巻君に詰め寄る。彼は、

「ぶはははは」

と笑いながら、スパイクの台に百円玉を投入した。

「…つたく、久しぶりに会ったつてのに何よ！超失礼じゃない!？」

ねえ九綱くん!??」

と、九綱君に話題をふる。僕と山村君は、ゲームしながらも少し聞き耳を立てた。

「いやいや、お前の胸なんかどうでもいいから」

彼も笑いながらそう言ったが、笑いは演技だろう。もちろん彼女が見逃すはずもない。

「調子いい時は本当にBカップなんだから…、なんだったら今度目の前で測ってみせるわよっ！！」

彼女はまだプンプンとしている。

「本題に入るぜ」

九綱君はそう言って続けた。

「家森について話して欲しい」

「…別に、あなたたちに話さなきゃいけない理由なんてないじゃん。私のプライベートなことじゃない？」

こっちのプライベートを散々見ておいてそれはないだろう…と思うたが、彼女は誰のプライベートも聞きたがってないし、聞いてもいない。彼女は人のプライベートを、自ら組み立てることができるのだ。…しかもとても正確に。

「俺が言いたいことは一つしかない。お前は俺に、誰とも付き合うつもりはない。一人の男には縛られないとか言ってたよな。それが家森とはどうだ？…説明くらいしてくれてもいいと思うんだが。家森とは付き合ってたのか？」

彼女にふられた人を初め、そこにいる全員がそれぞれの事をしながらも、聞き耳を立てる。ただ三巻君だけが本当に、我関せずとゲームに興じていた。

「わっかんないなあ〜？そんなの知ってどうすんの？あなたたちが聞いてもつまんないよ。私と雨樹人の話なんて」

彼女は悪びれた様子もなく、冷たく言い放った。

「つまらないかどうかは聞いた側が判断する。いいから話せよ」

女だろうと殴りかねないという表情だ。拳は固く握られ震えている。九綱君からは怒りが溢れている。家森君：あの嘘つきで、皆に迷惑をかけたラ・サールの落ちこぼれ…。九綱君が最も情けない人間だと、嫌いだと思う人間を、自分の最愛の女性が選んだ。それは怒り狂うだろう。自らにも家森君にも、そして梓にも。意思が強い人としてのプライドもあつただろう。また、こんな状況にもかかわらず、家森君を下の名前で親密に呼ぶ彼女の態度にも、彼は苛立たされていたに違いない。

「おい、あいつキレたら止めてやれや、三巻」

山村君が三巻君に小声で言う。

「キレたらて、おまえな、…俺じゃあいつ止められんよ」

「マジですか…。あずさちゃん、ピーンチ」

山村君は小声でそう囁く。ゲームの音や有線の音が入り乱れるゲームセンターの中だ。小声はおるか、普通の声ですら注意しないと聞こえない。…が、梓は山村君を見ながらこう言った。

「いやあんぐりなんか梓ちゃん大ピンチって感じ!??」

山村君は少々驚いた表情をしたが、すぐに薄っすら笑いながらスパイクに戻った。僕は我関せずの態度を終始貫いているつもりだが、彼女の瞳にどう移っているかは定かではない。彼女とはまだ目を合わせていない。

「うぐぐん、私…自分の話するのって好きじゃない。正直嫌いなんだけど…ていうか、私のこと…そんなに知りたいんなら、私に聞くんじゃないくて、与えられた情報を基にしてさ、自分で知って欲しいワ。自力で悟って欲しいの。…でもそれって、あなたたちは無理なんでしょ?できたらそうしてるもんね。そっちの方が断然楽なもの」

「……………そこまで知りたいんなら教えてあげるワ」
彼女はハア…と軽く溜息をつきながら、手すりにもたれていた体を解放して、こちらに近づいてきた。

「九綱君? あなた、私を好きだって言ったとき、自分の身に何が起こったって言った?」

「……………」
九綱君は黙ったままだ。ただ怒りは幾分か収まり、彼女の話に耳を傾けているように見える。

「雷が身に落ちたように…私を好きになっただって言ったよね??それが一目惚れだって」

言って…続ける。

「…私の場合それが雨樹人なの」
彼女は薄っすら微笑んで、九綱君のすぐそばでそう言った。手を出せば拳が当たる距離。緊張感が一気に走る。三巻君ですら、固唾を呑んでその場を見ていた。

少しの躊躇もせずに彼女は接近した。…近い。…本当に近い。彼女は九綱君の両頬を両手のひらで優しく包むと、静かで優しいげな声

でこう言った。

「あなたは経験したでしょう？だから解る。私の気持ち……。あなたの身に起こったことオナジコトが私の身に起こった。あなたは身を退かない。決して私から身を退かない。……私も同じ。決して雨樹人から身を退かない」

オナジコト……。そこで僕は彼女を見た。言葉の節に違和感があった。彼女が見えた。その一瞬、一瞬の表情の違和感も感じ取り、僕は初めて……。おそらくは最初で最後になるだろう、彼女を確実に見透かせた。……それは嘘だ。今のは嘘だ。

「……それは嘘だ。今のは嘘だ」
一瞬のゲームセンターのBGMの継ぎ間にタイミングが合い、思ったよりも声が響く。

梓も九綱君も……。そこにいるグループ全員が目線が……。僕に注がれる。

「あ……。うーん、今、僕ちよつと声大きすぎたかな？」

「あんたって、ほんまアホやな？」

真剣に話を聞き入っていた高川が、我慢できず突っ込む。

「もう、ホント……。つい口に出してしまったん。本当にキレイに見えたもんだからさ」

「あんた、なんかたまに滅茶苦茶間あ悪い時あるもんなあ」

「せやねん、仕事でもあんねん。たまにやねんけど……。あつ、そう言えばこないだな……」

「いやええから、取りあえずこの話最後までして。仕事の話はまた聞くから」

と言うと、高川は滅多に出ない真剣な眼差しモードの表情になった。

人間観察 vol.09 (後書き)

年末にこんな事してても、受かる人は受かるんですよ。受験はわからん。

人間観察 Vol.10 (前書き)

理想郷にも投稿しております。

梓はまた溜息をついた。

「ハア…、そつか…緒山君いたんだっけか」

と言いながら、一瞬視線を宙に移して…すぐに九綱君へと戻す。

「でも、あなた…納得したでしょ？そして解ったでしょ？どう頑張っても、この状況は変わらないってことが。もうゲームオーバーなのよ」

と言つて、今度はこつちの方を見る。山村君も三巻君も僕も、彼女が九綱君に近づいた辺りからゲームを放ってしまっていたため、ゲームオーバーになってしまっていた。

「このバカチン、早よ言えや」

山村君が梓に突っ込む。

九綱君は納得してしまっていた。彼は、自分自身の中で絶大であった…他の何者にも障られない、自らの気持ちと同質のものに敵対していると気付いたのだ。その比類なき硬質の気持ちは、決して破壊できない。自らのそれが破壊されないのと同じこと。いや、たとえ破壊できたとしても、そこに何が残るのか？悲しみと苦しみが残るだけで、得られるものは何一つない。彼は頭が切れ、理解が早い人間である。梓の言葉を理解して、もうどうしようもないと悟った。すんなりと自覚した。

…九綱君は、僕が見抜けた彼女の嘘を見抜けていない。いや、彼だけではない。そこにいる皆が見抜けていない。僕はどうすべきだろうか。彼女と話をするのか。このまま傍観するのか…。

(どうする……?)

彼女はサングラスを手にして、その場を立ち去ろうと、階段の方へ向かう。…僕は梓を後ろから呼び止めた。

「…梓」

呼び止めてしまった…。彼女はピタリと足を止める。まだ疑問が

ある。…最大の疑問だ。それを聞かずにこのまま別れるわけにはいかない。至つて真剣に、僕は彼女に問う。

「最後にいいかな？」

僕は彼女と勝負をする。心の読み合い。単純にただの勝負を。彼女は言つていた。知りたいのなら、当人に聞くのではなく、与えられた情報を基に自分で知つて欲しい、悟つて欲しいと。…彼女は片足を少し上げると、トンと降ろして、くるりとその場で回転して振り返つた。

「なあに？緒山君？私と勝負事でもするつもり？」

いきなり手痛いジャブだ。思いつきり喰らってしまった。彼女はあくまで冷静沈着。調子も良いと見える。ガードしては…勝ち目は万に一つもない。

「教えて欲しい。家森君に何を見た？」

一目惚れは嘘だ。その嘘を僕は見破つた。彼女はもう嘘は吐けない。演技はできない。どう出る？倉下梓…。

彼女は眉一つ動かさず、僕の目を一直線に見ている。少々の間をおいて…彼女はその小さな口を開いた。

「女の子の心は…海より深いものなの。それは深くて、深くて、深くて、深くて、遠くにある…男性には到底見ることが出来ないもの

…」

言つて、

「特に私の心はネ」

そう付け足した。

彼女の台詞に嘘はない。だが情報は入つてきていない。…はぐらかされた。もう一つの大きな疑問…。場の空気のプレッシャーに耐えられなくなり、それを口にする。

「お前の目的はなんだ？これからお前はどつなる？」

今度は、彼女は即答した。

「あなたは私を見ることは出来ない。あなたでは私を知ることが出来ない」

完敗：か。なぜか今は…もう表情が読めない。まるで見えない。
演技なのか本当なのかすらわからない。

(彼女：ここにきてもう一つレベルを上げた！？)
と、思うくらい…何もわからなくなった。

(やはり…初めから勝ち目などなかったか)
と思えてくる。

(…九綱君と話した際に見せた、明らかな演技すら計算されたものだったのではないか…、僕か誰かが見抜けるかどうかを試したものであったのではないか…)

と、疑わしくなってきたと同時に、たくさんの細かい問いが頭を過ぎった…。

(梓、お前はなんでそうファッションに統一性が無いんだ?)

(梓、あんなにコロコロと服装は変えていたのに、なぜ赤いランドセルだけは変えないんだよ?)

(梓、そんでそのトレードマークのランドセル…、なんで今日に限って持ってたねーんだよ!)

(梓、今時の女の子は誰でも茶髪にしてるぜ。なんでお前は真っ黒なんだよ)

(梓、お前、受験はどうするんだ?どこ受ける?一応受験生だろが)

(梓、お前は普段なにしてた?ていうか、逃げた雨樹人と再会したのか?)

(梓、お前は今何を思っている?何を考えている?)

そう思い終わった瞬間に、梓は階段の方向とは逆、つまり僕らがいる方へ、ゆっくりと歩いてきた。…ゆっくり…ゆっくりと。そして、僕らの間を通る。本当にゆっくり。僕と擦れ違う瞬間、彼女は僕の耳元近くにまで顔を近づけて、そつと呟いた。

「そんなにいっぱい悩まれても…いちいち答えてられないわ」

彼女はそのまま、ゆっくりと僕らの間を通り過ぎると、振り向くことも立ち止まることもなく、二階の出口から出て行った。僕はその後姿を目を皿のようにして見た。だが、何も見ることは出来なかつ

た。何も知ることは出来なかった。何一つわかることは無かった。

三巻君がスパイクに百円玉を投入すると、山村君が中指を立てた。「はいはい、九綱の失恋残念でした飲み会兼忘年会に来る人、この指止まれ〜」

と言いつつ、三巻君に続いて百円玉を投入する。

「時間は九時からね。で、九時まで」

「オールかよ。受験生に優しくねえな」

三巻君が突っ込む。

ゲームをしている三巻君と、その場に突っ立っている九綱君と、呆けている僕以外は、みんな山村君の指をつかんで賛同した。

ゲームセンターの二階出口は駅構内に繋がっている。そこから出てしばらく進むと、エスカレーターのところに出る。いつぞやか、彼女が少年にぶつかって話をしていた場所だ。そのエスカレーターを降りて少し進むと定位置がある。いつぞやの定位置だ。僕はゲームセンターの二階にある大窓へ走って行って外を見た。定位置を見た。外は雪が降っていて薄っすらと積もっている。植え込みのそばに彼女はいない。結局、ゲームセンターを出て行く後姿が、僕が彼女を見た最後の姿となった。

それ以降、グループ内で彼女を見たものはいない。

「で、どうなったん？」

「いや、話これで終わり。マジで」

「オチないやん。複線も回収なしやん」

「いや、だから最初からオチないって言ってたやん」

「で、家森君でどうなったん？」

「あー、それが彼はね、その年のセンター受けたんよ。それで、結果がえらい良くて、京大の医学部を受験したって聞いた。受かったかどうかは知らん」

「え、めっちゃ頭ええ子やん。その時、梓って女とは会ってたの？」

「うーん、後日、受験とか全部終わった後、平沼君に聞いた話では、

会ってるみたいだったね。沼ちゃんはさすがに今も梓と付き合いあるんちゃうかな。幼馴染だしね。それで、彼、家森君と会ったみたいなんだけど、彼は平沼君に、梓と付き合ってるって言ったらしい。でも、いつ家森君と再会したのかとか不明」

「ほんで、その梓の人間観察の目的ってなんだったん？」

「いやそれはもう本当に解らず終い…。こっちが教えて欲しいくらいだわ」

「…あと、可愛いみんなのアイドル朱里ちゃんてなんやねん!!?!? ??」

高川の声が荒くなる。

「朱里ちゃんはなあ…僕の初恋の人なんや」

「はあ、ふざけんな!!こんな帽子いらんわ!!」

そう言つて、高川はピンクのキャップ、梓と会った最後の時に、彼女が被っていたキャップを地面に叩きつけた。

「どうせやったらそのアイドルが被ってたキャップ持ってこいや〜」

一緒に人間観察をしてるとき、肩を叩けば振り向いてくれる距離に…梓はいた。最後に耳元で囁いたとき、ピンクのキャップのつばが僕の頭に触れるほど…彼女は近くにいた。でも今は遠い遠い場所にいる。住まいだけでなく心もそうだ。

今にして思えば、彼女の動作一つ一つ、言動一つ一つに、彼女を理解できるヒントが隠されていたはずだ。彼女は自分を知って欲しいと言っていた。だが、僕が考える限り、彼女を理解できる人間、彼女を見ることができる人間は、そうそうはいないだろう。家森君はその数少ない人間だったのだろうか。僕には…いや、僕だけでなく、皆にとってもそうは見えなかったはずだ。…僕は本当に何も見抜けなかった。あんなにそばにいて、話もしたつてのに。

「っさんじゅって〜んつつっ!!!!」

高川が僕の耳元で大声で叫ぶ。耳がキーンとする。…近所迷惑だから。

「…っというか点数低」

その後、僕は高川の機嫌を直すのにさんざん苦労した。なにが悲し
ゆうて、プレゼントあげて、一番だと褒めて、長い長い話して…、
機嫌を損なわれなければいかんのか…。

人間観察 vol.10 (後書き)

第一幕はこれにて終幕でございます。読んで頂き本当に有難うございます。次も期待して下さい！

空気感と雰囲気 Vol.01 (前書き)

第二幕の始まりで御座います。

空気感と雰囲気

小さい頃から…薄々と思ってはいたのだが、人にはオーラというものがある。雰囲気というか、印象というか、とにかくそんな感じのものだ。芸能人オーラとか。見れば一発で…こりゃ一般人ではないな、と思える極道の人とか。うまく口では言えないけれど、とても直感的というか、感覚的というか…、そんなもの。

人間は、大なり小なり何かしらの雰囲気を放っているんだと思う。普通の人であれば何も雰囲気を放っていないというわけではない。普通の人は普通の雰囲気を放っているのだ。だから普通であると、その人は一般人であると判断できる。

今、僕には意中の人がいる。同じ学校で、同じクラスになって友達になった。一度知り合ってからはずくに仲良くなった。今ではまるで、何年も昔から友人だったような間柄だ。こうなってしまうえば、恋心を抱くのはごく自然のことだろう。

彼女：僕が好きな女の子はもちろん普通の人だ。普通のオーラを発していることが多い。おそらくはただの一般人だ。だけど、何かどこかが違っている…と思うことが多々あった。例えて言えば、真っ白の絵の具にほんの一滴の墨を垂らして混ぜ込んだくらいのもので…、純白の一般人ではない…そんな違和感の存在がはつきりと感じられる。そう…、彼女はたまに、普通とは些細に違う空気感と雰囲気を生み出す時があるのだ。

熊本は市内の中心部に位置する私立知恩高校。熊本県と言えば、ままた田舎であるとの印象が強いが、九州では福岡県に次いでの大都市である。人口も年々増え、現在に及んでは政令指定都市になるのも近いと言われている。この知恩高校は高成績の進学校だとはお世

辞にも言えない。しかし、普通科特別進学コース…三十五人編成のこのクラスだけは別だと言える。このクラスの平均成績は市内トップクラスの私立高校のそれと同じレベルにあった。

僕、藤田正志は、県内トップの成績を誇る熊本高校や、他の私立高校の受験に失敗し、滑り止めとして受けた知恩高校特別進学コースに入学した。

三十五人の人が集まれば、そこには色々な人間がいる。勉強熱心な人、街に繰り出して遊ぶのが好きな人、体を動かすのが好きな人、テレビゲームが好きな人、異性に興味がある人…。趣向だけの話ではない。内向的な人、人見知りしない人、話しやすい人、とつつきにくい人、一緒にいて自然な人、波長が合わない人、好きな人、嫌いな人…色んな人がいる。違いこそ人それぞれだ。十人十色とはよく言ったもんだ。

僕はその人それぞれの違いを、その人の印象やオーラなどと表現できるようなものから読み取り、自分と波長が合うか合わないかを判断するのが得意だった。波長が合う人と合わない人、それぞれに適した付き合い方がある。これを円滑に行うことによって、人間関係がギクシャクしたりするのを防ぐことができる。

そして、空気。よく場の空気、場の雰囲気を読むと言うが…、これを感じ取るのも僕の得意業だ。僕は他人と自分とその場が織り成す空気感を、容易に敏感に感じ取ることが出来た。この生まれ持った特技のおかげで、僕は人間関係においてのトラブルは、まるで経験したことが無かった。お父さんは僕に何度となく、

「正志は世渡り上手だから感心するよ。俺はいつも会社で揉めてるがははは」

と、お酒を飲みながらよく言っていた。

四月某日。入学してから数日。半分くらいのクラスメイトの顔と名前が一致してきた頃、僕は彼女と初めて話した。

その日の二時間目の英語の授業中、窓ガラスがカタカタと音を立

てる。一番後ろの席に座っていた僕のすぐそばの窓だ。何の音だ？
と思つて見ると、一人の女子生徒が、鍵のところを指差して、

(あ〜け〜て〜)

と、声は出さずに口を動かした。気づいた僕にニッコリ微笑んで、
鍵を指差した右手を激しく前後させる。左手には学校指定のカバン
を持っていた。

(…おいおい、今頃登校かよ。見たことあるな…。うちのクラスの人
だけど、なんとという名前だったかな??)

などと思い、彼女の仕草と笑顔に負けたからか、気の毒に思った
からか、焦つたからか…よくわからないが、僕は鍵を開けてやつた。
彼女は少しずつ…静かにはれないようにと、難しい顔で窓を開け
る作業に集中した。そして先生が板書している隙に、窓から音もな
く教室に入ってきたのだつた。後ろの席の何人かの生徒が気づく。
抜き足差し足忍び足の動作を行いながらも、

(し〜し〜し〜)

と、人差し指を立て、

(お願い見逃して!!!!)

と、言わんばかりの表情を作る。後ろの生徒がクスクスと笑つと、
教室の雰囲気が変わる。ザワザワした瞬間に先生が振り向いて、彼
女を見つけるのだった。

「おいっ！なんだお前は!!?」

「ひっつ、なんでもありません!!」

「なんでもないわけがあるか!どこの誰だ?」

「帯山中三年の倉下です!」

「???? なんで中学生がここにいる!その制服はどうした!?」

「あ、違う。ここのクラスなんです!出席番号は二十六番の…」

「倉下、お前は二十三番だろうが…」

彼女のすぐ横にいた男子生徒が、立て肘で明後日の方向を向いたま
ま、口を挟む。彼は、入学式の日にした…平沼幸浩君だ。話しや
すい性格だが、どこか人との付き合いに一線を引いている。外見は

同じ年と思えないほど大人びていて、パーマでうねった髪はそこそこに長く、雰囲気は熱いロックミュージシャンって感じた。身長も高く、百七十センチはゆうに超えているように見える。

「あわわわ、二十三番の倉下梓です。遅刻しました！ごめんなさい！！」

と、大きく体を九十度に曲げてお辞儀する。クラス中に笑いがドツと沸く。

先生は出席簿で名前と出席を確認したあと、溜息をついて、

「わかった、いいから席に着いて教科書を開きなさい。黒川先生には言っておくからな！」

と言い、生徒を黙らせて授業を再開させた。

彼女はここの生徒で、今は学校にいるから当然制服を着ている。

制服はグレーのブレザーとスカート、白シャツというスタンダードなもの。胸には青くて細いリボンが添えられている。彼女の髪型はセミショートで、本当に真っ直ぐの直毛、髪の毛の色は透き通るような黒で、肌は白い。目は大きく、体型は痩せ型細身、身長は百五十センチちょっとという感じかな。ルックスは一見どこにでもいそうな感じではあるが、よく見ると各パーツが際立っていて、とても可愛いらしい女の子だ。第一印象は、普通の人、おつちよこちよい、お寝坊さんといったところ。僕とも波長が合う気がした。友達になれば上手くやっていけると感じた。

その日のお昼休み、平沼君と二人でいた彼女に話しかける。

空気感と雰囲気 vol.01 (後書き)

教室とか出席とか制服とか先生とか…やっぱり学校なカンジはいいです
ねえ。

空気感と雰囲気 Vol.02 (前書き)

ライス元国務長官はIQ180だそうですねえ。

「やあ、今朝は大変だったね。朝寝坊？」

「藤田君か。こいつは朝が弱いんだ。俺、中学も一緒だったんだけど…ほんといつもこんな調子さ」

平沼君は笑いながら言った。彼女は僕に目を合わせた。…この瞬間、ほんの一瞬なにかの違和感を感じた。その場の空気がかすかに揺れた気がした。次の瞬間、彼女は表情を変えて、

(……………???)

といった感じで、少し呆けたような目で僕を見る。それに合わせて空気感も元に戻る。そしてすぐに、

「あ〜、さっきは鍵空けてくれてありがとう!!!も〜中学の時は三回に二回は誤魔化したもんなのよ!風の梓って言ってねえ〜、いつの間にかねえ、ちゃ〜んと席にいるの!!!」

「まあ、沼ちゃんが毎朝教室の後ろの扉の鍵を開けておいてくれてたおかげなんだけどね」

「この教室一階のくせに、ベランダが無いんだからっ!入るのに苦労するわよ!!!沼ちゃんも鍵空けてくれてなかったし!!!長い付き合いじゃない!私がない時点で、鍵くらい開けときなさいよ!!!」

彼女は怒涛のマシガントークをして、プンプンと口を膨らませ、怒ったような表情をする。

「…いや、また寝坊だなとは思ったけどさ。まさか窓から入ってくるとは思わなかった」

平沼君は呆れたように言う。

「じゃあ、今度からは僕が開けておいてあげるよ」

「藤田君、やつさしい〜!!!」

怒った表情から一転させて、上機嫌な笑顔になり、名乗ってもいない僕の名前を呼んだ。

「あれ、まだ名乗ってないのに…僕の名前??」

「え?だって初めの日に自己紹介したじゃん」

確かに自己紹介はしたけど…そんなの緊張もあって、半分すら覚えてない。

「こいつ、バカのくせにそういうことはすごい記憶力なんだ。中学の時なんて、全校生徒の顔と名前と性格をほぼ覚えてやがったからな。しかも先生のもだぜ。異常だろ?」

「全校生徒ってすごいなあ!記憶力すごいんだ?実はIQ百八十とかあったりして」

僕がそう言つと、平沼君は、

「あー、でもこいつ高校受験まで曜日と月の英単語書けなかったよな。人の名前は大切だけど、最低限の受験単語くらい知つとけよ」と、笑いながら言う。

「バカつて言うな!!バカつて!!しかもなに!??英単語お?ちゃんと言えますう〜!!マンデイサタデイチューズデイ、ジャンニユアリーフェビュリユアリーマーチアイプリルジュライ!!!」
彼女は大声で捲し立てるが、突っ込みどころは多い…。ルックスからは大人しめの性格をイメージしたが…明るくてテンションがとても高い人だ、と思った。

「鍵は藤田君に頼むからいいもんねっ!ふ〜〜んだ!」

「いや、ていうかも遅刻すんなよ」

平沼君の冷静な突っ込みに笑いが込み上がる。居心地が良かった。波長が合うつてのはこの感覚のことだ。会ったばかりなのに不自然な感じが無い。自然に話ができる。この二人とは仲良くなれる、親友になれる予感がした。

ゴールデンウィークも過ぎ、少し暖かくなってきたある日。クラスはすでに馴染んでいる。三十五人の人間が集まると、そこには二三のグループの構図が見えるようになる。それに属さない人も数人はいるが、理由は様々である。単に人との接触が苦手なことによる、

つまはじき者になっっていることによる、部活の人や地元の友達と遊ぶのが主であることによる、わき目も振らず勉強に勤しんでいることによる……など、本当に理由は様々である。

僕も沼ちゃんも梓ちゃんも、特にこれといったグループには属していない。いわば中立派といった立ち位置にいる。しかし、梓ちゃんだけは少し異質で、とにかく親しみやすくて人見知りしない性格のため、毎日少しずつ男友達が増える。今ではクラスの男子全員と話すし、特進コース以外にもたくさん友達が出来ている様子だ。この調子だと、卒業時には皆と友達になっけていても全然おかしくない。

沼ちゃんが言っていた中学校の生徒全員の名前を覚えていたというのは、この社交性の高さによるのかもしれない。その反面、女子と話している姿はそれほど見ない。誰かと話しているのは、きまってる男子であった。でも、最も多くつるんでは僕と沼ちゃんの二人で、傍から見れば、この三人で一つの小さいグループに見えるかもしれない。それほどよく一緒にいてよく話した。

「だから、漢文の構図は英語の文体構図に似てるんだって。SVなになに、習ったでしょ？英語は主語があって述語があって、その後ろに細かい情報が出てくるようになってるじゃん。漢文も同じ構成なんだよ」

僕が声を張り上げると、

「本当だな。だったら簡単じゃん。漢文の単語覚えれば、白文でもだいたい読めるじゃん。一、二点とかし点がある分、もっと簡単」沼ちゃんが同意する。肝心の梓ちゃんは、

「ちいっとも簡単じゃないわよ！英語できない私はどうなるのさ！自動的に漢文もできないことになっちゃっうじゃん！！やばい、やばいわ。こんな調子じゃクラス落ちしちゃうわっ！！」

と大変に嘆いている。

「あ、それ置き字だから読まないよ」

梓ちゃんが悩んでいるところを指摘して言うと、彼女は、

「なにさ！？おきじ！！？なにそれ？？？」

と、目を白黒とさせている。

「英単語の中にも発音しない文字が含まれてることがあるでしょ？
pingpongのgとかさ。それと同じ。漢文の中にも読まない
文字があるの」

「はあ??なんで読まないものを入れる必要あんのよ!!法則も無
いし、いちいち覚えるっての?こんな文字使ってる人頭どうかして
んじゃないの!??」

「これからは梓読みでピングポングで言うことにする!」

「世界はあたしに従いなさいっ!!」

梓ちゃんの頭はパンクしそうだ。

「それについては俺も同感だ。読まない文字なんて省けばいいじゃ
ん」

沼ちゃんが冷静に同意する。

ここ知恩高校特進コースは、一年通しての成績が芳しくないとい、
学年が上がる際に普通コースに格下げされてしまふ。逆に成績が最
も良い普通コースの生徒と入れ替わりになる。はっきり言って、特
進コースと普通コースの成績には雲泥の差があり、前例は滅多に無
いそうだが…数年に一度は、入れ替わりの例が実際あったそうだ。

「数年に一度出るバカになりたくなけりゃ…勉強しろ」

沼ちゃんが、厳しく言い放つ。

「うううううう、もうやだあ〜」

梓ちゃんは頭を抱えて、髪をわしゃわしゃする。まあ誰しもが勉強
の時、どうしても理解出来ないことに遭遇すると嫌になるし、ヒス
テリックにもなるもんだ。

一緒に過ごす時間が増えるにつれて、淡い恋心が育つ。前々から
自覚していたが、僕は梓ちゃんのことを好きらしい。それが決定的
に自覚できたのは、ついこないだ…ついこないだの放課後のことだ
った。

沼ちゃんは僕の予想通りバンドをやっているらしく、学校が終わ

ればすぐに帰宅する。一人で楽器の練習をするか、スタジオでメンバーと練習するかのどちらかなのだろう。学校に居残っている姿はたまにしか見ない。僕も帰宅部だ。これと言って趣味が無い僕は、家に帰ってテレビを見て、夕食を食べて勉強するというパターンが多い。梓ちゃんも部活には所属していない。前に二人にクラブ活動の話をしたことがあったが、

「俺はバンドが忙しいから無理だなあ」

「私、すごい運動音痴なのよねえー。もう少し体が思い通りに動けば、部活だって楽しいんだろうけどなあ……」

と、二人とも部活には興味が無い様子だった。

梓ちゃんは放課後はいつも校舎の屋上に出て、日が沈むくらいまでそこに居る。つい最近放課後は屋上に行ってるなと気づいたのだが、そこで何をしているのかはよくわからない。ただ、毎日結構な時間をそこで過ごしているので、何か明確な目的があるのだろう。だが、僕はそれを想像することは出来なかった。

知恩高校の校舎は四階建てだがそう高さはない。屋上からグラウンドが見渡せる。放課後はそこでたくさんクラブ活動の様子を目にすることが出来た。

野球、サッカー、ハンドボール、陸上、学校の先生やOBの監督さん、外部の指導者など、高校生以外の人も多くいるし、ここ知恩高校の周囲には軽く数えて十ほどの高校が乱立しているため、練習試合目的で他校の生徒も多く出入りする。つまり、放課後のグラウンドは、学内学外学生非学生問わず、様々な立場の人がそれぞれのことを行う場所になるわけだ。

ゴールデンウィークに入る直前のある日、僕は放課後、梓ちゃんが屋上に行ったのを確認してから数十分後、屋上に行ってみた。その校舎：二号館の屋上は、誰でも行き来自由になっている。お昼休みも解放されており、昼食を屋上で取る生徒も多くいる。放課後も昼食時ほどでないにしろ、数人の生徒が遊んだり喋ったりして、授業から解放された一時を過ごしている。

「いたいた…」

梓ちゃんは一人で、手すりに両肘をかけて寄りかかり、グラウンドの方を眺めている。ちょうど出入り口の前にいるため、彼女の後姿が見える。放課後の屋上といういつもと違う空間のせいか、スカートや黒髪が風でなびいてる後姿のせいかはわからなかったが、何故かいつもと違う雰囲気を感じた。異質な空気感。…しかしそんなことはほんの些細なことだ。僕は、後ろからワッ！と梓ちゃんを驚かしてやろうと、抜き足、差し足、忍び足でソロソロと近づいた。

空気感と雰囲気 Vol.02 (後書き)

学校話では屋上は必須ですねえ。

空気感と雰囲気 vol.03 (前書き)

放課後の屋上って何かといいですね。

…一歩、一歩と静かに忍び寄る。しかし、距離はあと一メートルと少し…といったところで、梓ちゃんは急にクルリとこちらを振り向いた。

「わっ！！！」

梓ちゃんは振り向くや否や、急に大声で僕を脅かす。僕はあまりに意外すぎて…尻餅について倒れてしまった。とたんに彼女が駆け寄ってくる。

「ごめん！大丈夫？？ちよつと驚かしてやろうって…軽い悪戯のもりだったんだけど…」

梓ちゃんは心配した表情で僕に謝る。

「う、うん…大丈夫大丈夫。それにしても驚いたなあ…僕が来るのわかったの？」

梓ちゃんは僕を立ち上がらせるため、僕の両腕を掴んでエイ！と引っ張って言った。

「うん。コソコソしてるネズミさんがいたから、返り討ちにしてやるうと思っただの！」

梓ちゃんは僕の無事を確認すると、すぐに意地悪な笑みを浮かべてそう言った。

「ネズミとは酷い言い草だ。ここで何をしてるんだい？放課後はいつもここに居るじゃないか」

僕は何気なく聞いたつもりだったが、何故かその場の空気が真剣な空気になった気がした。

（おかしいな…普通の会話と同じようなものなのに…。何が違う？）

「放課後のグラウンドって…色んな人いるじゃない？私はここで、その人たちを見てるんだ」

梓ちゃんはニッコリ微笑んでそう言った。

「あゝ、うちの高校、スポーツは有名だもんな。でもスポーツ観戦

するのなら…もっと近くで見ればいいのに。マネージャーになるとかさ」

梓ちゃんはグラウンドを見ながら微笑する。

「うん、ここでこうして見ているのが好きなの。藤田君も一緒に見ない？」

「う、うん。いいけど」

時間は過ぎていく。梓ちゃんは本当にグラウンドを見ている。野球も、陸上も、サッカーも。何を、誰を、と言った見方でなく、全体を見ている。たまにその目線の対象を誰か個人に移しては…また全体を見る。生徒、先生、男性、女性、関係なしだ。僕には何がそんなに面白いのかわからない。たまに話しかけるが、梓ちゃんは空返事ばかり。いつもと違ってリアクションは薄い。

（前に運動音痴だつて言つてたからなあ…部活動の人らを見て羨ましがってるのかな…もっと近くで見れば楽しいのに…そうだ！）
僕は彼女の手を掴んで、こう言った。

「こんな遠くで見ているも、何が起こってるかわからないさ。見るんならもっと近づかなきゃ！」

「え…？」

梓ちゃんは一瞬ハツしたような表情をしたが、すぐに戸惑った様子で僕を見た。僕はお構いなしに、梓ちゃんの手を引っ張って、出入り口まで連れて行くとする。僕が急ぎすぎたため、五メートルほど進んだところで手が離れる。

振り向くと梓ちゃんは、ちょうど夕日を左肩に置くような位置にいて…微笑んでいた。夕日は梓ちゃんの黒髪を赤く染めている。薄っすらと風が吹いて…梓ちゃんの髪の毛、スカート、胸元の青いリボンがなびく。彼女は…微笑を崩さずに、風になびくスカートと髪の毛を押さえる。…まるで高名な画家に描かれた絵画のようなシーンが、現実として目の前に創られて…僕は言葉を失った。

「そっか、距離か…」

梓ちゃんが呟く。よく意味はわからなかったが、僕は話を合わせる。

「そう！近い方がいいんだよ、観戦はね！近くないと、細かいところが見えないだろ！」

彼女は変に納得したような表情で、

「そっか…そうだね」

と言つて、またニツコリと微笑んだ。

その屈託の無い無邪気な笑顔を前にして、僕の心は梓ちゃんに根こそぎ持っていかれた。その日のその時、僕の世界観は変わった。今まで空虚であったピラミッドの頂点に、梓ちゃんへの想いが座位することになりましたとさ。

想いは日に日に強くなっていく。梅雨も過ぎて、少々暑くなってきたある日。僕は沼ちゃんに梓ちゃんのことと話がある、と相談して気持ちを打ち明けた。どんどんと強くなる想いは、誰かに打ち明けるしかないほど僕の心から溢れ出しそうだった。彼は、

「そうだったのか、俺は全然気がつかなかつたよ。中学の時のあいつは…今と同じで、周囲は男友達ばかりだったけど、浮いた話は聞いたことないなあ。倉下が恋愛に対してどういう考え方を持っているのか知らないから…ろくにアドバイスも出来ないけど、藤田君は中学時代を含めても、あいつとかなり親しくしてる方だと思つし、当然だけど悪い印象はないと思つぜ」

と、昼食のパンを頬張りながらそう言った。梓ちゃんは日々何度も繰り返す遅刻のせいで、担任の黒川先生に呼び出されていて不在だ。ただ、僕の気持ちを言うばかりが相談の目的ではなかった。沼ちゃんは梓ちゃんのことをどう思ってるのか、逆に梓ちゃんは沼ちゃんのことをどう思っているのか。できればそれも知りたかつた。

「ありがとう。それで、一つ聞いておきたいんだけど、沼ちゃんも梓ちゃんと親しいじゃん。もし、ほら、沼ちゃんが梓ちゃんのことを…あれだつたら僕は…」

沼ちゃんはこつちの台詞の途中で笑つて言った。

「ハハハ、無い無い」

彼は手のひらをヒラヒラさせた。

「あんな…、」

彼は小声で、耳を貸せという感じで、身を机の上に乗り出す。

「内緒だぜ…：ていうか別に内緒じゃなくてもいいんだけど、俺…：いま付き合ってる子がいるんだ。バンドの関係で知り合った子でさ、学院大学付属高校にいんだよ」

熊本学院大学付属高等学校。自由な校風で有名な、私立の進学校だ。学業成績は高く、普通のクラスからして、この特進コースに勝るとも劣らないほどの成績である。

「そうだったのか、全然知らなかった…。そんないところのお嬢さんと付き合ってるなんて…：やつぱバンドマンは一味違うねえ」
と、僕はニタリと嫌味っぽくリアクションした。沼ちゃんは照れた表情で「クヌヤロウ」と、僕にヘッドロックをかけて、頭をゲンコツでグリグリした。そこに、

「やつほ…！ご飯食べちゃったの…！？んもうう、少しくらい待っててくれてもいいんじゃない？一人でご飯食べてもつままないしい…！」

梓ちゃんである。彼女は、

「ようやく解放されたよ、まったくヤンなっちゃうワ」

と言って、ガサゴソとアルミを広げて中にあるおにぎりを手に取った。

「こつてり絞られたか？遅刻女王」

沼ちゃんは、僕に、

（お互い内緒な？）

と、アイコンタクトを取る。

…ほんの一瞬…：なにか空気が変わった？？気がしたが、すぐに沼ちゃんと目を合わせて軽く頷く。

「なに見つめあっちゃってんの？？ひよっとして二人、愛の告白でもしたの？もう付き合ってるの？？？」

『なわけねーだろ！気持ちわるい！』

二人の突っ込みがシンクロする。

「ステレオで否定するところがまた怪しいわねえ」
梓ちゃんは機嫌がいいと言葉尻が歌のようになる。

「ま、いいや。…二人でどうぞ見つめ合って頂戴。私はごはん食べるの！ごはん！」

と、おにぎりを口いっぱい頬張った。

夏の始まりの日。僕は前々からあることを考えていた。デート。梓ちゃんと二人でどこかへ行きたい。別に遊園地だとか、動物園だとか、そんないかにもなシチュエーションでなくても、必要なものがあるから買い物に一緒に行くとか、ちょっとした用事で出かけるのに二人で行くとか、そんな軽いもので十分だった。どこかで少し二人だけの雰囲気になれば…僕はそれで十分、梓ちゃんに心を伝えることができると思っていた。

生きていればチャンスは訪れるものだ。要はそれに気づくかどうかと、それを生かせるかどうかだ。今回は前者に関しては何の問題も無かった。

その日のお昼休み、僕と梓ちゃんは黒川先生に呼ばれて職員室へと向かった。

空気感と雰囲気 vol.03 (後書き)

放課後そのものがいよいよな気がしてきました。

空気感と雰囲気 vol.04 (前書き)

職員室に入ったただけでしばかれたりしてましたねえ。当時も意味が解らなかつたんですが、今振り返ってみるとますます意味が解りませんな。

「なんかやだなあ〜…何か悪いことしたっけかなあ?? 私たち…先生の説教は大の苦手な梓ちゃんだ。呼び出されるとロクなことがないというのは、いつものことだった。僕は、

「いや、今日はお説教じゃないと思うよ。僕も一緒に呼び出されるんだし」

「そっか、そっだよね!」

梓ちゃんは本当に「そうか!」という表情をして、手のひらをグーでぼんと叩いた。…いや、そんなに普通に納得されてもリアクションに困るんだけど…。

職員室に着くと、黒川先生は何の変哲も無く、何のリアクションも見せず、自分の席に座っていた。黒川先生は、かなりのお爺ちゃん先生で、やばいのではないかと言うほど老けて見える。教師の定年は六十歳くらいなんだろうか。しかしながら…この先生の見た目は、八十歳と言われてもわからないほどである。動作はかなりスロ―リーで、声も小さい。すでにボケがきてるのではないか、と思うくらい物忘れが多く、一部の生徒からは裏でバカにされていたが、それを知ってもニコニコしているほど、優しく人がいい先生だ。

「あ、あ〜…やっと来たな。ふたりとも」

「はい、何の用でしょうか?」

用事を聞く行為は手っ取り早く済ませたい。話によっては、この後梓ちゃんと一緒に何かを行えるようになるのかもしれない。梓ちゃんは先生に軽く会釈した後、職員室を見回している。

「あ、あ〜…ふたりに頼みたいことがあってね…なんだったかなあ…? たしかプリントが…」

そう言っつて、先生はゴソゴソと何かを探してるようだが…数分経つても出てこない。

「先生…?」

「あ、あゝ…悪いねえ、ちょっと待つとくれ」
と言うと、隣の女性教諭に話しかける。

「かねがわせんせゝい、ほれ、あの高校生優秀論文集の…プリントはどうしたかなあ??」

隣の机の金川先生は、美人でグラマラスな英語教師である。エロチックなオーラをブンブンと発している。このレベルのオーラだと、僕でなくとも誰でもわかるだろう。こういうオーラをフェロモンなどと表現するのだろうか。残念ながら特進コースだと授業での縁はないが、男子なら誰もが最初に顔と名前を覚えるであろう先生である。

「あ、それならほら、先生の机の一番上の引き出しにありますよ。
今朝、生徒に頼むんだって仰ってたじゃありませんか。忘れたら困るって仰って…」

そう言つて笑いながら、黒川先生の引き出しの一番上の引き出し空けて取り出してみせる。

「はい、もう先生つたら、ボケるには若すぎますわ」

「あ、あゝ…悪いねえ、すっかり忘れてたよ…。ありがとう金川先生」

(爺さん、その引き出しは一番最初に見てるだろうが！)

と、突っ込みを入れたかったが…さすがに先生に向かってそんなことは言えない。

「ありましたか?」

と、問うとすぐに説明してくれる。

「あ、あゝ…実は市内の私立高校の連盟で毎年論文を募集しててな…」

辺りを見回しつつも会話を聞いていたのだろう、梓ちゃんの眉間にしわがよる。

「…僕は編集の責任者だね。それを読んで受賞作品を選んで…優秀なものは本にして、毎年出版しているのだけれど…」

(まさか論文を書けとか読めとか…)

僕の眉間にもしわがよっていたに違いない。

「…実は締め切り間近なのに、まだシャンパニア学園高校の原稿が来てないんだ。それで…、ふたりには悪いんだけど、今日学校が終わってから、シャンパニアまで取りに行ってくれないかな？」

聞くや否や、眉間のしわが取れて顔がほころぶのが自分でもわかる。

（黒川先生グツジョブ！）

と、心に思った。

（これって事実上デートになるじゃんっ！）

梓ちゃん並のハイテンションになりながらも、表面は冷静に受け答える。

「あ、わかりました。そういうことなら放課後に二人で行ってきます」

「あ、あゝ…悪いねえ、ふたりとも。それじゃお願いするよ。向こうには電話してあるし、白藤先生という方に原稿を頂いたら、明日のホームルームの時に渡してくればいいから」

先生はニツコリわらって「よろしく」と表情で言う。

「わかりました！」

僕は快く返事して、職員室を後にした。

「梓ちゃんは都合は良かった？なんか、僕が勝手に引き受けちゃったって感じになっちゃったけど」

思い返せば、梓ちゃんは一言も喋ってない。一人で先走ったかと心配になってきた。しかし彼女は、

「んん？大丈夫、大丈夫！私ってほら、放課後は屋上にいるだけだし、先生方への点数も稼いでおかないとね。遅刻魔で成績悪くて運動音痴じゃあ、本当にクラス落ちしちゃうワ」

それは困る…。特進コースのクラスは三年間一緒なんだ。梓ちゃんがいなくなってしまうたら、僕の学校生活は真っ暗になっちゃう。

「そうだね、先生は責任者だって言ってたからね。その責任者に頼まれるくらいだし…信頼されてるみたいだから、ちゃんと仕事すれば点数大幅アップだよ、きつと！」

僕は嬉しくなつて後々のことを考えた。その時、梓ちゃんは僕を食いつくように見てた。真剣な表情で…あまりにも鋭い視線を受けて我に帰る。我に返れば、空気の澱みにも気づいた。

「???どうかした?僕の顔に何かついてる???」

彼女はニツコリ微笑んで言った。

「いいえ、あんまり藤田君が嬉しそうだったから、ついつい見てただけ」

僕は急に恥ずかしくなった。顔が赤らんだのが自分でもわかった。

シャンパニア学園高校は、知恩学園の南東に位置する。私立でも県内屈指の進学校で、先の学院大学付属高校などと並んでの成績優秀な男子校である。名前から連想されるようにキリスト系の学校で、僕ら知恩高校は仏教系の学校なので、同じ高校という括りでも随分と雰囲気の違いがある。知恩高校からはそれなりに距離があるが、熊本市内を走る路面電車を使えば、数十分で着いてしまい、そう歩かなくても済む。二人っきりで外のムードを楽しむにはうってつけの機会だ。もっと梓ちゃんのことを知りたいし…もしもチャンスがあれば…いい感じの雰囲気になれば気持ち伝えたい。

僕の特技は空気を読むことだ。その場の空気を読んだり、人が発するオーラを感じ取る。もしも…、もしも少しでも梓ちゃんが僕に気があるようなオーラを発すれば、見逃すことなくそれを感じ取る自信はあった。帰りのホームルームも終わる。沼ちゃんが、

「面倒なことを押し付けられたなあ。しかも、シャンパニアとか…遠いじゃん。ま、でも…」

と言って、ニンマリと僕に笑みを送る。梓ちゃんはすでに校庭に出ている。僕は、

「そうなんだ、二人っきりでデートを楽しんでくるよ」

と、意地悪な笑みを直球のセリフで返す。沼ちゃんはフツと鼻で笑って、

「おう、楽しんでらっしゃい。おいらは今日も練習だべー」

と、歌いながら教室を去っていった。僕は急いで校庭へ出た。

梓ちゃんはカバンを両手で背中側に持って、水道のところに寄りかかって校庭を眺めていた。

「本当にグラウンドを見るのが好きなんだな」

視線を移さずに答える。

「うん、私見るの大好き。子供の頃からこうなの。ずっと、ずっと……こうしてた」

なんだ、小学生の頃から観てばっかだったのか。スポーツでもなんでも、観るよりやる方が楽しいだろうに。

「じゃあ、ぼちぼち行きますか」

靴紐を結び直してそう言う。梓ちゃんは、

「うん。シャンパニアなら市電だね。行こうかつ!!」
と言って走り出す。

「乗り場まで……競走……!!」

五、六メートル先で叫ぶ。

「おいっ、そりゃずるいぞ……!!」

僕は追いかける。まったく、運動音痴のくせに粋な真似を。

空気感と雰囲気 vol.04 (後書き)

昨日、黒川先生のモデルになった方と偶然お会いしました。相変わらず独自のテンポを持っておられました。

空気感と雰囲気 vol.05 (前書き)

関西の女の人って絶対アメ持ってるんですよね。そして、絶対くれる。

乗り場へは僕のほうが早く着いた。梓ちゃんは全力疾走の果てに転んで、涙目になっていたからだ。

「…全力で走るからだ。ガキかお前は」

「だって抜かれそうだったんだもん!!」

僕は乗車券を二枚取って、一枚を梓ちゃんに手渡す。

熊本市内において路面電車はかなり重要な交通機関だ。JR熊本駅より若干南に行ったところを始発駅として、熊本駅前、市内の中心街のど真ん中を経由して、僕らの学校の近くを通る。そしてそのまま水前寺公園を抜け、南東へと進む。健軍という地域を越えてしばらく行けば終点となる。シャンパニアは健軍にあるので僕らが乗った乗り場からは、近からず遠からずといった距離だ。時間的には数十分ほど掛かる。

梓ちゃんはさっき転んだことも忘れたかのように、市電の中を見渡して、様子を見入っている。今気づいたが、梓ちゃんはなにか他のことに気を取られると、すごく真剣な眼差しになる。簡単に空気感が変わる。今まで幾度と無く感じた違和感は、彼女が何かに夢中になったときに現れたものなのかもしれないと思った。そう思った瞬間、梓ちゃんがニッコリ笑って手を差し出してきた。

「ん、これあげゆ」

と、コロコロとアメを口の中で転がしながら、僕にもアメをくれる。

「ありがとう」

アメを受け取って口の中に入れる。オレンジの味がする。

「藤田君は何か好きなこととかあるの？趣味とか、得意なこととか」
梓ちゃんは僕を覗き込むようにしてそう言った。

「う〜ん、特に無いなあ。でも車が好きな。三年生になったらすぐにも免許を取りに行きたいよ。で、卒業したらすぐにもバイクでもしてさ、自分の車が欲しいんだ」

梓ちゃんは目をキラキラさせて僕の話の話を聞いている。少し…ほんの少しだけ…梓ちゃんは僕に気があるのかな…と思った。

「…だから、今は勉強に集中かな。つまらない答えだけど、成績さえ良かったら、親も免許を取ることやバイトのことも許してくれそうだしね。もちろん、渋々だろうけど」

「そっかあ…、なんか立派だねえ」

「梓ちゃんは、趣味は何かある？好きなこと…」

僕は彼女の趣味や昔のこと、家のこととか…プライベートなことは何も知らない。よければ何か知りたいなと思った矢先、感心した表情で話される梓ちゃんの台詞に、僕の言葉は遮られた。

「ほらほら、沼ちゃんも音楽やってるでしょ！？男の子っていいなあ…なんかやりたいことがあって、夢があって、それに向かって…って感じでさ！わたし中学生の時、一度だけ沼ちゃんのライブ観た事あるんだ！もうねえ…凄かったんだ！音もグワングワンに鳴っててね！ステージのライトとか、沼ちゃんの服とかもすごい！！！！その場の人みんな飛び跳ねたりして…私は怖くて入っていけなくて、後ろのほうで見てただけど、もう同じクラスの沼ちゃんだとは思えないくらいカッコ良くてさ！ライブ終わってからは、観に来てくれてありがとうって声かけられたんだけど、沼ちゃんの回りのファンの女の子から、白い目で見られちゃったりしてさあ…！そいでさ…」

彼女のマシンガントークは延々と続く、その後は黒川先生や金川先生の話、試験の話、クラスメイトの話などしているうちに、あつという間に健軍に着いたのだった。

往々にして、気心のしれた人と一緒にいたり、好きなことをしたり、極度に集中したりすると、あつという間に時は過ぎ去ってしまった。人間の感覚とは不思議なものだ。集中時なんて特にそうだ。帰って勉強して…たまにハマって集中していると、母さんが僕を呼ぶ声が聞こえなかったり、少し悩んで考えてただけなのに、四十分くらい過ぎていたりすることがよくある。時間の感覚は当てにならない。

現に梓ちゃんと一緒にいると、時はまるで僕に嫌がらせをするかのように、早く過ぎてしまう。退屈な授業中と比べると、同じ経過時間だとは到底思えない。時間だけではない。人の感覚そのものが大して当てにならない。初めて通る道は長く感じたり、初対面の人から変に威圧感を感じたりしてしまうもんだ。…その場の空気を読むのは得意なつもりだが…これまでだって、誤解はたくさんあったんだろうなあ。

健軍で降りて、そんなことを考えていると、微かにだが…確かに空気感の澱みを感じた。ハツと我に返り、目の前に何かがあるのに気づく。…なんだ？目？気づくと、梓ちゃんの顔が目の前にあった。近い。数センチだ。いつかの屋上の時のように、尻餅をつきそうなほどの勢いで後退する。

「な、な、な…ビツクリした…!!ど、どうしたんだ一体??」

「ええ?だってだって、さっきから何度も呼んでるのに、藤田君ては全然返事してくれないんだもの。どうしたのかなって思っちゃうよ」

「んん?呼ばれたのか?俺?全然気づかなかった…。これこそ集中ってやつだ…。あーでも、近かった…。でも…キスする時って、今くらい近づいて…、」

「ふふ、でも藤田君の言うとおり」

梓ちゃんが上機嫌に言う。なんだ?なんのことだ?僕の言うとおりって…。そう思って、

「んん?何か言ったっけか…?僕…」

「あれあれ、覚えてないの??ま、いいや。それより早く行く行こ!日が暮れちゃうワ!!」

というと、またも彼女は走り出す。おいおい、さっき転んだばかりじゃないか。もう忘れたのか。

「おい!待ってってば!そんなに急ぐとまた転んじまうぞ!!」

彼女は五、六メートル先でピタリと足を止める。どうやら今、思い出したらしい。痛みとともに。

シャンパニア学園高校は男子校だ。なぜか市外および県外の出身者が多く、その数は半分以上を満たす。九州全土はもとより、果ては広島や大阪などの大都市からも入学者が来る。僕は理由までは知らないが、毎年毎年そうなるらしい。一般にはキリスト教系私立で進学校ということもあって、いいとこのボンボンお坊ちゃまが集まる高校として知られているし、それは事実だった。

…そこでの出来事は唐突に起こった。まあ嫌なことが起こる…それはじわじわくるとは限らない。刹那、いきなり起こることだって多々ある。

シャンパニアの校門まで行くと、そこで異様な二人組が目に入った。本当に唐突に。一人は…小さい。凄く小さい。身長は梓ちゃんと変わらないくらいの男で、丸坊主、目はくつきりとして大きく、服装は下から、靴はローファー、シャンパニアの制服のズボン、上は黒のノースリーブ一枚だった。金色のチェーンのようなネックレスと指輪をいくつつつけている。もう一人は、身長百七十センチくらいで細身、肩まである長髪、目は大きく、眉は細く整えられている。男だが、黒く長いスカート状のズボンをはいている。スカート下は派手な模様の入ったウエスタンブーツで、肩口から破けるようなデザインの白いシャツから、白くて細長い腕が伸びている。腕元や首の周りには、ジャラジャラとかなり多くのアクセサリが輝いていた。二人とも…まるでヤンキーマンガに出てくる悪役キャラみたいなルックスだった。

見たらすぐに気づく。異様なのはルックスだけではない。空気感だ。ひどく澱んで歪んでいる。二人ともこっちを見てすらいないが、この二人は危険な人物であると、ルックス以外からも…そう、オーラが出ている。その場を飲み込んでしまうほどの威圧感とオーラ、それがその場に滲み出ている、その空間を支配しているといった感じだ。

…別に何も構うことは無い、彼らに用事は無いし、彼らだって僕

らに用事はない。もう行こう…と梓ちゃんを振り返ると…彼女はいつもの真剣な眼差し…数倍はあるうか、超真剣な眼差しで二人を凝視しているのであった。長髪の方が、梓ちゃんに気づいてこちらを見る。坊主の方は電話をしているようだ。こちらは見ていない。時間にして数分、距離にして十数メートル…梓ちゃんと長髪の男は、互いを凝視していた。

…今更ながら気づいた。この異様な空気感と緊張感は、この二人が作り出しているのではない。梓ちゃんが大部分を作り出している。彼らが放つ威圧感とオーラは、その場の雰囲気とはまた別物であり、このとてつもなくイヤな雰囲気は、梓ちゃんが彼らを凝視していることによって作られているものだった。

「あ、梓ちゃん??」

はつきり言って、こんなにも連中を見ていては…彼らに敵意が無くても、こつちからケンカを売っているようなものだ。そう思われても仕方がないほど、梓ちゃんは長髪の彼を凝視していた。

空気感と雰囲気 vol.05 (後書き)

坊主頭のヒトは1話で出てきた九綱くんの従兄弟です。

空気感と雰囲気 vol.06 (前書き)

なんで高校名は伏せてあるんだろう。

坊主の方が電話を終えて、長髪に話しかける。

「先輩、新空予約取れたつす。今日は少し盛大にやりますか」

長髪の男は、梓ちゃんから目を逸らさずに、

「おお、そりゃ良かった。…もしよかったら少し動いてから行きたいな。みんなを呼んで、プレハブで遊んでから行かないか？九綱君が良ければそうしたい」

と言った。

「俺はどっちでもいいつすよ。でも、食事前は動いた方が、確か健康にいいつすよね？」

坊主は携帯電話をしまいながらそう返答して、初めてこっちに気づいた。こっちを見て、

「??…先輩の知り合いつすか？」

と、たずねる。

「いや、知らないな。…行こうか。運動と空腹は最大の調味料だと言っね。健康にもいいはずだよ」

長髪は坊主と会話しながらも、まだ梓ちゃんから目を離さない。僕は両者間から生まれるプレッシャーでどうにかなりそうだった。

「うっし、今日こそ少しは本気出しますよ」

と言った坊主頭の彼は、ゴツゴツと拳と拳を胸の前で叩く。背丈こそないが、ノースリーブから見える腕の筋肉は凄まじいものだった。

「九綱君が本気出すなら、僕は見るだけにしておこうかな」

「それじゃ、俺お腹空かないつすよ」

二人は話しながら校門の方、こちらのほうへ歩いてくる。長髪はまだ梓ちゃんから目を逸らしていない。梓ちゃんもずっと…ずっと長髪の彼を凝視したままだ。そのまま、距離がどんどん詰まってくる。すごい重圧感だ。おかーちゃん、助けてって感じ…。

二人が目の前に来る。長髪は梓ちゃんを見たまま、梓ちゃんは長髪を見たまま。坊主は僕と梓ちゃんをチラッと見たが、すぐに興味なさげに進行方向へと視線を戻す。…しかし、二人とも全く目を逸らさない…でも、不思議とガンつけるだとか、睨み合っているわけではないという感覚が伝わってくる。これは…互いに互いを観察しているという感じだ。観察という言葉が頭に浮かんだ瞬間、これは我ながらピッタリの表現だと思った。そうだ、この二人は互いを観察しあっている。お互いに、鋭く…。

擦れ違つか、その直前か、というタイミングで、沈黙が破られた。「私たち、用事があつて、白藤先生に会いに来たんです！職員室はどっちでしょうか！？」

沈黙を破ったのは梓ちゃんだった。彼女は全くの緊張も怯えも無い様子で、ニッコリ笑って長髪から目を逸らさずに、大きな声で話しかけた。二人が足を止める。長髪はまだ梓ちゃんから目を逸らさずに静かに言った。

「僕はシャンパニアの生徒じゃない。…悪いけどわからないなあ」
また沈黙が来る。二人は立ち止まったままだ。人生史上、最もイヤな空気感に…当事者として加わっている気がする。次の沈黙を破ったのは坊主頭だった。

「白藤つてのは知らないが…、職員室はあの建物の二階だ」
「ありがとう!!」

梓ちゃんはようやく長く長髪から視線を外して、坊主頭を見る。そしてニッコリ笑いながらそう言った。彼女のお礼が終わるか終わらないかというタイミングで、二人は立ち去る。擦れ違った後ろで

「??マジで知り合いじゃないんすか？」

「いや、本当に知らないよ」

というやり取りが聞こえた。僕はホッと胸を撫で下ろすと、

「どうしたの??あの建物の二階だよ」

と、梓ちゃんが言った。本当に不思議そうな表情をしている。この時、僕は初めてはつきりと梓ちゃんの異常性を認識した。なぜああ

も人を凝視したのか。なぜこれだけのことをして…平気でいられるのか。なぜあのような雰囲気を作り出せるのか。恋心が消えたわけではない…が、僕の感、小さい頃から僕を支え続けた場の空気を読む感と、人のオーラを感じ取る感、梓ちゃんに対して、盛大な緊急警報を鳴らしていた。当の本人は僕を見つめて、不思議そうな顔をしている。僕は気を取り直して、

「うん、行こうか…」

と言って、彼女の前を歩いた。

そこからはスムーズに事は運んだ。坊主頭の言ったとおりの建物に職員室はあった。白藤先生は、黒川先生に負けず劣らずといった年齢のお婆ちゃん先生で、お茶とお菓子を出して僕らをもてなしてくれた。僕らはしばらく学校の話をして、無事に論文の原稿を受け取って、市電に乗った。帰りも何気ない世間話をして、梓ちゃんは家の最寄の降り場で降りて帰っていった。

僕は自転車通学なので、学校まで戻る必要がある。帰途の折、今日のことを考えていた。いいムードは特になかったこと、男を凝視してた梓ちゃんのこと、気持ちを伝えることが出来なかったこと、梓ちゃんから異常性を強く感じ取ったこと。

…正直、色々戸惑ったけど、梓ちゃんへの想いは消えてはいない。誰だって、少しくらい変なところはあるだろう。なにより、梓ちゃんとはいい雰囲気なんだ。相性がいい。一緒にいると、時間は矢が飛び去るように過ぎる。僕は、梓ちゃんから感じ取った異常なオーラよりも、梓ちゃんと一緒にいる時の雰囲気の良さ、居心地の良さを選び取ることにした。今度は…今度は…たといいい雰囲気にならなくても…想いを伝えたい。そう強く決心した。

期末試験が終わり、もうしばらくすると夏休みに入る。もうじりじりと暑くなってきたその日。いつものごとく、三人でしようもない話をしていた。

「でもさああ??そんな格好だったら、風邪ひいちゃうじゃん??」

いくら夏でもそれは無いよおお」

「でも、暑いんだぜ？だって、暑いんだぜ！？」

「いやいや、そりゃ無いよ沼ちゃん、朝起きて自分で鏡見てビックリするんじゃないの？」

「朝はいいんだよ。誰も一緒じゃなけりやな！」

「な、な、何言ってるのよ！？バカ！！」

沼ちゃんが、梓ちゃんにドン！と押される。

「うおっ、あぶねえ！！」

沼ちゃんは椅子を後ろに倒し気味にして座っていたので、椅子が大きく揺れる。僕と梓ちゃんは目を合わせて二人して笑った。

まるで何年も昔から友人だったような間柄だ。恋心も消えていないし…むしろ例の一件から少しの時を挟んで、また強くなる一方だ。もちろん、時折感じられる違和感…それは例えて言うなら、真っ白の絵の具にほんの一滴の墨を垂らして混ぜ込んだくらのものだが、今もはつきりと存在する。消えてなんかいない。シャンパンアで男を凝視してた時に感じた警報と共に…色濃く脳裏と肌に感覚が刻まれている。

「あ、そういや二人とも、お願いがあるんだ」

沼ちゃんが改まって話を切り出す。

「なあに??？」

すかさず、梓ちゃんが返答する。今日も彼女は上機嫌だ。

「実は月末にライブやるんだ。すごい久しぶりなんだけど、新しい曲も何曲かできたし、今すぐくバンドの調子いいんだ！それで、よかったです二人とも観に来て欲しいんだよ」

沼ちゃんは目を輝かせて、嬉々として語った。

「そうなんだ！？ 行く行く、絶対行く〜！だって、前に見た時ものすごかったもん！私、今でもよく覚えてる！！音とかライトとかがね、すごい！！」

沼ちゃんの頼みだし、梓ちゃんが行くって言うのなら、僕は断る理由は無い。音楽についてはそれほど詳しくないし、当然ライブに行

った事など無い。正直腰は引けたが、梓ちゃんが絶賛する沼ちゃんの勇姿というものを見てみたくもあった。

「もちろん僕も行くよ！梓ちゃんから噂は聞いていたしね。楽しみだ」

と、僕が言つと、沼ちゃんは嬉しそうに返答する。

「ありがとう！よつし、気合入れて頑張るぞ！！あ、これチケットね！…antipass groupってバンドが主催でさ、三つのバンドが出るんだけど、俺らは二番目でさ〜。六時半には会場は空くし、八時前くらいの出演になると思うし…」

沼ちゃんはさらに嬉しそうに、刷り上ったばかりの赤いチケットを僕と梓ちゃんに渡して、ライブの説明をする。確かに梓ちゃんが言ったとおり、なんだか羨ましい。やりたいことがあって、それに向かって一直線って感じた。沼ちゃんの熱く真剣な眼差しが作り出す、この場の空気感は僕にそう伝えた。

放課後…梓ちゃんはすぐに屋上に上がっていった。最近グラウンドの水のみ場の傍でしゃがんで、じっとグラウンドを見ることも多い。僕が、近くで見たほうが面白いと言ったせいか、屋上が三割、水のみ場のそばが七割くらいの割合で、近くでの観戦が増えていた。男友達が異常に多い梓ちゃんは、水のみ場のそばからグラウンドを見てる時、今から帰宅するのであるう多くの男子から話しかけられていた。それに対して一つ一つ応対して話していたが、遊びに誘われたり、帰宅に誘われたりしても、決してその場を離れようとしなない。少し話をしたら、またグラウンドを見る行為に戻るのだった。そのせいか、梓ちゃんの放課後のグラウンド観戦モードの時は一緒にいてもつまらない、という話は、梓ちゃんを知る人にとって常識となっていた。今では、放課後グラウンド観戦モードの梓ちゃんは、皆に帰りの挨拶程度しか話かけられない。したがって、水のみ場のそばでしゃがんでグラウンドを見ている梓ちゃんは、基本的に一人である。

僕は梓ちゃんのそばに行く。水道の蛇口が設置されているコンク

り台に腰掛けた。ちょうど、しゃがみ込んでいる梓ちゃんの右上から、彼女を見下ろす形になる。梓ちゃんは振り向きもしていない。「なに、」

その瞬間だった。梓ちゃんは僕の話の遮り言葉を発した。

空気感と雰囲気 Vol.06 (後書き)

ノースリーブって、男性でも女性でも着る人選びますよね。

空気感と雰囲気 vol.07 (前書き)

見るのが好きと言ってるのにまず理解されない梓さん。

「人を見てるんだ。私、人を見るのが好きなの！」
僕は驚いた。僕は、

「何を見てるの？毎日熱心だね！」

だとか、そんな感じで話しかけるつもりだったのに…でも、話は成立している。梓ちゃんは…僕のまだ発していない、まだ僕の心からこの世に出てきていないはずの問いに…しっかりと答えていた。僕は戸惑いつつも、

「なん…」

梓ちゃんはまた、僕の言葉を遮る。

「う〜ん。感かなあ？？自分でもよくわからないんだ。藤田君がなんか…人の雰囲気とか、その場の空気感読むのと同じかもね！」

テンションが高い、いつもの梓ちゃんの声でそう言う。彼女はグラウンドを見たままで、僕のほうは振り返っていない。僕は梓ちゃんに自分の特技の話をしたことは無い。そんなことが特技だと言っても…理解されないか、理解されても気持ち悪いと思われるのがオチだと思っていたからだ。しかし、梓ちゃんはなんで…僕の言うことがわかったんだ？？まるで、心の中を見透かされているようだ…。

その時、僕ははっと気づいた。違和感の正体…澱んで歪む空気感の正体…それは梓ちゃんが、人の心の中を見透かす時に起こる現象なんだ、と。現に今の空気感は、初めて梓ちゃんと話した時に感じたもの、梓ちゃんが屋上にいた時に感じたもの、市電に乗って健軍で降りた時に感じたもの、そして何よりあの二人組に遭遇した時に感じたものと同質のものだ。彼女は人の心を見透かす…その時に空気感が澱んで歪む…今も澱んでいる…ということは、リアルタイムで僕の心を…

「????どうしたの？藤田君」

梓ちゃんが目の前にいる。いつの間にか立って、僕のほうを向いて、

目の前にいる…

「え？え？…いや考え事…し、してたんだ…」

色んな思考が頭を過ぎる。また僕は集中していたのかとか、梓ちゃんはいつの間に…振り返って僕の前に来たのかとか、今もまだ僕の心は見透かされているのかとか…。

「すごく難しい顔してたよ？？悩み事？？？」

「い、いや…沼ちゃんのライブのことを考えてたんだ」

僕はとっさに言い訳した。別にやましいことをしてるわけではないのに、冷や汗がドツと噴出す。そして、言い訳を続ける。

「ほら、僕ってライブって行ったことなくてさ。ああいうのって、ちょっと怖いムードもあるじゃない？？それで緊張しちゃってさ…」

僕は梓ちゃんとは目を合わせられずに…視線を泳がせてそう言った。彼女は、

（うん、わかるわかる、その気持ち！）

と、言わんばかりに、目を閉じて首を上下にゆっくりと振る。目を開いて、

「でも、大丈夫だよ。沼ちゃんもいるし、二人で行くんだし、…ていうか、他にもうちのクラスの人や、うちの学校の人、何人も行くんじゃないかな！？そんなに心配しなくても…」

言って、大きく息を吸い込んだ。

「大丈夫だって！」

僕の背中をバンと叩いた。

「痛ってえ！」

僕は今までの冷や汗がふっ飛ぶかのように、梓ちゃんと一緒に笑いこけた。いつの間にか澀んだ空気感は、爽やかな親友との間に生まれるハッピームードに切り替わっていた。

今まで幾度か感じた確かな違和感は、やはり心を見透かそうとする梓ちゃんから生まれるものだろう。それは間違いない。だが、彼女から生まれる不気味さを完全に自覚して受容した今でも…彼女への想いは少しも色褪せず、心の中心にふてぶてしく座位してるのだ

った。

あいにく、その日は雨だった。それほど強い降りではないが、しとしと朝からしつこく降っている。予報によると、明日も明後日も降り続けるようで、少しの間も止む気配は無い。土砂降りでないのがせめてもの救いか。雨の日のライブだと、お客さんが減って、盛り上がりに欠けたりしないのかな…などと、素人心配しながらもライブハウスへ向かう。

ライブハウス「ギヤング」は、新市街にある。ここへも市電で向かうことになる。新市街は、熊本県内でも最大の繁華街の中心部に位置している。周囲には、熊本城や上通り・下通りという名のただっ広いアーケード、中央郵便局や市役所、大型デパート、県立美術館などが点在し、JRや航空の交通機関の要所を除いては、県内で最も人の行き交う場所だと言える。交通も発達していて、多くのバスやタクシーが行き交う。もちろん市電も熊本城を横目にして、アーケードの中心を突き抜ける形で路線が敷かれていて、ローカルなルックスの市電が一日に何度もそこを往復している。

ライブハウスは地下にある。梓ちゃんとは現地集合だ。僕らはまだ携帯電話を持っていなかったので、頻繁に連絡を取り合うことは出来ない。事前に行った約束と言えば、開演する七時には現地に行くという程度の簡素なものだった。夏休みに入って一週間ほどたつが、もちろんその間は梓ちゃんとは会えていない。…今日、会って気持ちを伝える。そしてできれば、夏休み中も何度か遊びたい。改めてそう思うと、色んな意味で緊張してくる。

六時四十分くらいか。僕は地下への階段を降り、重い扉を空けた。不健康な雰囲気：暗闇の狭間から、自然界ではけして見ることできかない色の光が僕の目を突く。雨降りの外よりも湿気を含んだ空気が僕を纏い、刺激的なサウンドから織り出される音楽は、僕の耳を鋭くつんざく。出入り口の扉の近くに座っているサングラスにパンチパーマで、くたびれたスーツを着ている男性から、チケットの半

券と、ドリンクチケット、チラシなどが入ったビニール袋を手渡されて、ライブハウスの中へと歩いていった。すでにその空間の半分ほどは、人で埋まっている。かなりの大音量で音楽が鳴っているため、そこにいる人はみな大声で、耳と口を近づけて会話をしている。初めてこんな場所に来たが、本当に異質な空間だ。正直ここにいるだけで疲れる。辺りを見回すと、梓ちゃんと沼ちゃんがいた。

梓ちゃんは、上から白のカチューシャ、白くて薄地のブラウス、グレイのニットのスカートを履いている。靴は黒い編み上げブーツだ。彼女の私服姿は初めて見る。学校での梓ちゃんからは、まったく予想できなかった、清楚で大人しい感じ、お淑やかな女の子っぽい…。梓ちゃんの印象にも、ライブハウスという場にも合っていない気がした。梓ちゃんは僕に気づくと、胸元で小さく手を振ってニコリ笑う。

「やあ、早かったね！」

僕が二人の下へ駆け寄ると、沼ちゃんがそう言って言葉を続ける。

「あつちに中川君と小川さんがいるよ。山口さんも来てるし、あと西田さんと木村さんも来てるよ。遅れるけど石田君と矢部君も来るよ」

次々とクラスメイトの名を挙げる。

「そっか、雨が降ってて心配したけど、たくさん人来てるじゃん！良かったな！頑張つてよ！！」

と背中をはたく。沼ちゃんは、

「任しとけ！今日は楽しんでいってくれよ！！あ、あつちで飲み物もらえるし、ビールでもソフトドリンクでも好きなものもらって。飲み物のチケットもらったでしょ？」

僕は受付で手渡されたドリンクチケットを見せて、バッチリ！という表情で微笑んだ。

沼ちゃんは、彼を呼びに来た赤毛でウェーブがかった髪型の女性と一緒に、控え室の方へ消えていった。梓ちゃんが僕に挨拶する。

「ご無沙汰！元気？」

梓ちゃんはこの異質な場の空気に吞まれることもなく、相も変わらぬのハイテンションだ。

「うん、元気元気！梓ちゃんも元気そうだね！」

「私は元気が取り得だもん！！休みでしっかり寝れてるし、なあ〜」
「にも問題無いよ〜」

梓ちゃんは上機嫌になると、首を振って言葉尻に音程が付く。夏休みのおかげだろう。すこぶる上機嫌に見えた。

しばらくクラスメイトの人らと話をしていると、室内の音楽と辺りの照明が消える。照明が残されたステージの方へ、自然と注目が集まる。そうしてライブは開演した。最初のバンドは僕らと同じ年齢くらいの人らで、数曲演奏した後、まだあまりオリジナルの曲が出来てないから、有名な曲のカバーをするとコメントして、次の曲を始める。よくラジオやテレビで流れていて耳にする、流行りの曲のメロディ聞こえてきて、カバー曲が何曲か演奏される。

会場内はすでに八割くらいの人で埋め尽くされている。最前列の人らは波打つように、バンドが生み出すリズムに合わせて動いている。演奏者の熱気と観客の熱気が合わさって、互いが互いを牽制・牽引して相乗効果を生み出し、その場の雰囲気更なる高みへと昇らせていった。いつか梓ちゃんが話してくれた光景と同じものが目の前にある。

「ねっっ！！私が言った通りでしょ！！？」

一瞬僕はギョツとした。また心を見透かされた？…今は状況が状況だけに、空気の澱みを感じ取れない。それだけに何も嫌な気はしない。むしろ気分が高揚して楽しい感じた。心の中を見透かされたからって…それが何だっつてんだ！と、会場の熱気に包まれて、彼女に対する違和感などまるで気にならなくなってしまふ。そんなものはとても些細なものだ。本当にそう思った。

「うん、凄いね！上手く言葉では言えないけど、すごいエネルギーだ」

「でしょでしょ！！！！？」

梓ちゃんとの距離は近い。とにかく大音量なので、お互いの耳元まで口を持っていかないと話は出来ない。自然に…髪と額の辺りがわずかに触れる。僕はバンドの演奏も余所に、ドキドキしてまんなかった。

空気感と雰囲気 vol.07 (後書き)

ライブなんてしばらく行ってないですねえ。

空気感と雰囲気 VOI・08 (前書き)

今度モトリークルーのライブに行ってきます。

梓ちゃんと僕は一番後ろでバンドと観客の一体になった姿を、第三者のような視点で見ている。その情景はとにかく凄まじく、教室や電車の中、街の風景と自分の家くらいしか知らない僕にとっては、まるで異世界のように感じるのだった。

バンドの演奏が終わると、一気にその場のボルテージが下がる。

ボクシングで第一ラウンドのゴングが鳴った後のように、選手同士も観客もクールダウンするため、一息入れるという感じだ。僕は飲み物をもらって、先ほどの位置まで戻ってきた。梓ちゃんは、

「あ〜、お酒なんて飲んで！フリオオだ。藤田君いけないんだ〜！〜！」

と、悪戯っぽい笑みを浮かべて、横から人差し指で僕の肩をつつく。僕はみんながビールを頼んでいるようだったから、合わせてそれを頼んだ。空気を読んだつもりだったんだが…。

「そういうところってば大人だよ〜私、お酒って飲んだこと無いわ。…飲んでみたいけど、ルールは守らなくちゃね！」

梓ちゃんは宙を見て、一人で勝手にウンウン！と頷いている。すぐさま、

「あ、沼ちゃんだ！もう始まるのかな??？」

見ると、沼ちゃんがステージ袖から出てきて、なんか床に小さい箱みたいなものを並べて、コードで繋いでいる。色とりどりで綺麗な小箱だ。あれも音を出すための装置かなんかだろう。じきにそれも終わった様子で、

（用意できたのかな???)

と思った時に、また客席の照明が消えて、うるさく鳴っていたBG Mがスッと消える。

（〜始まる!)

そう思った瞬間に、本日二度目の大音量がギターのアンプからはじき出

され、沼ちゃんのバンドのライブが始まった。つい先ほど目の前にしていた光景が、寸分の違いも無く再現される。すると梓ちゃんが、僕の耳元に口を持ってきた。

「行こ！」

そう言ったように聞こえた。が、意味が解らないので聞き返す。

「？いまなんて??」

梓ちゃんは、一段と声を張り上げて言った。

「ここで見てても、何が起こってるかわからないわ!! どうせ見るんならもつと近づかなきゃ!!!」

梓ちゃんはニツコリ笑って、僕の手を掴んで前に走り出す。

「もつと近くがいい!! 後ろからじゃ見えても…わからない!!!」
「いつか、僕が梓ちゃんに言った言葉。僕は嬉しくなつて、梓ちゃんの手を握り返した。目の前に広がるのは圧縮された人と人の…海、まるで嵐で時化っている海だ。この大海原に二人して飛び込んだ。」

そこから先は細かいことは覚えていない。リズムに合わせて、跳ねて、体を動かし、踊って、気の向くままに動いて、そして暴れた。梓ちゃんなんて、クラスメイトから持ち上げられたが最後、その場に居た人みんなにリフティングされて、ステージ前の端から端まで跳ねるボールのように運ばれていた。他にも興奮した男がステージに上がって客席に飛び込んだり、そのまま後ろまでリフティングされて運ばれたり…僕らはここにきて初めて、演奏者や観客と一体化した。流れてくる水はただの水なのに、海に混じってしまえばたちまち塩水になるかのように、僕らはライブの空気と一体になって、うねり狂うボルテージをさらに下から押し上げてやった。

この最狂のテンションは、沼ちゃんのバンドとそのあとのバンドまで、少しも緩むことなく続き、公演のすべての項目が終わった後は、まるで戦国時代の戦の後を想像させるほどだった。会場前とは変わって比較的目に優しい薄暗い照明と、幾分か音量が絞られた場内BGMをバックに、僕らは今体感した興奮について話していた。

「すごいすごい!!! 前より全然楽しかった!!!」

「なんか会場が揺れている感じだったね！なんで地下にあるかわかったよ！こんなの上の階でやったらビルが崩れちゃう！」

クラスメイトも含めて、みんな矢継ぎ早にその感想を口に出している。沼ちゃんと彼のバンドメンバーも客席にお礼を言いに来た。

「みんな、今日は本当にありがとう！すごい盛り上がりのおかげで…こんなの俺も初めてだったよ！！単純に…興奮したし、嬉しかった！！！」

沼ちゃんは本当にすべてを出し尽くして、至極満足という感じが。バンドメンバーの人からも、わざわざ出てきてみんなに口々にお礼を言う。梓ちゃんは、

「沼ちゃん…良かったよお！！私なんて何度もみんなに持ち上げられて流されちゃって…少しチビっちゃったわよ！！！」
なんて言ってる。

みんなが帰り支度をしてると、沼ちゃんがこっそりと僕に耳打ちする。

「もう遅いし、倉下送ってけよ。さっきのであいつなんか足痛めたみたいだし。うってつけじゃん」

言って、

(チャンス到来だぜ！)

と、グツと親指を立てる。僕は笑って、

「ありがと。今度は僕が全力を出すよ」

と言い、親指を立てる仕草を返して、梓ちゃんのそばに行った。

「足痛めたんだって？大丈夫かい？？」

梓ちゃんは少し辛そうな表情をした後、すぐに微笑んだ。

「うん、ちよつとね…さっきので挫いたみたい…。今は痛むけど、きつと二、三日で治ると思う！」

「二、三日って…これから帰るのが大変じゃないか。もう遅いし、家か…近所まで送るよ」

「あ、ありがと…でも大丈夫だよ。藤田君に悪いし…」

沼ちゃんがそこで口を挟む。

「出来れば俺も一緒に送ってやりたいんだけどなあ。俺はまだ料金清算とか、打ち上げとかあるし、ちよつと外せないんだ。藤田君、悪いけど倉下を頼むよ」

「ナイスフォローだ。」

「うん、もう遅いし。梓ちゃん、ほんと気使わないで。送っていくよ」

「…わかった、じゃあ藤田君お願い！ごめんね！！」

二人でクラスメイトや沼ちゃん、彼のバンドの関係者さんに軽く挨拶してライブハウスを出る。

小雨の中、市電乗り場まで歩く。梓ちゃんは、少し歩き方がぎこちないけど一人で歩けるみたいだし、表情も暗くなく、歩く速さもそう遅くはない。確かにこれなら二、三日で治るだろう。市電の乗り場までも、市電の中でもライブの話ばかりだった。

市電は雨の中を淡々と進んで行く。十五分か二十分ほどで僕らは降りる。

「ほんとごめんね藤田君、家まではもう少しあるんだ」

梓ちゃんは、僕に本当に申し訳無さそうな表情で謝った。

「いいよいいよ、気にしないで」

僕は梓ちゃんのすぐそばに立って、傘を広げる。少々歩みが遅い梓ちゃんと、しとしと雨の中、街灯で照らされた夜の住宅街を進んでいく。僕は一気に緊張感が高まっていった。雨が降っているのと、梓ちゃんが足を挫いてるおかげで、僕らは合傘傘である。距離は近い。閑静な住宅街のおかげで話もしやすく、邪魔者はいない。夜の暗さと少々頼りない街頭のおかげで、告白のムードは完全に出ている。これはチャンスだ。これ以上ないってくらいのチャンスだ。僕はこの機を逃したら、一生梓ちゃんに気持ちを伝えることが出来ないような、そんな気がした。しばらく歩いて…僕は一気に話を切り出した。

「…梓ちゃん？ 僕ね…君の…ことが好きなんだ」

空気が変わった。と、思った次の瞬間また空気が変わる。澁ん

で歪む。あの空気感だ。水のみ場のそばの時を思い出して、改めて自覚する。僕は今梓ちゃんに見られている。見透かされている。でも、それは当然のことかもしれない。僕は今、愛の告白っていう…大それたことを彼女にしたんだから。梓ちゃんが僕を見るのは当然だ。僕は今まで緊張のあまり、梓ちゃんと目を合わせていなかったが、やっと濡れた道路に合わせていた視線を上げて、彼女の瞳へと移す。刹那、空気が緩んだ。澱みと歪みが消えた気がした。梓ちゃんは静かに口を開いた。

空気感と雰囲気 vol.08 (後書き)

沼ちゃんはカートコバーンが好きでした。

空気感と雰囲気 vol.09 (前書き)

転校先でも青春は続くのでしょうねえ。

「…本当にごめん…藤田君のことは好き。でも、私、特定の人と男女のお付き合いは考えていないの…。逆に言えば…みんなが友人だし、それでいて恋人みたいなもの…。とても…とても変な考え方もしれないけど、今の私たちの付き合いで満足して欲しいんだ」
言って、

「本当にごめんね…」

と付け足した。梓ちゃんは薄っすら涙を浮かべながら、すごく申し訳なさそうに、僕の告白に返答した。

いつものハイテンションの彼女からは、思い浮かべられなかった表情とセリフだ…。梓ちゃんはいたって真剣だった。真剣に茶化すことなく僕の気持ちに伝えてくれた。…振られた。こうなる予想をまったくしていなかったわけではない。僕はなぜ、梓ちゃんが男女の付き合いを避けるのかが気になった。梓ちゃんに問おうとする。

「あず…」

その瞬間、澀む。また空気が澀んで歪む。

「本当にごめん、でもこれが私…、私の気持ちなの」

また心を見透かされた？梓ちゃんは、いつものハイテンションの時とは打って変わって冷たく、そして静かな声で言った。今もこの間の水飲み場の時と同じように、こちらの疑問を聞きもせずには答えていた。しかし、応答は成立している。一気にあの時の不気味さと不信感が脳裏によみがえる。同時に色々なことが頭を過ぎる。僕はどうすればいいのか、どうしたいのか、どうすべきなのか…少しの間だけ…考えて結論を出そうとする。梓ちゃんが…どんなにいびつな空気感を出そうが知ったことか！僕は…自分の梓ちゃんを想う気持ちの方がずっと大切だ。そう結論付けた。前々から何度となく思ってきたことだ。しかし、僕のその気持ちは、梓ちゃんに静かに拒絶されている。

…考えた挙句、僕は今までの関係：友人関係、沼ちゃんと三人で話す関係、クラスメイトとしての関係、二人で合傘傘をして歩いても…何も違和感が無い関係、好きだと言葉を伝えるに至るほど親密になった関係：これこそを大切にしたい、崩したくない、決して失いたくないと考えた。幸いにも梓ちゃんはさつき、

「今の私たちの付き合いで満足して欲しい」

と、言った。僕さえ気持ちの整理ができれば、この関係…何物にも変えられないこの関係は、失わずに済むかもしれない。僕は意を決して、心に覚悟を作り上げて返答した。

「…わかった。じゃあこれからも仲の良い友達でいよう。でも僕は待ってる。…いつまでも待ってるから…もし気が変わったら…今度は君から…教えて欲しい」

僕は、雨音に消されそうなほど静かな声でそう言った。澱んで折れ曲がった空気感は、元に戻っている気がした。梓ちゃんは、

「うん、わかった。…ありがとう」

言って、少し微笑みを取り戻した。少し気分が明るくなる。そうだが…僕は彼女の笑った顔が見たいんだ。梓ちゃんの笑顔を望んでいる。泣かせてどうする??泣かせちゃったんじゃ…全然、全然ダメじゃんか…。僕はそう心に強く思った。

夏休みも中盤を過ぎた頃のクソ熱いその日。唐突に、本当に唐突に、父の転勤の話が家族の食卓に浮上した。

父は、大森組という、世間でも有名な上場一部の建築系の会社に勤務しているのだが、なんと北海道支社務めになるらしい。給与は一気に上がるし、これまでの貯金と転勤を承諾する際に発生するお金で、家を買うことも考えていると言う。北海道支社勤めになると、もう転勤はまず無いとのことだ。転校は大変だと思うけど、高校生活は始まったばかりだし、向こうで安定した生活を基盤に、新しい環境で勉学に勤めて欲しい。そう両親は言う。

…心に引っかかることは一つしかない。梓ちゃんのことだ。しか

し、両親はもうこの転勤を心に決めている。僕が今ここでどうこう言っても、転勤は覆らないだろう。恋心がおさまったわけではないが…このまままるで知らない土地に行つて、まったく新しい人達と梓ちゃん達と作ったような関係を築き上げていくのも一つの選択肢かもしれない。少し悩んだ末に…両親からしてみれば、以外にすんなりと…であろう、答えを出した。

「うん、わかった。…でも、北海道つて雪が降るし、積もつて大変なんじゃないの!？」

と、何も心残りが無いかように振舞つた。父さんと母さんは、元々北陸の出身で雪には慣れ親しんでいる。

「なあに、人間どこだろうと住めば都さ。雪もいいもんだよ。ダルマできるぞ、ダルマ!」

父さんは本当に嬉しそうだ。僕はついこないだ、ずっと欲しくて欲しくてたまらなかつたものを手に入れることに失敗した。でも父さんは、長年働いてきた自分への評価と、その評価を受け入れてもよいという家族の了承を得た。きつと欲しかった物に違いない。本当に嬉しそうだ。思えば、僕は早急すぎたのかもしれない。もう少し時間をかけて…ゆっくりと二人の関係を成熟させていっていけば…あるいは梓ちゃんと…。

「ま、どっちにしる転勤で不可能になるか」

「ん、なんだ？」

父さんが反応する。

「いや、こつちの話」

自分の部屋に戻る。セミがジージーと鳴いている。まったくうるさくてしょうがない。同じうるさいって感覚でも、ライブハウスのあの空気感とはまるで違う。人間の感覚とは本当に不思議だ。思ったのは…人間の感覚に絶対はないということだ。僕は何度も何度も何度も…梓ちゃんが発する、澀んで歪んだ雰囲気味わつたが…今にして思えば、確信したはずのその感覚でさえも、錯角だったのではないかと思えてくる。だってあの…あの天真爛漫で、ハイテンシ

ヨンで、遅刻魔で、おつちよこちよいで：僕が恋心を抱いた梓ちゃん、そんな奇妙な雰囲気を作り出すなんて…。そう思って、ふと僕は気づく。

「そう言えば、結局：僕は梓ちゃんのことを何も知らないままだな」梓ちゃんとは本当に数多くの言葉を交わしたが、意外なほどに彼女は自分の話をしていないことに気づいた。趣味、特技、好きな食べ物、好きな本、好きなテレビ、好きな音楽、逆に嫌いなもの、家族構成、将来の夢、やりたいこと、なりたいもの、好きなタイプ、嫌いなタイプ、今まで生きてきて一番不思議だったこと、今まで生きてきて一番面白かったこと、一番悲しかったこと、誕生日、血液型…etc…今にして思えば、僕は梓ちゃんのことを何も知らなかった。

「やっぱり早急すぎたのかもなあ。今度恋をするときは：もっとじっくり相手のことを聞いてから、告白しよう」

夏休みは半ば過ぎ、僕がすんなりと了承したので、引越しは来週にも行われるそう。北海道は遠い。おそらくもう梓ちゃんや沼ちゃんとか会う機会は無いだろう。電話くらいは：とも思ったが、急にそんなことを言っても二人を悩ませるだけだし、引越しを了承してしまった身としては気まずいし、何より悲しい。二人がどう思うかはわからないが、空気を讀んでこのまま消えることにした。

遠くにいるからといって、関係が崩れるとは限らない。近くにいるからといって、関係が続くとも限らない。梓ちゃんは手紙でもハイテンションなのかな…。手紙のやり取りだけでも、あるいは電話のやり取りだけでも僕の心を見透かすだろうか。異様な違和感を感じさせるだろうか。

「なんだ、やっぱり：まだまだ好きなんだなあ」

そう独り言を言って：梓ちゃんのことを思い出すと：涙が出た。そして思った。梓ちゃんなら：梓ちゃんなら手紙の文字の筆圧や書き直し、電話の声のトーンや話し方で、僕の心を見透かすだろう。容易に。なんの造作も無く。そして、北海道にいるはずの僕の周囲の

空気感を澀んで歪ませて、僕をビビらせる。だからこそ梓ちゃんなんだ。そう、それこそが梓ちゃんなんだ。

そう気づいて、それでもやはり彼女を好きな自分に気づいた。だが、僕の感…僕をこれまで支え続けてくれた空気感と雰囲気を読み取る感は、

(これで良かった、あの女は君の手には負えない)
と、知らせている気がした。

…ついこの間、シャンパニアの校門前で、僕の感は梓ちゃんに対して緊急警報を鳴らした。僕は梓ちゃんの心の深層に何があるのかはおろか、彼女の表面の部分すら知ることは出来なかった。それを知ることができてたなら…彼女とお付き合いできただろうか。それとも、僕の感の知らせる通り、彼女を持って余ってしまっただろうか。…この答えを知る機会は失われた。おそらく…おそらくこれから先、梓ちゃんに接近するチャンスはもう二度とないだろう。…二回あったチャンスは、気づきこそしたが、生かせはしなかった。そんなことを延々と考えていると、唐突に部屋の扉がガチャリと開く。

「も〜〜、お兄ちゃん！何度呼んだら返事してくれるのよ！??
起きてるんならちゃんと返事してよね！お母さんがご飯だって!!」
妹が顔を出す。

「ノックくらいしろよ!!」

そう返すと、妹はさらに声を荒げて、

「何度もしたわよ!!!!」

いかんいかん。また集中してしまっていたか。

「すまんすまん、ちょっと考え事してたんだ…」

すかさず怒号が飛ぶ。怒れる妹を尻目に、僕は逃げるようにリビングに走るのだった。

空気感と雰囲気 Vol.09 (後書き)

「空気感と雰囲気」編はこれにて終了で御座います。読んでくださった方々、貴重な時間を割いて頂き、本当に有難う御座いました。

人生の分岐点 v o l . 0 1 (前書き)

3話目です。宜しくお願いいたします。

人生の分岐点

ターニングポイント。人生には分岐点というものがある。人は何かをするにつけ、あらゆる行動の可能性の中から、たった一つの選択肢を選び取る。あるシーンで何かを選び取り、そしてまた次のシーンで何かを選び取る。それを繰り返す過程で、人格は形成されて行き、積み重ねられて初めて、人生と成り得る、そして、更なる果てには人間の終着点があるのだと…私は思う。

この人生に用意されている私の選択肢…。選び捨てられた選択肢の先に…なにがあつたかなぞ、当人はおるか、他の何者であろうとも知ることはできない。

命が消えようとするとき、人はそれまでの人生を走馬灯のように思い返して、脳裏に張り巡らすという。幾度となくあつた私のターニングポイントが次々と思ひ返される。…人生の選択肢。私は…どの分岐点を間違つて進んでしまったのだろうか。

コンビニは、その立地条件やオーナーの性格、お店の方針でその形態が決まる。店舗の持つ雰囲気は、場所、広さ、付近地域の特色、オーナー、そのオーナーによって選ばれるアルバイト、客層…こういったもので形作られるのだと思う。

私が勤めるここ、セブイレブン帯山店は、九州は熊本県熊本市の閑静な住宅街に位置する。熊本東バイパスという大きな通りが近くにあるが、直接面してはいないため、基本的には近隣住民がこの店の客層となる。

交通機関の要所近くや、オフィス街の店舗だと、お客さんの顔ぶれは比較的ランダムで、流動的である。しかし、住宅街の店舗となると、客層は一軒家やマンションを購入して構えている方が対象とな

るため、お客さんは近所に新たに他のコンビニエンスストアが開店でもしない限りは、この店へ通い続けることになる。したがって、常連さんと呼ぶことが出来るお客さんは多く、特に話はしないものの、おそらくお互いに顔は知っているとこの間柄になるのだ。

コンビニで働いたことがある方ならわかるだが、常連さんには誰がつけるわけでもなく、自然とあだ名が発生する。毎朝スポーツドリンクとおにぎりと新聞を買っていく太った中年男性は「太^{ふとし}」、お昼にきまってパンと紅茶を買っていく美人のOLさんは「ビューティー」、深夜に立ち読みしてカップラーメンを店舗前で食べている不良少年の団体には、「ヤンキーA」「ヤンキーB」「焼きソバヤンキー」「から揚げヤンキー」、毎日メール便を持ってくる青年は「メール便の人」…などと、各人の身体的特徴や、当人がよく購入する物をもとに、大変安易にネーミングされる。そう呼んでいるということを知らないアルバイトが初耳で聞いても、「あー、あの人か!」とわかるほど、直球なネーミングがなされるのである。

私、新城真理は二十九歳のコンビニアルバイトである。二浪の末、東京の有名私大文学部に合格して、そのまま大学院修士課程へ進学、その後博士課程に進んだのはよかったが、もう少しで博士号というところで、担当教授と反りが合わなくなり、単位取得退学という形で、実家の熊本市帯山に帰った。両親は優しく、

「真理ちゃんはずっと勉強して頑張ってきたから、少し休むといいじつくり休んでから、今後の身の振り方をゆっくり考えなさい」と言ってくれた。

私のコンビニ店員歴は長い。もちろん店舗こそ幾度も変わってはいるが、浪人時代から通して、今までずっと続けている。熊本に帰ってきてからもやってきてることだし、働かないと精神衛生にも悪いから…と、とりあえず近所のセブンイレブンの面接を受けた次第だ。…それももう半年以上前の話になるが。

コンビニに来るお客さんというのは、当然何らかの目的があつて店内に入ってくる。食事を買ってくる人、飲み物を買ってくる人、

タバコを買いに来る人、本を買いに来る人、お金を下ろしに来る人、宅配便を出しに来る人、トイレを借りに来た人、公共料金を支払いに来る人、万引きしに来る人… e t c … 最後のは冗談だけど、とにかく目的は様々である。

私ほど店員暦が長くなると、そのお客さんと今の状況を見ただけで、その人が何を欲しているのかわかるようになる。極端な例だと、三十五 を超えるような蒸し暑い日に、汗だくで入ってきて、メロンパン三個のみを買っていくような客はまずいない。そういう客は、二百円程度の大型ペットボトルのスポーツ飲料を買っていく。また、小学生くらいの子供が来て、

「これくらい下さい！」

と、スポーツ新聞をレジに置いたりはしない。子供は、お菓子やマンガを買っていくのがほとんどだ。

外見にこれといった特徴が無い人でも、何回か店に来れば、購入物の特徴を見ることがができる。最も多いと思われる食べ物の買い物パターンですら、三、四パターン程度だ。

十年の経験上言えるが、ほぼすべての人がそうである。…ここで「ほぼ」という表現を使ったのには理由がある。それは私が知らない客もこの世にはごまんといるだろうから、当然例外もあると思う…そう思って使ったわけではない。実際に例外として、ウチの常連客で心当たりがあったからだ。

あだ名は「謎の女子」。彼女は、購入物はもちろん、現れる時間帯にも規則性がない。ついでに言えば、服装にも規則性がない。来る度にコロコロと服装が変わるのだ。ほぼ毎日…私が働いている日だけでも毎回来店を確認するので、いない時間のことを考えたら、かなりの回数で店に来ていることが想像される。一日に一回は必ず来ている大常連さんである。わかることは、容姿から十四〜十七歳だろうということ、これだけ頻繁に来るのだから、近所に住んでいるのだろうということくらいである。

私が見る彼女は、推定年齢とは裏腹に大人びて見えた。髪の毛は、

カラーは漆黑、髪型はボブ、長さはショート。色白で目は大きく、肌の白と黒目・黒髪によるコントラストがクッキリしている。はっきり言ってかなり可愛い。昨日は艶消しの黒いノースリーブに黒いロングスカート、履物も真っ黒の編み上げブーツを履いている。今日は全身黒尽くめだ…と思った。

購入物は…とにかく規則性が無い。常連であれば、食べ物好みは大方わかるものだが、彼女に至っては、棚に並んでいる順番で取っていつてるのかと思うほどバラバラである。

私は深夜バイトが主なのだが、謎の女子は現れる時間も様々で、深夜一時ごろに現れることもあれば、明け方の五時ごろ現れることもある。彼女の職業が皆目見当つかない。若い子だし、深夜徘徊しているところを見ると、フリーターかなんかで、夜は遊んでいるのかなとも思ったが…それにしても、複数人数で来店したことはなく、いつもきまって一人だった。

印象は冷たい子供といった感じで…、一度だけ、それも一瞬だけだが、眼光が鋭く光るといふか、異質な視線で他のお客さんを見ていることがあったので、そんな印象がある。ルックス、行動、印象…そう言った点で、一際目立つ女の子で…どこかしら一般人でない、普通の人ではないな、と思わせるお客さんだった。

深夜のコンビニアルバイトというのはなかなか難儀なもので、昼間に比べると危険性が高い。熊本という田舎でもそれは同じことで、ここ最近、近所では若者の暴力事件が起きたり、お面を被った変質者が頻出したりと…なにかと物騒な話があった。しかし、東京でも深夜や早朝のバイトを行っていた私にとっては、

(…またか)

と、思えるほどありふれた話だった。その手の輩の話は幾度となく聞いたが、コンビニの店員が最も気をつけるのは強盗に対してで、当然ながら、勤務中に外を出歩いたりはしないため、店外で起きた暴力行為や変質者などの事件に絡んで、直接被害をこうむることは

ほとんど無い。これも経験上から自信を持って言えた。

十月某日、深夜は少々肌寒くなると思った、そんな日。深夜三時。一般的にはこの時間を指して、草木も眠る丑三つ時だとする。お客さんも誰もいない。手持ち無沙汰なので、深夜は大体一緒にシフトに入っているオーナーさんに断って、外のゴミ箱の整理や店内清掃、書式業務をする。最近は家庭用ゴミも捨てられていることがあるので、夕方や夜にゴミ袋を換えていても、深夜にはすでにいっぱいになっていることが多々ある。そうして、いっぱいになっているゴミ袋の口を縛っていると、謎の女子が来店した。ここは店の外だが、「いらっしやいませー」

と声をかける。…事が起こったのはその瞬間だった。

人生の分岐点 v o l . 0 1 (後書き)

あだ名付けは別にコンビニに限られず行われますねえ。

人生の分岐点 vol.02 (前書き)

学歴があるのにバイトの人とか本当にいますよね。勿体無いなあ。

目の前の通りを挟んだ向こうで、叫び声と大声、物音が聞こえる。なにやら男女が揉めているらしい。店に入ろうと、扉に手をかけていた謎の女子も、声を聞いて通りのほうを振り向く。彼女の動作につられて通りのほうを向いた時だった。男性が女性を刃物で切りつけているという、とんでもない瞬間を目にする。私はあまりにもいきなりで驚いたからか、

「きやあつっ！！」

と、大きな声を出してしまった。刹那、男はこっちを見る。あれよあれよという間に、何の因果か、バツチリと男と目が合ってしまう。男は次に謎の女子のほうを見る。私もつられて彼女のほうを見ると、彼女はその男を凝視していた。当然ながら、彼女と男は目が合う。その様は異様だった。謎の女子は臆すどころか、眉一つ動かすことなく、男と襲われていた女性、そしてその周辺を見ている。そしていったん状況を確認するかのようにそれらを見た後：また男を凝視する。男も謎の女子の異様さに気づいたからか、私達に目撃されたからか：こちらに今まで以上に強く注目した。その時、男が見せた一瞬の隙に：地面にへたり込んでいた女性はバツと立ち上がり、ヒールを捨てて走って逃げ出した。男は、

「待ちやがれっつ！！」

と、声を荒くして叫ぶが、視線は私達と逃げる女性の間を行き来している。女性は逃げ出してしまったし、思いつき目撃されてしまった。どうすればいいのかわからないという状態に陥って、パニックになっているように見えた。もちろん私自身もパニックである。とっさに、

「け、警察を…」

と言つて、店に入ろうとすると、男は（クソッ！）と言わんばかりの表情をして、女性とは別の方向へ逃げていった。私はその後、

少しの間ポカンと口を開けて呆けていたが、休憩室にいる店長に話をしようとして店内に入ると、謎の女子はすでに会計を済ませて出て行くところだった。

「あ、ありがとうございます…。帰り、気をつけて帰ってね…。」
と言うと、彼女は一瞬私を見た後、特に気持ちを表情に出すことなく、人形のような整った顔立ちのまま、

「…あなたもね」
と言って、足早に店を出て行ったのであった。

その後、店長に事情を話して警察に通報した。警察の人は被害届けが出るまで事件としては取り扱えないが、最近色々物騒な事件の報告を受けていることもあって、付近のパトロールを強化すると言った。そして女性が履き捨てたヒールを証拠品として持っていった。私は気分的にも精神的にも大丈夫だったのだが、オーナーさんは念のためにしばらくの間だけでも…と深夜の時間帯を外してくれて、それからしばらくは夕方中心のシフトに入るようになった。

それから数日後。夕方は六時ごろ。あれから別段変わった様子もなく日常は過ぎてゆく。しかし、先に起こっていた暴力事件の犯人や変質者、先日否認無しに目撃してしまった男が逮捕されたとの報告は受けていない。特に新聞等で知らされることもない。このまま風化してしまうのだろうか…。季節は秋口、外は爽やかな風が吹いているだろう。…などと思っていると、一人の女子高校生が店に入ってきた。

「いらっしやませー」
と言う。大人しくて真面目そうな子だ。すぐに雑誌が置いてあるコーナーへ行ったから、顔までは確認していない。白のハイソックスに、靴はローファー、グレーのブレザーとスカートに白シャツ、胸には青のリボンが付いていた。

(知恩高校の制服だ…)

知恩高校は、熊本市内にある仏教系の私立高校で、学力偏差値は

それほど高くないのだが、スポーツ、特にバレーボールは全国的にも有名な高校である。

(中学生の時、すごく仲がよい友人が知恩に進学した…彼女元気がな???)

などと考えていると、当のその子がレジにくる。

おにぎりが数個とお茶…レジ打ちして、お金を受け取ってお釣りを渡す。特に何も考えずに、

「ありがとうございますー」
と言つと、

「元気そう。夜間ではなくなったのね」

女子生徒はそう言った。

「????」

呆けて彼女をよく見ると、その子は深夜によく店に来ていた謎の女子だった。

「!」

驚いた…高校生だったのか!いや、そのくらいの年だとは思ってたけどまさか…という感じだ。

「思いつきり目が合ってたもの…。できれば夜は避けたいわよね」
彼女は、こちらの驚いた表情をサラリと流して、言葉を続けた。

「でも気をつけて。あの人…きつとあなたと私に…もう一度接触する」

彼女はこれもまたサラリと…恐ろしいことを言った。

「え…?せ、接触つて??」

もちろん意味はわかるのだけれど…会話の流れについていけない。そう問うと、彼女は、

「襲われるかもしれないってこと」

そう言つて、足早に店を出て行く。私はポカン…と口を開けて、彼女の後姿を見続けた。

彼女が何物かは知らないけど…。

(怖すぎるわっ!)

私は本当に怖くなった。黒髪の無表情女子高生の冷たく言い放つような口調での警告、そしてあの女性を刃物で切りつけた犯人がまた来るかもしれないという恐怖…。

（もう…、なんだって私は…子供の言うことにこんなに動揺してるわけ??）

でも、彼女の言うことは一理ある。あんなに現場を直に目撃してしまっただ。口封じのため…とか。

（…でもそんなのあるんなら、事件の直後に来てるわよっ！あ〜、やだやだ、サスペンスドラマの観すぎよね…）

事件からは数日経っている。その後は特に話は聞かないし…、犯人はもう懲りて自宅に引きこもりながら、

（…神様どうかバレませんように…）

などと、手を合わせて祈っているのかもしれない。…でも、謎の女子の台詞はいやに真に迫る感じだった。

（なんか根拠でもあるのかしら…自信ありげに接触するって言い切ってたけど…。それほど自信があるんだったら…私なんかより、あの子の方がよっぽど危険じゃない。私の数倍は男を直視してたわよっ！んもう…なんでこんなことになっちゃったんだろ。あの時ゴミ捨てに外になんて出なきゃ良かったわ！仕事とは言え…悪い選択しちゃった！！）

「あ〜、もうやんなるわ〜…」

そう言っつて、頭をグワシグワシ両手で掻き回すと、

「あ、あの…」

と、目の前に困惑した表情のお客さんがいた。

「す、すみませんっ！！！」

私はすぐに仕事モードへと気持ちを切り替えた。

さらに数日が経った。謎の女子が話しかけてきた時は少々怖くなったものの、実際に何も起こらない平和な日々が続くと、あれは取り越し苦労もいいところだったと感じてしまう。

あの子が来た次の日はまだ少し恐ろしくて、万が一刃物で刺されるようなことがあってもいいようにと…弟のマンガ雑誌をお腹に入れて勤務したりもした。が、我ながらバカみたいだ。

（そう簡単に刺されたりしてたまるもんですかっ！）
なんて思っ、一人でプンプンしていると、謎の女子が店に入ってきた。

人生の分岐点 v o l . 0 2 (後書き)

人生80年と考えたら、死ぬまでに1回くらいは犯罪現場に出くわしたりもするでしょうねえ。

人生の分岐点 v o l . 0 3 (前書き)

今は夜勤でも若い女性がやってる事ありますよね。昔は見なかった
気がしますが、労基とか絡んでたんですかね。

彼女は日中夕勤帯も二日に一度くらいのペースでやってくる。

「いらつしゃいませー」

あれからは口を利いていない。私は彼女のことを気になっていた。よく見てみると、彼女はなんか…異質だ。さすがに謎の女子と名付けられただけあって、彼女独特の雰囲気がある。人を見る目つきというか、ただ普通にそこに存在している態度が堂に入っている。

（まだ若いのに…そう、子供が持つ無邪気さや落ち着きの無さがないんだわ…）

疑問点も多い。高校生なのになぜ深夜徘徊しているのか、なぜ毎日毎服装を極端に変えるのか、なぜ購入物が一定でないのか、なぜ暴力事件を冷静に見ていられたのか、なぜ自信ありげに犯人が接触してくるなどと言っていたのか、そして…なぜその犯人に会うかもしれないのに平然としていられるのか…私にはわからないことだらけだ。

彼女は、今日も好みやパターンを推定できない物をいくつか手にとって、どさりとレジに置く。他にお客さんはいない。まったく知らない仲じゃない。むしろ犯罪の現場を同時に目撃したという、一般にはなかなか例がない稀有な間柄だ。私が彼女に何かを話しかけて…いや、質問しようとした瞬間…、彼女は私の言葉を遮って言った。

「十八番のタバコも貰えるかしら」

私の台詞の頭に被せるタイミングがあまりにきれいだったので、私は反射的に絶句した。一瞬言葉を詰まらせた後、息を飲んで気を取り直して答える。

「た、大変申し訳ありませんが、未成年の方には煙草はお売りできません」

言うつと、彼女は微笑して、五千円札を出した。

「五千円お預かりいたしますー」

と言つと、

「お釣りはいらないわ」

と言つて、いつものように足早にお店を出て行く。

（なんか…こつちの言葉…はぐらかされて逃げられちゃったって感じ??しかもお釣り要らないって…あなたの買い物、千円にも満たってないじゃない…。お金持ちなの?っていうか煙草なんか吸うわけ??子供のくせに…）

（もつっ！ほんつとつに……変な子ッ！）

と、思つた瞬間、出口の扉を押そうとする彼女が、

「変な子」

と、呟いたのが薄つすらと聞こえた…。幻聴か???そう思えるほど、私が心に思つたタイミングとピッタリで…。静かですぐに立ち消えてしまうような声だ。彼女はそのまま、動作に何の不自然さやぎこちなさも見せずに、スツとお店を出て行つた。

…私は面食らいながらも…お金をレジにしまつて、彼女に渡すはずだつたお釣りの金額分のお金を出して、募金箱に入れた。オーナーさんの言いつけだつた。ガサガサツと折り曲げられた四枚の千円札を募金箱に入れ、続けてチャリンチャリンと小銭を何枚か入れる。それが済んで、

「なんなのよあの子…。変な子」

今度は声に出して言つた。

それからさらに数日が経つ。もちろん平和なままだ。何も起こつてない。私はすっかり安全を取り戻した気になっていた。オーナーさんの許可を得たうえで、また深夜にもポツポツと入るようになった。（なんか深夜のほうが調子いいのよね…）

学生、研究生時代からそうだ。往々にして、大学生や院生は夜型になるものだ。長年繰り返し返したライフスタイルのせいか、夜中の十二時から四時頃が最も調子がよくなるような体になっていた。

このお店は住宅街にあるが、深夜にもそれなりの数のお客さんが来店する。レジで暇そうにしている時間も多々あるが、平均すれば一時間に十〜二十人ほどのお客さんが来ているだろう。客入りは決して悪くない。深夜に戻ることができた初日から…謎の女子は来た。夜の彼女は私服だった。

今日は、赤い男物のようなジャンパー、下は地味な薄いベージュのブラウス、帯のようなベルトに、紫のロングスカート、靴はいつかも履いていた黒の編み上げブーツだった。あとは今日のポイントです、と言わんばかりに、頭に可愛いらしいブラウスと同じ色のリボンを付けている。

「いらっしやいませー」

言っと、彼女はこちらをチラリと見て、商品棚のほうへ歩いていった。いつものごとく、規則性の無い食品をさっさと選んでレジに置く。

（今日は何か言うかな…？）

とか思いながら、バーコードを読み取っていると、彼女はいつもの静かで落ち着いたトーンで、

「また夜に来てるんだ？」

と言った。私は彼女と視線を合わさずに、商品のバーコードを読み取りながら、

「はい。もうだいぶ経ちましたし、その間何もなかったのよ」

と、ほんの少々「何もなかった」を強調して、嫌味っぽく言う。すると彼女は、

「辞めたほうがいいわよ」

と言った。私はバーコードを通すのを中断して、

「…え????」

と、素になってそう答え、彼女を見た。何を言っているのかわからない。静かで冷たく言い放っているが、どこかこちらを心配しているような感じがしなくもない口調…。

「もう辞めたほうがいいわ。お仕事」

彼女は声のトーンをまったく変えることなく、そう言った。

人生の分岐点 v o l . 0 3 (後書き)

なんで学生って夜型になるんでしょうねえ。年を取ったら無くなり
ますしねあれ。

人生の分岐点 Vol. 04 (前書き)

大学院とか博士とか一度経験してみたいもんです。

「え…？な、なんでですか…？」

（お仕事…？バイトのこと…？）

唐突に…こつちがまつたく予想だにしないことを言われれば、反射的に聞き返してしまうのも仕方がない。私は彼女に、なにか粗相でもあったかと思っただが、答えは違う。

「危険だからよ」

至つて冷静に彼女は言う。彼女は千円札を右手に持つて、「はい」という表情で私に手渡す。私は焦りながら、

「せ、千円お預かりいたしますー」

と言つて、レジ打ちした。彼女は今度はお釣りを受け取ると、いつものごとく足早にお店を出て行く。その後姿を呆けて見ていると、彼女はドアの前でピタリと足を止めた。振り返らずに言う。

「よく考えて選ぶのよ」

言つて、店の外の夜に消えていくのだった。私はまた呆けた顔をして、ぼんやりと彼女の後姿を見続けた。

…まるで言っている意味がわからない。

（なんでわたしがあんな子供にタメ口で仕事辞めるとか言われなきやいけないのよ…！！…たとえ客と店員という関係でも、いい加減ムカツいてきちゃうわっ！…たくなんなのよあの子！自分だつて同じシーン目撃して…、しかも凝視してたくせに…！あの子の方がよっぽど危険じゃない…！！）

横のレジにいたオーナーさんは私を見て、

「し、新城さん…？どうかしたのかい…？？」

オーナーさんは恐る恐る私の顔色を伺つて、そう言つた。そんなに酷い顔してたのかしら…私…。

「いや…あの女の子ですよ。いつも夜は私服の変な服装で来て、お昼にもたまにくる知恩高校の…」

「ああ、あの黒い髪の可愛らしいお嬢さんか」

オーナーさんもすぐにわかる。そう言っ

「あの子は、夜によく東バイパス沿いのバス停のベンチに座って、ずっとボーツと車が通るのを眺めてるよ。何度か警察にも補導されたりしたみたいで、近所では評判の子だ。もつとも座ってるだけで何もしてないからすぐ釈放だ。不良って感じじゃなくて、なんか不思議で変な子だよな。謎の女の子ってところだ、ははは」

さすがは私たちアルバイトのボス。ネーミングセンスまで阿吽の呼吸。でもバス停ですつと道路見てるって…余計に意味不明で謎だね。

「少し前まで帯山中学に通っている姿をよく見たよ。今は知恩に行ってるのか。子どもはすぐに大きくなるな。光陰矢のごとしだ」と、オーナーさんは笑う。私はもう少し謎の女子について話が聞きたかったが、お客さんがレジに来たので、話はこれで終わった。

久しぶりに旧友と会うのはいいものだ。高校の時に仲が良かった同級生の鈴木洋香は、

「帰って来てるのなら、何故連絡をよこさない？」

と、私を厳しく叱った。お叱りを丁重に受けて、二人して食事に行く。

昔の話と仕事のグチ、どうしてもこれが話題の主になる。驚かれるのは…やはりコンビニのバイトである。

「マリ、それはないんじゃないか。中央大学の院を出て…なぜ高校生のアルバイトみたいなことをやっている？」

「だって慣れてるし、腰掛けなんだもん」
クイとグラスを煽って言う。

「そんなんじゃない、彼氏も出来てないだろ？ちゃんと就職すればよい…んー、良かったら、私がクチ聞こうか？」

旧友の鈴木洋香は、熊本日々新聞社で編集の仕事をしている。男勝りのキャリアウーマンで、高校時代から成績は良く、クラスの中心

人物で、カリスマ性もあつた。

「洋香はいいとこだもんねえ〜、私だつてそんなところで働きたいよ」

「マリ…お前、自分の学歴を知つてて…私をバカにしてるのか?? 今度ウチを受けてみるといい。私も推薦しておくし、絶対採用されると思うがな」

新聞の編集か…文学修士なんてなんの役にもたないと思つていたけど…。ここまで文章に携われる仕事もそうそう無いかもしれない。それに何よりやりがいのある仕事だ。俄然興味が湧いてくる。

「ほんとに??できればお願いしたいわ。採用さえしてくれれば、身を粉にして働くわよ」

「お前、向いてると思つぞ。仕事は細かいけど、生活はガサツで…すぐ馴染んでやっていけそうだ」

「ガサツで悪かつたわねえ〜」

そう言つて焼酎をグイとあける。

「お酒もそんだけ飲みや上等だ。絶対採用だな」

洋香は

(こんなに飲む子だったのか…)

と、私を白い目で見つつも感心している。

今日はお酒が進んだ。学生時代から飲むのは好きだったけど、こんなに飲んだのは久しぶりだ。正直、院を中退してからは落ち込んでいた。が、両親の支えと地元での落ち着いた生活と時間が、私を癒してくれた。そろそろ新しい生活を考えてもいい頃だ…。

ふと思う。あの時大学院を退かなかつたらどうなつていたかな。意地を張つて地元に戻らずに東京で就職していたらどうなつていたかな。洋香のお酒の誘いを断つてアルバイトに行つていたらどうなつていたかな。

お酒のせいか…たればを考える。サークルで仲が良かった先輩が言つてたっけ…。

人生の分岐点 vol.04 (後書き)

「たられば」は人生上の永遠の希望で御座います。

人生の分岐点 v o l . 0 5 (前書き)

新卒のチャンスを生かすか生かさないかの分岐点まで帰らせて欲しい。高校の進路決定の時でもいいから。

「人生は選択肢の連続だ。僕らはあらゆる分岐点の中で出会い、別れ、一緒の時を過ごす。その分岐点の選択が一つでも違っていたら…僕らは出会わなかったかもしれないし、ここにある…なにもかもが狂ってしまったかもしれない。そして選択を繰り返した果てにある…その人間の終着点はどういうものなのか。なぜその終着点に行き着いたのか、どうやって行き着いたのか。…それは誰もが誰もを知ることが出来ない」

…とかなんだかそんな感じのこと。…確かにそうよね。人は何気なく生きているけど、何気ない選択をひたすら繰り返してる。その何気ない選択が、未来を大きく変える可能性だつて…大いにあるわ。…でも、そんなの……どうしたらどうなるかなんて、絶対にわかんないわよね。…などと、色々と思い耽つてると、すでにダウン気味の洋香がムクツと起き上がる。

「帰る〜。タク乗り場まで連れてってくれ!!」
と、言いながら…ゲロゲロと吐いていた…。

夜の風は冷たく、もう秋の終わりを伝えていた。季節は巡って人々をやさしく諭す。それは母親が朝に子供を起こすかのように、父親が悪いことをした子供を叱るかのように、優しく、厳しく…人々に時の流れを知らせる。人生の中を連続して、必ず我が身に降りかかってくる分岐点…、それはまるで季節の変わり目のようなものだ。必ず来るとわかりきっているのに…それが何時だかは曖昧で…はつきりとはさせていない。

洋香に肩を貸して、ユラユラと歩いていた私たちは、やっとタクシー乗り場に着いた。タクに洋香を乗せて、彼女の自宅の住所を運転手に告げる。彼女の家は私の家とは反対方向なので、彼女とはここで別れることになる。彼女は、

「わらしは意識あるから、らいじょーぶ。らいじょーぶらつて。お

まええ、気いをつけて…帰り…なさあいよお…」
と、非常に心配な様相だが、自宅の前で降ろされることになるので大丈夫だろう。

私は夜風に当たって酔いの大方は醒めていた。もちろん少々残ってはいるが、彼女に比べればなんてことはない。すぐに次のタクシーが来る。夜の一時も過ぎた頃、私は夜の景色を眺めながら、自宅に向かっていた。新聞の編集の仕事のこと、アルバイトのこと、謎の女子のこと、人生の分岐点のこと、女性を切りつけた男のこと…お酒が入ると色々と考え事をする。私の人生はどうなるんだろう…みんなこんなこと考えるのかなあ…。

少しウトウトとしてしていると…視界にバス停とベンチ…と、そこに座って佇んでいる少女が移る…。とっさに、
「すいませんっ、止めてください！」

と言う。もう家は近い。運転手さんにお金を支払う。

「酔っ払ってるし、少し歩いて酔いを醒まして帰ります」
言って、タクシーを降りた。そこから十メートルほど歩いて、少女の右後ろに立つ。少女はベンチに腰掛けているので、彼女の右上から見下るす形になる。後ろから…頭に長く付けられている白のリボンと、白のワンピース、ベージュの服を羽織っている…それくらいが確認が出来る。…深夜二時前の東バイパス沿いのバス停、そこに私達はいた。私が話しかけようとすると、意外に…彼女が先に口を開いた。

「今日は仕事じゃないのね」

やはり謎の女子だ。彼女は私を見てもいないのに、私を私だと判断して話しかけた。

「よく私だっわかつたわねえ。隣いい？」

今日は店員とお客さんの関係ではない。敬語を使う必要もあるまいと思う。

(私はこの子より一回り以上年上なんだぞっ)

と、自分自身に言い聞かせつつ、親しげに話しかけた。

「よししょつと」

私は彼女の返答を待たずに、バス停のベンチの彼女の隣に、少しの間を開けて座る。別に彼女が何をしようと思っただけで関係なかった。ここに来たのは酔っ払っていているせいと、ただなんとなく誰かと話でもしたかったせいだろう。

「いい夜ね。少し冷たいけど」

私がそう言うと、彼女は空を見上げて返答する。どこまでも続く、抜けるような黒い空は雲一つなく、星も月もクッキリと夜に抱かれていた。

「うん、月もキレイ。おかげでよく見えるわ」

「??? 一体何が見えるのだろうと思う。」

「何が見えるの?」

彼女は静かに答える。

「人よ。車に乗っている人」

意外な返答だった。でもそんなことはどうでもいい。

「私、多分あのコンビニ辞めるわ。他にお仕事を探すことにしたの」
(別にあんたに言われたからじゃないけどね)

と、心の中で舌を出して付け足す。

これもまた意外なりアクション…。彼女は私と目を合わせて、真剣に話を聞いている様子だった。

「そう?…寂しくなるわ」

と、またも意外な事を言う。お酒のせいか突っ込みも厳しくなる。

「辞めるって言ったくせに。何言ってるのよ」

笑いながら言う。彼女はその言葉を聞くと微笑んで、

「そうね」

言って、

「でも、その選択は賢いわ」

と、付け足した。

選択という言葉聞いて、最近よく考えることが頭に浮かぶ。人生の分岐点、選択肢の連続、人間の終着点…。こんなこと、あなたみ

たいな子供には難しすぎるわね。尋ねようとしたが、止めた。その時、彼女はこう言った。

人生の分岐点 v o l . 0 5 (後書き)

夜の街の雰囲気っていいですね。

人生の分岐点 v o l . 0 6 (前書き)

真里さんもこれ中途採用扱いになるんでしょうか。

「あなたはその決心中、大きく未来を変えたかもしれないわ」

私はドキツとしたが：返答した。

「そんなこと聞いてないわっ！子供の知ったかぶりになんて付き合
つてらんない」

私は声を少し荒げて、きつめにそう言った。彼女は(????)とい
った表情をして、私を見ながら少し考え込むような仕草を見せた。
そして、

「ふふ、今夜は飲みすぎたのかしら？：らしくないじゃない」
と、落ち着き払った声で言った。少し冷静になる。

(私ったら：子供相手になにムキになってるのよ。大人気ない。こ
れじゃまるで：私のほうがてんで年下の子供みたいじゃない：)
そう思つて、問う。

「じゃ：じゃあ、あなたは私がああのコンビニのバイトを辞めたらど
うなるって思うの？」

彼女は私に合わせていた目を伏せて、首を横に振った。

「それはわからない：誰にもわからない。ただ、」

「ただ：？」

自然と彼女の話に耳を傾ける。彼女は立ち上がって、私の前に立つ。
幾台もの車が静かに通つて、街頭やビルのネオン、車のライトや信
号の光などが様々に混じりあつて：彼女の背中のすぐ後ろを幻想的
な光で鮮やかに照らす。車が風と共に通り過ぎる。その風は彼女の
スカートと長く結ばれたりボンと黒髪とをなびかせて揺らす。：な
んで美しい様だ。まるでポストカードか、モデルさんの写真みたい
だ。彼女はニツコリと微笑んでいる。

「ただ：あなたは自分の未来を自らの意志で選択したわ」
そう言つて、

「お腹空いちやっつたワ」

「またね」

と続けて、夜の黒に薄っすらと消えていった。私はポカンと彼女の後姿を見続けた。…いつも彼女の去っていく様を見ている気がする。

自らの選択。そういえば今まで私は行動をする時、断固とした決意など…それを持って行動したことは一度もなかった。私が決めたことであつても…どこか他人行儀でその場の流れに流されて、まあこれでもいいかと思つて…、そうして決めたことばかりだったように思える。確固たる信念を持つて、人生の分岐点を曲がったことがあつただろうか。…いや、無くてもいい。問題はこれからだ…、これだ！とわかるような分岐点にある選択肢は、私の確固たる信念と決断を持つて選び取られるべきだ。…そう、これからは自らの意思を持つて、人生の分岐点を通つていくんだ。そうすれば…そうすれば、たとえ終着点にどのような結末が待っていたとしても、胸を張つて受け止められるはずだ。

私は何か胸のつかえが外れたかのように…心が軽くなった。お酒で酔つ払うよりもよっぽど気分がいい。私はベロベロに酔つ払うのとはまた別の心地良さを味わいながら、自宅への帰途を辿つた。

次の日、早速両親に就職の意志を打ち明けた。高校の友人の鈴木が、新聞社の仕事のクチをきいてくれるから、とりあえずそれを受けてみようと思つ、と伝える。両親は笑顔で、

「真理ちゃんがそう決めたのだつたら、私達は応援する他ないわ」と、言つてくれた。その次の日には彼女に連絡して、再度確認を取る。彼女はお酒の席と同じ様子で、二つ返事で上司に話を通しておくと言つてくれた。

…私は人生の分岐点を大きく曲がった気がした。目の前にずっとあつただけけれども、なかなか掴み取れなかつた選択肢を…両腕に抱きかかえたような感じ。

それから一週間後、面接通知が来る。それから、ちよつとした一般教養の問題と論文、二度の集団面接、三度の個人面接を経て…採用

通知が来た。

「職歴以外は何も申し分ない、しかしそれも若いので何の問題も無かった」

との上司のお言葉を、洋香を通して聞いた。

私が選び取った選択肢はすべて、トントン拍子で私が思い描いて想像した通りの図柄になっていく。アルバイト先のオーナーさんにも就職についての話を全部話す。オーナーさんはまるでわが娘のことのように喜んでくれた。…皆が皆、上手くいっているように思えた。…しかし、その日は来た。誰しもの人生に嫌なことは起こる、それはじわじわくるとは限らない。刹那、いきなり起こることだって多々あるものなのだ。

その日はコンビニ勤務、最後の夜勤の日だった。今回の勤務が終わって、タシフトを二回こなせばアルバイトは卒業である。その週は月末と重なり、週明けと同時に十二月となり、新聞社勤めが始まる。

時間は三時を回ったところか…別段変わった様子はなく、お客さんがいないことを除けば、いつも通りの夜である。就職のことや、寒さのせい或少し体調を崩したことがあって、あれからバイトは少し休みがちだった。そのせいもあって、謎の女子と会うことは少なく、彼女とはあのバス停の夜からろくに口を利いていない。

（なんだかんだ言って…彼女のおかげで今の状況になったって感じもある。機会があれば礼の一つでも言いたい）

私はそう思っ、少し落ち着いて話が出来るといいな。と思った。

偶然か神の悪戯か…丁度その時、謎の女子が店に入ってきた。私はなんだか可笑しくなって、いつもより少し上機嫌な声で、

「いらっしやませー」

と言った。

今日の彼女は、黒い編み上げブーツに、ブラックレザーのズボン、上は青のスカジャンにニット帽という、相も変わらずファンキーで統一性のない格好だ。

(ほんと、何から何まで…最後の最後まで変な子だわ)
彼女はいつものごとく、適当に食べ物を選んで、それをよく見もしないで手に取っている。そして私がいるレジのところに来るか否やというタイミングで…、いきなりサングラスで短髪、黒のロングコートの男が店に入ってきた。

「いらっしや…」

私は異常を察知して、挨拶の声を止めた。

人生の分岐点 vol.06 (後書き)

スカジャンとかすっかり見なくなってしまいましたねえ。

人生の分岐点 vol.07 (前書き)

刃物を突きつけられた経験はまだ無いです。一生無くていいです。

男は余所を見向きもせず、一直線にレジのほう早足で来る。出入り口はレジのすぐ横にある。奥のレジにいた私の前に、会計の台を挟んで謎の女子がいる。私が「???」と戸惑っているうちに、男はコートから刃物を出す。サバイバルナイフというのだろうか？刃渡りが数十センチはありそうな…ごついナイフだった。

この時…やっと私は、数ヶ月前に店の前で見た、女性を切りつけていた犯人だ…と確信した。レジの前にいる謎の女子は、男の形相とナイフを見て後ずさって、レジの前横に設置しているお酒の棚に当たる。酒ビンがグラグラと揺れ、うちいくつかは床に落ちてきた。

男が入ってきてここまで、その間十秒も経っていない。私はあまりにもいきなりだったせいか、ビツクリして体が縮こまる。体が動かない…。声も出ない…。男は叫んだ。

「お前らの目撃が俺の人生を変えた！お前らがいたから俺は道を誤った！！」

と、狂うように叫びながら、ナイフを大きく振りかぶった。目の前にいる謎の女子は男を凝視している。男は、

「その目で…俺を見るなっ！！」

と、謎の女子に近づく。その間は最早二メートルも無い。

この一瞬で、私は今ここが…この時こそが、また一つの人生の分岐点だと思った。選択肢は何かがある？時間は無い…。その時、私は決心した。考えた中で、最も悔いの無い行動を選ぶ。

(私は自分で…自らの意志でこの分岐点を曲がるツツ！！)

…ナイフを大きく振りかぶった男は、謎の女子を狙っている。私はナイフと彼女の間にレジ越しで自分の腕を入れた。腕に熱さが走る。数秒遅れて鋭い痛みも走る。鮮血が散る前に、私は彼女に言った。

「はやく逃げてっ！！」

そして、男を睨み付ける。男は私と視線を合わせた瞬間、

「そ、その目でええ…俺を見るなッ！！！！」

と、さつきよりも数倍はあろう大声で叫んで、私の血で赤く染まったナイフを、私の胸に突き立てようとする。ナイフが胸に触れる感触があるかないかというくらいに、男の体が後ずさりする…謎の女子が両手で体重をかけて、男を思いつきり突き飛ばしたのだ。

彼女は私の方を、いつになく取り乱したような表情で凝視する。さすがにいつも冷静でクールな彼女でも、ここは焦らずにはいられなかったのだろう。冷や汗と涙と私の血が顔にかかって、異形の表情になっている。彼女は、レジに前のめりになって倒れようとする私をひしと抱きかかえる。なんで逃げないのよ…と思った。

「バカ…逃げなさいよっ…二人して殺されるわよ…！！」

…私がそう言った瞬間、第二の異変が起こる…。もう何がなんだかわからない…さつきまで私達を殺そうと憤って狂っていた男は、こちらに背を向けて後ずさりしてくる。何が起きたの…と思い、男の向こう側を見る。

さ、猿…???猿のお面をつけた人が、男の前に立っていた。その姿はまるで中国の人のようで…テレビや映画で見るとようなもので…派手だった。派手なお猿の面に、男性物の中国の衣装を身に纏っている。そう、確か京劇とかなんとか…。

(な、なによ?何が起こっているのよっ!)

と、思った瞬間、謎の女子がポツリと言った。

「…変質者」

わたしもピンと来る。そうだ…数ヶ月前から出没しているというお面を被った変質者…こいつだ、こいつに違いない。男は後退しながら小声で、

「た、助けてくれ…」

と、猿面に怯えて、誰にと言うわけでもなく嘆く…。私達に背を向けて後退してきているので、後ろ向きのまま私達との距離が縮まる…謎の女子は猿面を凝視している…。すると彼女は、突然私を抱いて支えたまま、後ずさりする男の尻を思いきり、前に押し出すよう

にして蹴った。

…何から何まで初体験だ。…私はその直後に凄まじいものを見ることになる。彼女が蹴った様ではなく、自分から滴り落ちる大量の血でもなく、ナイフを持った男の恐ろしさでもない…。謎の女子に蹴られた男は、勢いで足が前に出る。少女の蹴りだ…こんなものでは一のダメージを負わせることも出来ない。だが、男は反動で前によろけて進んでいく…その瞬間…その瞬間である。私は凄まじいものを見た。…猿面。猿面はまるでエプロンか前掛けのように下まで伸びている上衣から、上半身をほとんど動かすことなく右足で男の首元を横から蹴りこんだのだった。その動作があまりに美しく…私は痛みも忘れて…その美しくて激しい蹴りに見入ってしまった。男は首を境に頭と体の上部が「く」の字に曲がり、そのままレジ前の棚に体ごと突っ込んでいく。

「ガラガラガラ…ツシャアアアアア~~~~ン!!!」

棚が倒れる。その直後、猿面は懐から薄い札束を出してレジの前、私を抱きかかえる謎の女子の前に、万札をパラパラと投げ捨て、男の髪を引っ掴んでそのまま引きずって出て行こうとする。ナイフ男は完全に意識を失っていた。男が店に入ってきてから、二分も経ってないだろう。ただか二分程度の時間のくせに…人生で最も長い時間を感じる…。棚が倒れた音で異常を察知したオーナーさんが、店の奥から出てくる。猿面はオーナーさんの目の前を、男を引きずりながらゆっくり歩く。猿面はそのまま、なんの焦りも戸惑いの仕草も見せずに店を出て行った。

「け、け…警察を…!!!」

と、叫ぶオーナーさんを見た謎の女子は、柄にもなく声を張り上げて言った。

「警察なんてどうでもいいわ!救急車を呼んで!」

言って、

「店員さんが刺されているの!!!」

と付け加えた。私はその時初めて…自分の胸にナイフが突き立って

いそいそと駆けつけた。

人生の分岐点 vol.07 (後書き)

時間の流れ方が体感でおかしい時って確かにある。遊んでる時の1時間と仕事の時の1時間って絶対違う世界の時間でしょ。

人生の分岐点 vol.08 (前書き)

最近急激に目が悪くなった気がします…。超不便。

男は、謎の少女に両腕で突き押される寸前に、私の胸にナイフを刺し込んでいたのだった。認識して、起こっていることを受け入れて初めて、気が遠くなつてゆく。辺りがやたらと血だらけなのは…このせいだったのか…。視界が白くなり、謎の女子とオーナーさんの私を呼ぶ声が遠くなつていく…。

…ターニングポイント。人生には分岐点というものがある。私はつい最近、この分岐点の大切さに気づいた。決して悔いの残らぬように、自分に課された分岐点に対して、自らの意志の判断を根拠として、模索された選択肢の中から自身の行動を選び出すという信念を得た。…わたしは自らの意志で悔いのない選択をした。…だがそれは間違っていたのだろうか…。

命が消えようとするとき、人はそれまでの人生を走馬灯のように思い返して、脳裏に張り巡らすという。幾度となくあった私のターニングポイントが次々と思い返される。…人生の選択肢。私は…どの分岐点を間違つて進んでしまったのだろうか。

…白い天井が見える。…点滴と看護婦さんが見える。病院かな…?…どうやら天国や地獄の類ではないらしい…。私がゆっくりと目を開けると、病室の風景が意識に飛び込んできた。両親とオーナーさんが涙を流して私を覗き込む。…一命を取り留めた?

幸いながら、ナイフは深く刺さっていたものの、横から若干斜めに刺さっていたため傷は浅くなり、さらに急所は外れていたもので、致命傷には至らなかった。

なぜか事件直後に来た救急車（猿面が事前に呼んでいた?）に、即座に病院まで運ばれて、非常に迅速な処置を得たおかげで、実際の傷の具合の割には、軽傷で済んだとのことだった。数週間で退院できるし、胸には多少の傷痕は残るものの、腕の傷痕は、ほとんど

目立たなくなるまで治癒するだろうとのことだった。

私達を襲ったナイフ男は次の日、警察へ出頭したらしい。防犯力メラに残っていた…この事件の映像を男に見せるも、猿面に関しては「全然知らない、いきなり襲われた」

の一点張りだったという。彼は福岡に住所を持つ人間らしく、熊本には一人で遊びに来たと言っており、警察はさらに詳しく事情聴取しているそうだ。

事件からずいぶん経った後に…新聞社の伝手で、とある情報を手に入れた。それによると、当時熊本市内には、若者を中心とした高利貸しの武闘派の団体があった。彼らは青少年にもお金を貸し出して、暴利を貪っていたため、摘発されてしまうのだが、商売敵や他県の同様のグループともよくいざこざを起こしていたという。

彼らは猿面に変装することによって、中の人間を入れ替えては正体を隠し、アリバイを作るようにした。そうして、裏切り者や敵対グループの者を刈っていたという…。

女性を切りつけた拳句、私と謎の少女を襲った男は、福岡から来た猿面の敵対グループに違いなかった…。

入院した日から数日後には、両親とオーナーさんだけでなく、洋香と、なんと新聞社の上司さんも病室に来てくれた。洋香は泣きながら、

「無事でよかった！本当に無事でよかった！」
ばかり。

「夜な夜な祈祷してた甲斐があったぞ！」
と、涙を拭いて変なことを言う。彼女には昔からオカルト好きという側面があった。上司さんは、

「災難だったね。事情が事情だし…もちろん採用を取り消したりはしない。しっかり休養を取って、元気になって入社して欲しい」と言ってくれた。

私の周りの人が、私を心配してくれて大切にしてくれる…。今の

私の状況を見て、私は私が辿ってきた分岐点の先にあつた今を見て…辿った選択肢は、その実は間違つてなかつたと確信した。これはたとえ…それなりであろうとも、必死に生き抜いてきた結果得られたものだったと思う。

これからも人生の分岐点は、大小問わず幾度となく私の前に現れるだろう。だが私はそれを軽視したり、怯えたり、遠慮したり、見逃したりは決してしない。…私は自分の意志で選択肢を選び取るという手段を選び取った。それは世の中にいくつもある、人生を懸命に生き抜く手段のうちの一つであろう。

私は拳をグツと握りこみ…病室にいる両親とオーナーさん、洋香と上司さんに言った。心をこめて。

「みんな、ありがとう」

退院後、私はその足で…ある場所に向かった。知恩高校。用件は一つである。名前も知らない少女に会いに行く。呼び出す手段もないので、学校が終わる時間を見計らつて、校門の前で待つ。

夕日をバツクにたくさん生徒が下校していく。グラウンドでは多くの生徒が部活動に勤しんでいる。小一時間は待ただろうか…。遠くから一人の女の子を中心に、男の子が五、六人歩いてくる。…彼女だ！と一瞬思ったが、その子はあまりにも謎の女子とは印象が違いすぎる。

「だああかああ、私がちよつと本気出して勉強したら！クラスでトップも狙えるんだってば…！！！」

「つまり…学年トップ！！ってワ・ケ・…！！！」

と、大声&ハイテンションで周囲の男の子たちと話している。すぐ横の男の子が言う。

「ははっ、お前の本気っていつ出るんだよ！」

彼女は、

「うし、来年度本気出す…！」

と言つて、胸元で両手をグーにして意気込む。

「いやいやいやいや、そこは今年出さんとさあー!!」
何人かの男の子が台詞をシンクロナイズさせて突っ込む。

「き、気合溜めんのに…時間かかっちゃうのよ!!わたしは!!」
そうして彼女は、満面の笑みを浮かべながら、飛び跳ねるようにしてグラウンドを横切って、校門のそばまでやってくる。私が知っている彼女とはあまりにも違う姿を近くで見て、ひよっとして謎の女子は私の夢だったのではないかと思えるほど、その存在が疑わしくなる。だが、もちろん…目の前にいる男の子を何人も引き連れて、こちらへ歩いてくる少女は、謎の女子本人である。見間違っことは無い。そうして私とすれ違う瞬間がくる。

「あ…」

私が話しかけようとした瞬間、彼女は私を見た。一瞬だけ…いつもの謎の少女の表情で…そして彼女は声には出さず、表情でこう言った気がした。

「良かったわね」

と。そして擦れ違う。私は何故か涙が溢れ出て…またいつものように、彼女の後姿をずっとずっと…遠く消えてなくなるまで…見続けていた。

そして、…もう聞こえないだろうけど…心を込めて言った。

「ありがとうっ!!」

人生の分岐点 v o l . 0 8 (後書き)

v o l . 3はこれにて終了です。こんな文章に貴重な時間を割いて頂き、本当に有難う御座いました！

人とは何か v o l . 0 1 (前書き)

今話はそこそこ異質なカンジです。引き続き宜しくドウゾッ

人とは何か

諸君は、人間とはどういったものか：と考えたことはあるかのう。人とは何か。私は、ただそれだけを生れ落ちての九十六年間、ずっと考え続けてきた。この世には人間が生み出した学術というものが存在する。それは、人間を依代として、神か悪魔のようなものが世に出現したかと思わせるような才覚や、凡人でありながら、自らのすべてを賭して学問と研究に打ち込んだ人格によって形成された世界の遺産なのじゃ。

宗教、科学、政治、道徳、倫理、文学、数学、芸術：この世にある、ありとあらゆるものを突き詰めた人間という生き物は、以上に挙げたような学術を極めに極めた。：にも拘らず、人はどのような立場の者であっても、体系的にそれを学べるようにシステム化されたこの現代に有りながら：おそらくは有史以前からあったであろう問いに、明確な答えを出せないである。人とは何か。ただその単純な問いの答えを明確に出すことができない存在なのじゃ。

ピタゴラス、老子、釈尊、孔子、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、キリスト、：ガリレオガリレイ、シェイクスピア、デカルト、ニュートン、ライプニッツ、シヨールペンハウアー、アインシュタイン：この世には、神か悪魔の如き才覚を持つ者が多分におり、その歴史に、足跡と共に讃えるべき記録が残されておる。彼らの残した軌跡は、今もなお夜の空の一等星の如く光り輝き、夜の闇に惑う旅人の足元を照らして導く。人間の存在がある限り、永遠に導き続けてくれるじやろう。：しかし、まるでキラ星のような彼らの才知を持ってしても、この人間というものの存在意義については、誰しもが納得する明確な答えを出せなかつたのじゃ。

人とは何か。なんとという深遠で尊大な問いであろうか。人間が誇

る英知を持つてしても、未だ回答が見出せないである…。正直、私のような愚小な凡人の出る幕ではない。…しかし、それでも…それでも私は、その答えにずっと恋焦がれたままじゃった。

「先生…お体に触ります…。どうかお部屋にお戻り下さい。いま、看護の者を呼びますので…」

門人の宮本君の泣きそうな声が聞こえる。私はその声を制して言った。

「今日は幾分か気分が良い。…庭に出て人と話したい。すまぬが…車椅子を押してはくれぬか？」

宮本君は無言で涙を拭っているのか。嗚咽の音が聞こえよる。…彼が泣くのも無理もないのう。彼との付き合いもかれこれ三十年を超えた。自分の親との時間よりも長い年月を同じくして過ごしている。それだけ近くで熱心に私を支えてくれた。彼はおそらく今も涙を流しておろう。泣きながら私の車椅子を押す。彼は私の嘘を見抜けていなかった。

「のう？宮本君…君と私は一緒に学問に時を注いでから、しばらく経つ。どうじゃの？なにか思うことはあるかね？」

「……………」

彼は答えない。変わりに咽び泣く声が帰ってくる。

「どうじゃ？今日も空は青いかね？」

彼はようやく答える。

「…不肖の弟子で申し訳…ありません…。私は先生の御病状を思うあまり…何も…考えられません。空が晴れていますのも、先生の…言葉で気づいた次第です…」

私は答える。ゆっくりと穏やかに。

「宮本君…、死は恐れるべきものでも、忌むべきものでもない…。また退けようとするものでもない。天寿を全うして塵に帰る姿は美しくあるものじゃ。むしろ死は誇るべきことなのじゃ」
そう言つて続けた。

「だから宮本君も悲しんではいかん。死に望む人が自らにとって、大切な人であればあるほど…喪に服す心持ちを持って、その人の臨終に臨むと良いのじゃ」

彼は泣く事を堪えられずに答える。

「わ…わかりました」

そこに…おそらく北野君であろう人物が庭園に現れる。彼は、

「先生、今日こそは免状と印を頂きます。まさか…このまま潰えるおつもりではありませんまいな」

彼の心上には一点の澱みも無い。彼は私の容体を気にした上で、私の死と同時に私の思想が消えて無くなってしまう事を大変に心配している。ゆえに、自らか他の誰かを後継者として、私の思想を守り抜く心構えなのだろう。宮本君がその言葉に反応して言った。

「北野君！今はその様なことを言うときではない。先生はきつと明日にでも回復されて…また以前と同じように教壇に立つてくださる免状だの印だのは先生のお心積もりによってなされるもの。自分からそれを催促するとは、無礼にもほどがある！」

北野君はすぐに返答する。

「宮本さん、その考えは違います。人として生まれたものは、必ず天寿を全うして天に帰ります。その姿は悲しむべきことではなく、むしろ讃えるものであるべきだ、と先生自身が言っておられる。それに先生は、この数ヶ月間ずっとご健康を害していらっしやる。一門人として、これ以上の激務を先生に担わせたくないという気持ちばかりませぬか。多々ある業務は門人に任せてしまつて、先生には静養なさつてもらつのが最良の選択ではありませんか」

宮本君は黙り込む。ここまで見てもわかるとおり、彼はどうしても自らの感情が素直に前に出すぎて、こと学問や思想においては他の門人に一歩引けを取るようなことが多々あつた。もちろん彼も北野君も両者ともに私欲は無い。ただただ私の容体を心配するがあまり、言い争っているのであつた。

瞬間、眩暈が起こる。私はここが時か…。…そう判断して、先ほ

どから庭にいながらも、黙って話を聞いていた大久保君を含めた高
弟三人に言った。

「門人を部屋に集めて欲しい。皆に私から話がしたい」

人とは何か v o l . 0 1 (後書き)

ライブニッツって誰だ？習った記憶無い。

人とは何か vol.02 (前書き)

今回の話は難しいですねえ。

三人には私によいよ臨終が近づいていることが伝わったであろう。今後のことを考えても、北野君の言う通り、思想と言動と才覚とが最も優れている人物を見出して、後々に起こるであろう門人間の災いを避けるためにも、後継者を選出せねばならんのかのう。しかし、私は今いる門人をもつてして、私を上回る人物という者は思い浮かばんわい。いや、この生涯を通して、その様な人物とは出会えなかつたように思う。みな私のような小さき者にも及ばずであつた。

「そう考えて、ふと一人の女性のことを思い出す。そう言えば一人おつたのう。凄まじい天賦の才を持ち合わせた人がおつた。彼女ほどの才覚なら、私の後継者どころか、世を救うか滅ぼすかというほどの人になつたであろうに。」

「ああも若くして亡くなつてしまふとは……」
言つて、気付く。

「そうか……あの時の少女は……彼女の娘じゃ。……ははは、道理で会つた事があると思つたはずじゃ。そうか、彼女の遺伝子は今も……しかも、より優れた存在となつて、なおこの世に残つておるのだのう」
そう気付いて初めて、この世に残る未練に対して強気になれる。

彼女は私の先輩じゃ。私も彼女を見習つて、少しでも自らの教えが残るよう余生を送らねばならんのかもしれんのう……。そう、私では理解することのなかつた……私の命題は門人の誰かが……私の学術の遺伝子を受け継いだ誰かが理解してくれるかもしれないからのう……。

「のう……倉下君や……」

……十年後。福岡は博多の大久保君の自宅にて、とある新聞社のインタビューが言う。

「聖君がお亡くなりになつて……十年が経とうとしています。この度、

私どもは聖君の高弟に当たるお三方、宮本先生と北野先生、大久保先生にお話を聞く機会を与えられました」

そう言つて続ける。

「まず、聖君の生い立ちから、私のような無知な者にも簡単にお教え頂けると嬉しいのですが…。よろしくお願いいたします」

先生が亡くなった後も、先生の教えを聞きたいという方や、先生について長く学問した方と話がしたい…という人は多かった。いや、むしろ増えている。これは先生の思想に普遍性があり、いかに優れていたかということを示唆しており、我々弟子としては光栄で大変に喜ばしいことだ。

今回も地方の新聞社から、先生に関する記事を組みたいとの申し出があり、話をするために高弟である私たちが一堂に会しているのだった。

「これは僕が答えよう」

北野君や大久保君より、幾分か先に先生に師事した僕は、静かにそう言った。

先生は明治の終わり、千九百年代頭に長野県で生まれた。先生の家はとても貧乏で、兄弟がとても多かつたらしい。父親は足に障害があり、まともに動けなかつたので、母親が農業や内職をして生計を立てていたと聞いた。先生が言うには、物心がついたときには母親は、日々の生活の苦しさのため、心身ともに磨耗していて…何かと病気がちだつたという。

当時はヨーロッパの国々が、その世相の頂点に席捲しており、バルカン戦争に第一次世界大戦の勃発や、中華民国の成立…と、世界的な国単位での動きも目まぐるしく、日本は、現代ほどに政治形態も科学技術も確立されておらず、何事も手探りで行われるような状態であつたため、貧乏人は大変に虐げられたものであつたそうだ。

先生はこの時期、母親と家計を支えながらも、幕末の際に世の流

れを読み切れずに失墜して、田舎へと流れてきた老学者から学問を習っていた。そうして青年期になるまでに父と母を亡くし、兄弟のうち何人かも流行り病で亡くしてしまう。この時に、先生は弱って死んでいく肉親を見ながら、「人間とは何ゆえにこのように苦しむ存在であるのか」という疑問を抱いたと聞いている。

それは、必死でもがくように生き抜いてきたにもかかわらず、最後まで苦しみながら死んでいった母や、両足に重度の障害を背負って、真つ当に生きようとすることさえ否定されていた父親、人が通常送れるはずの人生のうちの幾割も生きていないのに、異形に変わりながら朽ちていった兄弟……。そしてそんな環境にありながらも、生き延びることができた自分…。先生は自らの家族の惨状を目にしたから、そこに「なぜ？」という疑問を見出した。

「宮本君、君は先生の少年期について、とても重要なことを忘れて
いるよ」

北野君が言う。僕は直ぐにそれに気づく。

人とは何か v o l . 0 2 (後書き)

今生きていれば、百数歳になるんでしょうか。同じ日本国内でも、
当時と今ではすべてが違うでしょうね。

人とは何か v o l . 0 3 (前書き)

偉人の方の逸話は、偉人のジャンル問わず何かと面白いものが多いです。

「そうか、そうだった。先生はあまりにも不自由さをお出しになかったから、失念していた」

北野君と大久保君は「確かに」と僕に同意して笑う。僕は話を続けた。

先生は全盲だった。とても強い刺激光を当てればわずかに感じられるそうなのだが…、この視覚障害は、兄弟を亡くした際に、看病していた自分も流行り病を患ってしまった。幸い一命は取り留めたものの、視覚を失うという後遺症が残ったと聞いている。

十歳だかそのくらいの時に視覚を失ってしまったそうなのだが、当の本人は、

「いやいや、私とて昔は見えておったから、空の青も草木の緑も炎の赤も知っておる。それに君らがおるから、君らの言葉を通して、今でも情景を見ることが出来るんじゃないよ」

…とかなんとか言って、普段から平然としていらっしやった。事実、先生は異常に勘が鋭く、耳と鼻も一般人をはるかに陵駕するレベルで利いていた。記憶力も非常に良く、晩年でも一度聞いた話は決して忘れなかった。

こういったことも、先生の非凡な才覚を話すに当たり、特筆すべきことだと思う。先生は目こそまったく見えていなかったが、その他の感覚器の異常な発達により、本来視覚から得られるべき情報は一切得られなくても、それを補って余りあるほどの情報を簡単に得ていた。

「わずかな足音や、微細に香るその人の匂いから、当人の姿がまったく見えぬうちに「おお、〳〵君が来た、〳〵君が来た」などと言つて、周囲の人を驚かせていましたね」

大久保君が口を挟む。

「そうそう、これがねえ…またちつとも外れなくてね。当たるんで

すよね」

北野君も懐かしむような表情でうんうんと頷く。

勘が鋭いのも先生の特徴のうちの一つで、…実際は声のトーンや口調、話している内容で判断するらしいのだが、とにかく嘘やおべんちゃら、裏がある発言などは簡単に見破られてしまう。このことについてたずねたことがあったが、先生は、

「人というものはじゃな。自然とその心を外に映し出してしまふものじゃ。人は誰しもがそこにいるだけで…心の内を外に振りまいておる。私はそれを感じ取って、予測しているだけにすぎない。皆も心を静かに落ち着けて、その人がどのような振る舞いを行うのかを注意深く観察すれば、自然とわかるはずじゃ」

そう言つては…私が今朝何を食べたかまで言い当ててらっしゃった。これも良く当たった。七割くらいの確立で当ててらした。食事を言い当てるなど、ただの先生のお遊びだが、不思議なものだった。私のどういった情報をもとに、食べたものなぞ予測していたのか…未だに私には見当もつかない。

ある時など、若い門弟にクラシックの楽団員の者がいて、

「せっかくですから、先生と皆様も是非コンサートにおいて下さい」と誘うので、

「では、一つお呼ばれしようか」

と出かけたところ、席は関係者用の特別席だったが…あまりに大きいホールだったのでステージまでが遠かった。音響効果を優先したというその特別席からは、それなりの距離があつたことや、楽団員はみな同じ服装をしていたこともあり、門人の彼がどこにいるのかわからない。先生にホールの説明も出来ず困っていると、当の先生は、

「なあに、演奏さえ始まればすぐにわかることじゃよ」

と、笑つて言つた。私たちが(??)となつていると、じきに演奏が始まる。しばらく経つと先生が、

「右手の奥の方にはいるのではないか」

と言う。さらに途中でとても素晴らしいセクションがあり、北野君や大久保君と、

「あの楽器はどの方が弾いて、どの楽器から演奏されていたものなのだろう…」

と話していると、先生が、

「左手前にいる女性が奏でているのではないか。オーボエという楽器だなあ」

と言う。我々は半信半疑で、とりあえずは先生の言葉に頷いたのだった。

演奏終了後に控え室に行つて、門人の彼にそのことをたずねると、「私は皆さんから見て、ステージの右手奥のほうにいました」

「あの楽器はオーボエですよ。左手前にいた白いドレスの女性が弾いていたんですよ」と言い、

「いや、今日は先生や皆様がいらっしやっていたことを意識しすぎたせいか、…とても緊張しました。でも、そのことを除けば、自分の中では満足いく演奏でした。今日は来て下さつて、本当にありがとうございました」と御座いました」

と、感想とお礼を僕らに伝えた。楽屋には行かずに先に帰つた先生にそのことを伝えると、先生は、

「ははは、そうじゃったか、そうじゃったか。…しかし、お前達は盲目の私よりも目が見えておらんのだのう」

と笑つて言つた。そして、

「彼は緊張していたせいか幾分か固い演奏じゃつたの。が、素晴らしい演奏じゃつた。彼自身も我々にいいところを見せることが出来て一安心しているだろう」

と、彼の感想をピタリと言い当てた。これには僕だけでなく、大久保君や北野君、他の門弟も大変に驚いた。

先生は二十歳代半ばにおいては、高名な先生方の話を聞くよう、

全国各地を放浪していらした。先生はこれについて、

「私は目が見えないので、書より学ぶことが出来なかった。なので、世の中に響くほどの思想を持った人の噂を聞けば、その人を訪ね歩いて、話を聞いて自らの学識を養った。もちろん書を人に読んでもらって、それを吟味したりも随分と行っただが、やはり面と向かって話すのが一番良い。本や文章に比べ、随分と理解し得るものは増えて、誤解は減るものじゃ」

と言っていた。そしてブロック経済体制、軍国主義の台頭、犬養首相が暗殺された五・一五事件や、第二次世界大戦の勃発…激動の千九百三十年代の辺り…、先生は画家として過ごされた。

「絵に関しては、これもまた…先生について特筆すべき事柄のうちの一つだろうね」

北野君が言う。大久保君も頷き、

「当時は先生に絵を描いてもらいに、色んな人が来たらしいですね。軍人から官僚、経済において大成した人や、芸術家や武術家まで…果ては外国の女優まで来ていたそうです」

と言う。

彼らは先生に絵を書いてもらう代わりに、寸志を渡していた。先生が絵描きを続けていると、次第に寸志の額も多くなっていき、この時代は多くの国民が貧窮していた時代であつたにもかかわらず、食うには困らなかつたらしい。また、先生はその人に「絵を描いてもらいました」という署名を、帳面に書いてもらっていたため、いつどこでなんという人物の絵を描いたのかということが、記憶と共に記録されていた。当時の世において、結構にご高名な方も署名されていた。これにより、当時の先生がそれなり注目された画家であつたことがわかり、寸志も本人の言う通り、かなりの額があつたのではないかと推測できる。インタビュアーが口を挟む、

「しかし…、聖君は全盲だつたとお話されたばかりではないですか…。全盲の方が絵描きというのは、私には想像できません。聖君は一体どのような絵をお描きになつていたのでしょうか？」

人とは何か v o l . 0 3 (後書き)

千九百年代前半の日本国史の面白さには目が見張るものがあります。民主主義初期段階の手探りで政治を行っている様には、理想を掲げて現実と戦うドラマがあるかと。

人とは何か vol.04 (前書き)

戦時中の史実のドラマなども描き甲斐があるでじょつねえ。

私は笑って言った。

「人物画だよ」

インタビュアーは目を白黒させている。

そう、面白いのはそこだ。先生の絵が、なぜあれほどに高名な方の間で評判になったかはそこにある。

先生は、子供の頃は目が見えていたわけだから、当然ながら、人間の外見がどのようなものかというのは知っているし、その他でも大方の人が目にするような物は、現物を一通り目にしていった。そしてその後は盲人となり、何も見えていない。しかし先生は、その絶大な感性で人を感じることが出来た。

先生は人物を感じて、その印象を人物画として絵に描くのだ。まず依頼者と話をする。世間話から思想的なものまで、そして先生はその人物を判断し、キャンパスにその人の印象を描いた。先生の前では何人たりとも偽れない。偽ろうとも必ず暴かれる。極めて優れた人を見る目と判断力、感性や推理力によって描かれる、真実の絵がそこに描かれたのだ。

先生の存在は、人間の真実の姿を描く絵描きとして、知る人ぞ知る存在になった。先生は寸志という形でお金を取っていたため、貧乏人であるうと権力者であるうと、望んだ者はみな、自らの姿を描いてもらうことが出来た。貧乏人で醜く小汚い格好の女性を絶世の美人のように描くこともあれば、社会的に成功して地位もありお金もあり、女性を何人も侍らせているような二枚目の男性を、化け物のように醜く弱々しく描いたこともあった。出来あがった絵は、人の様相を保っているのとは限らない。人外の姿に描かれることも少なからずあった。

先生は「自らの真の姿を知りたい者は放浪している彼に会うといい。だが、その際はくれぐれも自分の心を磨いていくことを忘れて

はならない。でないと、自分の本当の姿に直面して絶望してしまうだろう」などという評判を受けて、瞬く間に人の真実の姿を描く画家として、世間で評判になったのだった。

千九百四十年代：激動の時代において、先生は政治家の助言役として活動なされた。俗に言う戦時中であつたが、先生は全盲であり、絵を描いた際に知り合つた、世の出世人と広く交流があつたため、直接戦地に赴くようなことは無かつた。

当時の日本はよく知られているように、国民一丸となつての軍国主義体制を敷いており、何人たりとも、この軍国思想の正しさを信じて止まなかつた。先生はここでもまた敵味方を問わず、多くの人間が消えていなくなつてしまふのを目にして：いやもちろん見えてはいないのだが：「人とは何か」という、子供の時から持つ自らの命題について、深く自身に問いかけながら、政治家には人徳と道徳、倫理と人間としての在り方をくどくどと説いたという。

もちろん先生も人間である。その人生において、間違われたことや驚かれたこともあつたということ、我々は先生自身の口からお聞きしている。先生は人生最大の過ちとしてこの頃、政治家や人々に説いた「平和というものを手にしたいのなら、戦争の必要性を理解しなければならぬ」という思想を挙げている。先生は幾度となく、涙を流しながら：この時の自らの愚かさは、どれだけ拭いに拭いても消し去れないと言つては、悔やんでいらつしやつた。

先生は、その後も政治家の助言役として、数々の人物の元で、彼らの話を聞いては自らの思想についてのお話をされ、日本の各地を転々として、自らの学識を磨きつつ、政治家や経済の立役者を支えていたという。

日本においての戦後復興には、目を見張るものがあつた。元来、日本人は非常に勤勉な性質を持つ。軍国主義と植民地拡大に向けられていた官民一体のエネルギーの矛先は、戦地の復興と文化的発展へと向けられることになる。

戦後しばらくして、先生は熊本の上益城郡という土地へ家を建て

て、そこに根を下ろされた。上益城郡は熊本市の東南東に位置する。市内からは車であれば、一時間ほどで着く。

世間的には熊本市というのは、田舎というイメージがあるかもしれないが、市内はそれなりに栄えている。しかし益城郡まで入ると、周囲は緑々とした山や畑が多く、住宅街どころか、民家も少なくなってくる。先生はここで、近所の子供達に勉強を教えながら、自らの見識を更なる深さへ持っていくようにと、研鑽の日々を送られていた。私が先生と出会ったのもこの上益城においてだった。

先生がここに家屋敷を構えて、子供に学問を教えているという噂は、ポツポツと世間に広まっていった。たまに新聞や雑誌などで記事が取り上げられることもあり、先生の所在は世に知られるところとなり、益城のご自宅には、今まで関わった数多くの人、そして先生の見識に触れて、自分の思想を高めたいと望む人が多く集まってきた。彼らは多種多様で、大阪東京はもちろんのこと、北海道や沖縄の人も「是非とも一度お話を聞きたい」と、先生の元へ集ってくるのであった。大久保君や北野君もそうして先生の元を訪ねてきたクチだ。彼らほど熱心な者になると、自分が住んでいた家土地を処分して、熊本市内に職を見つけて、すぐに益城に行ける場所に住まいを構えるのだった。そして来る日も来る日も、先生や高弟達と論議の交流を深めて、各々が自らの学識を高めて行くのであった。先生は晩年までこのような生活を送った。たまには友人を訪ねたり、外の空気を吸いに行くと言って、フラツといなくなることはあったが、基本的には益城のご自宅にいらっしやった。

「と、まあ先生の人生について、私が知るところはこんなところですね」

私は一息ついて言った。インタビュアーが答える。

「貴重なお話ありがとうございます。御座います。それでは、お三方には、それぞれ聖君についてたくさんのお思い出がありますかと思いますが…、よろしければ面白いエピソードなどありましたら、お聞かせ下さい」北野君が言う。

「僕が最も印象深いエピソードとして記憶しているのはあれだ。や
つぱり、占師との一件だね」

「ああ、あれか。あれは面白かったな」

私は思わず同意した。彼は「あれはね…」と話し出す。

人とは何か vol.04 (後書き)

聖君は孔子や佐川幸義氏、岡本正剛氏がモデルとなっているそうです。

人とは何か vol.05 (前書き)

占いはあまり好きでは無いです。雑誌やテレビに載ってる簡単なものでもほとんど見ません。でも話的には言い方次第で面白くなるし、不思議にもなるし、怖くもなるので何かと重宝しますねえ。

あれは…僕が先生の弟子となつて四、五年くらいだったかな。今からもう四十年以上前の話になる。先生の家の門の前を掃いていると、先生と同じか、少し若いくらいの男が尋ねてきてね。…先生の家には来客は多かつたけど、その客には高貴な方もいらつしやれば、一般の方もいらつしやる。当然ながら、先生は人を社会的地位や成功の具合、外見の美醜、金銭を多く持つているか否か…などでは判断しない。それゆえ、老若男女問わず、色んな立場の方が訪ねて来ていた。それで…たまには変な方もいらつしやる。その男は初対面から少々変だつたね。

その男は、

「自らは占師を職として、聖なる君子の人相を見に来た者だ。できればここを通して欲しい。聖なる君子と話をしたい。そして彼の人相を見せて頂きたい」

と、上段から被せてきた。僕だつたらすぐに「お引き取りください」と言つところなんだけど…先生は違つんだねえ。その話をすると、「いやいや、遠くから私のようなものを訪ねてきて下さっているんだ、会いもせずは無下に断つては失礼じゃろう」

と、ニコニコしてその占い師と面会なさることを許可された。占い師に伝えると、彼は、「フム」

と、軽く頷いて屋敷に入つていった。そして先生と面会するのだけれど…先生を見るなり、

「ふむう…ふむう…」

と言つて、挨拶はおろか名乗りもしない。僕が堪りかねて、

「君！失礼じゃないか、わざわざ尋ねてきて、そんな態度は無いだろっ！」

と言つと、…先生は僕を怒るんだよねえ。

「北野君！君ほどあるうものが、何故彼の言動の真意を理解しない。

挨拶や紹介をしないからと言って、私に敵意があるとは限らない。彼の佇まいと行動を意識すれば、すぐにでもわかる話じゃぞ」

とか言つてさ。するとそれを聞いた男は、

「さすが、世の中にその名を轟かせた大人物ですな」

と言つ。先生は神妙な顔つきになって、男の方を向いて言つ。

「時に：私の人相はいかがでしたかな？：よく男前だとは言われませんが」

先生は笑う。男は微笑して、

「残念ながら：僕が探し求めているものではなかったのう。本当に残念じゃい」

と、言つた。さすがに僕はもう堪えられなくなって、男に掴みかかろうと一歩踏み出す。と、

「北野君！」

先生は僕を制した後、男に静かに言つた。

「御眼鏡に適わなくて残念ですな。しかし：私は自身のことを常々凡である、凡であると言いつつ続けてきましたのに：世間は私を過大評価なさる」

言つて、

「どうですか、遠路はるばるいらつしやつたのに：私は何の役にも立てずに申し訳ない。もしよろしければ、私とお酒の一杯でもお飲みになりませんか？？」

そう続けた。当時の僕は先生が何故このような無礼な男にも下出下出に出るのがわからなかつた。男は、

「断る理由は無い。：遠慮なく馳走になりますか」

と言つて、顎髭を撫で、初めて先生に一礼した。

彼は名を藍老といい、日本各地をフラフラとしては人相を見て、自らの目に適う人物を探している占い師なのだという。

「変なのは言動だけじゃないな。：生きる目的もおかしな男だ」

と、宮本君が文句を言つと、大久保君が

「まあまあ、先生は相手がどんな方であろうとも、その人の心の奥

底を見抜かれて、人物を判断致します。その先生がわざわざ我々と一緒にお酒を飲もうとお誘いになるほどですから。我々にはわかりませんが、おそらくは心は清い大人物なのでしょう」

彼がそう言つと、先生が言う。

「ふむ…。大久保君、よくそこに気がついた。自らが不明であるからといって、それを拒絶してしまえばそこには何も生まれません。そういう時は、一歩下がった視点で物事を見るのじゃ。そうすれば、自ずと物事の真のあり方が見えてくる。そうして初めて、自我を通していない物事のありのままの姿を見抜くことが出来る」

それを聞くと、今まで黙りこくつてはお酒を飲み続けていた占い師が、僕のほうを見て言った。

「ふむ…。時に北野さんよ、世の中の自我はどのようなあり方をしていると思うか？」

占い師は続ける。

「自我というのは、他の干渉を受け付けてここに存在している。自我は発生した瞬間から外界からの影響を受けて育つ。それでは…自我というものは、外界からの影響で構成されているも同じではないか。…これをどう考えなされるかね？」

当時の僕は…何を問われているのかすらわからなかった。先生はニコニコして、僕を初めとして席に座している門人の反応を確かめているような素振りを見せる。僕が返答に困っていると、それを見た占い師は微笑して言う。

「…わかりませぬか」

言うて、

「…聖なる君子よ、あなたは学識高くとも、人を見る目は御座いませぬ。お弟子さんとはいえ、この程度の問いに答えられないのは…、聖君の後々の苦勞が簡単に目に浮かびますわい」

その場の空気が一気にまざる。僕は怒るよりも何より、返答できなかつた自分の見識の低さで、先生の顔に泥を塗ってしまったことを痛く思った。すると先生は、

人とは何か vol.05 (後書き)

最近では道徳や倫理を教えるような私塾は見ませんよね。この殺伐とした時代、幾らかはあってもいいように思いますけども。っていうか、私が通いたいです。

人とは何か v o l . 0 6 (前書き)

孔子を初めとした諸子百家の著作は、道徳書としても読み物としても面白いですよ。私は老子や荘子の考え方が好きです。

あれは：僕が先生の弟子となつて四、五年くらいだったかな。今からもう四十年以上前の話になる。先生の家の門の前を掃いていると、先生と同じか、少し若いくらいの男が尋ねてきてね。：先生の家には来客は多かつたけど、その客には高貴な方もいらつしやれば、一般の方もいらつしやる。当然ながら、先生は人を社会的地位や成功の具合、外見の美醜、金銭を多く持つているか否か：などでは判断しない。それゆえ、老若男女問わず、色んな立場の方が訪ねて来ていた。それで：たまには変な方もいらつしやる。その男は初対面から少々変だつたね。

その男は、

「自らは占師を職として、聖なる君子の人相を見に来た者だ。できればここを通して欲しい。聖なる君子と話をしたい。そして彼の人相を見せて頂きたい」

と、上段から被せてきた。僕だつたらすぐに「お引き取りください」と言つところなんだけど：先生は違つんだねえ。その話をすると、「いやいや、遠くから私のようなものを訪ねてきて下さっているんだ、会いもせずは無下に断つては失礼じゃろう」

と、ニコニコしてその占い師と面会なさることを許可された。占い師に伝えると、彼は、「フム」

と、軽く頷いて屋敷に入つていった。そして先生と面会するのだけれど：先生を見るなり、

「ふむう…ふむう…」

と言つて、挨拶はおろか名乗りもしない。僕が堪りかねて、

「君！失礼じゃないか、わざわざ尋ねてきて、そんな態度は無いだろう！！」

と言つと、：先生は僕を怒るんだよねえ。

「北野君！君ほどあるうものが、何故彼の言動の真意を理解しない。

挨拶や紹介をしないからと言って、私に敵意があるとは限らない。彼の佇まいと行動を意識すれば、すぐにでもわかる話じゃぞ」

とか言つてさ。するとそれを聞いた男は、

「さすが、世の中にその名を轟かせた大人物ですな」

と言つ。先生は神妙な顔つきになって、男の方を向いて言つ。

「時に：私の人相はいかがでしたかな？：よく男前だとは言われませんが」

先生は笑う。男は微笑して、

「残念ながら：僕が探し求めているものではなかったのう。本当に残念じゃい」

と、言つた。さすがに僕はもう堪えられなくなって、男に掴みかかろうと一歩踏み出す。と、

「北野君！」

先生は僕を制した後、男に静かに言つた。

「御眼鏡に適わなくて残念ですな。しかし：私は自身のことを常々凡である、凡であると言いつけてきましたのに：世間は私を過大評価なさる」

言つて、

「どうですか、遠路はるばるいらつしやつたのに：私は何の役にも立てずに申し訳ない。もしよろしければ、私とお酒の一杯でもお飲みになりませんか？？」

そう続けた。当時の僕は先生が何故このような無礼な男にも下出下出に出るのがわからなかつた。男は、

「断る理由は無い。：遠慮なく馳走になりますか」

と言つて、顎髭を撫で、初めて先生に一礼した。

彼は名を藍老といい、日本各地をフラフラとしては人相を見て、自らの目に適う人物を探している占い師なのだという。

「変なのは言動だけじゃないな。：生きる目的もおかしな男だ」

と、宮本君が文句を言つと、大久保君が

「まあまあ、先生は相手がどんな方であろうとも、その人の心の奥

底を見抜かれて、人物を判断致します。その先生がわざわざ我々と一緒にお酒を飲もうとお誘いになるほどですから。我々にはわかりませんが、おそらくは心は清い大人物なのでしょう」

彼がそう言つと、先生が言う。

「ふむ…。大久保君、よくそこに気がついた。自らが不明であるからといって、それを拒絶してしまえばそこには何も生まれません。そういう時は、一步下がった視点で物事を見るのじゃ。そうすれば、自ずと物事の真のあり方が見えてくる。そうして初めて、自我を通していない物事のありのままの姿を見抜くことが出来る」

それを聞くと、今まで黙りこくつてはお酒を飲み続けていた占い師が、僕のほうを見て言った。

「ふむ…。時に北野さんよ、世の中の自我はどのようなあり方をしていると思うか？」

占い師は続ける。

「自我というのは、他の干渉を受け付けてここに存在している。自我は発生した瞬間から外界からの影響を受けて育つ。それでは…自我というものは、外界からの影響で構成されているも同じではないか。…これをどう考えなされるかね？」

当時の僕は…何を問われているのかすらわからなかった。先生はニコニコして、僕を初めとして席に座している門人の反応を確かめているような素振りを見せる。僕が返答に困っていると、それを見た占い師は微笑して言う。

「…わかりませぬか」

言つて、

「…聖なる君子よ、あなたは学識高くとも、人を見る目は御座いませぬ。お弟子さんとはいえ、この程度の問いに答えられないのは…、聖君の後々の苦勞が簡単に目に浮かびますわい」

その場の空気が一気にまざる。僕は怒るよりも何より、返答できなかつた自分の見識の低さで、先生の顔に泥を塗ってしまったことを痛く思った。すると先生は、

人とは何か vol.06 (後書き)

今回の話、ちょっと難しいですねえ。

人とは何か v o l . 0 7 (前書き)

色んな知り合いがいますけども、絵描きさんだけは趣味にしている人さえいないんですよ。いれば話を聞いてみるのですけども。

先生は、絵で放浪の旅をされた後は政治家の相談役として、これまた全国を転々としておられました。絵自体はずっとお描きになつていました。益城にお住まいになつてからもそれはお変わりなく、近所の子供達から、東京から訪ねてきた政治家、果てはアメリカの軍人さんにまで喜んで絵を描いて渡しておりました。

それで、ある時…あれは三十年ほど前だったと思いますが、熊本の市内のほうに大変に優しく頭が良いと評判の女医さんがおりまして…、彼女は新婚さんで、その時は妊娠していらつしやつたのですが…先生の庵までいらつしやいまして、門前にいた私に、

「予てから先生のお噂の数々を聞いております。私は市内の方で医者をやっている倉下と言う者ですが、この度結婚して子宝にも恵まれ、心から幸せが溢れるような気持ちで御座います。産休のこともありまして、まとまった時間が作れましたので、かくはと思い、先生に私の絵を描いていただけたら…」と思つて、本日足を運ばせてもらった次第です。もしよろしければ、先生にお取次ぎ頂けないでしょうか？」

と、言いました。このような礼儀正しい方なら取り次いでも問題無いであろうと、話を通すと、先生は少し考え込むような顔つきで、

「今日は朝から気分が優れない。大変に申し訳ないのじゃが、また後日にして欲しいと伝えてくれんかの」

と、おつしやつた。先生がそう言われてはそう伝えるしかありません。彼女に、

「本日先生は体調を崩しておられました…大変申しわけありませんが、また後日にお願ひできないでしょうか？」

と言いますと、彼女は、

「わかりました。わざわざありがとう御座います。くれぐれもお体は大切になさつて下さい」

と言って、ペコリとお辞儀をして帰って行きました。その数日後に、
「先日は大変失礼致しました。先生の具合はいかがでしょうか？」
と言って、彼女はまたやってきました。同じように先生に取り次ぐ
と：先生はまたも難しい顔をして、

「今日も気分が優れない。すまないが、また後日にして欲しいのう
とおっしゃる。こんな対応は先生にしては珍しい。それに体調が優
れていないようにも見えない。しかし、逆らうわけにも問い質すわ
けにもいきませんので、彼女には先日と同じように対応しますと、
これもまた同じように、非常に丁寧にお礼を言って帰っていく。：
もちろんまた数日後に彼女はやってきまして、

「何度も申し訳ありません。今日は先生の具合はいかがでしょうか
？」

と言います。先生に取り次ぐと、いやに神妙な顔つきで

「ふむ： やつと準備ができよったわい。いつも通りこれへ通してく
れい」

と言って、客室の一つを指差しました。

その部屋は和室で、たまにしか使われません。畳敷きに襖と障子、
天井は宮崎産の杉板で組まれ、欄間も：物事を見栄えさせることを
好まない先生にしては、豪勢に装飾があしらわれており、床の間と
広縁もあるという、家屋敷内で最も豪華なつくりの部屋でした。

私が彼女を部屋に通すと、部屋には香が焚いてあり：普段と違う
匂いが充満していました：さすがに私ごとときでも、先生の雰囲気
異質であることに気づきました。目が見えない先生にとって、嗅覚
というのは大切な感覚の一つなのです。香を焚けば、その場は清浄
な雰囲気になるのですが、先生の嗅覚が潰されてしまう可能性もあ
りますので：通常先生の自宅で香が焚かれるということは少なかつ
たのです。

先生は絵をお描きになる時は。いつもその方と一時間から長い方
であれば五、六時間ほどお話をされます。初対面の方であつたらな
おさらです。目が見えない先生は、そのお話の中で相手の姿を見極

めていかれるのです。その話の中で相手の真実の姿を心で見極めてゆくのですね。それが終わると、いよいよ絵を描くのを始められるのですが…その日はとても長くお話されていまして…一向に話が終わらない。すると、その女性が帰り支度をして出てくるので(？?)と思い、話を聞くと、

「随分長くお話をさせて頂きました。絵を描いて下さらなかつたのは残念ですが、私の人生でこれほど貴重だつたと思える時間は他にありません。本日先生に教えて頂いた様々な考え方を自分の糧として、これからも頑張つて生きていこうと思ひました。お弟子さんの方々も、先生に負けないような偉人になつてくださいね!」

と、ニツコリ笑つて言ひます。彼女はすこぶる満足気なのですが…先生は何故絵をお描きにならなかつたのだらう??と思つていますと、先生が和室から出てきて、

「大久保君、彼女は妊婦さんではないか。家まで車で送つて差し上げなさい」

と言う。私は疑問をいつたん横に置いて、彼女を車に乗せて、家まで送ることになりました。

先生のご自宅から、熊本市内の彼女の自宅までは一時間ほどでした、車内で彼女と話しておりますと、先生は私どもにも話されないような難しい話を彼女にされたそうで…彼女は、

「中でも人物像の見分け方などは、大変ためになりました。先生はその方の趣味と恐れるものを聞いて、その方が何をもつて心が安らぐのか、何をもつて心を乱すのかを大きく参考にして…心が安らぐものと協調性のある言葉を特に選んで口にするのだそうです。私も職業柄、たくさん病を抱えた方に出会いますので、彼らと話をする際には心したいと思ひます」

「先生は目前の人が嘘をつくつと、その方からまるで鈴が鳴るかのよつにわかるそうです。よくドラマかなんかで使われる嘘発見器つてあるじゃないですか?ひよつとすると、先生はお話される方の心音まで聞こえていらつしやるのかもしれませんね??」

「先生が言うには…お魚が住みつくには水がある程度は泥などで汚れていた方がよく、あまりにキレイな水だと魚はそこに居着かないそうです。人も同じらしく、あまりに厳しく潔癖であると…居辛いですものね。ある程度は人間臭いような環境の方がいいのですね」

「人が金銭や地位や名声を求めるのは、まるでお猿さんが池に移った月を見て、宝玉だと思つて掴もうとするようなものらしいです。そんなことをしたら、お猿さんは池に溺れて苦しいばかり。私も医師としてのキャリアを考えないことはありません。しかし、それが自分に相応する立場かどうかを考えること…今後はよくよく心したいと思います」

「人の心というのは、日々のお天気のように変わるものだそうです。たとえある時は失礼な人間だと思つたことがあつたとしても、また次に会えば違う心持ちでいらつしやることもあるそうです。第一印象や思い込みでその人のことを決め付けてはいけません…」

…など、感動のせいか、かなり興奮されてひっきりなしにお話されていました。彼女はご自宅へ着くと、

「今日は本当にありがとう御座いました！くれぐれも先生によろしくお伝え下さい！！」

と言つて、笑顔で深々とお辞儀をして、家の前で私を見送つて下さいました。先生の家へ戻つて、先生に、

「先ほどの女性を無事にご自宅までお送り致しました。ところで、何故にあの方の人物像を描いて差し上げなかつたのです？」

とたずねると、先生は画材を庭へ放り、門弟に火で焼くように申し付けました。そして、

「私はもう絵は描かぬ」
とおっしゃる。

人とは何か v o l . 0 7 (後書き)

絵を焼くお話は武田惣角の手裏剣の話を目材にしています。偉人の逸話が面白いと思つたのなら、武人の話はおすすめかも？

人とは何か v o l . 0 8 (前書き)

3人の弟子は孔子の弟子をモデルにしています。顔回は非常に優れていたそのので除外していますけども。聖君も自身を超える弟子には恵まれなかったという話でもあります。

私は先生の表情を見て、

(これはただ事ではないな)

と思い、お話を聞いていますと、

「私はあの女性を見抜くことが出来なんだ。彼女は何故か霧がかかったような感じで…本心というか、姿形を心に描くことが出来なかったのじゃ。…こんなことは初めてじゃ」

そう言って、

「しかし、あれほどの才覚は生まれて初めて見たのう。打てば響く才能、一を聞いて十を知るなどの言葉は、まさしく彼女のためにある言葉であろう。磨かれてこそいなかっただが…私にもあれほどの才覚があつたなら…永遠の命題を解けたかもしれない…。天とは惨い仕打ちをするものじゃ。私にこれほどの命題を与えておきながら、才覚を与えずして、彼女には他なる命題を与えて、才覚をも与えるのだからのう。しかも、その二人を会わせるなど…惨すぎるわい…」

と、深く嘆き戸惑っておられました。先生のこのような姿をみたのは、これが最初で最後です。私には…その女性の持つ才覚というのはまったく見抜けませんでした。やはり先生ほどの方の視点から見初めてわかるものなのでしょうねえ…。

それから二年ほどして、その女医さんが、

「近くに往診しに来たからご挨拶に…」

と言って、菓子折りを持って来たことがありまして…丁度、先生も外にいらっしやっただので、陽気にお話されていたのですが…その時は、彼女の姿がはつきりと見抜けたそうです。先生は笑って、

「あの時はなんだっただろうのう。画材は全部焼き払ってしまったので、絵は描けぬ…まっこと残念じゃのう」
と、言うておりました。

二年経って、彼女の何かが変わったのか…はたまた先生があの時たまたま不調だったのか…未だにわからず終いですね。しかし、先生があのように惑われるのも、誰かを指して自分の不明を恨むと言つて嘆かれたことなども…見たのは本当に、それが最初で最後ですね。

「そうなのか？私は先生が驚かれたことをもう一つ知っている」
私は口を挟む。北野君と大久保君が揃って私を見る。

「そうか…、そう言えば、あの時は私しかいなかったのか。その後直ぐに先生は調子を崩されたので、皆には言う機会が無かった…。今考えると、とても異常な出来事だったのかも…」
私の言葉を聞いた北野君が慌てて言う。

「??？なんだそれは？良かったら教えてくれよ」
大久保君もインタビュアーも、北野君の言葉に同調するかのように、食い入るような顔で僕を見る。

「あれは確か…」
あれは確か…先生が亡くなる半年ほど前だ。先生が大阪にいるお知り合いに会つて、帰ってきたとの報せを受けたので、JRは熊本駅まで迎えに行った。確か六月か七月くらいだったと思うが…その日はまだ涼しくて、天気も良かった。少々暑いと言えなくもないが、清々しい春がまだ残っている…というような季節だったはずだ。それで、先生を改札まで迎えに行つて…外に出たのはよかったが、先生の様子がどうもおかしい。まるで何かを探すかのような動作で、辺りをキョロキョロとしている。
「??？どうか致しましたか？」
と聞くと、

「いや、誰かに見られている気がする。無礼があつてはいかんのう。周囲に誰か…私を知っている方がいて、私を見てはおらぬか？」
とおっしゃる。

(??？…誰だろう?)
と思つて、辺りを見回していると、駅前のご真ん前にある植え込み

の傍で、ちんまりとしゃがみこんで、こちらを見ている少女がいた。年のころは十五、六歳くらいだろうか、まだ少しあどけなさの残る顔立ちだ。目はパッチリと大きく、可愛らしい感じの女の子で、透き通るような黒髪でストレートヘア、長さはそう長くもなく、顎の辺りくらいまでだ。

…ルックスはとても奇抜だ。その子は、靴は編み上げブーツ、真っ黒でフリルのついたワンピースを着ていて、胸元は大きく開いている。ブラジャーの紐が出ているのが遠目にもわかった。頭には黒いリボンをつけている。ゴシックな格好だ。彼女の傍らには赤い、まるでランドセルのような鞆がある。その赤は黒の衣装と離れて一点だけある…俗な世界の中に毅然とその存在を示しながらも、人からは離れたところにある真実…そんなことを連想させる。

…どこからどう見ても、先生とは関わりがあるようには見えない。違う人種ではないかと思えるほど、先生とは背負っている世界観が違う。しかし、彼女は先生から目を離すことなく、私が彼女を見ていることに気づいてからは、微笑してこちらを見ている。…まさか先生の知り合いというわけでもあるまいが…一応確認してみなければと思つて言つ。

「…一通り見ましたが、それらしい方は…。ただ、先生の左手側に先生の事をじつと見ている少女がいます。…私は存じ上げておりませんが…先生は少女のお知り合いに心当たりはありますか？年のころは十五歳か十六歳かそこいらという感じで、本当にこつちをずっと見ていますか…」

先生は左手側を向いて、笑つて言った。

「ははは、そんな若い娘は知り合いにはおらんのだ…。どれ」
先生はその少女の方へ歩いていく。多くの人が行き交う中だというのに、先生は誰とも当たることなくスイスイと、少女の前まで歩み行く。少女は笑いながら先生を見たまま座っている。その様を呆けて見ていた私は、あわてて先生の後を追いかけた。

人とは何か vol.08 (後書き)

「年のころは十五、六歳くらいだろうか」というのは、おっさんから見ると若い人の年を読み間違えるという描写ですけども、わかりにくいですねえ。。

人とは何か v o l . 0 9 (前書き)

目下の人に対してとはいえ、無礼に無礼を返すようではまだまだですよね。というか、目下とか位置づけている時点ですでに無礼な気も。。

先生が少女の前に立つと…少女が口を開いた。

「なあに？お爺ちゃん？私に何か用？」

表情はニツコリと笑ったままだ。先生は言う。

「…お嬢ちゃんが私を見ていたから…ひよっとして知り合いかもしれないと思って、話しかけたんじゃないよ」

少女が返答する。

「???いいえ、知り合いではないワヨ」

少女は台詞の語尾を、まるで歌うようにして言った。私も口を挟む。

「でも、君はずっとこちらを見ていたではないか」

…まるでこちらの声が聞こえてないみたいだ。そう思えるほど彼女はこちらの問いかけにまったく反応していない。じつと先生を見ている。先生も少女の佇まいを気にしているようだった。先生が口を開く。

「いや…、私はあなたを知っている。どこかで会ったことがある。

覚えがある…。名も姿も思い出せん…が、私はあなたの存在を過去に体感している」

少女は薄く笑いながら、先生をじつと見ている。馬鹿にするような笑いではなく、嫌味がない…どこか暖かい笑顔だった。

「でも私はお爺ちゃんを知らないワ。勘違いじゃないかしら？」

言うと、先生は、

「…」

と、絶句していた。表情は明らかに戸惑っている。先生のこういう姿は極めて珍しい。驚きを隠せずに私も戸惑っていると、彼女が口を開く。

「答えが出せなくて困っているのね」

言って、言葉を紡ぐ。

「わたしのことも…あなた自身のことも」

僕は彼女が何を言っているのかわからなかった。…すると先生が、ゆっくりと口を開く。

「…わたしは…この瞬間を生れ落ちて待ち望んでおった…。あなたが私に命題の答えを教えてくださいというのか」
言って、安堵の感情と共に言葉を付け足す。

「…いやはや…長い道のりであった。私の長かった旅もこれで終わる」

と、彼女の前にしゃがみ込む。そして、ゆっくりと彼女に問う。

「…人とは何かね？」

少女は先生から視線を外す。ぼうつと宙を見たまま微笑して…長い間をおいて言った。

「残念ね…それは説明しても、きっとあなたでは…理解らない」
私は、

（小娘が！！なんと無礼な！！！）

と、心に思ったのは確かだ。しかし、声には出なかった。その場の空気が私の発言を許さなかった。直感でわかる。この二人の会話には入ってはいけないと…。

「…そうか…薄々と思っではおったが…やはり私では知り得ることとは出来ぬか…。残念じゃのう…」

先生が泣いているように見えた。…私はもはや二人を見ていることしか出来なかった。先生は立ってフラフラと歩いていく。彼女は先生を呼び止めて言った。

「待って！」

そして、

「…でも、あなたは間違っていないワ」

今度の笑顔は先ほどよりも、もっともつと暖かった…。先ほどは人を観察するかのような感じが少なからずあった。が…今はそれはすべて消え失せ、まるで友人を見るかのような目になっている。間違いない。彼女は先生を知っている。先生が振り返ると、そこにはいつもの先生の毅然とした凛々しい姿があった。

「いやいや…、取り乱して失礼したの」

彼女は先生を見て言う。

「人は…自らと他が軋み合う歯車の中で、何かを気付き得る。何を
知り得て何を知り得ないかは…その人それぞれヨ。だってそうでし
よ？…お爺ちゃんも私もそうなのヨ」

言つて、

「人は…不完全なものだからネッ」

彼女は右手の人差し指を立てて、少しだけ振りながらそう言った。
仕草は若い女の子そのものだ。しかし言葉は、若い女の子のものと
は思えないほど…卓越しているように感じた。正直言つて、私には
彼女の言う言葉の真相がわからなかった。先生は黙つて、彼女の言
葉を聞いている。そして先生は、

「人生の歯車…巡り合わせにこれほど感謝した日はないわい」

と言つて、足早に歩いていった。彼女はその後姿をじいつと見てい
る。私はなぜか呆けて、その場に突つ立ったままだ。年は同じくら
いか、一人の少年がやってきて、彼女に話しかける。

「おう、相も変わらず…こんなところで何やってんだ？いつもここに
いるよな」

彼女が答える。

「あ、こんにちはっ！やつほーい」

言つて、今度は静かに続ける。

「人つてさ。儂いよねえ…悲しいよねえ…。真実を目の前にしてい
るのに、その実体に触れられない。触れるべき立場にある人なのに
…触れない。私…あまりに切なくて泣きそうだわ〜っ」

と、語尾こそふざけているものの、悲しそうに遠くを見るような表
情で言う。男の子は、

「????なんだお前、今日はいつもよりもさらに変だぞ。なんか悪
いもんでも食つたか？」

と、両手のひらを天に向けて、腕をすくめて言った。彼女は静かに
続ける。

「食べてないわよう〜。お昼から何も。お腹ぺこぺこ！緒山君、悪いものでもいいからなんか奢ってヨ！！」

「お昼から何もって…まだ三時回ってないぜ。燃費悪いなあ…」
男の子が答える。そうして彼女は男の子と一緒に、駅の南側へと歩いていった。…私は我に返って、あわてて先生を追いかける。

その日の晩…先生は脳梗塞で倒れられ、大学病院へと運び込まれた。幸い三週間後には退院されて、心配するような後遺症も無かったが…皆が涙を流して心配した。

「…という話だ」

私が話し終わると、インタビュアーが言う。

「聖君が驚かされたのが、若い妊婦さんや女の子だったとは、それはとても意外で、興味深いエピソードですね。聖君は残念ながら、後継者を正式な形では選出されませんでした。…それにはどういった理由が考えられるでしょうか？」

大久保君が答える。

人とは何か vol.09 (後書き)

人ってなんなんでしょうねえ。

人とは何か vol.10 (前書き)

仏教の縁起思想的な物事の捉え方がよく出てきますよね。この小説。

「単に門人の中に、先生に匹敵するほどの人材がいなかったからでしょう」

北野君も答える。

「やはり、門弟間での不和を恐れていたことではないかな。今ではそういうした後継者が選出されなくて、かえって良かったと思ってるよ。皆で対等に話できるしね」

私も答える

「先生は、後継者を決めて教えを引き継いで云々」というほど、大仰に事を構えてはいなかったのかもしれないね。私達との会話自体、そう大それたものでなく、各人が各々先生の話を消化して、理解してくればそれで良いと思っていたのかもしれない」

各人別々の答えが出てくる。この中に、先生が思ったものと符合するものはあるのだろうか。インタビュアーが、

「ありがとうございます。聖君がお亡くなりになって、十年の月日が流れましたが、実際に会う機会が無かった方でも、教えを聞くと言う形で、聖君の思想に触れることが出来ると思うんです。これはきつと、そういった方々へのメッセージとなってくれるはずですよ！」

と言って、この話を締め括る。さらにインタビュアーは、テーブルコーダーやメモ用紙を片付けながら、

「先生方、本当にありがとうございます！お蔭様で素晴らしい記事が出来そうです」

と、目を輝かせて言った。

帰りの車の中で…私は駅前で会った少女と先生の話を…また思い出していた。少女は男の子に、

(真実を目の前に行っているのに、その実体に触れない)

と言った。先生がこれまでの人生の中で、真実を目の前にしていたかどうかなんて、おそらくは初対面であろう彼女にわかるはずも無い。…ということは、彼女は先生を見たあの時に、先生の近くに真実があると判断した…ということになる。

（人は…不完全なものだからネッ）

何故か…彼女のその言葉は、十年以上経った今でもはつきりと思いつき出される。…これこそが人とは何か？の答えなのではないだろうか。人とは不完全だ、と言いたかつたのでは…？先生も当時の私も気がつかなかつたが…、それは彼女自身が

（あなたでは…理解らない）
と、言っていた通りだ。

…そう考えて私は頭を振った。まさか…まさかあんな年端も行かぬ少女に、先生が生涯を通して考えなかつた命題の答えなぞわかるはずがない。そう、わかるはずがない！

車を運転している弟子が私を見て言う。

「先生、いやに真剣な顔つきでどうかなさいましたか？」

私は、今考えた事を脳裏から捨てて答える。

「いや、人とは何か…と考えていたんじゃない」

先生への憧れのせいだ、…弟子の前では先生のような口調になる。

先生の教えという遺伝子は、確かな形で私や北野君や大久保君をはじめとする、万人の下へと受け継がれた。私や彼らは、先生の命題を解き明かすことが出来るだろうか…。それとも少女の言うとおり、真実を目の前にしながらも、それに触れることはできず…ただ佇んでいなければならないのだろうか。

人とは何か vol.10 (後書き)

「人とは何か」編はこれにて終了で御座います。お読み頂いた方々、貴重なお時間を割いて頂き本当に有難うございました！

すべてを取り払った後に残るもの VOI・01 (前書き)

早くも4話目です。引き続き宜しくお願い致します！

すべてを取り払った後に残るもの

初めは、それを知りたいという気持ちだけだった。秘密、隠し事、他人からは見えないこと、人に見られたくないもの、プライバシー……いつの時代でも、そういったものは人々の好奇心や興味をくすぐり、世の中のうちの幾人かに対しては、それを得ようとして……なんらかの行動までも起こさせる。それほど、人の秘密というものには神秘性がある。その人が頑なに隠していることも、別に隠しているわけではないけど……結果的に他人が知り得ないことも……俺はそんならであるうが、できることなら、知ってみたいと強く思う。

俺はこういった知的欲求が人一倍強い。子供の頃に、お爺さんの家の物置を引っ掻きまわしたり、父さんの鍵付きの引き出しを開けて覗いたり、姉の日記を盗み見たりした。もちろんそうして知り得た秘密は、決して口外しない。単純にその秘密の内容を楽しんで、自分だけがそれを知っているという優越感に浸るだけである。もちろん、俺が知ったことを誰も知らない……という優越感もあった。

俺は今までにたくさんの人間の秘密を知り得てきた。ストーカー、覗き、盗撮、盗聴も専門的レベルまではいかないが……試みたことは何度もある。俺の人間性はいわゆる変態という部類に入るだろうか。だがこの行為は誰にも気付かれていない。この世に俺の変態じみた趣向を知り得る人は、未だいない。

俺が通う九州学園高校は、私立高校の中でも偏差値は高く、シャノンパニア高校、熊本学院大学付属高校、熊本第二高校などと並んで

の進学校である。俺は教育熱心な両親の期待を受け、日々勉学に勤しんでいる。テストの度に、

「お前は素直な優等生だ。その調子でがんばり勉強しろ！勉学の先にしか人生は無いんだからな」

と、両親から口を酸っぱくして言われる。事あるごとに。その期待に応えるため、放課後は熊本予備校という、熊本駅から少し東に行つた所にある予備校に行き、さらに数時間の授業を受けて勉強していた。

親のかけるプレッシャーや、本当は自分はどうありたいんだ！という気持ちの葛藤は、気になった誰かの秘密を知り得ることで解消されていた。とあるクラスメイトが、実は他のクラスの誰々を好きだとか、クラスで一番の美人の佐々木さんのお尻にはホク口があるだとか、近所に住んでいる香波さんは、毎晩彼氏とイチャついてるだとか、担任の井守先生は男子学生と不倫しているだとか…、普段の俺との関係からは、決して見えないことのない事実。それを知ることとは何よりの興奮であり、何よりの喜び、何よりのストレス解消であつた。

相手の秘密を知ることので得られる爽快感と、彼らの内緒を握っているという立場は、逆に俺の脳内がキレておかしくなることを抑えていた。小さい罪を犯すことで、より大きい罪を犯すことを抑制していると言える。

親や周囲からの期待を受ければ受けるほど、その行為はエスカレートしていく。が、まだ誰にもばれてないし、知り得た秘密を漏らしてどうこうしたいという欲求も無かつた。…俺は純粹に、他人の内緒…それも性的なものを吟味するという快楽を求めているのだと

自覚した。そして、それをひたかくしにするため、優等生の仮面を被っているという…本末転倒の思いも感じていた。つまり、優等生であるがゆえにストーカーの仮面を被って、誰かのプライバシーを知ろうとするのか、変態の犯罪者であるがゆえに、優等生の仮面を被って生活しているのか…本来の自分がどちらなのか、自分で自分を判断できない状態である。自分を最も知らないのは、案外自分自身なのかもしれない。自分の秘密を暴きえていない…あまりにも身近すぎて…。

…人は皆、自分を偽るために仮面を被っている。俺は他人の秘密を知る度にそう思った。他人には絶対に見せない、見せたくない自分の姿…それを隠すために、人は仮面を被って、人前では本来の自分の素顔を晒さない。

場面や状況に応じて、多種多様の仮面を使い分けて生き抜く姿は…人間なら誰しもが行う正当なものである。正当な欺瞞…人の習性とも言えるこの不可解な当たり前は、本人が意識しているしていなに関わらず、確かに存在する。俺にとって、その仮面を一枚ずつ剥ぎ取って、その人の持つ素顔を拝むという行為は、何よりの快樂の行為だった。

予備校での授業が終わると、市電に乗って自宅のある出水まで帰る。市電というのは熊本市内を走る路面電車のことだ。JR熊本駅の少し南を始点として、終点の健軍というところまで、熊本市の中心を縦横に通っている。市内の主要箇所を結んでいるので、地元の人はもちろん、旅行者にも重宝されている。…俺が彼女を初めて見たのは、その市電の中だった。

彼女を意識した初日。偶然居合わせた…世界のどこかの同一点で

出会う見知らぬ女。その女は俺を惹きつける何かを持っていた。

彼女の第一印象は、知的な女性だった。市電に乗りこむと、まず車内の乗客を一通り見渡して、あとは降車までずっと外を見ている。その彼女が何かを見ている様が、何と言うか…とても知的で美しく感じられた。

細身のクールなお姉さんといった印象で…服装はお洒落で、一際目立っていた。センスは奇抜だが格好良く、着飾ることが好きなのだろうと予想できる。

今日は、すごく細いジーンズ、ブルーのTシャツに、前が開いた白シャツ、だらしなく結ばれたブルーのネクタイ、編み上げブーツに、赤いランドセル型のカバンを背負っている。白と青の空間にある一点の赤が、彼女のセンスの奇抜さを醸し出している。大きい目に、真っ黒でストレートの髪の毛からは、清潔感と冷たさを感じた。

彼女は市電に乗ると、まず乗客を見渡す。彼女の目立った服装を見ていた俺と目が合う。これが俺と彼女のファーストコンタクトだった。彼女は空いている席に座って、周囲や景色を見ている。俺が下車する国府停留所まで降りない。俺よりも遠いところから熊本駅まで通っていることがわかる。

俺は毎回決まった時間…二十一時四十分か五十二分発の市電に乗り込むのだが、彼女とは必ずしも一緒ではない。三回に一回くらいの割合で一緒になるという感じだった。

彼女を意識した二日目。定期的に利用していると、座る席というのはなんとなく決まってくるものだ。俺はいつも入って右側…車両

のなるべく後ろに座る。しかし、彼女には定位置というものは無かった。いつも適当に好きなところへ座る。ひよっとしてわざと前に座ったところを避けているのではないか、と思うほどである。

…ふと気付く。新しい場所に座ると、違った角度からものが見える…。それはどこか、俺が他人の秘密を知りたがる動機と似ている気がした。普段見ているその人の違った面を見たい…という気持ちと。

彼女を見ながら、そんな他愛もないことを考えていた。当の本人はブーツとした感じで、外や途中の停留所から市電に乗ってくる客を見ている。ジーツと見ているのだった。

彼女は両太股の下に手のひらを入れて、編み上げブーツのかかとをトントンと床の木片に当てて鳴らして、退屈そうに辺りを見渡している。具体的にどこがどうというわけではない。なのにとことなく、何故か…彼女に知的好奇心を掻られる自分がいた。

彼女を意識した三日目。熊本駅前には乗客が多いため、市電が停留している時間は長い。数分間留まっていることもままある。彼女はいつも、発車間近に乗ってくるため、市電が停留所に到着した後すぐに乗り込む俺は、いつも彼女を待ち受ける形になる。その日はいつもより乗客は多めで、席は埋まっていた。

(今日は来ないかな…)

そう思っていると、発車直前になってようやく彼女が乗り込んでくる。彼女はいつも通り乗客を一通り見渡した後、席が一杯なのを見て…俺の目の前に立った。

今日の彼女の服装は、ピンクのワンピースに、腰周りに同じ色の大きいリボン（帯か？）を結んでいる。白のブラウスを羽織って、清楚な雰囲気を出しているのに、ごつい黒の編み上げブーツと濃い赤のランドセルは変えずに着用していたため、トータルではいびつなファッションとなっていた。

ドアが閉まって、市電は熊本駅前を発車する。俺は心なしか緊張していた。少しとはいえ、好意を抱く女性がそばにいと…正直ドキドキする。彼女は俺の気持ちも知らずに、いつものように外を眺めている。

最初の会話は意外だった。呉服町前で俺の隣に座っていた男性が席を立つ…その時、彼の鞆の端が俺の肩に当たる。

「おっ、兄ちゃん、ごめんな」

と謝って、彼は降り口へと歩いていく。彼の後姿を見ると…目の前で声がした。

「はい、落ちたわよ」

前を向き直ると、彼女がしゃがみ込んで手を出している。

すべてを取り払った後に残るもの vol.01 (後書き)

改行を×2にして、行間を作ってみました。少しでも読みやすくなれば良いのですが。既投稿分も行間を入れる編集を行おうと思っています。

すべてを取り払った後に残るもの vol.02 (前書き)

熊本駅周辺はガラリと様変わりしていますが、市電も新規車両に変わったのでしょうか。あの木の床がローカルな雰囲気醸し出して、感じ良かったものですがねえ。

すべてを取り払った後に残るもの vol.02

「乗車券」

手には乗車券がある。どうやら隣の男性の鞆が当たった際に落とす
てしまったらしい。

「あ、ありがとうございます…」

俺は慌ててお礼を言って、その乗車券を受け取る。その時に少しだ
け触れた彼女の手は、抱いていた印象とは違って、とても暖かかっ
たのを覚えている。

彼女はニコニコ笑って、空席になった俺の隣にトスンと座った。
彼女は俺に話しかけて…すぐ隣に座っている。…何か話しかければ
仲良くなれるかも…と思った瞬間、意外に、そして唐突に彼女が口
を開く。

「キミの服ってさ、それって九州学園の制服だよね??」

俺はまた慌てて答えた。

「は、はい…そうです。九学です」

彼女はニコニコ笑ったままで続ける。

「そっか、頭いいんだ?? 私は知恩高校卒業なんだ。九学だなんて
尊敬しちゃうなあ」

第一印象から：勝手に想像していた俺の彼女の像は見事に外れた。知的で冷たい感じだと思っていたのに、いざ口を開いた彼女は、とても暖かくて少し：バカっぽかった。

「いや、全然頭良くないですよ。ほんと…」

彼女はニッコリ笑って、

「あゝもう、その謙遜が優等生っぽいワ」

彼女は語尾を歌うように、少し音程をつけてそう言った。

市電は中心街に差し掛かり、たくさんの人が乗ってくる。十時過ぎ。お酒を飲んだ人、遅番や残業で仕事上がりの人、街に遊びに出ている学生：状況は様々だが、たくさんの人が乗車して、さらに電車内はいっぱいになる。そうして、市電は淡々と進んでいく。しばらく沈黙が続いて、俺が降りる国府停留所に近づく。

「次で俺降りるんです。遅いんで、気をつけて帰ってください」

と言う。彼女は俺のことを見て、ニッコリ笑って、

「ありがとう キミもね」

と、上機嫌に言った。その屈託のない笑顔にドキリとする。

（まだ会ったばかりなのに：なんでドキドキしてんだ俺…）

などと考えながら、

「じゃ、失礼します…」

と、言つて下車する。彼女は笑つて…手を軽く振つてくれた。

それからというもの…よく彼女のことを思う。彼女の事を考えていれば、プレッシャーや不快感が和らいで、落ち着いた心持ちで学校や予備校に行ける。俺は友達も少なく、学校や家での会話はほとんど無い。それだけに、先日彼女と交わしたほんの少しの会話は、クツキリと鮮やかに心に残っていた。

(人を好きになるといふのはこういうことなのかな…)

などと思いながら、俺は学校の授業を終わらせ、予備校へ向かう。

彼女を意識した四日目。今日はいにくの雨…降り止む気配は無いが、降り自体はそう激しくもなく、ポツポツといった感じだ。十時前。辺りは暗い。数日振りに、彼女が市電に乗り込んでくる姿が目に入る。俺はそれに気付きながらも、わざと視線を外して知らない振りをした。横目でちらと見ると、彼女は黒のフリルが付いた傘を閉じて、トントんと床に当てる水を切っている。そして、編み上げブーツと床の木片とが当たる、ゴツゴツとした足音がこちらへ近づいてくると、

「よっ
」

と言つて、そこには片手を上げて俺に挨拶する彼女がいた。

「あ、こんばんは…」

と言つて…素つ気無く挨拶を返すも、心の内はかなりテンションが上がっていた。彼女は俺の隣に座ると、傘をコツコツとさせて、

「もー、よく降るわよね…。少し歩いただけでも濡れちゃうわっ」

と、不機嫌模様なのにも関わらず、テンションは先日同様高い。

「降りますよね。梅雨ですしねー」

と、話を合わせる。

「今日も予備校なの??」

と、彼女が俺に言う。

(あれ?予備校のこと話したっけ??)

などと思いつつも、すぐに返事を返す。

「あ、はい、そうです」

「そっかー、大変だねえええ」

「でも、優等生なんだものね!頑張らなきゃね」

と、続ける。チクリと少しのプレッシャーを感じたが…彼女から言われるそれは、両親や先生から言われるその重圧感に比べて、何故かたいしたことはない。彼女は僕をジーツと見つめている。

「え、えーと…」

俺は何か彼女に話しかけようとしたが…彼女のことをなんと呼べばいいのかからなかったので、いざ発音したものの…言葉が続かなかった。彼女はすぐにそれを察したかのように…笑って自己紹介した。

「梓よ。倉下梓。よろしくね!」

と、右手で僕の手を取り、ブンブンと上下させる。戸惑い慌てて答える。

「あ…、お、俺は高田隆です…」

「く、倉下さんは何やってたんですか?お仕事ですか?」

彼女は笑顔を崩さずに即答する。

「梓でいいわヨ」

そう言って、

「私もお勉強かなあ。ってもいい加減なものだけどね!」

と続けた。

(お勉強???浪人とかかな?)

年も気になるが、さすがに軽々しく女性に年は聞けない。でも、話した雰囲気や外見から察するに、俺のいくつか年上…二十歳前後だろう。

俺は無難に学校のことや、テレビ、漫画や小説なんかの本の話などを彼女に振る。彼女は何の話題にでも、適当に合わせて話を聞いてくれるのだった。時間はあつという間に過ぎる。国府停留所に着いて、俺は挨拶した。

「じゃ、俺ここですから。気をつけて帰ってくださいね」

彼女は笑顔で答える。

「うん、じゃね」

と、また手を振って俺を送ってくれた。

俺がたたくさん話を振ったおかげか、彼女が聞き上手なせいか…とても雰囲気よく話が出来た気がする。まるでしばらく前から友人同士であったかのような…そんな時間を過ごして。色々と変な人だけど…悪い人じゃないし、話していて楽しい人だな…と思った。

俺は彼女の前でも、優等生で真面目な人柄の仮面を被っていた。もしも、この仮面の下にある…変態かつ犯罪者の本性を見られてしまったら…。彼女はなんと言うだろうか…などと考えながら、目を細くして俺は帰宅した。

すべてを取り払った後に残るもの VOI・02 (後書き)

優等生のプレッシャーというのは何かと描かれる話ですが、まるで味わったこと無いですねえ。うーん、優れてみたい。

すべてを取り払った後に残るもの vol.03 (前書き)

仮面、ペルソナについてのお話は、龍谷大学の吾勝氏のお話が元になっていきます。基本的な心理学用語なのだそうです。今回の話を面白いなと思った方は、そっち方面の研究をしてみると芽が出たりして???

すべてを取り払った後に残るもの Vol.03

彼女を意識した五日目：六日目：七日目。彼女と一緒にいるという特別な空間。夜の十時前の市電の中。限られた数十分の時間。今や…これが現在の俺の生活の支柱となっていた。

彼女はとても話しやすく、かつ聞き上手だった。限られた時間の中で、俺は彼女に世間話から自分の話まで、そして深い人生についての話など…たくさん話を話した。彼女は聞きながら、適当に相槌や質問、突っ込み、自分の意見などを挟むので、とても話しやすい。一緒にいて安心するし、何よりも自分をさらけ出すことで、こんなにも癒されるとは思っていなかった。よくドラマや漫画なんかで「話したらスッキリする」とか、そんなセリフを見るが…まさにその通りで、普段のストレスが、彼女と過ごす時間で洗い流されていくのが明らかに自覚できた。

「あははっ、でもそれってお父さんが悪いんじゃないの??？」

「そうですね、俺もそう思うんですけどね…やっぱり、言えないですね」

彼女との会話はもうとても自然だ。彼女の親しみやすさのおかげで、知り合ってから数週間…話した回数もさほど多くないというのに、とても慣れ親しんだ親友か、兄弟のような間柄になっている気がした。

ふとした流れから、好みの異性のタイプになる。彼女は、

「そっだねー、やっぱり私を理解してくれる人かなあ〜。私の心の奥底まで理解してくれる人がいいなあ…でも、人を好きになるっ

て、そんな単純じゃないもんね。お互い全然タイプでないのに、お互い惹かれて付き合ってたさ、結婚までしちゃう人とかたくさんいるし…」

彼女が身振り手振りを踏まえて楽しそうに話す様子を、俺はドキドキして見ていた。俺は彼女のことを理解するだろうか…俺は理想のタイプに当てはまるのだろうか…などと考えていると、彼女が言う。

「キミのタイプはどんな人??」

俺は気持ちを知られたくなかったから…彼女とは正反対のタイプの人間像を挙げる。

「そうですね、知的で冷静な感じで、胸が大きくて…大人っぽい感じの…」

彼女は俺の言葉を遮る。

「あーもう、やだやだ…」

彼女は両手をすくめて手のひらを上に向け、呆れたような表情を浮かべて言う。

「胸が大きいなんて…そんなものいらないわよっ」

どうやらバストに関しての発言が気に入らなかったらしい。確かに彼女の胸は、どうひいき目に見ても大きいとは言えなかった。顔立ちや雰囲気はお姉さんって感じなのだが…、この胸の無さが若干セクシー度を落として、親しみやすい要因になっているのかもしれない。異常にスタイルが良い、モデルさんみたいなルックスだったら、

世の男は気が引けて、余計に話が出来なくなるものだ。彼女は、

「ちょっと！どこ見てんのよっっ！…！」

と、大変におかんむりだ。俺は笑ってフォローする。

「いや、別に梓さんの胸がどうこうとは言っていないですよ…！」

彼女は（キーンッ！）という感じで怒っている。そして、

「でもねっ！胸なんて余計なものよっ！！っていつか、むしろ…ち、小さい方がいいのよっ！！！」

と言つて、熱弁を続ける。

「…だってだって…、だ、抱き合ったときに余計なものが…ないほう…心が近くなるでしょ…！」

「そ、それで…心が近い方が…よりお互いが理解るじゃない…」

彼女はそう言つて、ボツと顔を赤くする。

（…・か、かわいい…）

俺がそういう思っていると、国府停留所が近づいてくる。俺は真っ赤な表情の彼女を見ていられなくて、

「…そう言われてみると、確かにそうですね」

と、話を合わせる。彼女は満面の笑みを浮かべて、

「でしょー」

と、してやったりの表情を作った。その姿も可愛かった。

「じゃ、俺降りますので…梓さん、気をつけて帰ってくださいよ」と話を切り上げる。

もつと話をしていたい…でも彼女に対する気持ちや、自分の仮面の下にある素顔を知られたくない気持ちも確かにあった。後ろ髪を引かれながら…市電を後にする。

きつと…俺は彼女のことを好きになってしまっている。ひしひしと彼女のことを深く知りたいと思う自分がある。心のことで、プライベートなことでも…仮面の裏にある俺の欲求が。彼女を標的にして狙いを定めている。俺はそれを必死に打ち消した。彼女に対して、非人道的なことはしたくないという常識による正常な心と…、彼女は「私のことを理解してくれる人が好き」と言っていた、彼女を暴いてしまえ！という欲望からくる好奇心とが…激しく互いにせめぎ合う。

…今日のところは正常な心が勝った。俺は彼女の前では仮面を被り続けたい。この市電の中にある一時を失いたくなかった…。

彼女と過ごす時間を何より楽しみにしている反面、深みにはまっていくのが恐ろしいという気持ちもあった。正直これほど人を好きになったのは初めてで、自分で自分がこの気持ちをどう処理すればいいのかわからない。彼女と会えば会うほど、話せば話すほど、

彼女を思う気持ちは大きくなっていった。

彼女を意識した八日目：九日目：十日目。今日の彼女は、編み上げブーツに、ブルーのロングスカート、白のだぼっとしたトレーナーのような服、胸には十字架のペンダントが見える。赤いランドセル型の鞆を背負って、テクテクと停留所前を歩いてくるのが市電の窓から見える。市電の運転手はまだ外にいて煙草を吸っているのもうしばらくは発車しないだろう。彼女が乗車券を取って乗り込んでくる。いつも通り乗客を一通り見渡して、俺の顔を見つけると、そばに来て隣に腰掛けた。

すべてを取り払った後に残るもの vol.03 (後書き)

異性とそこそこ仲良くなった後、どの辺から恋愛の空気を作っていくかって悩みますよねえ。ぐずぐずしているとお友達的な空気しか出来なくなってしまうすし。

すべてを取り払った後に残るもの vol.04 (前書き)

ファッションもセンスが要りますよね。高い服を買いさえいいというわけじゃないですし、たくさんあればいいってものでもない。組み合わせの妙と言いますか、感性と言いますか：服装にも性格や自己主張が出ますよね。

すべてを取り払った後に残るもの vol.04

「今日は買い物してきたんだ」

と、彼女はご機嫌に言う。

彼女と過ごす時間は、幸せと恐ろしさが同居する不思議な時間だ。好きな人と一緒に居られるという幸せ。その好きな人を暴いてしまいたい…という欲求に負けるかも、という恐ろしさ。そして、俺がそういった欲求を常抱いているということが露見するかもしれないという恐ろしさ。しかし、俺にこの時間を拒否するという思いは微塵もなかった。彼女と一緒に居たいという想いは、恐れよりも何よりも強かったのだ。

「へえ…何買ったんですか??」

俺が言うと、彼女は、

「ん〜、服、洋服っ！安かったんだっ」

と、ニコニコして、膝の上に置いた赤いランドセルをポンポンと叩く。彼女はいつも前衛的なファッションで…その上、同じ服を着ているのを見たことがない…。家には相当な数の服を持っているんだろっなあ…と思って言う。

「服とか、着飾るのが好きなんですネ？梓さんってお洒落ですもん」

彼女は(???)という感じで俺を見る。そして、

「私ってお洒落???着飾るのが好きなように見えるの???」

真顔でそう言う。俺も(????)となる。これだけ毎日奇抜なファッションして、くるくると衣装を変えていれば…誰でもそう思うだろう。戸惑いながら、

「あ、いや、そう思うなって、そういう気がただけです」

言うと、彼女は薄っすら笑って言う。

「ね、人ってなんのために服を着ると思う??」

何のためって…裸で歩くわけにはいかないだろう。着ないと恥ずかしいし、風邪引いちまうし…ていうか、着ないと捕まる。考え込みながらも、キョトンとした表情をしていると、彼女は、

「ブブー!!!」

と言って、口を尖らす。

「時間切れです」

と、人差し指を立てて言った。そして、

「人が服を着るのはね…それは自分を守るためよ」

と言う。俺は、

「そりゃ、裸で歩いてりゃ風邪を引きますし、怪我もしちゃいますからね」

言つと、彼女はまた薄く笑つて、

「そうね…」

と言つ。そして続ける。

「でもそれだけじゃない…。人は着飾ることで、心も守っているのよ。ただ単に…寒さをしのいで、外の刺激から身を守るだけなら、こんなに様々なデザインのものがある必要ないじゃない」

…それはそうだ。確かに身を守るためだけじゃない。彼女は続ける。

「人は服を着ることで、自分の心を飾り付けているのよ。…本当の性格はとても地味な子でも、服をキレイにして飾り立てれば、人はその子をとて派手で、明るい子だと思つて。…逆に、性格がとて派手で元気な女の子でも、汚くしてみすばらしい格好になつちゃつたら、その人の魅力は十分に伝わらない」

俺はなるほどと思つた。

「いわゆる、第一印象とか…見た目で判断する…とか、そういうことですね」

うん、とうなずいて、彼女は話を続けた。

「…もちろん他人からの見た目だけじゃない。着飾つた自分を自分で意識することで、その人は自信がついたり、演技できたり、生まれかわつた気分になつたりするワ」

彼女はとてもよく話す。ふと仮面のことか頭を過ぎる。そうか…、俺が人前で本性を出さずに、優等生を演技しているのも、心を着飾っていることになるのかもな。…たしかにこの学生服を脱いで、汚く、だらしない格好に着替えれば、優等生を演じることに少なからずもやりにくさを覚えるだろう。彼女はまだ喋り続けている。

「つまり…結果的に自分の心にも左右するってワケ…」

俺はその時に、

(じゃあ、彼女がこれほど着飾るのは…心の奥底になにかを隠しているのだろうか…)

と、疑問を抱いた。

一気に俺の仮面の下に潜んでいる…知的好奇心が大きくなっていく。彼女はこうクルクルと服装を変える…しかも奇抜なセンスで塗り固められたファッション…着飾ることで…彼女は自分の心をどのように偽り誤魔化しているというのか…。

彼女のことをもっと知りたい…。その時…俺の目をじっと見ていた彼女は、話を切り上げてポツリと言う。

「ペルソナ」

俺はその言葉で我に帰り、キョトンとする。彼女は、

「舞台の用語で、仮面のこと」

言って、

「心理学では、人が他人と接するときを使う…表層的な人格のことらしいワ」

と、続けた。俺はドキッした…まさか俺が常々思っていた単語が、彼女の口から出てくるとは思わなかった…。まるで心の奥底まで見透かされたような感じになって、ビククリする。

すべてを取り払った後に残るもの vol.04 (後書き)

見栄を張ったり、他人の目を気にしたりするのもある種ペルソナを被っていると言えるのでしょうか。自分の正直な気持ちが無かすらわからない時があります。

すべてを取り払った後に残るもの VOI・05 (前書き)

下ネタは苦手みたいですわねえ。

すべてを取り払った後に残るもの vol.05

「人は誰でも必ず…話す度…誰かと接する度にペルソナをつけるわ。何百枚も何千枚も何万枚も用意されたペルソナ。偽られた…自分を守るための心の動作。私もキミも他のみんなも…皆がペルソナをつけて生きているわ」

「たとえば私だったら…生まれた瞬間に女性というペルソナ、倉下梓というペルソナ、赤ん坊だというペルソナが与えられる。…そして生きていく過程を経て、様々なペルソナが増えていく。誰かの前では強さを演じるペルソナ、また誰かの前では可愛さを演出するペルソナ、賢く見られるペルソナ、その他…あらゆる感情を表すペルソナ…。それは多種多様。人が…時には無意識に、時には違和感を感じて、ペルソナを被って生きている…」

言って、

「人は愛し合えば…服は脱がすけど、…ペルソナまでは脱がせない…」

と、少し顔を赤くして続けた…どうも恋愛だとか、男女関係だとか、下ネタだとかの…そっち系の話は苦手らしい。

…彼女はその場を誤魔化そうとして、急にテンションを上げる。

「わかる??だから私がたくさん服を買うのは、自分の心を守って健全で正しい心を保つための…とてもいいコトなのっ!!私が着飾りたい!ってという心の根本は、人なら誰でもやってる…ペルソナ被るっていう当たり前のことなのっ!!」

言って、

「それが理解ってない人が多すぎるんだもん……」

と、ブツブツ続ける。

おそらく家族や友人から、服買すぎだとかなんとかよく言われるのだろう。責められる自分を正当化するための長丁場演説だったらしい。…別に俺は責めたわけでもないのに…ここまで反応するつてのは、よほど普段から言われてるんだらうなあ…などと思った。

俺は、人なら誰でも仮面を被るといふ彼女の意見を聞いて落ち着いていた。俺が異常だと思っていた本性を隠す行為、そして、内にある本性そのものも…本来誰もが持つものなのかもしれない。自分の心の中で、仮面の下に潜む異常性が正当化された気がした。彼女は前に「私のことを理解ってくれる人が好き」だと言っていたはず。

そうか…だったら……。俺は、彼女のプライバシーを知り得てやるうと…この瞬間…決心したのだった。他人のプライバシーをのぞくという邪まな行為が、自分の心の中で正当化された瞬間だった。

彼女を意識した十一日目。彼女の話では、彼女は俺が降りる国府停留所より、三つ先の商業高校前で降りる。予備校の授業を早退して、商業高校前の停留所が見える場所に先回りして、彼女を待つ。

待つこと三時間くらいか…夜は十一時ごろ、彼女は姿を現した。停留所を降りて、北へテクテクと歩いていく。ここから服装までは確認できないが、トレードマークの赤いランドセルが見える。彼女の服のどこかにアクセサリか飾りとして付いているのだろうか…、鈴がチリンチリンと鳴っていて、辺りの夜の暗闇に、白い点をつけ

るかのように響いていた。鈴の音とランドセルの赤を目印にして、俺は出来る限りの距離を取って、彼女の後を追った。

この辺りはまったくの田舎というわけではない。県庁や水前寺公園という、かなり大きい公的建築物もある。彼女はそれらを抜けて、まだ北へと歩いていく。…かなり歩くんだなあ…と思っていると、彼女は古ぼけたワンルームマンションへ入っていった。すぐに一階の部屋に明かりが点く。…それ以外に明かりが点灯した部屋は無い…。

「あそこが梓さんの部屋か…」

夜の街でボソツと独り言を発しながら思った。とりあえず場所はわかった。今度は家の中も見てみよう…。一階ならのぞくのも入るのも随分と楽になる。

部屋の感じを見れば、その人の秘密の大部分を見たも同然である。家族構成、生活習慣、趣味、性格、収入、立場…いろんなことがわかる。部屋の中というのは、プライバシーの中でも大きな割合を占める。その人が心を落ち着ける場所から得られる情報は、あまりにも膨大で…魅力的だ。このマンションだと、一人暮らしだろう…男と一緒に住んでいたりすれば…それも面白いのだが。

今のところ、俺は彼女を自分のものにするという欲求よりも、彼女のペルソナの下…プライバシーを知り得るといふ、知的好奇心への欲求の方がはるかに大きかった。…彼女を自分のものにするという欲求が、まったく無いというわけではない。できることなら…彼女のすべてを知り得た上で、永遠に自分のものにしておきたかった。

…気が付けば彼女のことばかり考えている…まさかこれが愛とい

うものだろうか。俺は様々な思いを胸にして、彼女のいるマンションを後にする。…そしてそのまま、ゆらゆらと歩いて…遠くの自宅へと帰途についたのだった。

数日後、俺は学校が終わってから、彼女の家に行ってみた。今日はまだ明るさが残っているせいか、マンションの雰囲気は、この間見た時と少し違って見える。このマンションの一階には庭のようなスペースがあり、洗濯物が干せるようになっていて、彼女の部屋の庭には何も出ていない。

(平日の夕方だ…彼女が普段何をしているのかは知らないが、部屋にはいないだろう…)

とあって、周囲を見渡す。人通りも無い。…辺りは薄暗くなってきたが、彼女の部屋の明かりは点いていない。それを確認して、扉をよじ登り庭へ侵入した。ベランダの扉まで近づく。カーテンは閉められてない、鍵もかかってない…本人もいない…。

「…なんて無用心な人なんだ」

ストーカー行為をしておいて言うのもなんだが…もっと用心したほうがいい。ガラガラとベランダの扉を開けて、部屋の中に入る。

すべてを取り払った後に残るもの vol.05 (後書き)

人の秘密を知る事にある種の満足感を得るというのは、人間の性のように思います。どんな形であれ他人に興味を抱くものなんですよ、人間って。

すべてを取り払った後に残るもの VOI・06 (前書き)

梓さんは意外に読書家のようです。

すべてを取り払った後に残るもの vol.06

部屋の中は…無機質だった。今まで見たどの部屋よりも、人間臭さというものが無い。部屋は六畳程度で、玄関の方にお風呂とトイレがある。部屋はまったくと言っていいほど掃除されてなく、埃やゴミがたまっているが、生活感が極めて少ない。服や下着は部屋の端に積み上げられていて…家具はテーブルと冷蔵庫しかない。テーブルの上には本が何冊あるだけ…あとはコンビニのパンやおにぎりの外袋、ルーズリーフの紙やプリントなどが散乱しているだけで、他に物は見当たらない。

「…こんな部屋…初めて見た」

テレビはおろか、コンポも、洗濯機も、布団も、棚も、押入れも…ナベや食器すら無い。印象は無機質の一言に尽きる。薄暗さと合わせて、うら寂しげな悲壮感が漂う…。彼女の雰囲気から察するに…まったく予想できない部屋だった。これも彼女の素顔の一部分だという事に違いは無いのだが…正直言って、彼女の一面を知り得た喜びよりも、この部屋への驚きの方がずっと大きかった。

「…変な人だ」

これなら窓に鍵を掛けなくても何の問題も無い。服以外に盗まれそうな物はない。服なんて…いくら若くて可愛い女性のものとはいえ…ストーカー以外はわざわざ盗み出したりもしないだろう。服がなければ、女性の部屋だとは到底思えない…。

玄関まで行くと…部屋の鍵と思しき物が置いてある。

「まさか…」

…玄関は開けっ放しだった。玄関には、何足かの靴やサンダルが無造作に置かれていた。トイレやお風呂ものぞく。トイレには本が数冊置いてある。

「これは…」

本は聖書と、漢文で書かれているよくわからない本だ。聖書って…キリスト教？まったくもって意味不明だ。

お風呂場には、石鹸とシャンプーが置いてあるだけだった。風呂場とトイレの前には台所がある。台所は使った形跡すらほとんどない。ここから部屋を見渡しても…雑然とした無個性な部屋だ…。

テーブルの上の本は…これもまた漢文で書かれたよくわからない本と、論語、千夜一夜物語、ガリア戦記、言志録、巴里の憂鬱…とあとは名前すら聞いたことないような本…。

他には特に見るようなところもない。生活についてとてもガサツなこと、古くて難しい本を読んでいること、食事はコンビニのものばかり食べていること…などを知り得たが…やはり喜びよりも驚きが大きいです。

…俺はかなり不可解な心持ちで帰途につくこととなった。

彼女を意識した十二日目。彼女はいたって普通だ。俺が部屋に侵入したなんて、微塵にも思っていない態度で俺に接する。…部屋の惨状をあまりに見かねて…少しゴミを片付けたりもしたのに…鈍感

な人だ。と思うと、彼女がニコニコして話しかけてくる。

「ねえねえ、キミは趣味とか好きなこととかある?? 普段何してるの???」

その様はすごく可愛い…心が洗われるようだった。彼女がここまで鈍感だと、自分の仮面を少し外してみたくなって言う。

「人を知るのが好きかなあ。趣味ってワケじゃないんですけど」

彼女は俺の顔を見ながら、興味深そうに聞き返してくる。

「知る? 知るってどういうこと??」

答える。

「言葉通りっすよ。興味がある人がいたら…もっと知りたいなあ…
っと思うんです」

彼女は妙に納得したような表情で、うんうんと頷きながら、

「わかるわかる。それって、私の好きなことと似てるワ」

(?) と思い、聞き返す。

「梓さんの趣味はなんですか? 読書とか??」

少々怪しいことを言っても、何も気付かないだろう…この調子なら。
彼女はニコニコ笑って、

「読書?? 私、本は苦手。私は見るのが好きなの。」

と、言う。まあ本もたくさんあったわけじゃないし…。あの部屋からは…趣味の予想など出来ない。無趣味でファッション以外には興味は無いというのが本当だろう。適当に返事をする。

「見る? 映画かなんかつすか??」

彼女は微笑して答える。

「んー、ま、そんなところかな。ところでさ」

と、話題を変える。

こうして彼女と時を過ごす度、彼女への思いは大きくなっていった。彼女を侵したい…。不可侵を破り、許可を得るところか気づかれもせずに…彼女の領域へと入って行く。…彼女の服も、仮面も、全部取り払って…。そして、その後にはただ一つ残る真実の彼女を…消してしまつて…彼女の存在を、俺の中で永遠にしたい。

最後の扉を開いたかのように…その欲望が生まれ出る。…この最終的な欲望は、俺に興味を持たせたその人に対して抱く、最高位の欲望である。それをかき消すために、今までその人のプライバシーを知り得てきた。それを代償行為として、この最高位の欲望を誤魔化してきた。…必死でその高位で最終的な欲望を抑え込む。

「この間の…ペルソナの話」

「わかった??」

彼女は、俺の顔をのぞきこむようにして言った。

「あ、はい。仮面の話ですよ。人は誰でも、誰かと接するときには仮面を被っているって言う…」

答えると、彼女は「そうそう、よく出来ました！」という表情で言う。

「そうそう、あの話ってさ、まだ続きがあるんだ」

言って、続ける。

すべてを取り払った後に残るもの vol.06 (後書き)

コンビニの物ばかり食べていると思者が浅くなるような気がします。食べ物って絶対大きくその日のコンディションに影響しますよ。

すべてを取り払った後に残るもの VOI・07 (前書き)

優等生に見られてそのプレッシャーに思い悩むってのも…またベタな話ですねぇしかし。

「ペルソナを被ってるなんてことは、どうでもいいことなの。だってさ、そんなの誰でもやってる…自然で当たり前なことじゃない？大切なのはさ、どうやって心の葛藤を取り除くかってことなの」

「心の葛藤??」

思わず…俺は素で聞き返した。

「心の葛藤っていうのはね、自分がペルソナを被るあまり…苦しくなってしまうことをいうの。例えば…私がキミの前で、すごく明るい人に見られたいと思って…振舞うでしょ？明るさを演出するペルソナを被って。それで…キミに明るい人だなって認められる。でも、心の中で自分は…本当はそんなに明るい子じゃないのに…なんて思ってる悩んじゃうワケ。毎回毎回会う度に、ペルソナを被ることに疲れるのね」

「性同一障害なんかは、この葛藤がすごく大きくなったものかもしれないわ。…だから自己主張は大切な。自分が自分の心を明らかにして初めて…ペルソナを捨てて初めて、本来あるべき自分に戻れるの。自分を自分として出して、そうやって人は落ち着く…」

今日の彼女はよく喋る。…マシンガントークだ。しかし、俺の本当の自分…仮面を捨て去った自分。そこに残る物は一体なんだろう。

彼女は僕の目を見て、ゆっくり言う。

『手段はかんたん。自分で自分の心に話しかけるの！まず、自分の

心に挨拶してさ…「梓ちゃん、こんにちは」ってね！そして、たずねる。「いま、疲れてない？しんどくない？」って…そして、疲れてるようなら「何が疲れてる？どうしたい？どうしたら良くなる？」って、ゆっくりゆっくり順々に問うていく…」

「心の奥底に辿り着くまで…」

まるで、心理カウンセラーみたいだ。

「そうやってわかった原因がペルソナにあれば…無理しないで、そのペルソナは捨ててしまってもいいの。そうして、すべてを取り払った後に残るもの…それこそが自分。その自分こそが自分なの。見つけなきゃ…それをさ」

「ペルソナは…無理してまで被るものではないワ。外せば外すほど楽になる…」

「もちろん、あんまり外しすぎると、周囲の人に敬遠されたりしちゃうけど…ふふ、それって私がそうなんだけどね」

と、最後は笑って言う。俺は呆ける様にして彼女を見る。彼女は、

「…キミって…いつも悩んでいるような顔してるから…」

と続けて、視線を外して外の景色を見る。…俺たちがまだ話していなかった頃…そうしていたように…。

夜は十時過ぎ、市電は「ヴィー…ガタガタ…」と、ゆるやかな低音を出して、車内には澄んだ女性の声で録音されたアナウンスが響き渡る。彼女は足を伸ばして、編み上げブー

ツを「トンツ…トン…トンツトン」と、市電の床である…ささくれて古ばけた木片に当て、微かな音を打刻する。そこに車掌さんの操る「キリキリリリ…ガチツ、カチツ…」というハンドル音が混ざる。最後にこのBGMに彼女の声加わる…とても澄んだ静かな…ゆったりとしたテンポの声。

「…正直になつて…自分を見つけてみて」

…どこぞのクラシックの演奏会なんかよりも、よほど美しいオーケストラの演奏を耳にしていると思えるほどの出来事だった。俺は彼女の言葉と、市電の音、その他の雑音を、いつまでもいつまでも反芻しながら、彼女への挨拶もそこそこに、ほろ酔いのオヤジのような千鳥足で…フラフラと家へ帰った。

彼女への思い、自分への思い、他人への思い、そして自分がどうしたいか、どう在りたいか、どうすべきか…自分の存在はなんなのか…様々な思いが脳内を交錯する。そして、先ほどの印象的な出来事を思い出に変えながら…そして自分自身そのものの理想的な在り方を、薄っすらと脳内で構築しながら…。

数日後の真夜中…俺は自らの心に話しかけてみた。彼女が言った通りに。俺は…ベッドの上で仰向けになり、両手をへその辺りに置いて、月明かりで薄っすらと照らされた天井を見ながら…瞑想するかのように話しかけた。

「よお。元気かい？」

「…元気だが、思うところもいくつかある…」

なんだ…本当に答えが出るじゃないか…そんな他愛もないことに驚く。

「そうか、何をそんなに思い煩う？」

質問の内容を吟味して…深く深く考えてみる。答えは、

「…梓さんのことだ…」

やはり…そうだったのか。両親や教師の期待からの重圧や、仮面や本性、異常性のことなんかよりも…俺は彼女のことでも思い悩んでいた。

「彼女の…何に対して煩う？」

「…それは…関係だ。彼女との関係」

「関係をどうしたい？どうすれば煩いは解決する？」

少しの時間…深く思ってみる。

「…彼女を自分の物にしたい…。永遠に…」

今までにも何度か考えたことがあること…。最高位の欲望。やはり、それが俺の望み…。

「…すればいい。彼女を所有したらいい。どうすれば永遠に…彼女を抱いていられる？」

「告白して付き合って…一緒に…」

俺は即座に否定した。

「それは無理だな。彼女にとって、お前はただの知り合い程度だろ？不可能だ」

「でも…、彼女とはとても楽しく話できる…彼女という時間は特別だ…」

「それはお前だけだろ？一人よがりで一方的な気持ちは、拒絶されると相場は決まっている。今までの関係を保つのが一番いいんじゃないか？」

「今までと同じじゃイヤだ…。もっと彼女に近づきたい。たとえばそれが永遠でなくても…」

それには…やはり…一つの手段しかない…。ここまで来て、俺の本性が大きく自己主張する。

「……………逝ってもらおう…。…この手で」

俺の本性は答えを出した…。

すべてを取り払った後に残るもの v o l . 0 7 (後書き)

自分に様々な事を問いかけるといふ手法もカウンセリングである事
だそうです。皆様試してみても如何でしょうか？

すべてを取り払った後に残るもの VOI・08 (前書き)

ワンピースにサンダルってなんかいいですね。涼しそうですし。

今夜は満月だ。クツキリと夜の空に映える月は、俺を祝福するかのよう光り輝いている。俺の行く末を照らしてくれている。風が薄っすらと吹く。風に揺られる木々のざわめきすら、俺を祝福している。ほどよい夜の冷たさと静けさが俺を導き、彼女の家まで何も迷うことなく駆けていく。数十分で彼女のマンションに着く。マンションの扉の前に俺はいる。

「はあ…はあ…はあ…」

息切れこそしているものの、頭の中はとても澄んでいる。先ほど自分の深層意識にあった本性に触れて、冷静に興奮したときの感情が保たれたままだ。走るのを止めた途端に体温が上がる。体温だけではない…逆手に持って袖の内に隠している包丁も、俺と同じく熱を持って盛っている。扉の向こうに見える彼女の部屋は、煌々と明かりがついていた。

「梓さん…そこに…いますね？」

言って、一気に扉に手を掛けた。バツと飛び上がり、一気に庭側に飛び降りる。

…彼女はそこにいた…まるで俺を待っていたかのように…。ベランダの扉の前に立っていた。…たった今も…リアルタイムで本性に触れている俺は驚きもせず…、彼女が俺を待ち受けていたことを疑問にも思わない。…俺は息を整えて、彼女を見据えた。

彼女を意識した十三日目。

「やっほ」

と、彼女は俺に挨拶した。「…サー…」と、マンションの庭内に微風が吹く。月に群がっていた雲は徐々に流れて、満月の光を解放する。俺の顔と彼女の顔は。ほぼ同時に照らされた。

彼女は白いワンピースに白いリボン、白いサンダル…全身白尽くめだが…、脇にはいつものあの赤いランドセルが置いてある。…まるで死に向かうための白装束だ。

(彼女の意味ですら、俺の本性を理解して、受け入れて…祝福してくれているんだ！)

俺はそう思った。俺は一寸の迷いもない澄んだ顔で…彼女はニッコリと微笑むいつもの表情で…お互いを見ている。彼女は、

「見つけたのねっ」

言って、

「あなたの本当」

と、続ける。俺は特に躊躇もせず、

「…はい」

と、答える。そして言う。

「俺はすべての仮面を取り払いました…。俺のすべてを取り払った後に残るもの…それは、梓さんを永遠に自分の物にするために殺すという決意です。人の寿命は有限、人の所有もまた有限。…それ

ならこの手で終わらせてしまえばいい。…終われば有限の世界から消え失せます。…すなわちそれは永遠つ！永遠に失われることは、逆に言えば永遠の無を手にすること！これで梓さんは俺以外の誰のものにもならないっ！！」

言って、

「…梓さん…。俺は、あなたを永遠に奪います…」

と付け足す。

彼女は微笑して、静かにゆっくりと…しかしテンションを高くして…言った。

「いま…キミって…最高にいい目してるワヨ」

彼女の声は辺りに静かに響く。乱れがない湖の水面に小さい小さい石を投げたかのように、わずかに…その水面に立つ波紋のように…空間に響く。白の彼女は、両手を広げて言う。

「早く来て」

そして、左手で左胸を指差す。

「ここだよ」

すべての仮面を取り払った俺に迷いはない。この極めて異常な彼女の行動は、すべての仮面を取り払った俺の意向を認めて受容する行為だと…そう思った。逆手に持った包丁を順手に持ち変える。キラリと光る刃の表層は、月明かりを煌々と返している。ゆっくりと彼

女に向かって歩く。

彼女は両手を下げて、ジーツと俺を見つめていた。笑いを消して真剣な眼差しで……。距離が近づぐごとに……。この場の空気感が澱んで濁る気がした。本性を受諾して以来……。俺は初めて違和感を感じた。何かが歪む……。だがそれとて、今の俺を止める理由にはならない。彼女との距離が近づく。……。メートル五十センチ、メートル、八十センチ、六十センチ、三十センチ……。

俺は……。ゆつくりと……。彼女の……。指差した……。胸に……。包丁を……。突き立てた。

「ズズズ……」

刃先が数センチ……。彼女の白にめり込んで行く。白から赤が生まれる。俺は包丁を引かずに……。さらに押し付ける。彼女はベランダの窓まで押されて……。トンツと、体がガラスに当たる。

「ズツ……ズツ……」

赤が勢いを増す。彼女の血はとても……。冷たい。……。これも俺しか知らない秘密だ。血の温度など……。おそらく本人すら知り得ていない。俺は……。狂喜した。さらに彼女との距離が近まる。二十センチ、十五センチ、十センチ……。

その時、彼女は俺の体に両腕をまわして……。俺をきつく抱き締めた。そして目と目の距離は七センチ……。この距離で彼女は俺を見ていた。俺の目を……。見ている。……。直視。彼女の黒目に俺が写っている。今夜の空に映える満月のように、円満完全な本性を手にした俺の姿が写る。そう、彼女の目を通して……。完全に迷いが無い俺が見える。その

瞬間…迷いが無いはずの俺が歪む…歪んでいく…一気に迷いが…戸
惑いが…生じて…正常な心が現れる…。

…その瞬間、彼女が言葉を発す。俺をきつく抱いたままで、

すべてを取り払った後に残るもの vol.08 (後書き)

「すべてを取り払う」という概念は、かの仏教師の法然の「選び捨てる」という概念に似ている気がします。

すべてを取り払った後に残るもの vol.09 (前書き)

月灯りの下田舎道を散歩するのが夢です。うちの近所なんてゴミのポイ捨てとか酔っ払いが多いので雰囲気ないですしねえ。

「ダメツ！…もう少しそのまま置いてっ！！」

強く発せられる言葉を聞いて、俺の心持ちはさらに正常な方へと振れる。彼女はもはや五、六センチというくらいの近間で俺の目を見ている。凝視。そして、言った…空にある月や星々よりも静かに。

「言ったでしょ…？」

俺が(???)としていると、彼女はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「抱き合ったとき…余計なものが無いほうが…心が近くなるでしょ」
言って、

「私の心…理解る??？」

と、聞く。今の彼女は顔を赤らめていない。月明かりのせいか…出血のせいか…衣装のせいか…青白くて頼りなく…儂げに見える。俺は、彼女の両腕からなる縛りを解く…彼女の両腕を完全に外して…半歩後ずさりした。彼女は俺が付き立てた包丁の柄を左手で拭い…指に付着したドロリとした血液をペロリと舐める。それを見た俺は…俺は彼女に背を向けて、塀をよじ登り…泣きながら逃げた。泣きに泣いて…来るときよりも速く走って家へ帰った。

今夜は満月だ。クッキリと夜の空に映える月は、俺を嘲笑ってスポットライトを当てるかのように光り輝いている。俺の行く末を照らしてくれている。風が薄っすらと吹く。風に揺られる木々のざわ

めきすら、俺を批判して諫めているかのようで…。ほどよい夜の冷たさと静けさは、俺を失意のどん底へと落とし、…俺は自宅まで、様々な思いを交錯させながら駆けていった。

彼女の眼球を通して、客観的に自分を見た俺は…間違いなく俺の本性のもう一つの側面を見た…。それは欲に塗れた外道の姿。…俺はこの自分を見て狂ってしまった…。すべてから解き放たれた俺は…もう一步先の視点…もう一つ別の観点から、自らの本性を見て受容する。すべての仮面を外すべきではなかった…仮面の下の…本性の俺は…やはり…異常だった。

俺は家に帰って、自分を恐れ、行為を恐れ、逮捕を恐れ、未来を恐れ…彼女の死を恐れた。親には体調が悪いと言って、学校や予備校を休み、部屋に居続けた。

…何日たっても、警察も、梓さんや関係者などの…訪問も連絡も無い。…まるで彼女を刺したのは夢だったのではないかと思えるほど…だんだんと遠い記憶のようになる。

その間も、様々な思考が脳内を飛び交って…自分で自分の思考が管理できなくなる。俺の恐れは段々と大きくなり、俺は部屋の隅でガチガチと歯を鳴らして…寒くて震えるかのように、足を抱えて座り続けた。

ついこないだ…薄暗い部屋のベッドの上で…俺は自分の本性を見た。パンドラの箱を開けてしまった…最初こそ極上の精神だと思っただが…一步別の視点で見ればそれは…到底言葉では言い表せぬ、狂気そのものだった。これは常識という名の仮面を被っているからこそ、そう思うものだろうか…。

彼女を意識した十三日目は、おそらくもう来ないだろう。このまま自分のしでかしたことを消化できるまで、部屋に居続けるであろう俺は…、薄汚れた天井を見ながら、彼女と過ごした時を回想していた。

…彼女は一体何者だったのだろうか…。バストや服の話をしたかと思っただら…心理的な話をしたり、本性の知り方を教えてくれたり…拳句俺に刺されたり…。なのに、警察にもどこにも行ってないなんて…。

彼女の印象は、最初は冷静で暗くてクールなお姉さん…でも話してみると、とても明るくて…いい意味で馬鹿っぽかった。今は…天使か悪魔か神かわからない…理解不能なモノという感じだ。

ベランダで待ち受けていた彼女。俺が来たことに驚きもたじろぎもしない彼女。俺に刺してと願う彼女。俺を抱きしめる彼女。…冷たい血をトクトクと流しながら…俺の目を至近距離で凝視し続けた彼女。

どう思い返しても、あの晩の出来事はすべてが不可解だった…。まるで…彼女と出会って時を重ねたどこかの時点からずっと…夢か幻かの世界で過ごしているかのように…。どこかで倒れて、頭を打って感覚を失い…幻覚でも見続けているかのように…。まどろんでは、眠りこけ…現実ではないどこか別の場所に迷い込んだかのように…。

色々と考え…思考に思考を重ねて…そうして俺は目を閉じる。もうぼやけた天井すら見えてこない…。

そして…俺は俺の本性という、精神体から成る最後の仮面を脱ぎ捨てた。…いや、それは仮面とは言えない…。俺の素顔だ…。俺は仮面を脱ぎ捨てた末に…素顔までも取り払ってしまった。…その後に何が残るかは…すべてを取り払ってしまった俺では、もはや確認もできない。…確認する術がない。すべてを取り払った後に残るものとは…なんだろうか？という疑問が、俺の最後の意識となった…。

JR熊本駅前。俺は予備校へ向かって歩いている。今日から夏期講習が始まる。…後ろからカッカッカッと、素早いテンポの足音が近づいてきて、俺の背中にドン！と当たる。

すべてを取り払った後に残るもの vol.09 (後書き)

あずささんの目的って本当に「見る」だけなんですよねえ。ある意味単純な性癖かと。

すべてを取り払った後に残るもの vol.10 (前書き)

わたくしも一度朱里ちゃんなる人を見てみたいもんです。

すべてを取り払った後に残るもの Vol.10

「痛つてええ…っ…誰だ？何すんだ！???たく！」

案の定、犯人は倉下だった。

「おっはよ～～～っつ お元気い??？」

俺は「よお」と、素っ気無い返事をして、トボトボと歩いていく。

中学時代高校時代と一緒にのクラスだったコイツは、俺とは腐れ縁の幼な馴染み。趣味は人間観察という…イカレてる変な女だ。スポーツも出来ないし、頭も悪い…救いようもないヤツ。…まあ憎めないヤツではあるが…。

すると…彼女は俺をジーと見て、笑って言った。

「沼ちゃん！！いま私のこと…バカにしたたでしょ??？」

…人間観察が趣味だけあって、異常に勘が鋭い。これも彼女を変人だと思わせている一因だった。彼女は予備校前までついてくる。

「ん？倉下、お前…講義受けるのか??？」

彼女はニンマリ笑って答える。

「受けるよ？さすがの私でも、夏期講習初日からサボれないワ」

機嫌がいいと、セリフの語尾にメロディがつく。このテンションの

高さも一因して一部の人間や女子からはとても嫌われていた。

「そっか。珍しいな。せつかく梅雨が明けたつてのに…また雨でも降らなきゃいいが…」

俺の嫌味を華麗にスルーして、彼女は言う。

「ほい。これ私の」

彼女の手にある登録された講義時間割表を見ると…、

「なんだ、…結構被ってんじゃん。げ…一限目から…」

予備校内に入り、二人で教室に行くと、緒山君という友人がいる。席に座って…退屈そうにペンを回している。

「おっ！緒山君、おはよう！」

声をかける。俺や倉下は彼とは予備校で知り合った。新しい友人だ。

「おつやま君っ！…おっはよよ〜ん」

彼の顔を見た倉下も挨拶する。

「おはよ」

と、愛想なく挨拶した彼は、眠そうにペンを触っている。彼の眠気を覚ますために…俺は、彼が大好きな人の名前を挙げる。

「緒山君？ついさっき朱里ちゃん、売店のとこにいたぜ」

彼は目を見開いて、話に食いつく。

「マジで！???今日もう来てんの???」

一気にテンションが上がった彼は、

「ちょ、俺…売店行ってくるわ。ノート頼むな」

と言い残し、足早に去っていく。朱里ちゃんとは、今年の一浪メンバ―で可愛さナンバーワンと言われる、みんなのアイドルのことだ。もちろん緒山君にとっても、それは例外ではない。一目見れば癒されて、二目見れば恋に落ちて、三度見れば告白を決意するという…天使の生まれ変わりのようなルックスを持つ女性だ。…倉下は、

「ふんっ!!私あの子きらい。あんなちんちくりんのどこがいいのよ。胸なんてペツタンコだし、背も低いじゃない。…男ってさ、いつつもどいつつもこいつも見えないのよねっつ!!」

と、泣きそうな顔で怒りまくっている。自分だって胸はペツタンコにくせに…と思った瞬間、ギロリと倉下に睨みつけられる。

(そうそう…。コイツは容易に…、しかも正確に人の心を読み取ってくるんだっ…)

俺は彼女に「すまんすまん」と謝って、席に座り、講義の用意をする。彼女も隣に座って、テキストやペンケースを取り出す。ふと彼女の持ち物を見ると…、テキストのど真ん中にはナイフかカッターかで突き刺したかのような…細くて荒い切れ目があって…表紙は赤く染まっていた。

「…なんなんだこれ？どうした？」

彼女は笑って言う。

「人ってさあ、自分のことなんて知らない方が幸せよねえ…」

はい、意味不明。

「はあ？」

と、聞き返すと、

「テキストに包丁突き立てたら、中のケチャップが出てきたのよハンバーガーみたいなの？」

と、またも意味不明なことを言う。長年の付き合いだけに…彼女が変人だということはわかっている。こういう意味不明な言葉を発することは今までにも多々あった。俺の気持ちも露知らず、倉下は平気の平左で続ける。

「…でも、とてもいいモノ見れちゃったワ」

倉下はニコニコ笑って言う。

「???…また人間観察か？」

俺がそう言つと、さらに顔をにこやかにさせて、

「ウン」

と、頷く。

たった今、東京で講義をしている人気英語教師の姿が、大型スクリーンに映し出される。うちの予備校、代官山ゼミナール…通称代ゼミの特徴は、衛星を利用したサテライトの講義にある。これにより、地方在住の人間でも東京の第一線で活躍する講師の最新の講義を生で受けることが出来る。

講義が始まった。…倉下との話は中断されたが…

(また誰か倉下に深入りしたな…)

と、直感でわかる。なんたってコイツときたら…深く自分の心に立ち入った人間を…みなどうかさせちまうんだからなあ…。犠牲者は誰だか知らんが、気の毒になあ。

「ある意味…朱里ちゃんよりスゴいわ…こいつ…」

ボソリと皮肉めいた独り言を言ったが…当の本人は、開始五分でも眠そうに、コックリコックリと舟を漕いでいた。

すべてを取り払った後に残るもの vol.10 (後書き)

読了何時も有難う御座います。この話はこれにて幕で御座います。
次話も宜しくお願い致します。

精神の交錯 v o l . 0 1 (前書き)

いつも読んで頂き有難う御座います。今話も是非宜しくお願い致します。

精神の交錯

その日はとても寒かった。…まあ丁度いい。暑いより寒い方がいい。

「暑いのは辛抱たまらんけど…、寒いのは着て動けば、それで終いだからな」

独り言を言う。車を駐車場に停めて、助手席の鞆を取り肩にかける。迷い、戸惑い、恐ろしさなんかは微塵も無い。…あるのは少々の緊張と、多大な興奮と憤りだけだ。そうして、俺は銀行に入った。

…辺りを見回す。

「いらつしゃいませー」

ここ、九ヶ星銀行熊本帯山支店は、熊本県は熊本市の中心街から、少々西に行ったところにある。店舗自体は大きく客も多い。午後二時、閉店前。今日は従業員が二十人ほど、客は十五人程度といったところか。

「チッ…」

舌打ちして、店の中央まで行く。肩の鞆を床に置き、中にある猟銃を取り出した。ほとんどの人間は、俺の行動に気付いてすらいない。異変に気付いた人間も、ハトが豆鉄砲を食らった様に「え？まさか

？」と呆けている。俺はまず…天井に向けて、数発威嚇射撃した。

「バンバンバンツ！！」

ピシピシと音を立てて、天井が軋む。

一瞬の間の後…その場にいた人間が、まちまちの行動を取る。腰が抜けてその場に倒れこむ者、とっさに逃げ出す者、両手を上げる者、大声で叫ぶ者、あまりの唐突さに呆けている者…反応は様々である。窓口にいた従業員の男が、隣の女子行員に、

「おい、警察に連絡を！！」

と言う。

「アホウが」

…なぜこのように馬鹿げた行動を取る？…警察に連絡してどうなる？銃を持った強盗を挑発するかね普通？バカにも程があるぞ…。俺は銃口を従業員の男に向けて、容赦なく引き鉄を引いた。そして叫ぶ。

「全員静まれツツ！！！！その場を動くなツツツ！！！！！！」

言って、

「…死にたく無ければな」

と、静かに付け足すと、とりあえずの收拾はついた。その場に残された音は、静寂に浮かぶ子供の泣き声だけであった。出入り口付近

にいた客数人が逃げているのが見える。

「チツ…」

射殺した男の横にいる女子行員に言う。

「お金。一千万」

と、鞆をトスンと窓口に置く。彼女は先ほどの発砲の際に逸れた弾が腕に当たって、出血していた。彼女は絶句したまま…俺には見えない角度にある通報ボタンを押そうとする。

「はぁ…」

と、溜息をついて、銃のつかで女子行員の頭を殴り突き倒す。

「よく聞けツツ！！妙な動きをしたものは殺す。客は窓口の端に集まれ！！」

動きは悪いものの…客は各々そろそろと恐る恐る歩き、窓口の横のスペースに集まる。

「行員はこつちだ！！」

と、窓口の中央に向かって指を指す。そして、

「オイ、そこの老けたの」

と、年の頃は五十歳くらいか、その男を指差して、

「金を持って来い。一千万…いや、二千万円だ。急げ」

ゆっくりと落ち着いて言った。男はもじもじして、

「こ、ここには、…それほどの大金は置いて…いません…」

と言っ。

「はあ…。…だったらなお前？金庫から持ってくるしかないよな？
…行員やってるんだったら、大学くらい出とるんだろ？…頭使えッ
！！」

と叫び散らすと、その男はまだもじもじしている。その時、店内に
警官が入ってくる。警官は一人だった。

「おいこら、お前大人しくしろっ！」

振り向きざまに発砲する。弾は銃を構えてすらない警官の胸に直
撃して…彼は倒れこむ。…あらら、ありや即死だ。今日はよく当た
るな…と、冷静に思いつつも舌打ちする。

「チツ…」

おそらくは逃げ出した客が呼んだのであろう。この調子では…じき
警官がぞろぞろと集まってくる。やつらときたら…上はただの税金
泥棒や利権犯罪者のくせに、下は使い捨て雑巾のように補充が利く
からな。

「早く金を用意しろっ！」

他の行員にも言う。先ほどの警官の連れであろう、また別の警官が二人、店の中に入ってくる。

「両手を上げろっ!!」

しかし、銃を構えるより先に撃つ。先ほどと同じ。二人片付ける間に、もう一人の警官が発砲した弾はまったくの外れで、俺の近くにいた客の首の辺りを打ち抜いている。客や行員が声とも言えない声を叫び上げる。

「…こりゃ助からんな。警官が民間人を撃つとは…、税金盗んだだけじゃ飽き足らず、身体的にも苦しめますか」

言って、警官に撃たれた男の腹の辺りを撃ちとどめをさす。

「…こんな状態で生かしくやつは悪魔だ。苦しんでいる者は楽にさしてあげんといかん」

客と行員は、恐怖のどん底に落とされたという絶望の表情をしている。血の匂いと異常な空気がこの異質な空間に充滿する。行員の中には吐いている者もいる。泣きじゃくっている者もいる。

「シャッターを閉めろ!」

行員に言う。全面のシャッターが閉じられる。外の騒音が聞こえなくなり、ここ…機能を失った銀行の中に、完全に特異な空間が生まれた。

「支店長はどいつだ??」

俺は静かに言う、数人の行員の視線が集まったのは、先ほどの老けた男だった。

「なんで素直にお金を出さなかった？」

男はもじもじして喋らない。

「お前は自分の部下と金を天秤にかけて、金を選んだのか？」

男は恐る恐る答える。

「ち、違います」

「じゃあ、なんでだ？保身のためか？…金を盗られたら、責任問題だが…部下が死んでも被害者扱い、上手く生き残れば英雄だもんな…？」

「…アホウが」

と、言つて彼を射殺する。血飛沫が舞う。

「お前がさつさと金を出していれば、俺は逃げて誰も死なず、それで済む話だろうが」

次に年を取っていると思われる男に、冷たく静かに話しかける。

「もう十分勉強したろ？…金だ。金を用意しろ」

言つて、外の雰囲気気づく…。外には百人はいるであろう大規模の警官隊が到着していた。窓からそれを確認する。

「はあ……」

と、溜息をついて、言った。

「計画変更……だな。……とりあえずは……金は要らん」

俺はまず、第二の目的のために動くことにした。

精神の交錯 v o l . 0 1 (後書き)

猟銃って連射できるんじゃないか。さすがにこういった物は取材も難しく、リアリティに欠けてしまうコトがあったり無かったり。

精神の交錯 v o l . 0 2 (前書き)

こついう異常な場面に遭遇する確率はいかほどあるんでしょうか。
人には何の違いがあつて遇う人と遇わない人とがいるんでしょうね
え。

警官隊を指揮している俺は、一般人だけでなく、警官にも犠牲者が出ていたとの報告を受けて、ようやくコトの重要性を認識した。犯人の身元は特定できていない。どうにかして中の情報を得なければ。人質は数十人はいるだろう。誰かとコンタクトを取って。いや、目撃者によると犯人は一人だ。時間を稼いで、心身共に弱ったところに突入した方が安全かもしれない。しかし犯人は異常なほど強暴だ。下手に時間をおくと人質を殺していく可能性は極めて高い。それに、数十時間の時間稼ぎともなると簡単なことではない。かと言って強行突破すれば、奴は何をするかわからない。報告によればなんの躊躇もなく発砲している。猟銃。犯人はそれなりの発砲訓練を受けているのは間違いないだろう。

「…難しい」

思わず口にする。

周囲一体は封鎖され、警官が行き交い、すでに数社のマスコミが到着している。現場の雰囲気は騒然としていた。

それなのに：嫌味なほどに空は晴れていた。雲一つ無い。天は人事なぞ興味ないと言わんばかりに、古くから変わることのない眩しき光をさんさんと世界に放っていた。

散々考えた後、そこに出た結論はセオリーどおりだった。

「冷静に動いているのなら、話くらいはできるだろう。説得してみよう」

続けて命令を下す。

「犯人から外部に接触は無い…もう少し情報を集めて、銀行に電話を入れてみようか。店舗内から死角になる箇所を探して、見取り図に描いてくれ。包囲は崩さず、前方は犯人を刺激しないような言葉で呼びかける。マスコミが紛れ込まないように気をつけるんだ。あと…市内で猟銃所持の許可を受けていて、最近銃、弾、その他用具を購入してる人間をリストアップするんだ」

目撃者情報から、犯人が三十歳程度の痩せ型男性だとはわかっていく。シャッターが降りていて銀行の中は確認できない。まずは身元を特定しなければ、電話も出来ない。不幸中の幸いか…今のところ、犯人側に目立つた動きは無い。今のうちに先手を取っておかなくては、後々動きにくくなる…。

俄然、現場は慌しくなっていく。にもかかわらず、晴天の日は落ちる気配もない。俺は天を見上げた。陽は先刻と同じ。我関せずと言わんばかりに煌々としていた。

俺は人質全員を一行に並べさせて、自己紹介をさせる。

「名前と、年と、職業を言え…。こうなったのも何かの縁だ。お互いのことを知っていてもバチは当たらんだろう？」

そう言って、まず自分を紹介する。

「俺の名前は算だ。算光也、三十九歳だ。職業はなあ…前まで公務員をやった。家族は母と姉がいるだけだ」

人質は恐る恐る震えながらも、俺の話を黙って聞いている。大概に長い時間泣いていた子供も今は泣き止んでいて、音といえればシャッターの向こう側から、警官が話す拡声器の音が聞こえているくらいだ。シャッター、壁やガラスを隔てて、世間から遠く隔離された異常で凄惨な空間に、俺の声が静かに響き渡った。

「金を要求したのは借金があるからだ。本来なら今頃金を返して…家でテレビでも見てる予定だったんだがな」

言って、

「…借りた物は何をしても返さんといかん。人としてのルールだ。はじめだ。…俺は中卒でろくに働き先も無かった。母や姉には迷惑を掛けたくなかったし、借金は多い。それだけじゃない。世の中に對して思うこともある…」

「チツ…」

舌打ちして、言う。

「お前、お前から順に自己紹介しろ」

一番手前にいた男性の行員に話しかける。

「おお、お、俺は近くに、すす、住んでいます、な、な、名前は…」
聞くにかねて口を挟む。

「アホウが…行員だったら喋るのも仕事のうちだろうが。シャキッ

とせんか！プロとしての気概を見せてみる！」

彼は、

「は、はい…」

と、たどたどしく言葉を続ける。

「な、名前は田畑和寿です、三十歳です。職業は銀行員です…」

「…銀行員だつてことは見たらわかるだろ。次！」

次は女性の行員だ。

「た、た、高島まどかです。二十二歳です。県庁の近くにす、住んでいます…」

「いいところに住んでるじゃないか。親と同居か??」

彼女は恐る恐る…俺とは目線を合わさずに言う。

「は、っはい…」

「そうか、…その若さであんなところにはなかなか住めんわな。親孝行しなきゃいかんぞ。…次！」

「斉藤四郎で、です。年は四十六歳です…す。嫁と子供がいます…どうか命だけは…」

「アホウが…」

そう言つて、俺は彼の太股を撃ち抜いた。彼は叫び声を上げて失神する。

「助かりたいのは皆同じじゃないか！自分だけ助かるうと思つて…しかも嫁子供をダシに使うとは、お前はそれでも男かツツ！」

叫ぶ。人質の悲痛な叫び声と、すすり泣く声が聞こえる。

「…若い娘さんでも命乞いなどしとらん。それでも年いつた男か…アホウが」

言つて続ける。

「お前らは平和に慣れすぎとるから恐ろしいんじゃない。信念を強く持たんで、流されるように生きとるからそうなるんだ！…次！」

自己紹介は進んで、一般人である客の番となる。先ほどまで泣きじやくつていた子供を連れだした女性が立つ。

「さ、佐田かおるで、です。子供は…こ、こつちが…が、徹で…こつちが智で、です…」

その目と表情から「子供だけは助けてください」と言いたいのがわかる。だが、そう言えば先ほどの行員のようになされたかもしれない。子供を助けたいが…何をどうすればいいのかわからない…という感情が伝わってくる。痛いほどに。俺は、兄と思われる体が大きい方の子供に話しかけた。

「徹ちゃんか…お前、怖いかな？」

男の子は泣きそうになりながらも、黙ってうなずく。

「そうか、怖いか。…でもな、お兄ちゃんてのはな、心を強く持つて、どんな状況でも弟やお母ちゃんを守らんといかん。わかるな？」

子供は黙って頷く。

「そうか、強い子だ」

そう言つて、今度は母親に言う。

「おい、お前…、弟は逃がしてやる。シャッター開けて出してやれ。智ちゃんだっけか？逃がしたら戻ってこい。そのまま逃げたら…兄ちゃんの方は殺す」

母親はものすごく意外そうな顔をした後、

「あ、ありがとうございます！」

と言つて、弟を連れてシャッターのほうへ走つていった。

「ありがとうつて…人殺しに礼言つてどうすんじゃい」

ブツブツと言っていると、母親が戻ってくる。母親はまたお礼を言う。

「チツ…アホウが…、次！」

人間、不思議なもので、どんなに異常な状況に身を晒されようと

も、時間経過と共に慣れというものが生じてくる。後になればなるほど、自己紹介もスムーズになる。残る人数も少ない。さつきから俺のことをじっと見ている少女が立つ。彼女は、

「私は倉下梓です。十三歳、中学生です」

と、静かに落ち着いた声で言う。ガキだからこの事態が飲み込めないという訳でもあるまい。

精神の交錯 v o l . 0 2 (後書き)

銀行強盗は誘拐に並んで成功率が低い犯罪だと言われています。銀行で起こる事はわかっているのに、非常に程度の高い対策が採られているそうです。

精神の交錯 v o l . 0 3 (前書き)

白のハイソックスっていいですね。すごく清純なカンジがします。ルーズソックスとか今もあるんですけど、あれは暖かそうではないです。

しかし、その子はあまりにも冷静で、そして可愛かった。顔立ち
はきれいに整っていて、目は大きく、鼻筋も通っている。真つ黒で
透き通るようなストレートヘアで、髪型はショートボブ。身長は低
く、最近の発育のいい外人顔のマセた子供とは違って、顔も体もま
だまだあどけない子供だというルックスだった。制服は近所の帯山
中学のもので、白の運動靴に白のハイソックス、紺のセーラー服だ
った。

「帯山中学か？姉の娘が普通つとった。…ガキの割に、肝っ玉が据
わってて立派だ。他のモンもこれくらい堂々と振舞わんといかんぞ」

他の人質全員に聞こえるようにそう言う。…ふと視線を感じ、女の
子が俺の顔を凝視しているのに気付く。

「???梓ちゃん…だったか?…なんか俺の顔についてるか?」

彼女はニツコリと笑って。

「うん。箕のおじさん、お顔に血がついてる!」

と、明らかに場違いな声のトーンで言う。彼女の声により…この異
常な場が、変に歪に入り組んで、奇妙になった。他の客が、この子
が殺されないようにと祈っているのもわかる。このガキは俺のこ
とが恐ろしくないのか。…などと考えながらも、ここにきて初めて、
名前を呼ばれたことを喜んでる自分もいた。

「血か?そりゃ怖かっただろ?悪かったな。…その行員、タオル

持って来い」

と、ニタリと笑って言う。手渡されたタオルで顔を拭う…気分の高揚のせいか、今まで気がつかなかったが、俺はかなりの返り血を浴びていた。

こうして自己紹介が済むと、少々リラックスしたムードにならなくもない。そこには行員は十三人、客は十一人、合計二十四人の人質がいた。こいつらは…まったく知らない仲から、人質へと…互いの関係が変わったことには気付いただろうか。

(フン…運が悪いな…。だがこれもまた人生よ)

俺はカウンター奥、一箇所に集めた人質に、

「大人しくしてれば殺さん。だが妙な動きをすれば殺す。何かやるんなら…ちゃんと死を覚悟して行動しろ！」

と言って、一時間ほどは警官や行員であった、死体をズルズルと引きずって、フロアの端に積む。あたりには血の匂いが充満していた。行員の一人が、先ほど太股を打ち抜かれた男を抱きかかえて言う。

「す、すいませんが…か、彼の手当てはダメ…でしょうか？」

「はあ…」

と溜息をついて、銃口を上げる。少し緩んでいた場に、一気に緊張が走った。…その時、

「待って、外の様子がおかしい…」

先ほどの女子中学生のガキが声を上げる。俺は彼女に銃口を向けなおした。彼女はたじろぎも焦りもせず、

「テレビをつけて…確認した方がいいわ。寛さん」

と言う。彼女は表情や声のトーンこそ冷静なもの、ゴクリと生唾を飲み込む音が聞こえ、内心は相応に緊張してるのがわかった。しかし、彼女の言うことも考えなければいけない。内輪でゴタゴタとしている余裕なぞ無い。強盗限らずなんでもそつだ。

警察に動きがあったか…勢いにまかせてシャッターを閉めさせてしまったが…、これでは外の様子がほとんどわからない。うむ…。

慌てて行員にテレビを点けさせると、そこには完全に包囲されているこの建物の姿があった。

「…犯人の身元、行動、目的は一切不明です。一部で金銭目的と伝えられています。依然金銭の要求の連絡はなく、当局はテロの可能性も視野に入れて…」

チャンネルをいくら回しても…多くの局ですでに大事件として報道されている。それも大層に…大仰に…。

(はっはは、まあそりゃそうか。こりゃ腹をくくるしかないな…)

改めてそう思う。

(うーん、警察と連絡が取れないことには動けないな…こうなればもう…)

「真田さん！」

こちらへ走ってきた部下の一人が叫ぶ。

「猟銃所持者のリストアップできました！ってどうか、もうコイツでしょう。最近、弾を大量に購入していて、前科が有ります。店主の情報と目撃者の言っていた風貌も一致します。寛光也という男です！」

手渡された書類にさっと目を通す。とにかく話をしないことには…もう少し情報が欲しいが…。情報が少ない状態で、下手に刺激すれば…やはりもうしばらくは情報収集したほうがいいか…。いや、あまり間を置いて人質に何かあれば…マスコミは初動の遅れが原因…だとか報道しかねない。…手っ取り早いのは、窓際に誘き寄せて射殺することだが…殺すと人権屋のマスコミや政治家が五月蠅い…すでに殺すなどの上層部からの圧力もある。発生から三時間くらいか…。もう少しは大丈夫だろうか。いや、どっちにしても叩かれるのならもう…。

「そいつと断定して話を進める。算の情報を徹底的に集めて持って来るんだ。当たり前だが、確定しないうちは、マスコミには絶対に漏らすな」

部下に命令を下す。また別の警官がこちらへ来る。

「見取り図できました！」

俺はその図を見て、現場にいる警官に指示した。

「まず、マスコミのヘリとカメラをどけさせる。犯人にこっちの動きが漏れれば、こっちは動きようがない。そしてシャッターに穴を開けて、カメラ仕込むぞ。ここと、ここ、ここ、ここもだ」

俺は見取り図を指差して、現場警官に言う。

「狙撃手とテロ対策班も呼んでくれ。位置関係次第ではガスを使う」
また他の警官が来て言う。

「真田さん、また上です。わかった範囲内でいいから、現状の報告をくれと言っています…。あとマスコミも、情報と今後の対応方針を聞きたいと言っています。会見を開けとか何とか…」

報告の途中で、また別の警官が駆けてくる。

「社会党の議員を名乗る者からも電話が入っています。現場の指揮官を出さなければ、本庁を通して連絡を取ることになると、言うておりますが…」

アホか…と思って言う。

「できる限り速やかに対応すると伝える」

現場はさらに慌しくなる。マスコミを抑え、重装備の警官がシャッターに穴を開けに行く。カメラは調達するまで、まだしばらくは時間がかかる…。情報が無いと、動くに動けん。人質が時間を稼いでくれていることを祈るしかない…。

俺は上機嫌だった。この異質な空間を支配しているのは俺だ。ここでは俺が王様だ。望んで言えば…なんでも通る。俺は、女性行員二人にマツサージを言いつけ、体を揉み解してもらっていた。そして座り込んでいる人質全員と適当に話をする。そいつ個人の話、生活の話、社会の話、世間の話、日本の話、世界の話、教養や学問の話、人生の話…時間はたつぷりある。今、この場においては望んだもん勝ちだ。俺だけの話だがな。俺は一人の人質に言う。

「お前はどうかやって生活してる？」

「はあ、八百屋です」

最初の発砲から数時間は経過している。さすがに人質は落ち着き、この惨状の場にも少しは慣れた感があった。

「生活は大変か？」

「はい、輸入物の野菜と、大手のスーパーが出来てからは以前のよ
うに…いきません」

「そうか…、安くて安全が保障されてりゃ、客はどうしてもそつち
を買っちゃうもんな。十年、二十年先を考えて店の経営をしないと
いかな」

「はあ、その通りです」

「子供はいるのか？小さいか？」

「はい、上が十二歳、下は九歳です」

「じゃあまだ金が要るな。この不況じゃあ、再就職もままならんし、野菜が売れるといいんだがな……」

言って、横の女に話しかける。

「お前は、職業はなんだ？」

「しゅ、主婦です」

「結婚してるのか。旦那はなにしてる？」

「会社員です。ルート営業で……」

「営業か…だったらサービス残業や休日出勤が多いんじゃないのか？ちゃんと家に帰ってきてるか？労働環境はしっかりしてるか？子供はちゃんと育てられてるか？」

「い、忙しそうにしています…おっしゃるとおり、残業や休日出勤は多いです。子供は……」

と言って、お腹を気にした仕草を見せる。

「なんだお前？…もしかして妊婦か」

「は、は…はい。三ヶ月です……」

殺されるかもしれないという緊張のためか、目を固く瞑って祈るような表情で、女はそう答えた。俺は、

「…そりゃ悪かったな。気分は悪くないか？歩けるか？…流産でもしたら、気の毒な話だ。おい、お前！」

言って、行員の一人の男性を呼ぶ。

「は、はい…」

男は空ろな表情で答える。

「おまえ、この妊婦さんをここから連れて出してやれ。外へ出したら警官に救急車を呼べと伝える。…それが済んだら…お前は戻ってこい」

皆が驚くような表情を見せる。人を躊躇なく殺したかと思えば、子供や妊婦を解放したり、何を考えているか本当にわからないといった顔つきだ。

精神の交錯 v o l . 0 3 (後書き)

算さんのおっしやるとおり、内輪揉めなんて一つも良いこと無いです。でもよく起こります。みんな内輪揉めは無駄だとわかってるはずなのに。。あれなんなんでしょうねえ。

精神の交錯 Vol.04 (前書き)

ストックホルム症候群とは、被害者が犯人と一緒にいて特異な経験をすること、両者間に同情や共感などの信頼関係が出来てしまうこと、だそうです。

「…鬼や悪魔じゃない。俺だって人間だ。妊婦だと知って、それを殺すようなヤツは人間じゃない」

女性は、

「あ、ありがとうございます…」

と言つて、男性にもたれかかり、外へ出て行こうと歩く。

その姿を見守っていると、シャッターを上げた男性は、女性の前へ回り込み、彼女を盾にするようにして、自分だけ一目散に外へと走つて逃げていった。女性はその場に倒れこみ、こつちを振り返る。困惑したような、どうしていいのかわからないような表情で俺の方を見る。

「アホウが…。おい」

一番手前にいた人物を見る。中学生のガキか。彼女は、今の出来事を食い入るように見ていた。…人間の最も汚らわしい部分を見たんだ。注目するのも当然だ。俺は、自己紹介の時の彼女の毅然とした態度を思い出した。

「ガキ、お前行けるか？」

彼女はこつちを見ずにコクリと頷いて、スクツと立ち上がり、妊婦の方へ駆けていった。

「大丈夫？立てる？」

妊婦に話しかけているのが聞こえる、妊婦は腰が抜けているように見えた。彼女は小さい体で妊婦を支えて、シャッターの向こう側へと消えていった。

現場は騒然としていた。シャッターが上がリ、男がこちらへ走って逃げてくる。服装から見て筧ではない。：行員だ。

「人質だっ！すぐに保護してやれ！！」

と叫ぶ。：これで情報が手に入る、動き易くなるぞ、と思っている
と、今度は女性を横から支えて、ヨロヨロと出てくるセーラー服の子供が見える。負傷しているのか？

「おい！！彼女達も至急保護しろっ！医療班と救急車をここへ呼んでこいっ！！」

数人の警官が彼女達に駆け寄っていく。：子供の方が何かを話しているが、ここまでは聞こえない。女はぐったりしている。撃たれた？？瀕死だから解放したのか？：それにしても出血も無いな、思っ
て見ていると、セーラー服の女兒は、警官を振り払って：店舗内へと走って戻って行った。警官が戻ってきて報告する。

「真田さん、先の男性は何故解放されたのかわかりませんが、女性はどうも妊婦のようです。筧は彼女を哀れんで逃がしてやった模様です」

俺はセーラー服のぼうが気になった。

「子供はなんで戻った？なぜ戻した？」

警官は眉をしかめて言う。

「犯人は逆上すると何をするかわからない。簡単に人を殺す。が、礼節や道理を通すことをわきまえている一面もあり、犯人の価値観にそぐう行動をとっていれば、今のところ殺される心配はないと……」

「……そして、中の方が面白いから戻る。戻らなければ他の人が殺される。とかなんとか言っ、戻りました」

「面白いから戻る？戻らないと殺される？……子供の割に妙に冷静だな。しかし……ストックホルム症候群が出ている。人質が犯人側に協力すれば、解決は段違いに難解になる。しかし……下手に刺激できない状況には変わりない……」

「あとガスは使っ、とも言っていました」

警官が付け足す。

「……わかった。……どうしたものかな」

と腕組みして考える。

ガキが扉を開けて、こちらへ戻ってくる。……戻ってくるとは思わなかった。ガキも解放するつもりで行かせたんだが……。

「なんで戻ってきた？」

ガキに問う。

「…見ておきたいものがあるから」

彼女はボソツと小声で言っつて、

「妊婦さん、箕さんにお礼を言っつていたわ」

お礼なんてどうでもいい。俺は人質全員に言っつた。

「お前ら、今のを見てどう思っつ？」

続ける。

「大の男が自分だけ助かりたいがために、弱っつている女性…しかも、妊婦っつている女性を盾にして逃げていく…」

皆黙っつて聞っつている。

「…人間の醜さの最骨頂だ」

「…お前らは悔しくないのか？…一部の人間が得をする社会の搾取システム、公務員は民間人を小馬鹿にするように税金を無駄使っつし、果ては裏金に、手当て不正受給、年を取れば勤務中には遊び呆け、身内中で犯罪が発覚しても内々に済まっつす。政治家は中韓に媚を売っつり、税金を垂れ流っつしては見返りを受ける。他国からは舐められて、延々ともあらん名義を立てて金を要求され、領土の主張もろくにできず、国債を発行し続け、未来の国民にそれを背負わせ自分は楽をする。中韓の留学生などには大量の生活補助金を普及させておきなが

ら、年金需給の高齢者にはスズメの涙ほどの金も出さん。拳句に外国人に参政権を与えるだとかの笑い話を真顔で平気でぬかす」

「そうこう言っている間にも、政治家や公務員はひたすら私腹を肥やす。当の一般の国民はというと、生活苦と就職難、就労意欲の減退、少子高齢化、結婚率の低下、デフレに円高…。汗水垂らして働いても、異常な労働時間と業務内容、トカゲの尻尾切り、責任の擦り付けにあい…。やっと貰った安い給与では、結婚もできず、子供も作れず、車も持てず…。拳句の果てに…。こんな場末の銀行で、恐怖のどん底に突き落とされ、妊婦を囮にして、自分だけは逃げおおせるといふ、無礼非道の行為を平気で行う。…。そうまでして、生きていたい世の中か？」

「現代では泣いているのは…。いつもおまえら一般の人間だ。…。にも関わらず、何の行動も起こさずに、酒を飲んで愚痴をこぼすのが関の山。唯一与えられた力である選挙権すら生かもしない。恥ずかしいとは思わんか！？情けないとは思わんか！？欲に塗れた公務員や、売国政治家が憎いとは思わんのかッ！！？」

突然意味のわからない話をされて、人質はみな怯えていた。その様に反比例して、俺は話が続くにしたがって、みるみる興奮していくのが自分でもわかる。…。その時、

「ルルルルルッ、ルルルルルッ、」

電話が鳴る。幾分か興奮をおさめて言う。

「その女…。いや…。ガキがいい。ガキ、お前は使えるやつだ。電話を取れ。俺の言っていることを伝えるんだ」

電話口でどもられては会話にならん。落ち着いたガキの方が都合いい。ガキは無言で電話の傍まで行って、そつと電話を取った。

精神の交錯 Vol.04 (後書き)

今回は政治的なお話ですねえ。

精神の交錯 v o l . 0 5 (前書き)

ガキ扱いされてる梓さんですが、確かに童顔でした。

辺りは真つ暗になっている。情報は出揃った。やはり算光也で間違いない。唯一の肉親である母と姉、昔の上司などの近しい人物も現場へ呼び寄せている。状況次第では、彼女達も電話に出てもらい、説得に当たってもらおう。

算を知る人間が言う…彼の人間像も入手した。彼は、

「算は普段は温厚だが、ちょっとしたことで癇癪を起こす。逆上すると、何をするかわからない。その反面、礼儀は正しく他の人間の面倒見も良く慕われていた…」

と話していた。先ほど銀行内に戻っていった子供の人質の証言とも一致する。俺は、

「…よし、これくらい情報があれば話は出来るだろう。…電話して接触してみよう」

と言つて、電話を手にする。電話をかけると、

「…はい」

女性の声だ。あきらかに算ではない。

「…私は真田と違って、今回の人質籠城事件の対策本部を指揮している者だ。君は人質の方か？算はどうした？」

聞くと、女性は算に話を伝えているようだ。

「寛さんは、電話に直接は出ません。あなたや親族と話をすることを嫌がっています」

説得や交渉はお見通しか…。

「現場の状況を話して欲しい」

言うと、また寛と話しているようだ。

「そちらからの問いかけに応じる気はないそうです。食事を持ってくるように、と言っています。三十分以内に用意しないと…私を殺すそうです」

銃口でも突きつけられているのだろうか。彼女は淡々と話す。俺は、

「食事の準備を…」

と、近くの部下に言う。

「…あとそちらの電話番号、他にドリンク剤や毛布、雑誌や新聞も用意して欲しいと言っています」

「わかった、用意しよう。096・xxxx・xxxxだ」

それだけ言うと、電話は一方的に切られる。…弱ったな。これでは誘き寄せる手や説得する手は使えない。ふん…なかなか用心深いじゃないか。

しばらくすると、作業服を着た二人の男が、

「我々は食材を運び入れに来た」

と言つて、夕飯となるべき食材を次々と運んでくる。しかし…

「なんだあれは??」

俺が目にしたのは、カップラーメンだった。お湯はポットで運び込まれてくる。俺は出入り口に運び込まれているカップラーメンを見ながら、行員の男に、

「…おい、あれを受け取つて来い」

と指図する。行員の男が出入り口まで行ったのを確認してから、その他の人質に言う。

「お前ら、伏せてろ…」

そして、行員の男と、荷物を運び込んだ業者風の男…どうせ警官だろうが…に向けて、発砲した。二人ともに弾は数発命中する。同時に、

「動くなッ!!」

と叫んで、もう一人の作業服の男の動きを静止する。男はどこから出したのか、銃を手になっていた。

「おい、真田とかいうアホウに言っとけ」

「おまえら…警官は、世の中の人々が必死で払った税金で裏金を作っては…私腹を肥やしているというのに…。いざこんな犯罪が起こって、世の中のなんの罪も無い人間が腹を空かしてるのを前にして、カップラーメンなんぞ食わすのか??」

そして、少々の間をおいて言う。

「…さすが、公務員様は常識知らずだなあ」

続ける。

「マヌケ警察がツ!!仲間が死んだのも、人質が死んだのも、全部お前らの職業意識の低さの表れだ。もちつと勉強して来いッッ!!」

そう言つて、生き残った警官に、相方と行員の死体を運ばせる。被弾した業者の格好をした警官は、防弾チョッキを仕込んでいたのだろう、息も意識もあつた。死んだのは行員だけ。まったく、仕事の出来ない警官だ。

「なぜこんな簡単なことを…まともに対応できんのだ??」

俺は呆れてそう呟く。しばらくすると、店屋物やサンドイッチ、ワイン、お茶、ジュース、ビタミン剤、医薬品、毛布、電気アンカ、雑誌、新聞紙などが銀行内に次々と運び込まれてくる。

「人が死なんとわからんのか…」

俺は再度呆れる。そして、客で一番年を取つてそうな男に話しかけた。

「…おい、お前は何歳だ？」

男はビックリしつつも、はきはきと答える。

「は、はい、七十七歳です」

なんだ…、年寄りだとは思っていたが。見た目はもっと若く見えた。最近の年よりは何かと頑張っているもんな。問題がある年よりも多いが。

「そうか、…その年じゃきつかったろう。悪かったな爺さん」

と言つて、サンドイッチやビタミン剤を手渡す。

「これ飲んで、家帰りな」

ガキを呼ぶ。

「ガキ！爺さんをシャッターのところまで送つてやつてくれ。…お前は戻つて来いよ」

「はい」

と、お茶をぐびぐび飲んでいた彼女は、気の抜けた返事をして、トテトと爺さんのそばまで小走りに駆けていった。彼の手を取つて、出入り口まで連れて行く。

「もう大丈夫だよ。ゆっくり歩こう」

ガキが爺さんに話しかける声が聞こえる。二人が、シャッターが腰

の辺りまで上がっている出入り口まで行くと、警官がわらわらと群がってくる。しばらくすると、ガキはこちらへ駆けて戻ってきた。

「お前は…死ぬのは怖いか？」

戯れで銃口をガキに向けて言う。ガキはそれでも…顔色一つ変えな
いで返事した。

「怖いよ」

…怖そうには見えない。今気付いたが…こいつ、どこか達観している感じがあるな。目が怯えていないし、死んでいない…むしろ目は生き生きとしている。どこかしらに感じる違和感は…態度だけでなく、ガキの目線や考え方にもあるような気がした。

「いやに大人びたガキだ。…名前は？高倉あずさだったか？」

「倉下…、倉下あずさ」

ガキは飄々と答える。

「…飯食えよ。みんなも飯食え。食べないともたんぞ。…長い夜になりそうだからな…」

ガキに命令して、人質みんなに平等に食事や毛布などが行き渡るようにさせる。ガキは、一人一人に、

「食べたら元気出るわよ」

「きつと無事に解放されるわ」

「気分が悪いなら、横になるといいよ」

などと笑顔で話しかけて、元氣付けてから食料や毛布、アンカを手渡す。その妙に余裕がある姿に一瞬イラついて銃口を上げたが…、女子供を殺しても後味が悪いだけだと考えて…止めた。普通でないガキだ…。当人は、俺の動作には氣付かず、最後の一人に食事を配り終わると、初めに太股を打ち抜いた男性を指してこう言った。

「この人を外に出してあげて」

俺は、睨みつけて言う。

「…それはお前がどうこうと言うことじゃないな」

さすがにこの発言にはムカついて、銃口を男に向ける。男は失神したままだ。誰かが服を巻いていたのか、出血は止まっているようにも見えた。ガキが言う。

「…冷静になつて。殺してもなんのメリットも無い。殺すくらいなら解放して…警察に条件を飲ませた方がましよ」

言うて、

「それに…このままだったら邪魔よ」

冷たくそう付け加えた。俺はゾクツとして…笑った。

「ははははッ、邪魔と来たか。お前何様だ？」

俺は銃口をガキに向けて言った。

精神の交錯 v o l . 0 5 (後書き)

差し入れた物品の支払いは警察の経費で処理されるんですかねえ。

精神の交錯 vol.06 (前書き)

今回の話(精神の交錯 編)は若干残酷な描写がありますので、苦
手な方はお気をつけ下さい。

彼女は目線を背けず、一步も引かずに答える。

「私はただの人質。怪我した彼のおかげで、私たちはいつこうなるかと怯えてるわ。端に山積みになっている死体と一緒に、警察に引き渡した方がいいわ」

「箕さんだつて、死体をあんなにしておくのは心が痛むでしょ？早く弔ってあげないと」

そして、また、

「そのうち…きっとすごく臭うわ」

と、冷酷に付け加えた。

確かに。最初に殺した行員や警官の死体は、かなりの血の異臭を放ち、見た目も凄惨な状態になっている。死体…弔い…臭い…。そうきたか。上手いことを言いやがる。

「チツ…」

俺は軽く舌打ちして、ガキに言った。

「その死にぞこないを連れていって警察に渡せ。死体も回収するよ
うに言え」

ガキは、ほっと一息ついて、男性を抱き起こす。隣に居た女性が、

「わ、私も手伝う」

と、ガキの反対側から男性を支える。待ってましたと言わんばかりに。

「…見え見えだな。アホウが…」

俺は、小声で誰にも聞こえぬように呟いた。そのままゆっくりと出入り口まで行って…シャッターを上げると、女はガキと男性を突き飛ばして、シャッターをくぐり抜けようとする。ガキが叫ぶ。

「伏せてっ!!」

もう遅い。俺の放った銃弾は、見事女性の頭部に命中して、彼女は息絶えた。警官が集まってくる。ガキは今にも泣き出しそうな顔で、警官に男性を引き渡す。そして、警官と一言二言話して、こちらにトボトボと帰ってきた。…血塗れの姿で。

「二度も通用すると思ったのか。…女にしては浅はかだ」

ガキは無言で床にへたり込んだ。無理もない。目の前で人の脳味噌が飛び散らかったんだ。PTSDってやつにでもなるのかね…。だがまあそれも人生だ…。そんなことを思っていると、ガキは、

「…死体を回収するために警官が中に入るって…。二人で、武器は携帯せずに入ってきて来てって伝えたわ」

と、視線を俺に合わせずに言う。それからすぐに警官が入ってくる。連中は約束どおり、死体を回収しただけで戻った。

大腿部に怪我をした男性が解放され、死体を回収した数時間後の…明け方には小さい子供と、その母親を解放する代わりに食事を要求。それ以降、目立った動きは無い。その後、こちらはシャッターに穴を空け、カメラを仕込んだことにより、筧と人質の動きが確認できるようになった。解放された人質から、現場の細かい話や雰囲気聞いたが…、筧はまだまだ疲れを見せていない様子だ。

現場では、筧を誘き寄せて射殺しようとの案も出て…決定しかけたが…。上層部から「人権屋の政治家の強い圧力がある。射殺だけは避ける」との絶対命令が出たことにより、却下された。前回の電話からこつち、筧はこちらの電話にも呼びかけにも対応しない。今のところ、向こうに動きが無い限り、こちらも動けない…正直、万策尽きて…こつち着状態という感じだった。

…電話が鳴る。

「真田さんっ！」

部下をはじめ、一同一気に緊張が走る。電話を取る。

「もしもし」

「もしもし、私は銀行内の人質です」

先ほどの女性だ。

「こちらでお金を用意しましたので、このお金を新市街の丸罰…？金融の小暮さん…？まで、届けて欲しいそうです」

所々を算に確認しているのだろう。言葉を継いで話している。

「これが届けられたら、小暮さんからこちらへ電話するように伝えて下さい。確認が出来たら、人質を三人解放するそうです」

彼女は、淡々と用件のみを言う。カメラで確認すると…電話の主は、さつきからなにかの度に入入り口を歩き来している、セーラー服の子供だった。算は電話口からは離れた所にいる。他の人質の傍に居るのが確認できた。電話口の傍にいれば、シャッターの穴から狙撃できるが…。現場の判断で強行して、後から言い訳しようか…とも思っていたが、これではその手段も取れない。

射殺すれば…上から大目玉を食らって、一生窓際は間違いない。かと言って、このままこう着状態が続けば、マスコミや世論からの批判を受け、俺は責任者として処分される可能性は大だ。強引に踏み込んで…そりゃ、死者も出ず、算を拘束して解決できればラクだが…。解決できなければ、結局バッシングを浴びてやられちまう。もちろん、まともな作戦もなく強引にやって…それで成功する確率なんて、砂粒ほどもない…。

（くそう…俺のキャリアもこう着状態じゃないか。どうせ干されるなら、一人でも多くの人質を救った方がマシだな…）

俺は苦虫を噛み潰したような表情で、銀行を仰ぎ見た。

全面のシャッターは五十センチ程度だが…下の方が開かれており、誰かが近寄ったら、すぐにわかるようになっていた。カメラの穴は、横の閉まりきっているシャッターや、背面の窓に取り付けられたものだ。横のシャッターは建物の前半分にしかないため、カウンター

奥に行かされると、内部は若干見えにくくなる。カメラでさえそうなので、狙撃となるとほぼ不可能であった。

「…わかった。すぐに手配しよう」

と、電話口の彼女に返答すると、直ぐに電話は切られた。

「これで一つ肩の荷が下りるわい…」

俺はそう言っつて、皆にも酒を飲ませた。未成年は女のガキと、自己紹介の時に逃がしたガキの兄ちゃんだけだ。それ以外にはいない。ガキにはジューズを飲ませた。

夜が明けてから、俺は残った行員にお金を片っ端から集めさせ、鞆に詰めて、借金返済の手配をした。またも女のガキに電話させる。…準備は整った。ほどなくして警官が入ってくる。

「おい、この鞆を警官に渡してこい」

ガキに言う。

「うん」

彼女は鞆を重そうに持って、よろよろと警官のところまで歩いていく。鞆を渡すと、すぐに戻ってくる。…逃げるチャンスは幾度もあっただろうに…。このガキは逃げない。確信と言えるほどの直感を俺は感じていた。このガキは何か目的があつて、ここにいる。おそらくは…人質全員を助けようとしても、目論んでいるのだろうが。

(ガキのくせに健気なもんだ…)

と思つて、ウイスキーをぐいと煽る。

一時間ほど経つと、電話が掛かつてきた。ガキに取らせると、

「小暮さんつて人。お金…届いたつて」

と言つてくる。

「そうか」

これで目的のうち一つは達成した。俺は人質三人を、適当に客の中から選んで解放した。

あとは…。俺は、人質を完全に集めて「動いたら殺す」と言いつける。そして、鞆の中から、筆と墨、硯などを出して、おそらくは遺書となるであろう文章を書くことにした。墨を摺る音が寂しげに銀行内に響いて、音が届く分だけだが、その場の緊張を緩和させた。

精神の交錯 v o l . 0 6 (後書き)

人権とか友愛とかって元々は良い言葉のはずですが、すっかり黒いイメージが定着してしまいました。おかげで文章を書く際、通常の意味で使えないんですよね。

精神の交錯 vol.07 (前書き)

世界各国でかつてないほどの規模や件数のテロやデモが起こっていますが、世界的不況がすべての原因だと考えております。

日本国民の諸君

現在の日本国を見るにその政治は腐りに腐り、国官の者も腐敗した姿をしている。

この因は日本の政治家の失策のみに非ず。敵国の策略であり、テロリズムに因る。

敵国は日本の政治家を金で抱き込み、自国民を日本国内に様々な形で入国させ、長い時間をかけて、日本公務の中枢に自国分子を配置する。これは、我が国の民主主義的手段に則り、我が国に不利かつ敵国に有利な法案や決まりごとを作って、然るべき機関に通し、日本を生ける屍とし、敵国の操り人形として、大量の金銭を奪い取るものを旨とするものなり。

この策すでに適度の成功の益を見せり。小子化の折で日本人は増えず、大量の支援金を受ける敵国民は多くの子供を生み、留学や企業研修と称して日本国内に入ってくる成人と合わせて、その数を着々と増やし、いずれは民主主義的手法をとって、国の形態を保ちながら、内部のみを奪い取る心積もりである。

大変に遺憾ながら我が国日本は、この術中に見事に嵌り、すでに抵抗することも逃亡する事も不可能な状態である。さらに断固抵抗すべき立場にある国民も日々の生活に疲れ、若者は政治に興味を持たず、成人はなんとか自分の身を守ろうと、なんの役にも立たない金銭を収拾することに終始する有様である。

我輩これを黙って見るに絶えずここに筆を取って見解を述べるに至る。皆もこれを理解すれば、各々自覚と愛国心を持って、敵国のテロリズムを打ち破るべく、真実の思想を基に戦い抜いて欲しいと心から願うばかりである。

一九××年一月某日 笈光也

書き上げたばかりの文書を丁重に折りたたみ、銀行の中央の机に置く。こうしていれば警官が見つけて、お節介なマスコミがなんとかこれを盗み見て報道するであろう。

よし、それでは…最大の目的を果すときが来る。俺はガキに食事を運び込むよう警察に連絡させた。英気を養うため、心を静かに置いて瞑想する。

(国を滅ぼすのに銃に爆弾、刃物はいらす。スパイを使い、合法的に長い時間をかけて弱らせ、ある日の選挙を持って民主的に国を乗っ取る。これこそ現代における静かなる戦争。この事実を国民に知らせるため、我は命を捨て他人の命をも犠牲として餌にし、マスコミをおびき寄せ、この事実を白日の下に晒しあげる)

「マスコミがああ文書を嗅ぎ付ければ…みな否が応でもわかるはずだ…」

俺は呟いて、宙を見た。

食事が運び込まれて、俺は行員の人質を一人解放した。人質の精神状態は限界を超えていて、眠っている…いや、失神している者やグッタリしている者ばかりだ。会話もまるで無い。

…ここまで強行突破や狙撃がないと言うことは、警察は俺を説得する策で対応する腹積もりでいるのだらう。人権家が裏にいるに違いない…しかし、それももう限界なはずだ。強行突破を含め、そろそろ事態を收拾すべく動くはずだ。やるなら早い方がいい。俺を説得させるのなら…アイツも来ているはずだ。

「おい」

俺はガキに話しかける。体操座りして顔を伏せていたガキは、パツと反応して、顔を起こしてこちらを見る。さすがに少々疲れている様子だが、他の人質に比べると、まだ目は生き生きとしている。…こいつとは色々あったが、精神の強さは人並み以上…群を抜いていると思った。

「なあに？」

彼女は…少しくまが出来た目で、俺をじっと見ている。俺は静かに言った。

「電話を頼む」

二晩目の夜が更ける。テレビ局の報道を通して、包囲の具合やこちらの人数等がリアルタイムで筈に流れている。あの男は…頭は狂っているが切れる。…もうすでにマスコミには「ただ犯人の言いなりに」だとか「まったく手が出せず、今もこう着状態」などと好き勝手に書かれて叩かれている。残りの人質だけでも救わなければ…などと考えていると、上層部の使いがやってくる。彼は、

「真田君、我々としては圧力も怖いが…このまま人質が殺され続ける方が恐ろしい。説得して隙を見て捕らえるというスタンスは崩さずに…だが、射殺も視野に入れて、作戦を練り直してくれ」

と、まだ悠長なことを言っている。

寛は先ほど食事を差し入れた時、人質を一人解放している。人質の数も少なくなってきたし、栄養剤や酒を飲んでいても、体力的に限界近いだろう。…もちろん後で回収はするが、金は奴の指定した業者に届けた。目的を達成したと思っっているならば、心も緩むはず…。射殺が許可されるのなら、早くコトを行って終わらせるべきだ…。唐突に電話が鳴る。…銀行の番号。またも一気に辺りの空気が変わる。

「もしもし」

いつもの女児だ。

「…どうかしたか？」

「寛さんに言われて掛けています。今から私が言う人と話したいと言っています」

話？なんでいまさら…。

「母と姉、そして昔の上司だった仲原さんという方です。彼女達を現場に呼んではくれませんか？」

彼女は淡々とした口調で言う。…その三人はすでに現場にいる。話をしたと言うなら、寛本人が電話口に出るはずだ…ここで片をつ

ける。彼らと話をさせるからと言っておびき寄せて、射殺。…無難な策だ。

「わかった、ではすぐに呼ぶよう手配するから、少し待っていてくれ」

「…わかりました」

電話は切れる。俺はその場にいる警官に言う。

「寛が、母と姉と上司と話をしたいと言ってきた。奴が電話のそばに来れば狙撃できる」

上司の顔を伺う。彼は止むを得ないという表情をして、

「細かい部分の報告は私の方でどうにかする。それで行こう」

と言う。どうやら、彼も個人的には人権家が嫌いなようだ。

「わかりました。…寛には手配すると言って時間を稼いである。今のうちに狙撃手は位置についでくれ。発砲と同時に突入する」

現場の緊張感はさらに上がって、最高潮に達しようとしていた。

「…ガキ」

俺は銃を拭きあげて、腹にサランを巻く。

「母と姉はどうでもいい。むしろ話もしたくない。仲原という人間

と話をするだけだ」

ガキは無言で俺の目を見ている。

「電話が掛かってきたら、彼に入り口まで来るように言ってくれ」

彼女は静かに答える。

「死ぬのね」

俺は驚いた。…その唐突な言葉に。

「…？どういうことだ？」

「あなた、死ぬわ」

彼女は静かにそう言った。確かに俺は死にいくつもりだ。だが、何故…それがこいつにわかる？彼女は続ける…。

「三人はあの現場にいるわ。強行突破もしない、狙撃もしない。警察は最初から今までずっと算さんを殺さずに説得しようとした。算さんが会いたいと名前を上げるほどの人を現場に呼んでないわくない」

俺は答える。

「それがどうした？」

ガキは続ける。

「…なのに彼らは手配するから待てと言ったわ。時間を稼いで指揮を取って…今度は箕さんを殺すつもり…」

言って、

「…わかってるんでしょう?」

と、付け足す。

ガキのくせに…。思えば、俺は何度コイツをガキのくせにと思っただろう。異質で異常な空間にいるせいで…今まで気がつかなかったが…コイツこそ異常だ。何を見てもたじろがないし…戸惑わない。年齢やこの混沌の場にそぐわない冷静な判断力と行動力…。俺は言う。

「…お前はなんだ?…何者だ?」

精神の交錯 v o l . 0 7 (後書き)

体操座りって言います？三角座りって言いません？地方によって違うものなんですよーか。

精神の交錯 v o l . 0 8 (前書き)

何かを書くためにはその題材を経験する事が大切なんだそうですが、このテの話は経験したくないです。

彼女は薄く笑って即答する。

「私は可哀想な人質よ。… 箕さんは何者？」

俺は、その笑顔：純粹な笑顔に驚いて… 見とれていた。彼女の質問にも答えられない。ふと思うと、彼女と話すことで、どこか落ち着いている自分を感じた。彼女は続ける。

「わざわざ死ぬことはないわ」

俺は… ぼつと見とれていながらも、彼女のこの言葉だけには反論できなかった。

「それは違うな。… 生きるも死ぬも人の業だ。だが自我を持って行動している以上、命を捨ててもやらなければいけない事がある」

彼女は俺から視線を外した。下を向いて溜息をつく。

「… やはり止められないのね」

言って、視線を俺に戻す。

「いいわ。箕さんの生き様… 見ててあげる」

と続けた。

「アホウが… 死に様だろうが」

俺はそう言っつて、彼女の頭をグシャグシャとなでた。やわらかい黒髪がクシャクシャになる。

「…今度強盗するときにはホテルにしてね。シャワー浴びられるし」
笑っつて、そう言っつ。

「アホウ…次なんかあるか…」

言っつと、電話が鳴った。彼女はタツと駆けていき、電話に出た。

「もしもし」

またも女兒の声だ…。

「三人の準備が出来た。笥を電話口に出せ」

彼女は言っつ。

「まず…仲原さんという方と、直接話がしたいそうです。彼を入り口まで連れてくるように…」と言っつています。…でなければ…、人質を殺すそうです」

後ろから笥の声が聞こえる。…彼女も災難だなあ…。あ？ていうか直接だと？ 馬鹿か？一般人を近くに行かせることなどできるか。

「話なら電話を使っつてしか許可できない。…いくらなんでも一般の方を近くまで行かせることは出来ない」

彼女は落ち着いて、

「…ちょっと待ってください」

と言う。笥に相談するのだろう。しばらくして返事が返ってくる。

「警官を横に置いていても構わないと言っています。迷惑をかけたとの話をするだけだから、心配は無いと…。許可されないのなら、人質を…順に殺していくと言っています」

…直接。話なら電話でも出来るはずだ。直接会ってなんとかする。…いや笥のことなら直接会って話するのが筋だ、と考えることも有り得る。しかし…まさかこいつ、仲原という男を狙って…いや、彼らが不仲だと言う話は出ていない。仲原は笥とは職場で深い友好関係を築いていたと言っていた。母と姉も認めるほどだ。単に話が見たいだけか…。…警官も置いていいと言っているほどだ。大丈夫だろう。しかし、突っぱねれば…人質が殺されるということは事実だ。…許可するしかない…か？

「…わかった。では、これより十五分後に、店舗前まで彼を連れて行く」

と言う。彼女は笥に言葉を伝えているようだ。

「…三分後にしろとのことだ」

まあそうくるだろうな…。みすみす準備の暇は与えまい。こっちはそれを見込んでの十五分だ…三分あればおつりが来る。

「…わかった。仲原さんの安全のために警官は配置させてもらうから、それだけは重々確認を取ってくれよ。寛が言い出したことだからな」

彼女は静かに答える。

「…うん、わかった」

電話を切る。皆に作戦を伝える。

「よし、みんな、時間が無い。聞いてくれ。仲原氏を店舗前まで連れて行き、寛と話をさせる。寛が警官がいてもいいと言っているの、森、川瀬、港、俺の四人は護衛としてつく。距離が近ければ…そのまま取り押さえる。…万一やつが不審な行動を取ったら…」

上司を見る。彼は頷く。

「…発砲して構わん。…欲を言えば急所は外したいが、それも状況次第だ」

上司の立場を気遣って言ったが…俺は隙があれば殺すつもりだった。仲原が言う。

「私の身の安全は保証してもらえるんでしょうな」

俺は装備を整えながら答える。

「もちろんです。出来る限りのことはします」

と答える。年は五十過ぎと言ったところか。社会保険事務所勤めで

中肉中背、いかにも一般人といった感じである。

「準備はいいな??行くぞっ!」

慌しく、心の準備もそこにシャッター前に向かうこととなった。

「祭りの時間だ」

俺は腕をぐるぐると回して筋を伸ばす。背伸びする。そして人質に言った。

「お前ら…長かったが、これでパーティは終わりだ。各々家に帰って、ゆっくり休んで欲しい」

人質は疲れに疲れた目をこちらに向け(?????)となっている。

「俺は今から外に出る。…ある男を殺して…逮捕されるか、射殺されるだろう」

言って、

「もうお前らには用はない。だが忘れるな。俺の中にある狂気は、俺が生み出したものじゃない。社会が煽り立てたものだ。…だが、お前達にも罪はある!日に日に朽ち果てていく国を見ながらも…黙って傍観していたという罪が!!一人一人が政治を意識して、国賊を紛糾していれば、こんなことにはならなかった!!ここで変わらなければ第二、第三の俺のようなテロリズムを持った人間が現れる。…必ずな!!」

「忘れるな!国に対する誇りを持って!自分の気持ちで国を動かすと

いう意識を持って！…！…そうして初めて、平和で安全な生活というものが訪れるんだ…」

人質の表情は変わらない。俺の言葉は虚しくも宙を散った。ガキを見る…。彼女はいつもの視線で俺を見ていた。そして、

「…わかってるわ」

と、乾いた声で言う。…彼女の言動にはもう驚きもしない。俺はいつの間にか、彼女のことを…阿吽の呼吸が取れる人生の伴侶のように感じていた。

「…私を人質にして出て行くんでしょ」

さすがだ。こいつは何から何までお見通しだな。

「わかってるんなら話は早い。来い！」

と、彼女の首根っこを掴んで抱き寄せる。ここまで近かったら、警官も俺を狙撃はできないだろう。すこしでも外れれば、こいつに当たる。正確に狙撃しても…中学生の少女の目前で脳味噌ぶちまけたりするの…そんなことをするのは俺だけだ。人権屋のこともある…おそらくは踏み切れまい。

俺は外の慌しい様子を確認してから、彼女を近くに抱き寄せたまま、外へと歩きだした。その時ふと…彼女が言う。とても優しいが…明るい口調で。

「…遺言があるんだったら…聞いてあげるワ」

彼女は恐れも嫌がりもしていない。…とつくの昔に気が触れてしまったのかというほど冷静だった。…まったくこれから決死の覚悟で出て行くつてのに…。妙な間で茶々を入れやがる…。俺は銃の弾奏を確認して、銃身とベルトをを肩にかけながら、彼女も見ずに適当に返事をする。

『あーじゃあな…、あのチンパン首相に「お前は史上最低最悪の売国奴だ」とでも伝えといてくれ。奴のせいで何人も人間が泣いたかわからん』

彼女は俺を見ながら、（わかった）と言わんばかりに頷いたように感じたが、俺はそれをろくに見ていなかった。

外に出る。外は静かで冷たい。…それはまるで今…俺の胸に密着しているガキの佇まいのようで…息が白く消えていく様は、当たり前前の自然現象でありながら…なぜか美しく見えた。久しぶりに外に出た成果、コトを起こしている張本人の俺が、すつきりして緊張が解けていくような気がした。シャッターをくぐってすぐ、警官四人と仲原の姿を確認する。警官の一人が叫ぶ。

「算、その子を放せっ！！」

馬鹿か？そう言われて誰が放す？？そんな台詞になんの意味がある。…警官なんてもんはどこまでもマヌケだ。俺は静かに言う。

「仲原さん、久しぶりっすねえ」

彼は一步前に出て答える。距離にして一メートル。

「…笥君、少し痩せたな」

余計な時間はない。あっても会話を重ねることに意味はない。すぐに本題に入る。

「…悪とはなんだと思う？どこから生まれて、どこに所在する？…この国がこうなってしまった原因はどこにある？」
仲原は困ったような顔をして答える。

「…どうした？…笥君、私は君と話をしにきた。その少女を放して、銃を置くくん…」

俺は彼の言葉を遮った。

「しらばっくれるな！…答える」

彼は困惑する。

「…君の言っていることはわからない。…今ならまだ間に合う…。少女を解放して…銃を置…」

警官の拡声器の声や怒号が飛び交っていて話しにくい。俺はイラッとして…またも彼の言葉を遮って叫ぶ。すべてを掻き消すような大声で。

「答えは欲だツツツ！！！」

言って、俺はさらに…ありったけの力で声を張り上げる。

「お前のような愚かな人間の欲が社会を駄目にしたツツ！！長きに

渡って、この国に積もり積もりし小人の欲ッ！！欲と欲から生まれる怠惰ッッ！これこそが悪ッ！！これこそが国が滅びる原因なりッッ！！！！」

言って、俺は銃口を仲原に向ける。

「悪は死ねッッ！！！！」

引き金に指をかけて引こうとした。…が、その瞬間、得も言われぬ悪寒に襲われる。

精神の交錯 vol.08 (後書き)

犯罪者にも各々コトを起こさせる経緯があるんでしょねえ。中には納得するだけの経緯もあったり。もちろん、被害者には被害しかないわけですから、厳罰に処されるべきですけども。

精神の交錯 vol.09 (前書き)

警察の方も現場の人に限っては大変なんでしょうねえ。誘拐犯や強盗よりも、上司や人権団体の要求の方が無茶苦茶だったりして。

(な、なんだ!!?)

「チツ…」

悪寒に体が…神経が本能的に反射した。俺は何故だかわからないが、抱いていたガキを反射的に地面に突き飛ばした…。そしてその瞬間、目の前が真っ黒になった…。

… 筧に銃口を向けていた俺は、一瞬何がなんだかわからなくなつた。奴は意味不明な言葉をベラベラと仲原氏に叫んだ後、彼に銃口を向けて…引き金を引こうとした。

その瞬間、その場の空気が捻じ曲がって澱んだ気がした。俺や他の警官は筧に向かって発砲しようとするが、少女の頭が近くにありすぎて、撃てないでいた。…刹那、何が起きたのか…いきなり筧は銃を捨て、少女を地面に向けて押し倒す。その直後に…銃声と共に、奴はそのまま前のめりに倒れた。

一気に警官隊が突入して、銃を向けて筧を囲む。俺は筧を取り囲んでいる警官を掻き分けて奴のそばに行く。奴は後頭部から額の中心を撃たれていた。側頭部にも…なぜか弾痕が二つある…。

「きゅ、救急車だっ!!!救急隊を呼べっつ!!!」

途端に現場は警官、救急隊、マスコミが入り乱れて混乱する。この時の瞬間視聴率は年間を通してトップであったという。堰を切つて

流れ出すダムの水のように、各人が己の目的のために動きだす。突き倒された少女は無事保護され、銀行内にも警官が入っていく。救急隊員が箕をタンカに乗せて、救急車に運び入れる。すでに待機していた救急車が続々と近くに来る。彼らは警官隊の手によって解放された人質にも対応する。現場は数百人の警官の声やマスコミの生放送の報道陣の声などが入り乱れて騒然となる。…こうして事件は収束の一途を辿った。

箕は病院に搬送する途中で死亡が確認された。蘇生措置が取られるも効果はなかった。弾痕は二つあったのだが、奴を撃つたのは両者ともに狙撃班の者で、箕が倒れた後すぐに、班内の二人の男が発砲を認めた。発砲の許可は曖昧なものだったので、彼らへの射殺の責任は不問にされた。後日聞いた話によれば、彼らは箕に狙いは定めていたものの撃つつもりは無かったという。…二人ともがだ。彼らは、

「何か…恐れに似た違和感を感じて…気がついたら発砲してしました…」

「なぜかはわからないが…何かを感じて…あそこにいた何かに向けて…反射的に撃つた…」

などと、両者ともに言葉尻は違えど、似たような発言を虚ろな状態で繰り返した。うち一人は、たとえその対象が、犯罪人で殺人者であった、法的にも許された発砲であったとはいえ、自分自身の心を整理できずにいた。そうしている内に…一人の人間を殺したという重みに耐えられなくなり、銃に携わる仕事から身を引く事になる。

箕は遺書のようなものを銀行内に残しており、人質解放に向かっ

た警官隊が回収した。証拠品として我々が預かり、今まで公開には至っていない。俺も読んだが、まったく意味不明…妄想極まる内容で、奴が生きていれば、裁判の際に精神状態が異常だったとの証拠に成り得ただろう。現在は警察上層部の管理下のもと、証拠品として厳重に保管されている。

箕と仲原の関係は良好だったと聞いていたが、後に発覚したところによると、社会保険事務所で働いていた仲原は。巨額な金額にのぼる保険金を横領していた。内々でそれが発覚した際に、彼は事務所の上層部と相談して、人員を削減して新規職員を取らないことにより十年ほどで穴埋めできるとして、そのまま内々で処理してしまった。

箕はその際に、人員整理の対象となつてクビになっている。しかし、これは完全な機密扱いになっており、箕は知るはずもなかったそう。結果的に仲原を狙った箕にはなんらかの動機があったと予想できるが、今のところ…あの時に箕が何を思って仲原を殺そうとしたのかは謎である。

なお、箕が丸罰金融に送った金は全額回収されて、銀行側に戻された。奴の借金は今後、母と姉が背負っていくことになる。…結局のところ、箕は何一つ目的を達成できなかった。ただの人殺しであった。

箕には前科があった。これは事件発生直後…すぐに発覚していたことだが、詳細が届けられたのは、事件解決後のことだった。

彼は十五歳の時に自分の父親を絞め殺して捕まっていた。しかし、少年法により一年半ほどで仮釈放され、その後は苗字を変えて、更正プログラムと人権団体の後押しにより、社会保険事務所へ就職す

ることとなる。後に人質や有識者が、異口同音に少年法の改正を訴えたが、マスコミからは相手にされず、人権家の政治家に潰されてほとんど世間の目に触れることもなく…その声は誰にも届くことはなかった。ちなみに父親を殺した動機について箕は、

「父親の心の中に社会悪を見た」

などと供述していた。…この時すでに精神破綻を匂わせている。実際裁判においても、初期の取調べでのこの種の発言は、箕の精神状態を判断する一端を大きく担った。

マスコミや世論は、今回の事件の警察の対応を散々に批判した。

「むざむざ人を死なせたずさんな対応」

「すべて後手後手。無意味に死んでいった人質」

「やるのならば最初に射殺しなかったのか」

などと、現場の状況も知らずに言いたい放題だ。あの混乱と様々な権力が作用しあう中で、人質も警官も箕当人も…誰も死ななくて済む選択肢があったのなら…俺は土下座でもして教えを乞いたいくらいだ。

もっともわからないことは、あの瞬間に何が起きたのかということだ。箕は明らかに仲原を殺そうとしていた。そして、俺を含め、そばにいた警官はみな銃を構えてはいたものの、少女が近くにおいて撃てない状況にあった。

…その後空気が澱んで…空間が歪んだ気がしたのも確かだ。…そ

う思った次の瞬間： 箕は銃を捨て少女を突き飛ばした。： またこの瞬間に箕は二人の狙撃手によって、射殺された。

： なぜ箕が仲原を殺す直前で銃を捨て、少女を突き放すなどという意味不明な行動を取ったのか：、なぜ同時に二人の狙撃手が発砲してしまったのか：、そもそも発砲の原因はなんだったのか：、空気が歪み激んだ気がしたのはなんだったのか：。この瞬間に限っては、何が起こったのかまつたくわからないということが、俺のこの事件の印象の後味を悪くする大きな要因となっている。

俺はこの事件の現場指揮官の経験手腕を買われて、事件から半年後に大きく昇進した。箕のような極悪人がいたおかげで、俺は出世して： 食っていけるのか：と考えると、憂鬱になる。しかしこれも世の中の道理。悪人に感謝などはしないが、この事実を受け入れても、何も悪いとは感じない。

最終的にほとんどのマスコミは、箕を精神異常者として、自らの借金返済のため犯行を企てたと報道した。しかし、人質は口を揃えて、

「犯人は被害妄想の気があり、社会体制や政治に大きく不満を感じていたことが最大の犯行の動機。テロという言葉も耳にした」

と語った。

： 印象深かったのはセーラー服の少女である。数十時間にも渡って行われた取調べのテープからは、

「人には各々見えるものと見えないものがある。あの人は社会の深層が見えすぎた。それに必死で抗おうとして： 犯行を企てたの」

「…社会悪に煽られた彼の狂気は見た？…少なくとも箕さんを射殺した警官さんにはそれが見えていたみたいけど…」

「あの瞬間にあの場に在った人間の思考はそれだけじゃない。狂気、殺意、心配、欲望、嘘偽り、野次馬根性…人々のあらゆる本音が集って、異質な空気を生み出したのよ。そう…言わば…精神の交錯した瞬間」

などという…彼女の淡々とした語り口を聞くことができる。

生き残った人質は、彼女の言葉にうんうんと頷いていたが、正直俺にはどういう意味か理解できなかった。算と生死を共にしたもののだけがわかるとても言うのだろうか。

最後に彼女はニッコリと笑って、語尾を歌うように言ったそう
うだ。

「正直言って…とても怖かったけど、なかなかお目にかかれないものが見れたワ」

精神の交錯 v o l . 0 9 (後書き)

少年法廃止、死刑制度には賛成で御座います。厳罰が処されることにより平和な世の中が作られる…という根本原理を理解されていない方が有識者の中に多く、テレビを見る度に疲弊しますけども。

精神の交錯 vol.10 (前書き)

この話は90年代の話だと推定できますけども、2010年代に比べれば経済的にも政治的にも全然いい時代なんですよね。今寛さんがいたら首相官邸でテロ起こしてたりするかもしれない。さすがに書けませんけども。

時は四月頭の某日。：今日はとても晴れていて、清々しい天気だ。気候も随分暖かくなってきて：：すこしやすい時期になった。お約束の桜も満開で、人々の新年度を喜ぶ笑顔とともに、その情景を煌びやかに演出するかのようには咲き乱れている。

そんな暖かい世間の雰囲気を目に、私はドタバタと仕事していた。今日の総理の日程には、短時間ではあるが、東京は赤坂の某小学校で、国民とのふれあいの一環として子供たちとお話をする、という時間が設けられている。この件の仕切りを担当している私は、定刻内になんとか準備を済ませた。あとは総理が来るのを待っているという状態である。子供たちはワイワイガヤガヤと好きに騒いでいる。

総理が到着して、子供達の前で短いお話をする。司会の役目もある私は子供達に話を振る。

「じゃあ、みなさんの中で総理にお話がある人はいませんか？」

子供達がハイハイと手を上げる。私は、その中から適当な子供を選んで当てる。その子は、

「どうやって総理大臣になれますか??」

と、無邪気な質問をする。

「一生懸命勉強して、お父さんとお母さんの言うことをよく聞いたら、誰にでもなれるよ」

と、総理は笑って答える。子供達はハイハイ!と、我こそはとまた手を上げる。

「こんごのせいさくで一番力をいれてようと思ってることはなんですか?？」

と子供が言う。子供が難しい言葉を使ったので、周囲の大人がドツと笑う。総理も笑いながら、

「そうだね。あなたのお爺さんやお婆さんが安心して暮らせるようなお約束ごことを決めることを頑張るよ」

と、介護福祉についての話題を出す。子供達はまた手を上げる。私はまた適当に当てる。

「じゃあ、その少し大きいおねえちゃん!」

と言う。当てられた子はスクと立ち上がり、総理の目をじっと見る。そして一瞬の間を置いて…、

「お前は史上最低最悪の売国奴だ」

と、透き通るように静かな声で言い放ち、足早に去って行った。

その場は一気に微妙な空気になった。と言っても、気まずい空気ではなく、その切符のいい悪を切り捨てるような口調に、表面は困惑する演技をしつつも、内心は同調する大人が多くいるのが、総理も含め、みんなお互いにわかるといふ…なんとも微妙な空気であった。

精神の交錯 Vol.10 (後書き)

読了いつも有難う御座います。また次話でお会い致しましょう！

運勢の不思議 vol.01 (前書き)

幼馴染っていいですね。幼馴染とかいたことないです。どんなもんなんでしょ。

運勢の不思議 VOL・01

運勢の不思議

「バシツツ!!」

僕は社屋に入るや否や、いきなり後ろから背中を叩かれて、

「おつと…」

と、前によるけた。

「守ちゃん何やってんのよ!!」…コ・コ。また間違ってるわよ。
写真も逆!!」

幼稚園の時から、高校までずっと一緒だった、一つ年上の幼馴染であるマリ姉は、僕の背中を思い切り平手ではたいて、紙面原稿の一部分を指差しながらそう言った。

「え、マジで!?一応確認したのになあ…」

「全然確認できてないじゃん。守ちゃん、疲れてるねー」

マリ姉は、三年ほど前に…ここ熊本日々新聞社は編集の整理に、中途採用で入社してきた。そして半年も経たないうちに、元々持っていたのだろうか…その手腕を存分に振るい、今ではやり手のキャリアウーマンに化けてしまっていた。

社内では先輩とはいえ、年下で特に仕事ができるわけでもない社員の僕は、今や…実質彼女の部下同様という立場にまで成り下がってしまっていた。だが、強い不満があるわけでもない。彼女は仕事ができるし、僕にミスが多いのも事実だ。しかし、幼馴染とはいえ、一応は後輩と言える女性に、出来不出来で大きく抜かれて、職場で干され気味になっている…。僕がイライラしていたのもまた事実だった。彼女にも、周囲の人間にも腹は立つ。だが、一番ムカつくのは僕自身にだった。何よりも情けなくて…不甲斐ない自分にムカついて、そして落ち込んでいた。

「すまん、ちゃんと年内には…いや、今日中に直しとく」

今日は十二月二十七日。明日からは基本的に年末正月休みに入る。と言っても、紙面編集の仕事だ。常に僕の部署には誰かが出勤している状態である。

この仕事には盆も正月も無い。僕は三十日と三十一日、二日から五日までが出勤である。明日から二日間の連休になるため、一通りの仕事は終わらせないといけない。マリ姉は僕の顔色を見て、

「ハア…」

と、溜息をついた。

「最近どうしたの??ミス多いし、元気ないし…なんかすっかり弱っちゃってるわよ」

彼女は僕の表情が曇っているのを見て、心配そうに言う。

「若いんだから、もっとしっかりしなさいっ!」

と、僕の背中を今度は幾分か弱めに、布団よろしくパンパンとはたく。

「わ、わかったわかった…ちょっと疲れてるだけなんだ…大丈夫だよ。…とにかく文面と写真は訂正するから、もう少し待ってくれ」

彼女はまだ少し心配そうな顔で、

「…うん。帰るまでに仕上げてね」

と言って、僕に栄養ドリンクを渡して去っていく。…会社の支給品だが。

最近よく考え事をする。人生は不思議だ。不思議の塊だ。超金持ちの下に生まれて、何不自由ない暮らしをしている者もいれば、幼い子供のうちに実の親から虐待されて、殺されてしまう者もいる。計画を前々から立てて、最高に楽しみにしてたデートの日にどんより曇るとか、それでデートを強行した結果、異常に強い雨が降るとか。でも、彼女は上機嫌だったり…。貰った宝クジが三十万円の当たりクジだったとか。財布を落としたとか。それが誰かに拾われて届いたと交番から連絡があるとか。人生で起こることはその人にとって、幸だろつが不幸だろつが関係なくて…望む望まないも関係ない。

「いわゆる運というものかねえ」

僕は今やっていた仕事を中断して、さっきマリ姉が指摘した文面を訂正している。僕は普通だ。特に運が悪い出来事もなければ、運

が良い出来事もない。自分は幸せだと思う。僕よりもっと酷い境遇の人間は、掃いて捨てるほどいるだろう。

僕は十二の時に親父が自殺したり、交通事故に巻き込まれて両足が複雑骨折したこともある。が、それでも今は五体満足で生きている。仕事をして、恋愛もして、好きなことをして生き抜いている。もちろん僕よりも全然恵まれた人生を送っている者もいるだろうが…。

僕は、人生は良い運と悪い運によって成り立っているのだと思う。不思議だ。運とはなんなんだ？なんでこんなにも…人生は不思議なんだ？人生は不思議なのに、なぜ僕の人生は平凡なんだ？…まるで掴み所の無い、禅問答のようなことを考えながらも、僕は訂正を終える。

仕事に一応の区切りをつけて、直の上司である鈴木さんに持っていく。彼女は高校の先輩として知り合って、大学ではサークルも同じだった。それだけに気安く接することが出来る。

「遅くなってすみません。これ、終わってます」

「ん」

彼女は僕の方は見ずに、コーヒークップの底をスプーンでクルクルとかき混ぜながら、そっけない返事をした。僕が書類を机に置くと、

「ご苦労さん。マリも言ってたが、お前、最近調子悪いみたいだな。海じじいかなんかにでも憑かれてんのか？猫でも轢いたか？」

と言う。…海じじいってなんだよ…気持ち悪いなあ。

彼女は伝奇だとか、オカルトだとか、占いだとか、心霊だとか、妖怪だとか、悪魔教だとか、UFOだとか、都市伝説だとか…そういうしょうもないものが大好物だ。

「勘弁してくださいよ。何もないうすよ。疲れてるだけっす」

アホな話には極力係わり合いになりたくない。こういう日は街まで出て、そこらへんの女の子に声かけて、一緒に酒でも飲んで帰るに限る。なんだか疲れて…ガツクリと肩を落として言う。

「僕もう帰っていいっすか？」

彼女はまだスプーンをクルクルやっている。と、ガチャンとカップを置いて、引き出しから一枚の名刺を取り出した。相変わらず汚い引き出しだが…彼女は目当ての物をさっさと見つけ出す。

「ん」

と、僕に手渡す。

「どうせお前…、今から新市街にでも行って…ナンパでもして、一杯引っ掛けて帰るのだろ？ホレ、ついでにここ寄ってみるといい」
名刺を見ると、そこには「易・浮揚相生館」と書かれていた。思わずリアクションしてしまう。

「なんすかこれ。胡散くせーっ」

彼女はまだカップの底をスプーンでクルクルしながら、僕の声のト

ーンを真似して言っ。

「胡散くせーってお前なあ…。ったく…これだから素人は困る」

彼女はやっとこさ、僕のほうを見た。スプーンはしっかりと回しつ
つも。

「フン…私とお前の違い、どこにあると思う？」

…彼女はマリ姉以上の仕事ぶりを誇る…社内でも指折りのキャリア
アウーマンだ。マリ姉を引き抜いてきたのも彼女だと聞いているし、
社長のお気に入り、現在最も将来が有望視されている社員でもあ
った。勤続年数が長い分だけ、マリ姉よりも性質が悪い…。僕が言
葉に詰まって、返答に手間取っていると、

「そこにあるんだよ。そ…こ…に」

ようやくスプーンから手を離し、僕が持つ名刺を指差した人差し指
を前後に振って、彼女は言葉を続けた。

運勢の不思議 vol.01 (後書き)

わたくしは占いはまったく信じてません。厄払いとかも行ったこと
ないです。。。だからか！

運勢の不思議 Vol.02 (前書き)

働きやすそうな人間関係の職場じゃないですか。

「私とお前の違いは、相生館に行ったか行っていないか程度の違いなんだぞ。…ま、ハナから何も信じてないお前には、猫に小判だったかもしれないがな」

僕はこういう科学的根拠がないものは、まるで信じない。溜息を吐いて言う。

「はあ…、でもまあ気持ちだけは受け取るとききます」

「気持ちなんてあるか。その名刺の裏を占い師の爺さんに見せれば、私の紹介だつてわかるから。その辛気臭い顔を一度見てもらつて、邪気払いでもしてもらつてくると良い。そんな顔じゃ、新年迎えられないぞ」

言つて、彼女はコーヒーを飲み干す。空になったコーヒーカップを逆さにして高く上げ、底を「んー??」と見ながら付け足す。

「その表情じゃあ、女だつて寄つて来ん」

僕は鈴木さんの言葉を背にしながら、編集室を後にした。

退社間際にマリ姉も声をかけてくる。

「守ちゃん!」

彼女は仕事を中断して、わざわざ僕のところまで来る。

「これ、よかつたら」

と言って、一枚の名刺を差し出す。なんだ今日は？お店の紹介推進デーかなんかか。などと思っ言っ。

「まさかしょうもない占いかなんかじゃ…」

彼女は(????)という表情をした後、口を開く。

「私がよく行く整体師さんの名刺なの」

「すごく効くわよ。疲れてる時にはこれが一番だっ！保険利くし」

と、手で揉み解す動作をしながら、屈託の無い笑顔でそう言っ、

「明日お休みでしょ??よかつたら行っってみて！」

と、続けた。正直体の疲れはそうでもないし、整体にも興味はないのだが、鈴木さんに比べて…彼女にはトゲがないので、素直にそれを受け取ることが出来た。

「おう、ありがとう！また行っってみるわ」

彼女は、

「そこは本当にお薦めよー、すっきりして新年を迎えられるといいわね！」

と言っ、仕事に戻っていった。

僕は女性二人にここまで心配されて嬉しくなったが、逆にそこまで参っているように見えるのか…と、落胆する気持ちも抱えて、会社を後にした。

外は雪が降っていて、薄っすらと積もっていた。

「…すごいなこりゃ…道理で寒いはずだ」

この熊本で、積もるほど雪が降るのは珍しい。僕は雪の上をサクサクと歩き、タクシーを拾えるところまで行く。

うちの新聞社は、熊本の中心街とは少し離れている。車で二十分くらい北に行けば、中心市街地に着くが、市電が通っている場所ではないため、タクシーで移動することが多い。JRの駅は近くにあるが、回り道な上に乗り換えの必要が生じるので、余計に手間がかかる。

熊本と言えば、田舎のイメージが多分にあると思うが、市内はそう田舎でもなく、市街地に出ればそれなりの人混みと雑多な建物が並び立つ、都会の街並みを目にすることができる。大学生の頃からことあるごとに街に出るは、遊んで飲みまわっていた僕にとってはもはや聖地のような場所だった。

「就職してから…行く回数はめっきり少なくなったからなあ…」

学生時分は、サークルの連中やゼミの友人らとよく飲み歩いた。今でもたまに会っては、街を飲み歩いたりもするが、その機会もけして多くはない。最近はおっぴら一人で店に入っては、居合わせた人と話したり、近くを歩いている女性を誘ったりして、飲んでは世間

話するのだった。ついでに言えば、下心がまったくないわけではない。が、成り行き次第で、という感じである。僕からがつくことはほとんどない。ただ単に人恋しいためか、気晴らしのために他人を誘っているのだろう。それに何より、見知らぬ人とその時一度きりの出会いを楽しむという行為が面白かった。この出会いは偶然だ。難破に限った話ではなく、話していて面白い人間、俗に言う気の合う人間と巡り合えるかどうかは、それこそ運次第だ。

タクシーが下通りに着く。僕は料金を支払って、タクシーを降り、アトラダムに街を歩く。夜は八時前というところか。年越しも迫っているためか、街からはいつもより浮ついた空気が感じられる。人通りは非常に多い。忘年会も多いだろう。

今日はどうしようか、店に行つて…そこにいる人に話しかけるか、それとも適当に誰かひっかけるか…。

アーケードの裏路地に出る。裏に出ると、一気に建物の並びがいかがわしくなる。適当に歩いては、適当な人物を探す。細い道路を挟んでの向こう側に、スタイルの良い茶髪の女性が現れる。…とても美人だ。どこかへ急いでる様子もなければ、誰かと待ち合わせている様子もない。

(…美人すぎるかな。…でもダメもとで声かけてみるか)

と思つて、僕は一方通行の片側から車が来ないかを確認して、通りを横切ろうとする。その時、

「ドンッ！」

僕は誰かにぶつかつて、その人を突き飛ばしてしまった。

「痛ったあ〜い…」

その人は尻餅をついて倒れてしまっていた。

運勢の不思議 vol.02 (後書き)

ナンパなんかおしません。整体にはよく行きます。

運勢の不思議 VOL・03 (前書き)

あずさが通る！の小説副題好きです。言葉の響きとか語呂とかが気に入っています。

「すみませんっ！」

反射的に謝る。

その人は女性：いや女の子だった。年の頃は二十歳前後だろうか：三十を過ぎた僕から見れば、子供のようにも見える。彼女は、かなり派手なルックスをしていた。ギャルっぽい服装で、下から、キラキラとしたラメの入ったサンダル、細身のブルーのジーンズ、アルファベットの豪華なロゴが入った白いシャツ、茶色の毛皮のごついコートを着ている。アクセサリーもたくさん身につけていて、サングラスをかけている。頭にはピンクのスヌーピーのキャップを深く被っていた。背中には赤いランドセルを背負っている。

なんだこの子は。それが彼女の第一印象だった。ギャルっぽい格好の割には、真っ黒のストレートヘアで、長さは顎の辺りまでしかない。こういうカツコなら、髪は茶髪か金髪で：パーマを当てたり、カールを巻いたりしてて：長さももつと長いってのが定番はずだけど：。ていうか、その赤いランドセルはなんなんだよ！と突っ込みを入れたくなるほど格好に合っていない。ランドセルと言っても、子供が持つようなものではなく大人用にデザインされたブランド物のようだ。どこかが符合しない：なんかとてもいびつなセンスだった。

そんなことを考えていると、彼女は僕の顔を「じいー」という擬音が聞こえてくる気がするほど見ていた。彼女は立ち上がって、お尻の辺りをパンパンッと叩いて、服や腕についた雪を払う。そしてこう言った。

「お兄さんっ、気をつけてよっ!」

どう考えても余所見をしながら通りを横切ろうとした僕が悪い。

「ごめん、本当にごめん、怪我はないかい?」

彼女は目の前で両の手のひらを見て、今度は「プンプンッ!」という擬音が聞こえてきそうな声で言った。

「手のひら擦りむいちゃったじゃないっ! たくもっ…今日は厄日ね。朝からろくなことがないワ」

今度は僕に「ピカツ」と擬音…いや、電球が光る演出が入るような考えが頭に浮かんだ。

(この子でいいや。この子を誘おうっ)

「ごめんっでは、本当に悪かったよ…。ええと、なんなら…お詫びに食事でもお酒でもご馳走するよ。僕ハラペコなんだよ。一人で食べてもつまんねーし」

彼女は一瞬…僕の顔を不思議そうに見た後に、ニツコリ笑って言った。

「ん〜。ま、いつか。お兄さん、悪人には見えないし」

「だろ? 悪人なんてとんでもない…お詫びの気持ちだよ。ホント」

と言いながら、

(まああわよくば最後までって感じだけど)

と思うと、彼女は腕組みをして首をかしげて、

「とか言っというて、実は下心あるんじゃないの？ホントは」

と返す。一瞬ドキリとした。すぐに気を取り直して、

「いや無いつて無いつて。とにかく行こうよ。お腹空いてる??」

と言う。彼女は、

「う〜ん。少しは空いてるかな」

言っ、て、お腹を擦る。

「まあいいや。丁度近くにお薦めの店があるし、そこに行こう。僕ハラペコだよマジで」

僕は彼女の背中を「ほらほら」と両手で押して、行きつけのレストランへ向かった。

レストランの中で改めて見て思ったが、かなり可愛い女の子だ。初めこそ会話のテンションが高くて戸惑ったが、彼女は根っから明るい人らしく、僕が話すどんな話題にでも話を合わせてくれる。話しやすいというか、聞き上手というか、親しみやすいというか…とにかく一緒にいて楽しい。少々お酒が入ったせいか、僕は仕事のグチから、学生時代の楽しかった話、家族の話、付き合った女性の話

までしてしまう始末で、喋り倒した自分に気がついた後で、少々バツが悪いほどだった。だが、彼女は嫌な顔一つしない。話もただ聞きっぱなしというわけではなく、適度なタイミングで相槌を打ったり、突っ込んだり、質問してきたりしてくれる。

「よかつたら場所を変えないかい？もつとお洒落なお店に行こう。今夜はとても気分がいいんだ。君は聞き上手だし、もっと美味しいお酒を飲みたい」

彼女は立て肘で…額の辺りに持っているグラスを傾けながら、屈託のない笑顔で返答した。

「いいわよ。正直言うと、私も今日は落ち込んでたんだー。午前中は変な人と会っし、友人だと思っってた人とは仲違いしちゃっし、彼氏には逃げられちゃっし…もう、散々な日。でも、最後であなたとぶつかったことだけは運が良かったみたいネ」

…運の良し悪しか。やはり誰もが思うことなのかもしれない。

「そりゃ散々だなあ。でもあるよな、やたらとついてないって言うか…運が悪い日ってさ」

僕は、昼間考えていたことを思い出す。様々な境遇にある他人と、今ここにいる自分との差。それを区別する運勢という不思議な存在。自分の力ではどうすることも出来ない事象の存在…。人の境遇の差は何にあるのだろうか。…と、考えて、重要なことに気づいた。まだ僕も彼女も名前を名乗ってない。僕はあわてて名を名乗った。

「ごめん、名前、まだ言っってなかったね。僕は高田守って言うんだ。よろしくな。君は？」

彼女は僕に合わせていた視線を、自分の赤いランドセルに移した。そして、ランドセルを背負って、店を出る準備をしながら言った。

「私はあずさ。倉下梓。こちらこそよろしくっ！」

と、右手を差し出ししながら、これまたテンションは高く、声は大きく、元気いっぱいに自己紹介する。僕たちは握手を交わした後、ショットバーへ向かうため、レストランを後にして夜の街へ出た。

運勢の不思議 vol.03 (後書き)

ちゃんとしたレストランとか飲み屋さんとかバーとか知ってる人は大人って感じがします。

運勢の不思議 vol.04 (前書き)

数年前に付き合いで超高級なバーに行った事がありまして、そこが今話のお店のモデルになってます。私が店に行った二日前には福山雅治さんが来店してたそうです。

夜の街と言うのは、どこも独特の雰囲気を持つ。昼間と違って、辺りは暗闇になるはずなのに、夜の街では人工的な光が飛び交い、道路や建物、看板やノボリ、通る人や車に当たって、乱れるように反射して…人工的な美しさを演出する。オフィス街では見られない着飾った人が溢れ、ほとんどの人が仕事から解放された…すっきりとした顔を見せ、楽しげに歩いている。行き交う人々の、昼間やオフィス街に見られる仕事中の表情との違いが積み重なって、町全体の雰囲気が変わる様を僕は知っている。

人々の会話と音楽がにぎやかに耳に入ってくるし、レストランや居酒屋の料理の匂いが鼻をくすぐる。学生の頃からこの雰囲気が好きだった。唯一羽を伸ばせるところ。それは梓ちゃんも一緒なのだろうか…、彼女も夜の街を通り過ぎる人々を見ては、楽しそうに歩く。もう随分長く見ていなかった、若者特有の無邪気さがそこにはある。そう言えば、僕は自分の話ばかりして…彼女の事を何も聞いてない。歩きながら、僕は彼女の事を聞こうとした矢先…彼女は、「ねえねえ！あれは何のお店??」

と、ネオンの看板を指差す。夜の街並みに興味津々といった様子だ。

「あれはあれは??」

と、気になったものを片っ端から指差して質問してくる。彼女が差した中には、いかがわしいものもあったが…一つ一つ差し障りのないように説明する。そうこうすると、行きつけのショットバーに着く。

「お、着いた着いた。ここは個室になってるし、落ち着いて話ができるよ」

と言って店に入る。彼女は建物をまじまじと見て、

「へー、なんか超高そう。お兄さんって、いつもこんなところに女の子連れてきてるんだ??すごいね〜」

と感想を言う。僕は店員から個室への案内書きを貰い、彼女に言う。

「実は本当に高いんだけどね、まあ遠慮しないで飲んで。あ、やっぱり少し遠慮して」

僕は笑いながらそう言う。個室の中には建物自体が別のものもある。今日案内された部屋は、受付の建物の裏側にあった。

「こっちだよ」

と、彼女を連れて向かう。歩いて一分くらいだ。

部屋に入ると、薄暗い照明が目映る。部屋の中に、純和風は日本庭園の名所のような空間がある部屋だ。席の後ろには、川のように流れて水が流れていて、水流の音も聞こえる。バーテンダーは若い女性だった。

「デートなんだ。彼女はとても飲めるから、強いやつを出してやってくれ」

と、颯爽と言う。…少々格好をつけて。彼女は何も言わずに、個室

の中をくるくると興味深げに見回しながら、

「甘いやつがいい!」

と、バーテンダーに向かって笑顔で言う。

バーテンダーの後ろの壁は、光がオーロラカイルミネーションのようにして、美しく映えている。テーブルは透き通るようなベージュで、冷たい石のような感触だ。緩いカーブを描いて、五、六人分のスペースはある。僕はさっき遮られてしまった質問を改めて、まだきよるきよると辺りを見回している彼女にする。

「梓ちゃんは何してる人なの?」

彼女はきよるきよるとしながら答える。

「私?私は受験生。浪人してるんだ」

僕は驚く。まさかとは思ったが…本当に子供じゃないか。

「学生さんだったのか。ちょっと待って、…受験生って?何歳?」

「二十歳だよ」

と、含んだ笑顔を見せて言う。

「なんだびつくりした…。未成年にお酒を飲ませて連れまわしてるのかと思ったよ」

「本当は未成年だけどね」

彼女はたった今出てきたカクテルを、チロチロと下で味見しながら言う。バーテンダーが聞き耳立てているのがわかる。そう言って、

「嘘だけだね。きゃはは、お兄さんの今の顔面白いっ!」

「とんでもない冗談は止しておくれよ…」

酔っ払ってるのか素なのか…よくわからん。僕は気を取り直して言う。

「受験生がこんな時期に遊んでいいのかよ。センターもうすぐじゃないか」

彼女は、カクテルの中身をコップの下から「んー」と見つめている。

「いいいいの。私くらいになると、この時期でも余裕なもんなにょ」

ろれつが回っていない。少し酔ってるなと思う。

「で、最近はどうなの?…今日はついてないって言ってたけど」

彼女は僕と目を合わせずに言う。

「ついてないよっ。全然ね!友人は私を気味悪がるし、彼氏は私から逃げようとはっかりしてるの」

と言って、カクテルをくい飲み干して呼び鈴を鳴らす。その話は

さつきも聞いたが…。奥から席を外していたバーテンダーが出てくる。梓ちゃんが未成年だと判断した彼女は、

（私は何も聞いていませんっ）

と言わんばかりに、カウンターの奥の見えないところに引っ込んでくれていた。

「お姉さんっっ！これ美味しい。もう一杯下さいっ」

と言う。彼女は、

「かしこまりました」

と言って、また奥へ行く。今は…梓ちゃん表情からは特に酔った様子は感じられない。

「お兄さんだつて最近ついてないんでしょ？私達、似たもの同士じゃん」

「そうだけど…」

僕は返答して思う。僕を構成してきた出来事は、一体どうやって作られたんだろう。たとえば、僕が…地元の新聞社に就職したのは地元で生まれた偶然のせいもある。特に地元から出て行く希望がなかった僕は、ずっと生まれ育った土地で暮らしている。生まれた場所が東京だったら、地元を出て行く気がない僕は、熊本日々新聞社に就職することはなかったであろう。つまり、現状の僕は、僕自身がまったく関与できない偶然という名の運勢に大きく左右されている。それは僕だけではない。この世に存在するものすべてがそうだ。

生き物に限らず…物体だってなんだってそうだし…。梓ちゃんが言う。

「私のこと放ったらかして、なに難しい顔してるのよ?? 人生の不条理さでも考えていたのかしら??」

しかめっ面をしてそう言う。いつの間にか…彼女はカクテルが注がれたコップを手にしていた。

「ご、ごめん。あのねえ…人生とか運って、なんなんだろうなって考えてた」

彼女はしかめっ面をしたまま言った。

運勢の不思議 vol.04 (後書き)

未成年の飲酒は法律で固く禁じられております。違反した場合は厳正に処罰されるべきでしょう。

運勢の不思議 vol.05 (前書き)

運ってなんなんでしょう。

「なにそれ??お兄さんって、占い師かなんかなの??」

「…それとも、口説きにいくための導入部だったりする??」

彼女は意地悪な笑みを作ってそう言ったが、僕の脳裏には、占いの連想で鈴木さんの顔が浮かんでいた。

「占いねえ。有名な占い師さんにでも見てもらったら、運勢が変わっていいことでも起こるのかな。僕たち」

言つと、急に彼女は遠い目をして言った。

「そんなのの意味ないわよ。ね?ね?人生って、どうしてそういう良し悪しがあるのだと思う?」

彼女は意地悪さを消した笑み…ニコニコして言った。

「だから、運次第ってことだろ。その人それぞれの。不幸な元に生まれれば、その部分は仕方ないっていう…。まさか、運命はあらかじめ定まっているとか、そんな陳腐なこと言うんじゃないだろうね?」

僕は茶化すこともせず、まじめに答えた。彼女は、

「まさか。定まってる人生なんて無いわ。それじゃつまらないもの」
すぐに返答する。僕も、

「だからこそ人生はつまらないんじゃないの？」

とすぐに返答した。

「あはははは、それもそうだよねー。ふふ、でもそれじゃ悲しくない？なんで人生はつまらないんだと思うの？」

彼女の持つ印象が変わった気がした。レストランで話したと時の印象とはだいぶ違う。どこか：自分より年上の人と話しているような感じだ。お酒のせいかな？

「ま、悲しいけど仕方ないねえ。事実つまらないんだから。つまらないものはつまらないさ。僕は普通にこのまま働いて誰かと結婚して、子供でも生んで、老後はやりたいことでも見つけて静かに過ごす。その中で何か幸せを見出せば：それでいいんだろ？要は」

そついうと彼女は、

「それって素敵ね」

と言つて、カクテルを飲み干して呼び鈴を鳴らす。

「おねえさんっ もう一杯くださいっ

彼女はすこぶる上機嫌だ。そして言う。

「でもね。それができるかどうかも運次第じゃない。お兄さんが言った普通って、確かに一般的な人生よ。でも、お兄さんに一般的な人生が送れるとは限らないんじゃない？お嫁さんが超金持ちで、結

婚直後に親が亡くなって…遺産全部貰えちゃったりする可能性もあれば、それこそ明日交通事故で亡くなっちゃう可能性だってあるわ」

彼女はバーテンダーからカクテルを受け取り、

「ありがとう」

と言い、僕のほうを見て両手を合わせて、

「なんまいだー」

と言う。カクテルの色が違う。さっきから違う感じのお酒を要求しているようだ。

「縁起でもねえ…でもそれはその通りだよ。今の話は極端な例だとしても、結婚できるかどうかわからないし、子供ができるかどうかわからない、できても離婚するかもしれないし、子供も病気で亡くすかもしれない。それこそ可能性は無限にある。それこそ運次第だ」

言って、…思う。それじゃ僕はどうしたらいい？人生は定まっていなくても、こんなんじゃ生きてても生きている気がしない。僕の意志というのは、僕の人生に左右しないのか…。まさか、そんなはずはない。さっきの僕の就職の話で言えば、僕には地元を離れないという意思がそう強くはないにしても確かにあった。だから今ここにいるわけだ。

…その時、彼女は僕の眼球を通して、まるで心の中まで入り込むような…鋭い視線を送りながら言った。

「そう、すべては運次第。じゃあ人はどうすべきなのか。それが問題なの。ひよっとして、お兄さんってばまだ自分の手で人生を形作ることができるなんて…思っただけ？」

彼女は呆れたような顔をする。

「ど、どういうこと？」

僕は思っていたことを言い当てられて、思わずギョツとした。

僕の意味は…僕の人生に関係しない？

「お兄さんの考えはいい線までいってるわよ…それに気づいて悩む人もいれば、気づかずに一生を過ごす人もいる。気づいても受け入れずに人生を送る人もいれば、受け入れて、さらに先に行く考え方を手にする人もいるワ」

…言っで、またカクテルを飲み干して呼び鈴を鳴らす。

「おねえさんっ　おかわりっ　今度はとろけるようなヤツでっ！」

バーテンダーが出てくる。梓ちゃんは言葉を続ける。

「人生はね、自らの思考には左右されないの。どういうことかわかる？お兄さん。…自らの思考、意思というものそのものが、他からの強い影響と干渉によって成り立っているのよ。…よく運命は自分の手で掴み取るとか言うけど…そんなの嘘っぱち。自分の手では切り開けないからこそ、運命って言うの。自力で切り開けるのならそれは運命でなかったってこと。普通にその人に許されていた事柄

なのよ」

「わかる？お兄さんが今いる環境は、あなたの意思によって作られたものではないの。ここには私の意志やこのお店の意思、お店にいたお客さんの行動、その他沢山のものに影響されて存在しているのよ。逆に私がここにいるという事柄は、私の意思によっては創られていない。あの時…お兄さんが追っていた黒髪の女性が、一つ気分でも変えて他の道を通っていれば、もうこの瞬間は存在していなかったものになる。それほど…ここにある瞬間というものは…儂くて脆い…」

よく話す。物凄いマシンガントークだ。…と思いながらも、話に聞き入る。いくつかの疑問が頭を過ぎる。話はまだ続く。

「で、お兄さんの疑問は…じゃあ自分はどうすればいいのかってことでしょ？」

僕は、瞬間ドキリとして…彼女を真剣に見据えた。

運勢の不思議 vol.05 (後書き)

縁起思想は宗教とか関係なしに普通に当たり前のことだと思つので
すけど。あれって宗教なんですかねえ？

運勢の不思議 Vol.06 (前書き)

お酒もバカ騒ぎも好きではないですが、ショットバーなど静かで落ち着いたところで話をするのは大好きです。

「自分がやることなんて簡単よ。捨てればいいだけ。認めればいいだけ。受け入れればいいだけ。…簡単でしょ？」

言って、カクテルの注がれたカップを、揺れる照明に当てて遊んでいる。

僕は、彼女なら…僕の疑問すべてに答えてくれるような気がした。学校の先生に聞いてもはぐらかされた質問、本や偉い人の話から学ぼうとしたが得られなかった答え、自分で考えに考えたが答え合わせが出来なかった真実…。彼女なら、それらのすべてを教えてくれる気がした。

「お店にいたお客さんの行動って…どういうことだ？」

と問う。彼女はすんなりと答える。

「??だつて先にこの個室にいたお客さんが、もう少し長くいれば…私たちがここへは来られなかったわ。ここへ来られなかったなら…ここにある今は無い」

「なぜ僕が通りの向こうの女性を追おうとしたって…知ってるんだ？」

と問う。彼女は間を開けずに即答する。

「?そんなの見ればわかるわ。本当は彼女を誘うつもりだったんでしょ?でも、私にぶつかっちゃったもんだから、この子でいいや」

って思つて、私を誘つた」

言つて、

「こんのお〜っお兄さんのうわきものっっ！〜！」

と言つて、笑つてグラスをぐいと飲み干す。もちろん呼び鈴を鳴らして、バーテンダーに追加を頼むことも忘れない。

「なーんてね きゃははっ！〜！」

…驚いた。僕は嫌な汗を流しながら、

「捨てればいって…何を捨てるんだ？」

と問う。次はこう質問されると…わかっていたかのように、彼女は即答した。

「執着。物事にこだわる気持ちを捨てるのよ。だつてそつでしょ？
万事はすべてが他から与えられるものよ。それに自分がこだわって
どうするのよ。執着するだけ無駄じゃない」

「でも、僕はこだわりたいし、人は執着するものじゃないのか？」

…彼女はまたも即答する。

「もつっ！ここまできて何言つてるのよお兄さんっつ。だからあ〜
〜そのこだわりたいと思つ気持ちこそが、他からの影響を受けて成
り立ってるものなのっ！〜！」

今度はオレンジのカクテルを頼んだ彼女は、「はい」と言っ
僕にオレンジとスクイザーを手渡す。

「絞って」

と、僕の腑に落ちた表情を見て満足げに言う。

僕はオレンジを絞りながら、色々と考える。そうか…、これこそ
が他からの影響だ。僕は彼女に頼まれたからオレンジを絞る。彼
女が頼まなければ、オレンジを手にすることはなかった。僕が絞る
ことを否定したとしても、その否定する気持ちは、彼女の話の聞い
たことよって…起こるものだ。それは僕の意味でありながら、中
身は他からの影響で構成されている。

自らの意思とはこうも空虚で…がらんどんなものなんだと気づく。
そして、その意思は他の存在と事象という…無限の要素で埋め尽く
されている。僕は最後の質問をする。

「教えてくれ、これを受け入れて…これのさらに先にある考え方っ
てのはなんだ？さっき言ってたろ！？」

だんだんテンションが上がってくるのが自分でもわかる。逆に彼女
は冷静に言った。

「ふふふ、知りたい??」

「頼む…！」

僕は彼女の方を向いて頭を下げた。彼女は笑って、

「教えてあげない」

と言った。僕は、

(なんでだよ！)

と思っただが、自然と笑いがこみ上げてくる。それは彼女が言ったことが可笑しかったからでもなく、彼女が笑っているからでもない。それは彼女の言ったことを理解した自分が、あまりにも清々しく感じられたからだだった。まるで、鳥かこの外から無限の空へ飛び立っていく鳥のように…僕は、心が解放されたような気分だった。

店を後にする。支払いは三万円近くになった。もちろん全額出したが…山ほどお酒を飲んだ彼女は、最高にいい気分のように見える。若干の千鳥足で僕の前を歩く。

「じゃあ、私帰るわ〜」

と、言っているが…僕はもう少し、彼女の話が聞きたかった。もっともっと詳しい話が聞きたいし…できれば、さっきはぐらかされた質問の答えも聞きたかった。

「なあ、帰りはタクシーに乗せてあげるから、もう少し話していいかないか？今度は喫茶店でも入ってさ？」

とは言うものの、下心はもう一寸もない。あるのは…彼女の中にある人生の真理だ。僕は彼女の思想を、これこそ真実だと思って受け入れていた。もはや目の前にいるのは年下の酔っ払い少女ではない。僕を導いてくれる光だ…とまで感じている。彼女は、

「もう一件ん??…なあに?お兄さん、私を太らせて食べようって魂胆??」

あれだけの飲酒量、非常に高いテンションにもかかわらず、僕は何故か彼女があまり酔っ払っているようには見えない。笑いながら返答する。

「いやいや、本当に話がしたいだけなんだ。…さっきの話、本当に…なんとか色々思うところあるし」

彼女は微笑んで言う。

「お兄さんは…半分は自分で気づいていたわ。私はお兄さんの背中を押しただけ…どーんって」

と言って、

「もう遅いし帰るわ」

と付け足す。僕はもう一度粘ってみた。適当な場所を指差して言う。

「じゃ、じゃあ、あそこに行ってみよう。あれ!」

改めて自分で指を差した看板を見ると…そこには「易・浮揚相生館」と書かれている。…なんか見覚えのある文字列だ。記憶を振り絞る…。

運勢の不思議 vol.06 (後書き)

マスコミ関係ともなりますとさすがに高給取りなのか、三万円の支払も苦になっていないようです。流石です。

運勢の不思議 vol.07 (前書き)

占いにも資格とかあるそうですね。知人のお母さんが占い師をされてました。今思えば詳しくお話を伺えばよかったですなあ。

(…これって…鈴木さんが言っていた占いのお店じゃないか。こんな裏路地の微妙な場所にあったのか…ますます胡散くせーな…)

などと思っていると、彼女はその店の前で、掃き掃除をしていたお爺さんをサングラス越しでじーと見ている。なにかあれば…いつもそれを凝視してるな…この子は。彼女の視線に気付いたお爺さんが話しかけてくる。

「今日はもう終わりだぞい」

僕は彼女が立ち止まっているのをいい事に、

「さ、入ろう入ろう」

と促し、爺さんには、

「最後に何とかお願いしますよ〜ホラ、紹介状だって持ってますし」

と、鈴木さんから渡された名刺を、財布の中から出して見せる。爺さんは少し怪訝な顔をした後、すぐに陽気な顔をして、

「おーおー、洋香嬢の知り合いか！どうじゃ？あいつ…相変わらずのポインちゃんか??」

なんだこのジジイは…と思いつつも、話を合わす。

「…そ、そりゃもうもちろん。簡単になくなったりしませんよ。ああいうのは」

梓ちゃんが聞き耳を立てて、ピクリと反応する。彼女も胸はそこそこあるように見えるが…。

「なによボインって！！？まさか、お兄さんも私の胸、パットだって言っんじゃないでしょうね？？たくもっ…今日は本当に失礼な一日だワ…。どいつもこいつも…」

と、ブツブツ言っている。爺さんが言う。

「じゃあ、一つ見てあげるよ。遠慮せんと中に入りんさい」

そして耳打ちする。

「あのおなごの、ありゃパットじゃ。実際はAカップと見た。わしが言っんだから間違いないぞ」

と言う。

「……」

絶句した僕を尻目に、当の梓ちゃんは胸を隠しながら、

「聞こえてるわよ爺いっつー！…！…！…たくもっ…こんなことだったら普通にしくんだったわ…」

などと言っている…。結局、僕達は占い屋に入ることになった。

中は少々薄暗いが、先ほどのバーほど暗いわけではない。中央にある丸いテーブルには大きい赤い布が被せてある。壁にも赤い布が全面に掛けてあり、薄っすらとした照明と、テーブルに置いてある蠟燭の光とが交じり合って、赤の色が部屋中に響き渡っている。壁の料金表まで赤基調で、爺さんの服の黒以外は、ほとんどのものが赤で統一されている。テーブルには香炉も置いてあり、匂いも雰囲気も独特のものがあつた。

「もう長く人相を見ておる。大船に乗つたつもりでいんさい」

爺さんはテーブルの向こうの椅子に腰掛けて、ゆつたりと座り込む。

「洋香嬢はずいぶん古くからの付き合いだ。…いいヤツだ。あいつはな」

言つて、（…お掛けなさい）と、僕のほうを見やる。

特に見て欲しいわけでもないが…これも僕の人生にある運勢というものだろう。素直に掛ける。梓ちゃんは…よほど気にしてるのか、まだ胸の辺りを擦りながらブツブツ言っている。彼女は丁度、僕の右後ろに立つような位置関係である。

爺さんはテーブルに両肘をついて、顔の前で手を組んでこう言つた。

「わしのやり方は…少々変わっている。が、なんてことはない。ただ話を聞いて、人相を見て話をするだけだ。なんでもええから適当に話してみい。過去の話、仕事の話、恋愛の話、人生の話…なんでもええ」

僕は丁度良いと思った。梓ちゃんも会話に入ってくるかもしれないし、先ほどに関連する話題を振ろうと思って言う。

「いや、人生に悩んでいたんですよ。人生の運勢というものに」

爺さんはすぐに、

「人生に運勢などありません。すべては他との係わり合いで生まれるんだ」

と、バーでの梓ちゃんの言うことに通じそうなことを言う。

当の彼女は、テーブルを覗き込むようにして爺さんを見ているが、深く被ったピンクのスノーピーのキャップとサングラスのせいで、その表情は読めない。僕は、

「そうなんですよ」

と、つい先ほどバーで二人で話した話をする。爺さんは、

「ふんふん」

と、特に話の腰を折ることもなく、相槌をつく以外は黙って聞いていた。そして、話が終わると言う。

「兄さんや、そりゃこのお嬢ちゃんの言うことは正しいぞい。…いやはや、この老齢になって、こんな辺境の地で真実を話す人間に巡り合うとは…長生きもするもんだわい」

言って、

「兄さんは特に悩むこともあるまい。たった今そうしてるように… 今日気づいたことを深く心に置いて… 時を過ごしていけばいいだけじゃの。何も臆することはないわい」

と続ける。僕はそんなに安心した… 悟りきった表情でもしていたのかな。

「…これもあんたの方が言う運勢というものだろうの。どれ、嬢ちゃんが兄ちゃんに教えてくれなかった最後の答えは… わしが教えてやるうかの」

運勢の不思議 Vol.07 (後書き)

実はこれ「人間観察」編の午後の話なんですよね。変なところで凝ってみました。

運勢の不思議 vol.08 (前書き)

厭世的な人は昔から多くいますが、何か中国日本に多い印象がある
んですよ。アメリカやイギリスの方なんて隠遁生活とか絶対しな
さそうですが、ただの偏見なんでしょうかねえ。

「他からの干渉を受け入れた先にある思想とはな。…それは拒絶か感謝のどちらかだ」

梓ちゃんは感心した様子で、ピユウと口笛を吹いた。彼女のリアクションでその答えが正しいとわかる。

「拒絶か感謝??」

僕は食い入るように爺さんの顔を見る。その意味を知りたかった。

「簡単なことじゃわい。他の干渉を受け入れてしまった人間はじゃな…、それを自覚してすらいない…すなわち自らの意思に捉われてしまっている周囲の人間に嫌気をさせて世の中…つまり自分が認識する世界を拒絶するわけじゃな。逆に感謝とは、他の干渉が、今の自分の認識する世界を創り上げていると感じて、自分以外のあらゆるもの一切に感謝をして、余生を過ごすというわけじゃ」

「…最もこれは多くある例のうちの二つに過ぎん。兄ちゃんが今夜気づくことが出来たように、世の中にはたくさん…兄ちゃんと同じことに気づいておる人はおる。そういう人らのほとんどは、拒絶か感謝を後の人生で行うことになるもんだわい。もちろん例外もあるがの」

話は続く。

「…昔のう。聖なる君子という、とても優れた人間と話したことがある…。彼は盲人であったが、それを一切感じさせない人であって

な。聖人君子と世間で謳われておつて、沢山の人に自らの思想を教
えておつた。門人には子供も大人も男も女もおつたが、中には政治
家や軍人、大学教授などもおつた。最高に頭の切れる人物だったの
う。もちろん彼も若いうちから、兄ちゃんが言つた運勢の不思議に
ついては気づいておつた。…彼は基本的に拒絶の立場であつたが、
永い時に渡る思慮の末に、それでも…それでも人と係わり合いたい
と結論付けて、死ぬまで自らの思想を弟子に説いておつた。…これ
も一つの答えじゃ。執着を捨てて、他からの干渉を認めて受け入れ
ながらも、敢えて人に思想を説くことで、他の存在を良くしようと
思つた。…このように受け入れた後に、なお執着を掴み得んとする
者もある。答えなぞ…数限りなくあるものなのかもしれんのお…」

僕はただ…この爺さん、このスケベ爺さんの話を心の芯から聞いて
いた。

「誰しも若いうちは…夢や目標を持って生きるもんじゃ。だが生き
ていけば、いずれすべての人間の夢や理想は、他からの干渉に淘汰
されて消え去ってしまう。たとえ成就されたとしても、それは他か
ら頂いたものであつて、自らをして得たものではないということを知
る。こういつたことは、気づこうと気づくまいと、誰しもに起こ
ることだわい。僕にも、兄ちゃんにも、嬢ちゃんにもな」

「夢や目標か…」

僕は遠い昔の学生時代を思い出していた。夢や目標があつただらう
か…。少なくとも今はない。他からの影響によって淘汰されたか…
それとも他からの影響によって、初めから発生しなかつたのか。爺
さんは、

「わしなぞ未だに目標を持つたままじゃ。そろそろ淘汰されて欲し

いもんだが。わしの人生じゃ…まだまだ淘汰の時は来んな」

僕と一緒に黙って話を聞いていた梓ちゃんが口を挟む。

「ふふふ、その年になっても欲ってあるのね」

爺さんは言う。

「心は永遠の十八歳だからのう。わしのような凡くらでは、執着は到底捨てきれんわい。ほっほっほ」

そして続ける。真剣な表情で。

「時に嬢ちゃん。あんたも見てあげよう。…久しぶりに真理に触れたせいか、年柄もなく興奮してきよったぞ」

彼女は笑って返答する。

「お爺ちゃん、…これもきつとあなたの運勢ね。…あなたが長く望んでいたものが…見れるといいわね」

言って、帽子とサングラスを外す。

僕は(???)という心境、爺さんは心なしに緊張して戸惑っているようにも見えるが…、赤基調のこの部屋では、細かい表情までは読み取れない。梓ちゃんは、

「はい、お爺ちゃん」

と言って…僕の右横から体をテーブルまで持っていく。

彼女は両肘をテーブルについて、あごを両手で支えて…爺さんと目を合わせる。近い。爺さんとの距離は数センチだ。爺さんが息を飲むのがわかる。彼は、

「…じ…じりゃ…」

と言い、彼は絶句した…。大変に大仰な間を空けて、唾をゴクリと飲んだ爺さんは、

「……想像していたよりも、全然ベツピンさんじゃねえか!！」

と、笑いながら大声で言う。梓ちゃんも笑って、

「うふふ、お眼鏡に違って嬉しいわ。お爺ちゃん」

と上機嫌だ。僕は二人のやり取りを(???)と、不思議に眺めていることしかできなかった。

店を出ると、夜風はさすがに冷たい。辺りをしきりに降っていた雪は、今もすっかりと路面に積もっている。これほど降るのは本当に珍しいことだ。爺さんは、営業時間外だったにもかかわらず、

「とても面白い話が出来たから代金はいらんよ」

と言って、サービスしてくれた。僕と梓ちゃんはタクシー乗り場へと向かう。

「とても面白かったわ」

言って、梓ちゃんは足早に夜の街を歩く。彼女は相生館に入って、爺さんと話をした辺りからむこう、特に酔っ払っているようには見えなくなっていた。

(覚めるのが早いタイプなのかなあ…)

僕は彼女をタクシー乗り場まで送っていく。彼女は、

「お兄さんのおかげで…今日は最悪の一日にならずに済んだ。…礼を言うワ」

「ありがとう、ご馳走様」

と、にっこり微笑んでそう言う。そしてタクシーに乗り込みながら、まだ話を聞きたげな僕の顔をじっと見て言う。

運勢の不思議 Vol.08 (後書き)

梓さんも一応見た目は可愛い設定をお持ちです。

運勢の不思議 vol.09 (前書き)

どんな人でも生きるといふ事は難しいとか、人生ってなんなんだろ
うとか一度は考えるところです。哲学的な悩みは人の性ですよ
ね。

「あのお爺ちゃんは言わなかったけど…何も難しく考えることはないの。捨てることも受け入れることも、そしてその先へ進むことも、決して難しいことではないわ。…よく生きるってことは…たったそれだけのことなのよ」

言って、

「いい？ 惑わされてはダメ。他からの影響は、ものすごく直接的なこともある、間接的なこともある。それを見破る必要もなければ、備える必要もない。ただその瞬間瞬間を…よく生きるだけよ」

そう付け足した。

僕は黙って彼女の言葉を聞いている。まるで尊敬して止まない恩師の言葉を、丁寧に傾聴しているかのごとく、僕は彼女の言葉を一言一言噛み締めて聞く。

「また、会えるかな？ もっと沢山の…生きるための話がしたいんだ」
彼女は微笑して、

「それは…あなたの運勢次第だワ」
と言った。そうして静かに…タクシーは夜の街を出て行った。

運勢…なんて不思議なものだろう。人はそれを理解こそ出来るが、自由に操ることは出来ない。僕は梓ちゃんや占いの爺さんが言った

ことを思い返しながら…しばらく雪下の夜の街を歩いて…酔いを覚ますようにして、帰途に就いた。

大晦日。毎年のことだが、僕の部署はてんやわんやの大忙しだった。だが、僕には先日までのような失態はない。マリ姉が僕を見て言う。

「守ちゃん、なんかふつきれた???すごい頑張ってるじゃない!!」

「なんか顔が生き生きしてるよ。こないだとは別人みたいになっちゃって〜」

と、僕の頭をナデナデとする。

「おいっ、先輩に向かって、それはないだろ」

顔が赤くなるのが自分でもわかる。次の日には、彼女が紹介してくれた整体師のところにも行ってみた。彼女が名刺を渡して、紹介してくれた事柄も、他からの干渉のうちの一つだと思っただからだ。

僕は、爺さんが例として教えてくれた答えとは、少々違った答えを出していた。僕の答えは、拒絶でも感謝でも…執着の再取得でもなかった。…僕の出した答えは…虚無である。僕は他からの干渉を素直に受け入れて、それに従うべきであれば従う、従うべきでなければ従わない。…そう、自分自身があるままであり続けること、干渉に対しての虚無の心…を決心したのであった。まあ、あれこれ考えず、あるがまま、なるがままに生きるということだ。この単純さと簡単さが僕らしいと思っ、結構気に入っている。

おそらくは梓ちゃんは…僕の答えよりも何歩も先に行く答えや考え方を持つているのだろう。しかし、その答えは人それぞれだ。皆さんの言った通り、答えは数限りなくあるのだと思う。拒絶と感謝は大きいとはいえ、一例でしかないはずだ。だからこそ、彼女は…答えまでは僕に教えなかった。…そう、答えは人それぞれが出すものだからだ。梓ちゃんの答えは、彼女のものでしかない。僕にも彼女の答えが適合するとは限らないのだ。

僕はそこまで考えて、なんという思慮の深さだ…と思った。思い返せば、初めて会った時から…何かがおかしかった。僕が黒髪の女性を追っていたことも見抜いていたし、こちらの質問を測ったかのように…遮られたこともあった。何か心を見透かされているような…と思う瞬間もあった。

…すべて計算されていたのかもしれないとまで思う。ひよっとして…彼女は僕と同じく、非常に運勢の悪い一日を、良い一日へと清算すべく、それをできる人間を探していたのではないか??そしてそれができるであろう僕を見つけて…ぶつかつた。しかし、それを確認する術はもうない。僕は彼女の連絡先すら知らない。…急に、

「バシツツ!!」

つと後頭部をはたかれる。

「痛い!!」

と、素直に感想を口に出すと、後ろには鈴木さんが立っていた。

「このたわけが。文字通り年末で忙しいってのに…なに一人でブツブツ言ってるんだ?」

「UFOでも呼んでいるのか？それともなにか呪文でも…」

はいはい、と彼女の言葉を受け流す。すると、彼女は神妙な顔つきで僕に言った。

「ときに高田」

「はい？」

と、返答する。この人がこんな表情をするのは珍しい。

「あの日、相生館へは行ったのか？」

と云う。

「あ、はい？…行きましたけど」

そう返答すると、

「そうか、混んでたか？他に客はいたか？」

「いや、店閉める直前だったんで…他にお客さんもいませんでした
が…」

言うと、彼女はさっきよりも何倍も神妙な顔つきで僕を覗きこむ。

「…最後の客？…まさかお前が…まさかなあ…？…？」

なんか小バカにされた気がして、少々ムツとして問う。

「なんすかもう…何かあったんすか？」

彼女は腕組みして、首をかしげて口を開いた。

「それがなあ…。昨晚遅くに、相生館の爺さんから電話がかかってきてな。…あの爺さん、店を畳んだと言っておつてな。お前が店に行つた日が最後だったそうだとぞ」

僕は驚いて聞き返す。

「えつつ！？…そりやなんでまたそんな…？」

彼女は僕を見ずに、考え込むような素振りを見せたまま続ける。

「実は、私はあの爺さんとは子供の時分から知り合いでな…」

子供の時分て…、気持ち悪いくらい長い付き合いだなあ…と思うも、話は続く。

「爺さんには夢があると言うか…、占い師をしているのには、目的があるのだそうだと。…その目的なんだが、なんでも人間でありながら、人間以上の神だか悪魔だかの存在とうものをこの目で見る…というものなんだ…」

彼女は至って真剣に言う。

運勢の不思議 vol.09 (後書き)

オカルト好きの鈴木さんですが再登場予定アリです。彼女が大好きな本格オカルトの話も予定アリです。登場はしませんけども。

運勢の不思議 vol.10 (前書き)

偉人の人ってやたら厳格というか雰囲気あつたりしますもんねえ。
神が悪魔かというの大げさですが、行動一つ一つがやたらと堂に入
つてる人いますよ。見たい気持ちわかります。

「はあ、なんすかそれ？」

思わず突っ込む。が、彼女に特にふざけた様子も見せず話を続けた。

「神か悪魔と言っても、非現実的なものではないんだ。彼は、そう呼べるほどに…人でありながらも、人を逸脱した思想を持つ人間の相を見るのが、人生至上の目的だった。…それを目にすれば、店を畳んで隠居する…。それが余程であれば、死んでもいいと口癖のように言っていた…」

言って、続ける。

「もちろん物理的にはただの人間だ。オカルトな話ではない。とりわけ、そのような優れた思想を持っていて、善事を行うのが神、悪事を行うのが悪魔ということになる。彼は一度だけ、それほどの才覚を持つ人間に触れたことがあるらしいのだが…、もう一度そのような人間を見つけ出して、その顔を見てみたかったのだろうな…」

僕は思わず言った。

「え…でも、店は閉めたんでしょ？ってことは、そういう人物を見たってことっすか？」

彼女はまだ僕を見ずに、考え込むような素振りで言う。

『そうなるな。爺さんは「わしゃ目標を果した。もう死んでもいい」

と、笑いながら言っていたよ。彼が見た人物は…相当の代物だったのだろう』

「はあ…」

僕はなんか…狐に抓まれたような思いで仕事に戻った。爺さんは僕と梓ちゃんが来る時、店を閉めていた。あの後…お客さんが来たとは思えない。その後、店とは別のところで、神だか悪魔だかの人物を見たのだろうか…。いや、まさか…やはり…。

梓ちゃんが微笑している顔が頭に浮かぶ。彼女の顔つきと、話した感じを見た爺さんは…彼女から何かを感じ取ったに違いない。神か悪魔かと呼べるほどの思想や才能…。

だが、それは僕には関係のないことだった。運勢からなる他からの干渉が、僕を形作るというのなら…それは僕が好んで知りたがるものでもなければ、好んで遠ざけることでもない。機があれば、また真偽を確認できる時があるだろうし、なければ…僕がどう動こうと知れるものでもない。すべてはなるようになる。すべてはあるがまま、ありのままでよい。…これが、今の僕の出す結論だった。

「…ていうのが、ついこないだの僕の不思議体験っす」

あれからまた数日が過ぎた。僕は会社の新年会の場にいる。お酒を飲みながら、不思議体験を話すという場に僕はいた。鈴木さん主催の飲み場は、不思議体験話がお約束である。新入社員などは特に、不思議体験話を強制させられるのだ。

僕は昨年まで、整理以外の部署や、大阪に行っていたこともあつ

て久々だが、昔はずいぶんと話を強制させられては「ツマラン！」と、頭を小突かれたものだ。いつものスーツ姿の鈴木さんに比べ、ドレスアップした姿のマリ姉が感心した様子で感想を言う。

「それは不思議ねえ… 人生の考え方も面白いけど…。その女の子は、結局何者だったんだろっかね？今はどうなってるの？」

僕は言葉を詰まらせた…。もちろん、あれから梓ちゃんとの再会は果せていない。熊本には大手の予備校は少ない。実はつい先日、予備校生という言葉を手がかりに、大手予備校の周辺に行って彼女を探してみたりもしたのだが…、彼女の姿を見ることは一度もなかった。

今では僕は、彼女のことを…直接的な他の干渉そのものとして捉えるようになっていた。それほど、あの晩の出来事は僕にとって印象的だった。今でもくっきりと鮮やかに彼女や爺さんと話した一言一句が思い出せる。

「あれ以来会ってないしなあ…。どうなったかも知らない。受験生だからさ、今頃必死に勉強してるのは間違いないんだけど…」

「へえ、受験生ねえ。志望校が他府県だったら…もう会えないかもしれないね」

と言って、マリ姉は焼酎をぐいと煽る。彼女はうわばみである。飲めないわけではないが、彼女よりは若干酒に弱い鈴木さんが言う。今回の僕の話は面白かったのか、頭をはたかれない。

「へえ、爺さんが店を閉めた晩にそんな話があったとはねえ。興味深いな。ってことは…そのなんとかって子が、神か悪魔ほどの才覚

を持った人間だった…ってことになるのではないか？可能性はあるな…」

言って、

「コラ高田、お前なんで今まで黙ってた！」

と頭を小突く。…結局、はたかれる運命になった。

「いや〜もうこんな取って置きの不思議体験は、鈴木さんが楽しめる…こつこついう場のために温存しとかないといけませんから」

言って、僕はニツコリ笑う。彼女はたじろいで言う。

「お前…、いつの間にか一皮も二皮もむけおって！私をそう攻めるのか！」

と言って、また僕の頭をはたく。

「ちょっと、洋香！そんなにポンポン守ちゃんの頭はたかないですよ！」

マリ姉が彼女を制して言う。

「コホン…じゃあ、次は私の晩ね。今日は新人さんがいるから、私も取って置きの話するわ！」

僕はまたあの話が…と思う。鈴木さんが言う。

「真理の話ってまたアレだろうか？猿のお面つけた変態にナイフで

刺されたっていうやつ…不思議体験じゃなくて恐怖体験じゃないか…」

鈴木さんはもうその話は聞き飽きたよ、と言わんばかりに退屈そうな顔をする。僕とこの人の意見が一致するというのも珍しい。マリ姉は鈴木さんの言葉を無視して、新入社員と新しく整理に入ってきた人に向けて言う。

「違うのっ、お猿のお面の人は私達を助けてくれたの！」

と、真剣な眼差しで言う。

「あーもうそれ聞き飽きたっ！！」

聞き飽きたと主張する割には話の筋を覚えていない…。この人は基本、人の話を聞かないし、やたらと結果や論点のみを聞きたがる…細かい箇所は聞き流す性質だ。

(のくせ、話を強要するとか…ほんつとタチの悪い人だな…)

そう思っ…眉をしかめる僕を尻目に、鈴木さんは畳に寝そべって手足をばたばたさせている。ガキかあんたは。しかし、新人はとても興味深そうにマリ姉の話を聞いていた。

「なんかもうすでに面白そうじゃないっすか。なんすか??猿のお面って…」

などと感想を言いながら。

…話が始まるお膳立ては整ってしまった。こうして夜は更けてい

く。夜とともに、僕の人生も過ぎ去ってゆく。運勢によって、僕は梓ちゃんや爺さんと出会い、今の僕の思想に出会うことができた。そして運勢によって、今ここ…熊本日々新聞社において、マリ姉や鈴木さんを初めとする、気が合う同僚にも出会えた。

…僕は運勢の不思議を感じつつ、出会った運勢に感謝した。

あれから数年…。色々あったが…年を取るにつれて、最近是他からの干渉に感謝する思想に移行しつつある。虚無の先に…感謝の思想があつたのだと思っている。僕も大方の例に漏れず、多数派の思想を抱くようになったわけだ。

どこかしらで若い女の子が、カクテルをぐいと飲み干す姿を見ると、僕は梓ちゃんを思い出す。そしてあの時、彼女に出会えるよう影響した様々な他からの干渉に感謝して、しっかりと今ある幸せを噛みしめるのだった。

運勢の不思議 Vol.10 (後書き)

今話も読了有難う御座いました！また次話でお会いいたしましょう！

白の江戸ガタ V O I . 0 1 (前書き)

今話も宜しくお願い致します！

…生きることは辛いこと。初めてそう感じたのはいつだった…かなあ？…人なら誰でも感じたことがあると思う。人生には色々な種類の苦しみや悩み、悲しみや痛み、厳しさや世知辛さが…すぐたくさん…たくさんある。その生きる辛さや、痛みは…人によって絶対量が違うのだとも思う。

ものすごく、ものすごく…わたしなんかよりも、よっぽど不幸な人もいれば、ありえないほどの幸せに包まれた人生を送る人もいる…残念ながら…、わたしの人生は…きつと後者じゃない…。

最近のわたしの頭の中は、生きることへの恐怖でいっぱいになっている…。いずれ来る寿命が尽きるその時まで…必ず続くわたしの生命…。それが長ければ長いほど…、わたしは痛んで磨耗してしまうだろう。体は生きていても…頭の中は死にかけている。…わたしは今、切にそう思う。どんな人間であろうとも、自分の未来はわからない…。わたしは、小さな生き物が、高い高い崖から転落してしまうのかのような人生を送って…そして、最後はどうなってしまうのかな…。

生き抜く元気もなければ…自殺する勇気もない…。ただ…海の上にポツンと浮かぶ板キレのように…わたしの周りの状況…波と風のように存在する…周囲の状況に流されて、そこにいるだけ…。いや、そこにいるだけならまだいい…わたしは、この存在すら否定されて、学校でも…家でも…生活のすべてのせいで…擦り減って傷んでいた。

人は他人より上位に立つことで、ある種の優越感を得るそうだ。私は人よりも優れていると…私はあの人間に勝っている…と、そう

考えて、自らの正当性と存在意義を主張する…。または、ただ単に虐げる行為…を楽しんでいるだけなのかもしれない。わたしにはその感覚はまったく理解できなかった…。だからこそ的にされたのかもしれない。ここ一年で…わたしは数々の虐待、イジメを受けて…今や、自分で自分自身を憎むほどになっていた…。

「…なんで…わたしって…わたしってこうなんだろう…」

「…わたしは…何もできないのるま…」

「…自分では何も解決できない、しようとするしてない…」

「…ただ一人で泣いて悲しんでいるだけ…最低な弱虫…」

「…みんながわたしを嫌うんだ…大元の原因はきつと…わたしにある…」

わたしは…学校からの帰り道を足取り重く歩きながら…周囲の人がそうするのと同じ要領で…わたし自身を貶す。…生きるってなんだろう??…みんなみんな…こんなに辛いことを…平然とこなしてるなんて…すごい…。トボトボと歩きながら、わたしは素直に感心した。

わたしが通う熊本高校は、県内屈指の進学校で、トップの三十人ほどは東大京大一ツ橋を狙えるほどの成績を保っている。…残念ながらわたしは…そこまでの成績は持ちえていないのだけれど…なんとか授業にはついていけている…そんなくらいだった。わたしの学校生活の対人関係は、わたしをいじめるクラスメイトと、それを傍観するクラスメイト、見て見ぬふりをする教師で構築されている。

「ちよつとルツクスがいいからつて…調子に乗んなよッ！」

クラスメイトの吉永さんが、わたしの両肩をドンと突いて壁際に追い込む。…わたしは何も言い返せず、何も抵抗できずに…されるがまま、というのが日常だった。同じくクラスメイトの楠本さんが、わたしのペンケースとその中身を、辺りにバラバラと振り撒いて言う。

「理科室に行く前にキレイに拾ってからおいで」

いつものことながら…こんな有様を目前にすると、（泣きたくないつ！）って意志とは相反して、ぼろぼろと涙が出てくる…。無視されたり…教科書や筆記用具を捨てられたり…体操服や靴が無くなったり…悪口を書いた手紙が回されたり…靴箱やロッカーにゴミが入っていたり…彼女たちは息をするかのごとく、日常的にわたしを虐げる。

持ち物が無くなつては理不尽だと思い、顔をぶたれる度に、痛みと苦しみを感じる…こんな心中にありながらも…わたしはこのような行為に関して、どこかしら客観的だった。

それは…わたしがわたしを憎みつつあるという、今の内心のせいなのかもしれない。はじめのうちには…この意図も目的もわからない行為に対して、抵抗してみたり…担任の先生に相談してみたりもした…。けれども…そうしたところで、事は解決されるどころか…こうついた弱小な抵抗手段は…必ず倍になって、わたしの元へと返ってくるのだった。

こうして、無意味で弱い抵抗を繰り返しても、状態は悪化するだけ…ということを身体で理解したわたしは、いつも木偶の坊のよう

に突っ立って…その猛攻に堪えていた…。

そんな中で…唯一、わたしのかけがえのない友だちに…相談することだけは、効果があった。吉永さんや楠本さんが、わたしのお金を取ったり…エッチな事を強要したり…法に触れるようなことを強要したり…そこまでのいじめは行わない理由は二つある。

一つは事が表面化して大事になり、進学に響くことを恐れて…それでもう一つは…わたしのただ一人の友だち…わたしの存在を支えてくれる人を恐れていたことだった。

彼女は、真っ黒で長い…ポニーテールをひるがえして…長くてスラッとした足で、ずかずかと教室に入ってくるや否や、席に座っているわたしの足をコツコツとつま先で蹴っている吉永さんの胸倉を掴んで言った。

「いつまでもガキみたいなことやんないでよねッ！正直目障りだし！」

彼女は、ほんの数秒前までわたしを虐めていた人たちを、軽くひねるように一瞬であしらって…涙目のわたしを見て…目が覚めるような笑顔になる。そして…細くて綺麗な手をわたしに差しのべて、

「大丈夫??朱里?」

と、わたしの安心した表情を確認しながら言った。

「う…うん、文ちゃん…ありがとう…」

慌てて笑顔を作って…わたしは答えた。彼女は辺りに散乱する筆記

具を拾いながら…まだ頬に涙が残っているわたしに明るく言う。

時代の流れと共にいじめの内容も変わっていくそうです。今は携帯電話などが使われるそうで。昔あった「くくさん無視な」など書かれた紙を回したりしていたのが、今はメールになったりしてるんじゃないでしょうか。子供には異常な残酷さがありますけど、あれなんなんでしょうねえ。

白のヒトガタ vol.02 (前書き)

朱里さんはルックスから家族環境まで非日常のものを持っているのですが、心は至って常人なんですよね。精神力もしたたかさも持たない普通の人間が、普通でないルックスや人生を持つとどうなるか、というのがテーマだったり。

「はい…、これで全部よね!？」

彼女は、吉永さんに踏み壊されたシャープペンの破片まで拾ってくれた。辺りに散らされただけでなく、ほとんどの筆記具は踏み壊されていた。

「あの連中…今度はもっとキツクお灸を据えなきゃいけないよね!」

言って、そばの机に置いてあったカバンの中のペンケースを取り出して、シャープペンを出した。

「ほい、これ使いなよ」

さも…当り前のように…彼女は自分の物をわたしに差し出す。

「でも…文ちゃんのは??」

「何本もあるから大丈夫よ」

彼女は笑ってそう言う。

「…ごめんね、文ちゃん…いつもいつも…」

文ちゃんは少しだけ照れた様子の後、はにかんだ笑顔で、胸をドン!と叩いて答える。

「なんのこれしきつ!!」

そして、

「私は朱里を一生守るって心に誓ってるんだからっ!謝るのは…あんな狼藉者を追い払えてないわたしの方よ」

と苦笑して…付け足した。

味噌天神前…という市電の乗り場から、電車に乗って帰る。ここ熊本市は、熊本県の県庁所在地…熊本といえば、九州にある片田舎というイメージしかないかもしれないけれど、市内は九州でも第二の都市で…交通や建物、人口もそこそこのものだ。

…わたしは、市内でもっともポピュラーな公的交通手段である、この市電を利用して学校に通う。わたしが降りる、家最寄の停留所までは数十分…この時間…高校に入学したときは物珍しくて、景色を楽しんで見てたのに…。今目に映る景色は、その時のものと同じとは思えないほど…色艶が無くなっている…。

「…心の持ち方次第で…見え方も…変わる…」

わたしはそんな台詞をブツブツと一人言いながら…日が落ちて、薄暗くなった帰り道をトボトボと歩く。

昔のわたしの父は厳格だった。大学が持つ研究所勤めだった父は…、科学者と呼べるような職業だったけど…、一年ほど前のある日を境に、徐々に…堕ちていった。…父になにがあったかはわからない。

幼い時から見続けてきた…厳格で頼りげのある父の姿は、ある日突然に消えかけて、それから日に日に薄れていった…。そして…こ半年で、おおよそ廃人か、精神に異常をきたした人だと呼べる…そんなレベルにまで達した。

研究を止め…仕事を辞め…酒を飲んで…わたしや兄に暴力をふるい、拳句の果てには、意味不明な言葉を発しては、狂ったように暴れる…。そして、いつの間にか動作は鈍くなり、徐々に…徐々に…布団の上にいる時間が増えて…そうこう言っている間に、自分の力での食事や、トイレに行くなどの日常の生活動作さえ…出来なくなってしまうた。その様は…外見は父であっても、中身は父ではない者なのではないか…とまで思わせた。

…母は、父のその姿を見てか、今後の人生を考えてか…、まさしく消えるように…蒸発した。母が行き先も告げずに消えたその頃…父はおそらく、母の存在を認識できていなかっただろう…それから数カ月経った今…わたしや兄を認識できているかどうかも定かではない。彼は、まるで大きな赤子のようで…成人が持ち得るであろう…すべての常識を放棄していた。

そんな父の姿を見る度に…生きることの辛さと、生命の理不尽さを実感する。わたしが高校に入学したとき、心から喜んでくれた父の姿は…ほんの…一年とちょっとの時の間に消えてなくなってしまうた。

あれほど正常であった家庭を、意味も…主だった原因も与えることなく粉々に破壊してしまう…。まるでそれが夢幻であったかのよう…儚く消してしまう…。生きるとは、人生とはこれほど無慈悲なものなのか…と思わずにはいられなかった。

こんな生活の中にも…慰めの要素はいくつかあった。看護学校に通う兄は、口癖のようにわたしに言った。

「ああなつても、他の何者でもない僕らの父さんなんだ。僕が、父さんもお前も面倒見てやる！だから僕が卒業するまで、二人で頑張るっ」

「朱里、もう少しの辛抱だよ。僕が学校を出て病院に勤めたら、父を入院させて、そして、お前を大学に行けばいい」

兄の存在と、兄が事あるごとに口にする未来への希望の言葉、そして…親友である、文ちゃんの気持ち…わたしの心を大きく癒したこの支えがなくなったら…わたしはとつくに朽ち果てて、今頃お墓の下だ…と、考えただけでも恐ろしくなる…。

「きつと…わたしもおかしくなっちゃった…」

学校からの帰り道…ポツポツと独り言を言いながら歩いている…。
ようやく家の前に着く。

玄関のドアを開けると…父の叫び声が聞こえた。

「あばううぶ！…ぶるぶつつたい！…やいたい！…！」

父は起きている間は、常に…声が枯れんばかりの大声で叫び続ける。当初は…まだ意味がわかるような言葉を発していたけど…、今となつては…その言葉に意味がこもることはない。

近くに来る人間をみんな敵だと思つのか…食事、更衣、排泄、入

浴…と、日常動作すべてに助けが必要で…その際には、彼からの暴力が一緒になる。わたしや兄は…実の父に殴られ、蹴られながら…彼の世話をして生活していた。唯一の救いは、父が研究所勤めの時に貯めておいた…かなりの額のお金があるということである。兄は、「このお金がなかったら、一家心中するしかなかったよ…」

と言っていた。わたしたち兄妹は、この貯金を切り崩しながら…日々を質素に送っていた。

家に帰ると、父をなだめながらも食事を用意して、自分が食べながら…父にも食べさせる。それが終わるころ…兄が帰宅する。兄が父の下の世話をを行い、体を湯で濡らしたバスタオルで拭いている合間に、わたしがお風呂に入って…あがったら、父を寝かしつける。兄はそれからお風呂に入って勉強する。炊事や洗濯が終わったら、わたしは疲れて横になる…。これが放課後の…わたしの家庭の日常だった。

食事はまだいい。少々の記憶が残っているのか、空腹の感覚があるのか…父は比較のおとなしくて…食べ物に乗ったスプーンを口の前に置くことで、それを食べてくれる。

しかし、兄が行う…下の世話と体拭きは…難航すること極まりなかった。とにもかくにも暴れるので、兄は体中にいくつものアザを作りながら、父の世話をした。兄は、

「朱里は女の子だからね。アザつけたり、ケガさせたら…誰よりも、父さん自身が悲しむよ」

と、何一つ不平不満を漏らすことなく…この不遇から、わたしを守

った。

このような運命の仕打ちに弄られながらも、わたしは兄が愚痴をこぼすのを聞いたことがない。この兄の強さがわたしの心をも強くした。

（わたしは弱いけど…せめてお兄ちゃんの…ほんの何十分の一くらいは頑張ってみせる…）

兄が負けじとこの境遇に立ち向かっている様を見てると…少々の辛さや痛みは無かったことにできるのだった。

…そう、兄の強さと文ちゃんの優しさが…今のわたしの生命線。兄がわたしの学校での状況を知ったら…絶対にさらなる負担を強いることになる。…文ちゃんに、お父さんのことを言ったら…絶対に余計な心配をかけることになる。そして、必ず二人ともわたしを氣遣って、無理するに決まってる。

兄が自室に入る音がした。

白のヒトガタ vol.02 (後書き)

性格や考え方が普通なだけに気遣いが空回ったり、決断力が鈍く見られたりしています。あと、可愛い子は可愛い子なりの悩みがあったり。

白のヒトガタ vol.03 (前書き)

最近では看護師の地位もかなり向上したところで嬉しい限りです。次は
介護士の番なんでしょうが、介護士の社会的地位の向上は難しいで
しょうねえ。

(お兄ちゃんは…これから看護学校の勉強するんだ…)

そう思つて、わたしも今日の授業の範囲だけでも…と復習しようとする。けど、小一時間程度で…わたしは一日に疲れきつて、布団に横になった。

わたしは真つ暗な部屋の天井を見上げる。そこにはいくつかの星が見えた。文ちゃんの、

「蛍光塗料を紙に塗つてね、それを星の形に切るんだ。そして天井に貼るとさー、星空を見ながら眠れるんだよ。今度、朱里の部屋にも作つてあげるね」

という言葉思い出す。

わたしたちが中学校に上がる時の…彼女の話。わたしは未だに…この小さな星空を見上げながら、寝入るまでの数分間か十数分…考え事をする。…と言つても、最近の考え事は一つしかない。生きることの辛さと、痛みのこと…。

…どうすれば今の状況を打開できるのか、解決できるのか…それとも、ずっとこのままなのか…なんてことを考えてたのは、もうずいぶん前…。今は、生きるって…なぜこんなに辛いのか…、なんでわたしはこんな状況になつているのか…、人は誰でも…こんなに苦しい人生を送っているのか…そんなことばかりを考えている。

……そしていつの間にか…すーっと落ちていくように寝入る。こ

んな人生でも…この時だけは心地良い。

(…このまま消えていって…ずっと楽になればいいのになあ…)

…なんて考えながら。

朝起きると、わたしは身支度をして朝食を作る。兄はギリギリまで寝てるので…父と自分に朝食を食べさせながら…兄に、

>おはよう！朝ごはん置いておきます、お父さんよろしく！<

と、置手紙をして家を出た。夜と同じく…食事はわたし、排泄は兄が行う。昼食時は、松橋に住む叔母が世話しに来てくれるおかげで、わたしたち兄妹は、午前中も午後も学校にいらることができた。

わたしが朝一番に向かう場所は…文ちゃんの家。彼女は幼馴染で、ご近所さんなこともあって…もう十年以上もこうしてきた。文ちゃんの家のお玄関に着くと…今日も大きな声で言う。

「あーいやーちゃんっつ！おはよーっ！」

一、二分ほどで、彼女がドタドタと出てくる。これも小学校の時からこうで…わたしの日常だった。

「おはようっ！あかり！！」

彼女はわたしの手を取って、市電の乗り場まで走る。

「…そんなに急がなくても…大丈夫だよっ」

わたしのこの言葉も毎度のものだった、彼女は走りながら、息をついで言う。

「朝つてさ、走らないと！朝つて感じが、しないっつ！！」

わたしは笑つて、彼女の後をついていく。そして、市電に乗る。文ちゃんと一緒だと…市電の中から見える朝の情景が…まるで…わたしが想像し得る世界の中で…最良のものであるかのように映える。そして、他愛もない話で通学の数十分が消える。通学の時間…、それは…わたしは何も考えない、何にも捉われない、何も憂わない…そんなひと時になる。

しかし…それも束の間、文ちゃんとは校門をくぐったところで別れる。彼女とはクラスが違う。わたしたちの高校は、一年生と三年生は…校舎が二か所に分かれていて、わたしたち二年生は、校舎が三つにも分かれている。わたしたちは校庭で別れて…別々の校舎に入る。文ちゃんと別れて、トボトボと教室まで歩いてみると、誰かが後ろから…わたしのふくらはぎを蹴った。すぐにわかる…吉永さんだ…。

「濱北さーん、おはよう」

ニヤニヤとした笑みを浮かべて…何度も何度もふくらはぎを蹴りながら、彼女は言った。

「…吉永さん、おはよう…」

小声で挨拶を返して、わたしは教室まで歩く。後ろから両足を交互に蹴られながらだけど…わたしに抵抗する強さは無かった。

吉永さんや楠本さん達は、授業の合間でも授業中でも…先生の隙を狙っては、なにかと嫌な事をしてきた。お昼休みや放課後は、文ちゃんが来てくれる。文ちゃんはとても強気で…実際強いので、彼女がいる時は、吉永さんたちもわたしに手を出せないでいた。

…でも、授業の合間の休み時間に受ける嫌がらせは…徐々にエスカレートしてきている…。教科の先生によっては…学校の先生なのに…わたしを罵倒したり、吉永さんらに味方するような行動をとったりする先生もいた…。

静観するクラスメイトの中には、わたしがいじめられている姿を見て、笑っている人もいる…。いじめに加担する人もいる。見て見ぬふり…この事態は完全に無いもの…見えていないものであるかのように振る舞う人もいた。…いつも思う。みんなが見て見ぬ振りしてくれたら、少なくとも体の痛みはなくなるのにな…。こうしてまた…非平凡な高校生活の一日が平凡に終わる。

父の世話もあるわたしは、放課後は生徒会の役員として…学校のお仕事をする文ちゃんを残して、一人で帰宅する。小学校や中学校の時は、わたしも生徒会の役員をやっていた。…正確には先生の申し出を断れなくて…しかたなくやっていた…やらされていたって感じだけど…。

市電に乗って帰宅すると、父の叫び声が聞こえる。父の病状も変わらず…、悪くなることはあっても、良くなることはないとお医者さんから聞いている。いつもどおり、父に食事を取らせて、掃除と洗濯をして…兄の帰宅を待つ。その間もずっと…父は叫び続けている。

今日は食事の際に、手を思いつきり噛まれて…それを外そうとした時…強く蹴られて、頭をしたたかにテーブルに打ちつけてしまった…。噛み跡から血が滲む…。

白のパンガタ vol.03 (後書き)

「…」「や」「」が多いのは朱里さんの鈍間さや優柔不断さを演出しているのですが、鬱陶しいとすこぶる不評です。

朱里さんはまだいいんですよ。お父さんの貯金があつて。お兄さんがいて、文さんがいますので。それすら無いと話として助かる道がないので登場させているのですが、現実はそのうわけにもいきませんよねえ。

体に痛みが走る瞬間、その瞬間だけ…あたしは父にも、吉永さんや楠本さんにも…怒りや憎しみといった感情が出てくる。でも、それが…抗議や反撃といった…次の行動へ繋がることは今まで一度も無かった。それは、良識や我慢がそうさせるのではなくて…ただ単に、そうするだけの勇氣と行動力を持っていないからだ…わたしはわかっていた。そして、その意気地の無さを自覚したとき…その自覚が、自己嫌悪の種となったのもわかった…。

もしも…わたしがすごく気が強くて…空手とか柔道を使えるような…そんな強い人だったら…怒ったときに、父や、彼女たちに対して…暴力を振るうのだろうか…。そういう力をまったく持ち得なかったわたしには、いつも…、

(寝たきりになって…静かになって…動かなければいいのに…)

などと…考えるべきではない恨み言が…心に浮かぶ。

わたしは目を伏せて…顔を振って、その思いを即座に打ち消した…しかし、兄こそ心中はわからないが…わたしや叔母は…彼の世話に、ほとんど嫌気がさしていたのも…本当のことだった。

わたしは、自分のこの弱さのせいで…血縁の愛情すら守れないんだ…と、それも自己嫌悪に転化させて割り切った…。こうして、文ちゃんや兄といない時の…わたしの思考は、生きる度…日々を過ごす度に痛んでは…静かに悲鳴をあげて、刻々と擦り減っていった。

精神だとか…心だとか…そう名付けられた…物質的にはありえな

い部分は、この現状から目を背けて、逃げ出そうとするかのように…現実を拒否していた。そして…それが、わたしの内に秘めている望みなのだと…、わたしが切に願っている想いなのだと…わたしはこの日に…初めて自覚した。

少しずつだけど、確実に…精神は、日々に摩擦されて擦り減っていった。わたしの生活において、日々を過ごす中心となるのは、言うまでもなくわたしの心だ…。その心が摩擦して消えていってしまったら…その果てはどうなってしまうんだろう…。

「???それって、わたしという心はどうなってしまうのかなあ…」

夜の自室…天井の星空を見上げて、ポツリと言う。日々の生活の疲れのせいかな、最近はどこかしら…何か調子悪い。眩暈がしたり…立ちくらみがしたり…耳が聞こえにくくなったり…朝、目覚めが悪かったり…視界がボヤけて、白くなったりする。体も重いし、やたらと寒気を感じる…。なかでも、視界が霞がかかったように白くなり、物や人が薄っすらと…白く揺れるように見える感覚は…一際顕著だった。

「我ながら疲れてるなあ…寝れば…治るかなあ??」

と、どこか気楽に構える。…そしてスッと寝入る。この瞬間が幸せなのは変わらない。

今日は…まるで電源を落としたテレビのように、プツンと切れ落ちた…深い眠りについた。

わたしにとっての悪いことが、少しずつエスカレートしていく以

外は何も変わらない。判で押したような日々を繰り返す…。吉永さんや楠本さんは相変わらず…。わたしをいじめているし、わたしが泣きそうになると、文ちゃんが助けしてくれるのも…。同じことだった。家に帰ると、叫んで暴れる父を介抱するのも…。同じことである。…何一つ文句も言わず事を行う兄と一緒に…。

繰り返される非日常的な日常…。わたしにとっての異質な日常…。望んでいない日常…。苦しみと痛みを伴う日常は…。この日、更なる進化を遂げることとなる。

異常というものは、いつでも人間のそばにある…。すぐそばに…。それに出遭わないからといって…。決して遠くにあるなどと思ってはいけない…。そんな考えはきつと…。傲慢な思い上がりか、無知による勘違い…。そう、この日…。わたしは異常と出遭った。

椅子に座っている…。わたしの足を踏みつけて、グリグリと体重をかけて踵を回す…。そして、吉永さんは言う。

「一緒に遊んでるだけじゃん」。そんな悲しそうな顔しないでよ」

楠本さんも、明後日の方向を向いていた顔をわたしに近づけて言う。

「トモダチじゃん？わたしたち？なんでそんなに嫌がるかなあ…。？ねえ？？」

言って、笑いながら近くににいるクラスメイトに同意を求める。有無も言わさない質問口調に、傍観しているクラスメイトは逆らえずに頷いて…。わたしを見て笑った。

…その瞬間、わたしの目の錯覚が…明らかに現実のものとなる。
わたしを見て笑っている男子生徒の姿が…人の形をした白のシルエ
ットのように見えたのだった。わたしは一瞬目を丸くしてそれを見
直す。…しかし、それは何も変わらない。

「ヒトガタ…???」

まるで…神社のお祓いかなんかに使うような…薄っぺらい紙のヒト
ガタのようだ…。白のヒトガタは、目と口の部分を笑みの形で穴を
あけて、わたしをじっと見据えている…。目をごしごしと擦る。吉
永さんが、バットののように大きく振りかぶった辞書をわたしの頭に
打ちつけた。

「なに無視してんだよオメー」

あまりの勢いに、椅子から転げ落ちる…。床に四つん這いになって、
もう一度振りかぶり…。第二撃を放とうとする彼女を振り返ると…
彼女は普通に見えた。高くから威嚇してくる辞書に怯え、思わず、

「…む、無視はしてないけど…」

と返答する。彼女は、

「うっせー、お前はしゃべんなって!」

と言って、もう一際強く辞書でわたしの背中を叩き落とし、脇腹に蹴
りを入れる。

随分と細くなって…今にも途切れてしまいそうな息の線を…なん

とか取り戻そうと…整えて、さっきのクラスメイトを見る。彼の姿は…普通だった。わたしは(?????)という気分に陥って…徐々に強くなっていく痛みと息苦しさを消す方に集中した。

それが初めての事で…それ以来、白のヒトガタは事あるごとにわたしの前に現れる。それは、吉永さんであったり、楠本さんであったり、学校の先生であったり、クラスメイトであったり、叔母であったり、すれ違う他人でも…そう見える時がある。

わたしを見ては…あざ笑うかのようなシルエットを縁取る…白のヒトガタは、文ちゃんと兄以外は誰でも…そう見えるようになった。

日々を過ごすうちに、白のヒトガタは…誰かがわたしを見下してバカにしたり、憐れんだりするときに…その姿となって現れるのだ…理解した。文ちゃんと兄が…白く見えることはないし、他の誰でもが…ほとんどわたしを見るタイミングで…白いシルエットに見えるから、そう思ったのだった。

教室に行くと、白のヒトガタがこぞって…わたしを迎え入れてはあざ笑う…。わたしが…それを拒絶するように目を背けると…きまつてその数は増えていくのだった。

精神的なコンディションが五感に影響を及ぼす事があるそうです。まあ五感自体が精神的と言えますから、密接な関係にはあるんでしょうね。酷くなるとまさに精神障害という言葉通りの症状になるのですが、いったい患者さんはどこまでの認識を持っているのでしょうか。

白のヒトガタ vol.05 (前書き)

ヒトガタって元々は何のために使うものなんでしょうねえ。儀式と
かですかね。

…わたしは、この異常を受け入れるしかなかった。わたしの根底にある想いは…文ちゃんと兄に迷惑をかけたくない…一緒に生きていくうえで…足手まといにだけはなりたくない…というものである。

わたしは、白のヒトガタをはっきりと目にしながらも、

「…錯覚だ…これはただの錯覚だ…」

と、見えていないふりをする事で…毎日をなんとか過ごさせていた。

こうして…いくつかの日々を過ごす。…兄には隠せていたが、…文ちゃんは、いち早くわたしの異常に気付いた。彼女は…最初こそ、幾分かしつこくわたしに、

「???何かあった?…朱里??」

と、何度も何度も聞いてきたが、わたしがその都度、

「ううん…なんでもないよ…」

と答えるので、最近は何も言わない。時折…何かを考え込むかのようになっているけど…わたしと話す時は、常に明るく接してくれる。

放課後…トボトボと歩いて帰途につこうとするわたしを、後ろから…追い越してしまいそうな速さで走ってきた文ちゃんは、わたしの首元に抱きついて話した。

「やつほー、朱里っ！！」

「???…文ちゃん、今日は生徒会…いいの??」

彼女は満面の笑顔で答える。

「うんっ！最近、付きつきりだったからね。たまにはサボるんだー」

エヘヘと言わんばかりの笑みでそう言って、

「一緒に帰る！」

と付け足す。つられてわたしも笑顔になった。

「…うん！」

文ちゃんとわたしは、市電に乗って…花園という地域まで帰る。

…途中で、熊本市の中心街である上通りと下通りを抜けて、熊本城を前にする…。そして、交通センターを横目にして、市電は進む。

市電の中や街の中…数々の人が行き交う中で、わたしたちもそれに混ざって、この世界を構築する。数多の…白のヒトガタは、文ちゃんの背景にいて…わたしを笑っている。わたしはそれを目にしながらも…ヒトガタから目を逸らして…それらを無視した。文ちゃんが言う。

「…明日ヒマ???…日曜日だし、街に買い物にでも行かない??」

言って、続ける。

「お昼くらい奢るよ〜」

(…お父さんのことがあるし…お休みだけど、あまり外へは…。でも、二、三時間なら…どうかなあ???)

などと考える。

日曜日や祝日は、兄と二人で父の世話をする。…兄に頼めば…少しは外出できるだろう。街に出て…たくさんの白のヒトガタを見るのは嫌だけど…気分転換の時間も欲しい…。それに、文ちゃんと街に遊びに行くのは久しぶりだった。中学生のころは、何度も遊びに行ってたけど…。高校になってからは、お互いに自分の時間が必要なため、その機会は失われがちだった。

「うん、いいよ!」

わたしは笑ってそう答える。文ちゃんは「やった!」と聞こえてきそうなほどのガッツポーズを握って、応える。

「じゃあ、二時に新市街のマックでいい??午前中は…少し学校に用事あるんだ」

わたしもその方が都合がいい…。一時くらいまで父の世話をして、兄と交代して出てくる。

(うん、それならお兄ちゃんに負担が掛かりすぎることもない…。そうしよう…)

と、思う。

「…うんっ！」

わたしは素直に喜んだ。わたしの笑顔を見て、文ちゃんも顔がほころぶ。二人してニコニコして…家に帰るのだった。

兄は快く承諾してくれた。

「うん、家がこんなだから…朱里にはいつも迷惑かけてるけど…なるべく普通に生活して欲しいし、文ちゃんと遊びに行くのも、久しぶりだろ？半日と言わず、一日中だっていいんだよ」

兄は父のおしめを交換しながら言う。わたしは手を振ってそれを制す。

「ううん、半日でいいの。それに…お兄ちゃんだって、全然お友達と遊びに行ったりしないじゃない…。わたしばかり…お父さんの世話も楽なのばかりだし、…半日でも悪いよ」

わたしは率直な気持ちを声にした。兄はそれでも…わたしを気遣ってくれる。

「いや…本当は、僕がもつとしっかりしなきゃならないんだ。学生って立場のせいで、朱里や叔母さんに迷惑かけてるけど…。でも、今年で学校も卒業だし、病院で働くようになったら、父さんには入院してもらって、朱里には普通に暮らしてもらうんだ。それまで、もうしばらくの間は迷惑かけるけど、もう少しだけ我慢してほしい」

わたしは兄のいつもの力強い言葉を聞きながら思う。

(学校でのことも…白いヒトガタのことも…言えない…。わたしが

…自分で解決しなきゃ…)

…そう思って、静かに言った。

「わたし…迷惑だなんて思ってないよ。お父さんのことは仕方ないじゃない…。わたしはお兄ちゃんのおかげで…毎日楽しく過ごせてるし、お兄ちゃん…いつも無理して…お兄ちゃんの体調だって…心配だよ」

兄は笑って答えた。

「ははは、大丈夫大丈夫！僕は何ともないさ。でも、気持ちはありがたく受け取っておくよ」

彼は笑いながらも、申し訳なさそうに言う。

わたしは…兄や文ちゃんに重荷ばかりを背負わせてるのに…それなのに、生きる苦しみや辛さに直面して、挫けてばかりいる。でも…あの白いヒトガタは…今にもわたしの意識を飲み込んでしまおう…。どうすれば…どうすれば…解決できるのだろう…。白いヒトガタだけではない。眩暈や立ちくらみ、聴覚が遠く霞んでいくような現象も…日に日に回数も強さも増していつている…。もちろん、吉永さんや楠本さんの行為も、父の様態も良くなることはない。

部屋に戻って、天井にある白い星空を見る。そして…考えてみる。

白のヒトガタ vol.05 (後書き)

両親の介護は本当に苦痛だそうです。高齢化社会の問題は根深いものがありますよ。

寝入る瞬間ってなんであんなに気持ちいいんでしょうね。これ頑張ったら絶対今日寝入る瞬間気持ちよくなる！とか日中に思ってた頑張れる時さえあります。

(きつと…きつと、あの白のヒトガタは…わたしをあざ笑う他人の気持ちが…生み出すものなんだわ…)

(…だからお兄ちゃんや文ちゃんや…お父さんが、白のヒトガタに見えることがない…???)

(じゃあ…わたしが笑われないような存在になれば…消えるはず…)

(そうすれば…吉永さんや楠本さんにも…いじめられずにすむはず…)

(…でも…どうやって…???)

…心に数々と浮かべていた思考も、徐々に薄れてゆき…、眠る世界へと落ちていく。その寝入る瞬間の幸せを感じる暇もないほど…わたしは参っていた。どんどんとエスカレートしていくいじめ…難度を増していく父の介護…原因がわからない体調不良…兄や文ちゃんに迷惑をかけたくないという焦り…具体的な解決策が見えて来ない現状…そして、いまや…ほとんどすべての人間を通して姿を見せる白いヒトガタ…。様々な現象がわたしを襲い…総じて生きる苦しみとして…その姿を形成していた。兄と文ちゃんの支えをもつても…それに耐えきれぬ限度というものが…徐々に露になってきていた。

わたしは思考の切れ端の中に、そんなことを考えた。…思考の切れ端…この絶望の淵には、生きる苦しみに押し潰されて…このまま消えてしまいたい…という想いがあり…もう一方の思考の切れ端…

希望の縁には、文ちゃんと兄の力を借りて…生きる苦しみを…なんとかやつつけて、もがくように生き抜いてやる…という想いがあった。

しかし、それはもはや…思考の切れ端だけの話ではない。絶望の淵にあった想いは、わたしの思考のほとんどを覆うように支配して…切れ端にあるものではなくなっている。…そう、それは白のヒトガタの出現と同時に、わたしの意識と思考に襲いかかってきた。

一方の希望の縁は、とても薄弱なものであった…。文ちゃんの優しさと兄の支え…もあつたが、それに助けられて起こるわたしの心の強さも…もはや消え入りそうなほどであった…。

覚醒しているのか、入眠しているのかわからない…何も見えない、何も聞こえない、何も話せない…金縛りにあっているような感覚の最中…わたしの思想は、生きる苦しみに押し潰されてしまったと確信する…。思想のなにもかもを整理して…出した結論は…、

「もはや何も抵抗できない、決して逆らえない…。わたしはわたしを救えない…」

というものであった。

それを声に発したが…そのように行動できているのかどうかを確認できない…夢か現かわからない…。身体が利かない…

（わたしはどうなってしまったんだろう…わたしはどうなってしまったんだろう…）

泣きながら…たぶん泣いているのだろうという感覚を持ちながら…まだ思考している。最後の思考の内容は…

(この苦しみの果てには…何かあるのだろうか…)

という疑問だった。

「…り!…あかり!!?…あかりっ!!」

目が覚めると…そこには兄がいる。

「???…お兄ちゃん??」

朝…。わたしはずいぶんとうなされていたらしい…。

(…夢…だったの??…夢っていつか、難しい考え方みたいなの…そんな…)

わたしは顔を洗って…身支度をして、父の世話をしながら…兄を見る。彼は何の気なしに医学の専門書のページをめくって、そこにある文字列を読んでいる。…そこには気丈な兄の姿が見える。…少しだけ希望の縁が蘇った気がした。

…が、たった今、ふと異常に気づいた。その瞬間…耳が遠くなり…何か耳鳴りのようなシー…ーンとした音が大きく聞こえる…。急に…兄や父の姿はそのままだに…背景が白くぼやけたり、元に戻ったりする…。空間がうねるような感覚…。わたしは目を…パジャマの袖口でゴシゴシとこすって再度…視界を目に映す。そこには、何も変わらない…うねって歪む世界が存在した。

「???朱里?…どうした??大丈夫か?」

そう言った兄は、父と同じく…その姿は健全なままに保たれている。兄の声と姿を確認したわたしは、少し落ち着く。耳鳴りの中であるうとも…兄の澄んだ声は、わたしの心にまではっきりと届く。わたしは彼に迷惑をかけたくない一心で答えた。

「…ううん、なんでもないよ…寝惚けただけ…。大丈夫…」

幾分か元気が出たのも事実だ。わたしはそう言うと、このうねった世界を目にしながら…父の食事の世話をする。父が、ブツッ！と、口の中のものを吐き出す。ほんの一瞬…父の姿が白のヒトガタになる。粥の粒を顔に受けながら…わたしは思った。…わたしはついに狂ってしまったのかな…と。

一時頃にわたしは家を出た。…夏の強い日差しが目を襲う。世界はうねって見えるし、耳鳴りも止まないけれど…日差しや太陽、外の雑踏は確認できる。うねって澱みながらも…建物や風景も…子供のころから今まで、何度も何度も目にしたものだ…。少々白くうねって見えても…わたしは世界のことを…これがそうだと判断できた。

この突き抜けた異常を感じながらも、わたしは文ちゃんに会いに行くことにした。昨日、約束してしまっただし…熱や身体的な痛みはない。それに兄にも話をして、了解を取ってしまっている…。今、中止して家で寝込んでいれば…文ちゃんも兄も…きつとわたしを過分に心配する…。そう思っただけの行動だった。…しかし、それは間違いだったのかもしれない。

市電の乗り場が見えるくらいになると…ポツポツと人と出会う。…その人たちはみなが…すべてが…白のヒトガタだった。…ただの一人も残らずに…市電を待つ人も、市電に乗る人も、市電の窓から見える道を歩く人も……みなが白いシルエットに笑みの表情をつけ

て、すーっと足も動かさずに…といつても、足だと思われる部分は無いけど…歩いている…。それらはまるで…映画やアニメに出てくる幽霊のように、そこに佇み…異常なくせに、世界のその他の存在に対して、大きな違和感もなく存在していた…。

そして、日曜日は一時四十分ごろ…の新市街に来て、わたしは絶句した…。…そこにいる人…すべての人間が…白のヒトガタだった…。

わたしはまた目を疑う。何度も何度も瞬きして、目を袖口でこすって…。しかし、すれ違つては目の前を通りすぎる白のヒトガタは…まるでこの姿こそ真実ですよ…と、言わんばかりに堂々と…そして無数に存在していた。

真夏の昼の街に存在する無数の白は、わたしの視界を刺激した。
…わたしは白のヒトガタに混じって、ふらふらとしかめっ面で待ち合わせのマクドナルドまで歩いていく。無数の白い…笑いの視線を受けながら。

笑い顔の白のヒトガタが、急にわたしに近づいてくる。

白のヒトガタ vol.06 (後書き)

白のヒトガタで溢れた街並み…一度見てみたい気がします。

白のヒトガタ vol.07 (前書き)

蛇が自分の尾っぽを啜えてそのまま飲み込んでいったら消えてなくなるかと、子供の時本気で思っていましたねえ。今でもその絵が想像できたりします。

「ねーねー、キミめっちゃ可愛いね??今ヒマ??あ、俺??俺って怪しいもんじゃないよ。エヌオーって雑誌知ってるでしょ?俺、その本の記者やってんの。っていうかさ、キミみたいに可愛い子、全然見たことないんだけどさ。来月号の表紙にするから、ちょっと写真撮らせてくんない??マジで表紙にするし、君くらい可愛いければさ、全然問題ないんだよね!独断も通っちゃうって感じかな??いやいや、撮影つつても、すぐ終わるし、なんだつたら編集部に遊びに来てもいいよ??どうかな?アユオーライ??」

近づくや否や、その白のヒトガタは…テンポよく私に話しかけてきた…。ヒトガタはセリフの途中で、持っているであろうカメラ?で…パシャパシャとわたしを撮っている。カメラのフラッシュのような光も…白く色付き、ヒトガタになったり、シルエットになったりしてる…。いくつかのヒトガタが出てきては消え、揺らめきながら…散るよつに消えていく…。

…耳鳴りは酷いし、言ってることの意味もわからない…わたしは苦笑いして、胸元で両手を振って、

「し、ごめんなさいっ」

と言って、その白のヒトガタを振り切って…逃げるよつにその場を後にした。

周囲に無数に存在する白のヒトガタは…暑さに反応するかのよつに…その背丈や横幅をゆらゆらと変化させている。表情は一樣に笑い顔だが…よく見ると、すべて笑いの度合いや形が違って…と

にかく不気味だった…。視界全体が白く霞みがかっていて、耳鳴りもノイズが増えてきたような気がする、頭も少し痛い…。まるでテレビの砂嵐のような…。わたしの感覚…。

（わたしはどうなってしまったんだろう…。なぜこんなことになってしまったんだろう…。疲れてるくらいじゃこんなにならないよ…。病気に違いない…。精神的なものなのか…。目や耳の病気なのか…。病院に行かなくちゃ…。これじゃ日常生活にも支障が出る…。ただでさえ…。つらい人生なのに…。こんなの…）

無数の思考が、不安とともに頭をよぎる。待ち合わせ場所のマクドナルドに入ると…。酷い耳鳴りの中、女性の声が聞こえる。

「いらっしやませー」

風景は…。うねり以外は変わらずに見える。わたしはカウンターにいる白のヒトガタに向かって注文すると…。適当な席に着く。お昼も過ぎたというのに…。日曜日のせいか、店の中は人…。もとい白のヒトガタでこつた返していた。数分も立たないうちに、わたしが座っている二人席の向かいに白のヒトガタが立つ。そして、そのヒトガタは薄っすらと浮かべた笑みを…。激しい笑いの面に変えて、ゆっくりと言った。

「…うう、いいかしら？」

（文ちゃんじゃない…）

ノイズ交じりの声から、かろつじてそう判断して…。すぐに…。とつさに答える。

「は…はい、大丈夫です…」

答えて、文ちゃんの席がなくなっちゃった…と思う。でも…文ちゃんが来たなら…他のお店に行けばいいか…と思い直す。向かいに座った白のヒトガタは、その身の白をボヤケさせながら…笑みを消した。その他の視界にいる…すべてのヒトガタは…わたしを見据えて…激しく笑ったままである。…瞬間、向かいの白のヒトガタの手元が普通に見えた。

「あ…」

わたしは驚きを声に出して…その手元を凝視した。兄と父以外では…今日初めて目に入る人の人たる姿…。わたしはそれを食い入るように見る。見えたのは手元だけ…それは白くて細い…繊細な若い女性…女の子の手だった。ブレスレットと指輪も見えたけど…はつきりと確認できたのは、細くて白い手と…その指輪の形状だけだった。

指輪は、細い蛇が自分の尻尾を深く啜えて…円を作っているデザインだった。白く細い指に巻きつく蛇は一際目立って…その存在を主張していた。わたしの声と目線に反応して、白のヒトガタは言う。…とてもゆつたりとした口調で。

「……オウロボロス」

わたしは眉をしかめて（?????）となる。

「…オ、ウロボロ…ス??？」

わたしがその単語を言い直すや否や、その白のヒトガタは喋り出す。

「…そう。蛇が自分の尾を啜える姿は…永遠の象徴なの」
言って、

「輪よ。紡がれる命の輪。…そういうデザインなの。素敵でしょ？」
と、そう付け足して…白のヒトガタは笑みを浮かべた。…今の笑みには、わたしを蔑むような印象がないと…そう思った。わたしは、

「…永遠…」

と、噛みしめるように呟いた。向かいにいる白のヒトガタはまたも反応する。

「…そう。命と人生の象徴でもあるわ」

人生という単語を聞いてドキツとする。

(命が…人生が永遠??)

わたしは永遠に続く苦痛と辛さを連想する…。そんなの拷問だ…。
白のヒトガタは、ヒトガタのくせに、わたしをのぞきこむような視線で見つめて…言葉を紡いだ。

「永遠といっても人はいつか死ぬ。…でもまた新しい、まったく別の命として再生誕するの。…輪廻というヤツね」

輪廻…転生？たしか…生まれ変わりのこと…。

(わたしの…こんな命でもそうなるのかな…こんな人生…さっさと

終わっちゃって…もっと他の有意義な人生を送る人の為に…使われればいいのに…)

などと考える。耳鳴りが酷くなって、視界がさらにぼやけたかと思うと、白のヒトガタがまた話し出す。

「あなたもそうなるわ…いずれ…たぶんそうなる」

白のヒトガタの…まるで、わたしの心の中を見抜いたかのような…言葉を聞いて驚く。…なぜかその白のヒトガタの言葉は、わたしの心に自然に…ひたひたと…少しずつ浸透していった…。文ちゃんとお兄ちゃん以外で…まともに話したのは…本当に久しぶりだったせいもあるのかもしれない。…白のヒトガタの服や手が、また薄っすらと人間のそれに見えては…またヒトガタに戻る。

(…やっぱり若い女の人だ。年は同じか少し上くらいかな…)

黒いＴシャツが見えた。そんなことを考えながら、目線を泳がせていると、白のヒトガタの…彼女は…またもわたしに話しかけた。

「…何をそんなに悩んでいるの？」

「それに…痛そうね。それ…」

静かに言う。また薄っすらと見えた彼女の白い指先は、わたしの胸のあたりを指していた。指にある蛇の指輪がきらりと光る。まるで自分の存在を…わたしに見せつけるかのようにして…。

(痛い??ああそうか…わたしの心のことを言ってるんだ…)

そう思つて…わたしのことを思つてくれている人が…目の前にいると考へただけなのに…ボロボロと涙が出てくる。そして…なにも考へずに、ありのままの事を言う。文ちゃんにも兄にも言えないことを…この見ず知らずの…白のヒトガタに打ち明ける。打ち明けるのだが…それは独白のようで…現実にはいもしない神に…すぎるかのような思ひだつた。

「…わたし、最近変なの…。頭の中がおかしくなつて…耳鳴りとかするし…見えるものが白くなつたりする。人が…人がまるで白い…神社とかにある…お払いのヒトガタみたいに…シルエツトで見えるのっ」

ゆっくりと…泣きじゃくるようにして言う。

「…わたしは学校で…ひどくいじめられてるし、家でも…いろいろあるの…人に出会えば笑われて…とても…とても辛い…」

言つて、ポツリと呟くように続けた。

「だから…痛い…心が痛い…」

彼女は、わたしの言葉を聞いた後に…間髪入れずに答へた。

「…それはただの気のせいね」

「感覚はね、その人の心の内から生まれる。聴覚や視覚も、あなた自身が作りだしているものなのよ。あなたが心のどこかで、そう考へているものが見えたり聞こえたりしている…ただそれだけのこと」

とても…冷淡に言い放つて…続ける。

白のヒトガタ vol.07 (後書き)

大泣きするのもストレス解消の一つの手段なのだそうです。悲しい時や苦しい時は泣いてもいいと思います。たとえいい歳したおっさんであっても。

白のヒトガタ vol.08 (前書き)

気が弱い方は、被害妄想という実在するかしないかすら定かでない敵と戦わなければいけないんですねえ。

「意識してるのか、していないのかは知らないけど。あなたのそれはきつと…拒絶の産物。笑われてるからそう見えるんじゃない…。あなたが笑われていると思うから、そう見えるのよ」

「いくらイジメられたとしても、あなたの認識はあなただけのものだわ」

「選ぶのはあなた…もがくのか…消えるのか…。好きにすればいい」と、矢継ぎ早に言っ…話を整理しようと、泣きながらも躍起になっているわたしを尻目に、席を立とうとする。わたしは呆けるように…彼女を形成する白のヒトガタの後姿を見た。…その時、彼女の向こうから、文ちゃんがやってくるの見える。…文ちゃんはどこもボヤけずに…普通に見えた…。

（わたしが作る認識が生み出す…視覚と聴覚…五感…。笑われてい…と思うから、そう見える…そうか…文ちゃんはわたしを笑うはずがないと、わたしが強く認識してるから…白のヒトガタになっていないんだ…。他の人だっ…わたしを知る人ならまだしも…全然知らない人に…そんなに笑われるはずがないっ…）

強くそう思った。思ったというより理解したという感じ…。

…その瞬間、大半の白のヒトガタが元の姿となって目に映る。文ちゃんは、わたしの向かいにいた白のヒトガタの彼女を…チラリと見た後、わたしを確認して、手を上げてわたしのそばにやってくる。

文ちゃんとすれ違った…一瞬前まで白のヒトガタだった彼女は、編み上げブーツに白のスカート、漆黒のストレートヘア…。その後姿だけ見えて…彼女はそのまま店外に出て行って、見えなくなった…。文ちゃんはたった今まで…その白のヒトガタの彼女が座っていたところへ座ってわたしに言った。

「朱里、お待たせっ！あの人…知り合い??」

文ちゃんとわたしは、小学校からずっと一緒にいる。彼女が知らないわたしの知り合いなんていない。わたしは首を横に振った。

「…いや…知らない人なんだけど…」

そう言うと、文ちゃんは考え込むようにして言った。

「…なんかどつかで見たことがあるような気がするんだけど?…?…わからないなあ」

言って、わたしの手を取って続ける。

「さっ!!買い物に行こう!!」

わたしは文ちゃんと街に出た。さっきの黒髪の女の子と話したおかげか…耳鳴りや視界の白、白のヒトガタは軽減していた。わたしたちは、暑い夏の日差しの下を汗だくになって進んだ。そして、遊んだ。人生にある…なにもかもが吹っ飛んでしまっくらい、頭をからっぽにして。

少しの日時が過ぎた。夏休みに入って一週間…わたしは学校の行

事で、立神峡という避暑地に来ていた。立神峡は、熊本市よりも南、車で小一時間ほど行ったところ…八代市は氷川という地域にある。山の中に位置する緩やかな川になっていて、キャンプ場として整地されているレクレーシヨンスポットだ。湖のように…ゆるやかで幅がある川の上流には滝があつて、その上には山と山を掛ける吊り橋がいくつもある。

文ちゃんと新市街に買い物に行った時は…白のヒトガタだった黒髪の子と話したおかげか…少しだけ状態が改善されていた。しかし…その後、わたしを取り巻く環境と、わたしの頭の中の状態は…日に日に悪くなっていった。

…例えば罵詈雑言を吐いて、暴力をふるうクラスメイト、一向に回復しない父、そして…今や、あの時と同じく…文ちゃんと兄と父をのぞく…すべての人は、白のヒトガタとなつてわたしの視界と聴覚を苦しめていた。

けたたましく笑う白のヒトガタは、わたしの不安を煽つては、寿命という稲穂を…鎌で刈り取るかのように、強くわたしを脅かした。

学年全体、皆で同じところ…この立神峡に来ているが、キャンプ地はクラス別になる。希望者だけとはいえ、そこその人数がそこにはいた。もちろん吉永さんや楠本さんであるはずの…白のヒトガタ…、その他にもわたしを笑う…本来クラスメイトであるはずのヒトガタが、十数人その場にいる。

…このところのヒトガタの素行は本当に痛々しい。朝はタバコの火を手の甲に押し付けられたし、つい先ほどはしたたかにお腹を蹴られて、木陰で吐いたばかりだ…。夏休み直前に蹴られた太ももの外側は、今も青く腫れあがっていて…触ると鈍い痛みがある…。わ

たしは吐いた後からついさっきまで、ヒトガタの前でシクシクと赤子のように泣きながら…今は川のほとりに一人で座っていた。

ズズ…という程度に、涙が引いて…鼻をすするくらいになると、いつものように勝手に考え込む。…最近考えるのは…あの黒髪の女の子が言っていた…オウロボロスのことである。

「紡がれて…続いていく命…永遠の命…」

命というものが…本当に輪のように無限に連なっていくのなら…輪廻転生が本当のことなら…わたしのようなら…意味もない苦痛だらけの人生はさっさと終わらせて…他の人の誰かの人生として使って…続いていってほしい。

これが最近のわたしの考えであり…望みでもあった。今までも…薄っすらとはあったけれど…恐くて深くは考えられなかった自殺願望…。少しの視点をズラしただけで…今では強い現実味を帯びて、わたしの心の中を渦巻いていた。…しかも、それはたった一つの希望の光として。

「この世から崩れ去り…消え去ってしまいたい…。存在すら摘み取って…誰かの命にして…」

わたしはゆっくり…ゆっくりと流れる川の水を見ながら…ぶつぶつと独り言を言っ歩いて歩く。そもそも…このキャンプへは行きたくなかつたけど…行かずに家にいると、必ず兄に心配をかける。家の事を話せば…必ず文ちゃんに心配をかける。二人の…海よりも深い優しさですら…今のわたしにとっては…負担に成り得る要素と化していた。…八方塞がりであった。

人の…白のヒトガタのいないところを散策しようと、川の上流へと歩いて、山の中…山の中へと歩いていく。すぐそばを穏やかに流れる川面は、サラサラと綺麗な音を奏でている。強い日差しを遮る木々を揺らす緩やかな風は、草木も揺らして…それらは独特の響きを立てていた。

そこは…この中を歩いて行けば…このままわたしが知らない楽しい世界まで行けてしまいそうなほど…日常生活とかけ離れた情景であった。木漏れ日がさんと…わたしに注ぐ。

わたしは、今日よりも暑い日はないぞ！と言わんばかりの夏の太陽を仰いで…その眩しさに負けて、陽に手をかざす。蝉の鳴き声をバックに、鳥の鳴き声も聞こえてくるのが…このひどい耳鳴りの中でもわかる。わたしは川のそばから離れて、木の枝や木の葉や土でできた…けもの道のような道を歩み進んでいった。

ぼつぼつと茂る雑草をかき分けて、山路を上へ上へと登っていくと、目の端に吊り橋が見えた。よくマンガなどに出てくるほど…古ぼけて危うい感じがする吊り橋だ。もつとそばで見てもよつと、足を運ぶ。身の丈ほどある草を…両手で払って歩いていく。…とても歩きにくい。でもせっかく…こんなところまで来たのだからと…吊り橋を見てみようかと、そう思って歩く。

白のヒトガタ vol.08 (後書き)

仏教の輪廻思想ですね。生まれ変わりは本当なんじゃないか。

白のヒトガタ vol.09 (前書き)

精神的に不安定な方は高いところの上っではいけません。衝動に駆られる時、条件が揃ってはいけません。

「本当に歩きにくいなあ……」

橋が近くなつてくると、その橋まで続く小道に出た。道といっても、特に整地されているわけでもなく、古ぼけた吊り橋を見ても……頻繁に人が通っていないことがわかる。

わたしは吊り橋の近くまでトボトボと歩いて、吊り橋に足をかけてみる。風でゆらゆらと揺れる吊り橋……それはかなり長く……数十メートルほどのもので、ツタのようなものが幾重にも巻かれたレトロなものだった。足場は板でできていて、太い円柱の木片が杭として四方に打たれている。幾度も修復した跡があり、鉄のボルトで補強されている部位もあった。下に激しく流れる川までも……数十メートルはあるように見える。高さもかなりのもので、吊り橋のはじっこから、のぞきこむだけでも背筋がゾクリとする。

唐突に……わたしはこの吊り橋を渡ってみようと思った。わたしは……今まで自分の力では何もできなかった。文ちゃんや兄に助けられて……そうして、生きてきたわたしには……どれだけの力があるのだろうか。学校では執拗ないじめに遭い、家に帰れば……おかしくなってしまう父の世話をする……この決して平凡だとは言えない人生に生を受けてしまったわたし……過酷な人生に相反して、まったくもって意志や想いの強さがないわたし……辛さや痛みを直に感じながらも……なんの抵抗もできないわたし……この吊り橋を渡りきったら……何かが変わるだろうか??

何かが変わるような……そんな気がして……わたしは勇気を出して、吊り橋に足をかけてみた。

幾重にも編まれた蔦を両手で思いつき掴んで、一步…また一步…ソロソロと進んでいく。ありもしない勇気を振り絞って、下を見ないようにして歩いていく。そして理解する…生きるって…こういうことだ。…雑草や木々が生い茂る山路を登って…必死に登りついたと思つたら、渡れもしないような吊り橋が目の前に出てくる。その場所に留まっても仕方ないし、引き返したところで何も変わらない。そうだ…人生は、険しい険しい山路のようなものなんだ…。あきらめて座りこんだら、そこで餓死するだけ…。

死、という単語を思い出して、白のヒトガタの女の子の言葉を思い出す。

「輪、紡がれる命の輪…」

わたしのこの命でさえ…終わってしまったえば…他の誰かの命として再生誕する。死ぬとは何だろう…こうして生きることほど辛いことなのかな。一瞬のことじゃないか…それですべて終わって…そしてわたしの終わる命は新しい命に使われる…。わたしは両手の力を抜いて…下の川をのぞきこんだ。

…輪廻転生。…あれから少しだけ言葉の意味を調べて勉強してみた。仏教の言葉…のようで、生まれ変わりを指す。そうか…よく解脱とかいうけど…それはきつと、この辛くて痛い人生を脱出して…すべての痛みと辛さから解放されて…次の命になることをいうんだ…。

何十メートルも下にある…激しく流れる川を見つめながら、いろんなことを考える。吊り橋が大きく揺れたのはその時だった。

「!?!???」

…驚いて…わたしが来た方を見ると、白のヒトガタが何人も群れて…吊り橋のはじっこを揺らしていた。笑い声に混じって…わたしになにか、罵声を浴びせているような様子も見えたが…耳鳴りがひどくて聞き取ることができない…。それらの白のヒトガタが、吉永さんや楠本さんたちだと…瞬時に判断する…。しかし、そんなことはどうでもいいことだった。

…わたしは今の、このお膳立てされた状況を把握して…これが機会だと思った。抜け出す機会だと。わたしの次に控えている…誰かの命になる機会だと思った。今…この何よりも辛くて痛い生を構成する命を捨てて…死を選ぶ…。そして、この命は…他の誰かに使われる…。その人は、私よりももっと有意義な人生を送ってくれる…。この理屈に何も文句はないし…何の問題もない…。

…だんだんと揺れが激しくなつて、足場の木片と木片の間に…片っぱの足が落ちる。

「きやつつ!!」

わたしの片足は…股の所まで抜けて、吊り橋から宙ぶらりんになった。靴が脱げて、まるで奈落の底のような存在として目の前にある…溪谷の下へひゅーと落ちていく。わたしは反射的に…無我夢中で…両手でがしりと蔦を持っていた。…冷静になつてもう一度考える…。ここで両手を外して、大きく身を振れば…わたしは川に落ちて…叩きつけられるか…流れにのまれて…死ぬだろう…。いや…次の命として生まれかわることができる…。

それだけ考えて…自覚した瞬間に視界の白はますます酷くなった。

耳鳴りに混じっているんな声や、何かを叩く物音らしきものが聞こえる…。頭の中が、ピカソだとかの…有名で高価だけど…意味がわからない…抽象画の様に彩られる。意味不明な思考も混じり、本来聞こえるはずのない声や音まで聞こえてくる…。

(きつと…ついに…わたしの頭はおかしくなって…狂っちゃったんだ…)

そんなことを考えながら…心を縛りつけるようにまとめて…決心する。

(ここが…わたしの踏ん張りどころ…。神様…ほんの一瞬の勇気を…わたしに下さい…)

わたしはできる限り正常であるように…最後の思考と判断能力を振り絞る…そして、一息大きく息を吸うと、頑なに握っていた両手を離して…体を大きく上下に揺すった。

…それがわたしにあつた体感感覚だった。その後は、視覚も聴覚も触覚も確かには感じていない。すべての感覚がうねって混じるかのように…消えた。

最後の認識は思い出だった。…いつかの放課後…気だるそうに歩いてたわたしに…走りながら追いついて…わたしの首元に抱きつく文ちゃん…わたしはよろけそうになって…彼女が言う。

「朱里っつっ！！息止めてっ！！！！」

…最後のセリフこそ…記憶と違う…おかしなものだったが、その思いが、頭の中を過ぎったのだった。

抽象画ってその画家の心や想い、若しくは対象を自分のフィルターに通したものを具現化させたものだと思うんです。そう言う意味ですと、画家の心の中にその光景は確かに存在してるもので、抽象的とは言えないんですね。抽象画を見ればその人の心情を理解できるかもしれません。

白のヒトガタ vol.10 (前書き)

文と書いてあやという名前はとても素敵ですよ。物書きや作家さんにとって「文」という字は特別ですからね。

物事には…膨張と収縮というものがあるそうだ。何事にも変化があつて…また次の変化として、それとは別の方向へ進んでいく。時には…間逆の方向へ変化することだつてある。それにかかる時間も様々で…何年もかかつて膨張したものが一瞬で収縮することもあれば、一瞬で膨張したものの…収縮するのに…それこそ何年もかかることもある。わたしの場合、それは前者だつた。

夏休みが終わつて…足取り重く登校すると、廊下の壁にクラス変更の紙が貼つてあつた。わたしたちの代は、クラスが十一に分かれていたが、十にするには人が多く、十一にするには人が少ないという半端な人数だつた。夏休みの間に転校した人が三人、退学になつたものが二人いる、さらにクラス担任の一人の先生が産休に入ること、で、クラスが十になるとのことだつた。

貼り紙に書かれたわたしの「濱北朱里」という名前のすぐ後ろには「濱中文」という名前があつた。そして…そこには吉永さんの名前も楠本さんの名前もない。さらには校舎も違つたので、彼女たちとは出会う機会すら…ほとんどないという結果になつた。

「やったね！今度こそ同じクラスだつ！！」

わたしを迎えに来た文ちゃんが言う。

「行こう朱里！校舎も違つし、気分も一新だね！」

そう言う彼女は…本当に嬉しそうだ。わたしは、

「うん！」

とうなずいて、彼女と一緒に新しいクラスへ向かう。文ちゃんと廊下を一緒に歩く。それだけのことにすごく幸せを感じる。生きているからこそ…幸せを感じることが出来る。わたしは今までに感じていた痛みや辛さを、あまりにも大きく捉えすぎて…幸せや楽しさを感じ取れなくなっていた。それは痛みや辛さがなくなって…初めてわかったことだった。

（今感じた幸せは…ずっと…ずっと変わらずそばにあったものなのに…）

わたしは文ちゃんが与えてくれている幸せを…もう一度、深く心に留めた。

…吊り橋から落ちたわたしを助けたのは、他ならぬ文ちゃんだった。彼女のキャンプ地は、吊り橋の向こう側のすぐそばだったので、キャンプ地からわたしが橋の上にいるのが見えたそうだった。わたしを連れに行こうと思って、吊り橋のそばに来たところ、わたしが足を踏み外したのが見えたので…走った。そうして吊り橋を渡ったが、彼女の目前でわたしが落ちてしまったので、夢中で自分も後を追って…川へと飛び降りたそうだった。その時のわたしの記憶はとてもあいまいで…、ほとんど何も覚えていないけど…後から病院で聞いた話ではそうだった。

いつだったか…文ちゃんが海に溺れて波に吞まれ、岸壁に体中を叩きつけられて…ということがあったけど…その時と同じくらい、彼女には外傷があった。それに比べ、わたしはほとんど無傷だった。彼女は気を失ったわたしを抱いて、血だらけで必死に川岸へと這い上がったのだらう…、きつとわたしを傷つけまいと、細心の注意を

払って…自分の身を犠牲にして…。

何度も…何度も…何度も…わたしは文ちゃんに謝った。でも、当の本人はあっけらかんとして、

「なんで朱里が謝るのさ??私も同じくらい朱里に迷惑かけてるし」と言つて、譲らなかつた。わたしは彼女の気持ちに触れて…またもえんえんと泣いたのだった。

二学期の初めの日が終わる。わたしの隣を歩く文ちゃんは、夏休みの終わり間際に生徒会を脱退した。

「生徒会なんてもう用は無いしね。もともと先生へのゴマスリだったしさ」

彼女は笑つてそう言った。だから、これからは毎日…一緒に登下校できる。

「それより、また街に行かない??やっと涼しくなつたしさ。読みたい本があつてさー」

家に帰ると、珍しく兄がいる。

「???お兄ちゃん?どうしたの?」

言つと、彼は笑つて、

「いや、今日は学校を休んで、内定先の病院に行つて来たんだ。話

も早く終わつたし、もう帰ってきたんだ」

と、答える。今年看護学校を卒業する兄は、すでに就職先の内定をもらっていた。

「そうなんだ。お疲れさまー」

と言うと、兄は笑って言う。

「…内定先の病院に、父の受け入れが決まったんだ。…朱里や叔母さんにはずいぶんと迷惑かけたけど、ようやく一段落つくよ」

言って、続ける。

「内定先だからさ、就職したら僕も父をずっと見ることができると、専門の人間が介助するから、万一の時も安心だよ。…まあ、何度も話してたけどさ、…やっと現実のものになったよ。少し肩の荷が下りた感じさ」

そう言う兄の表情には、一つの目的を果たした安堵の表情と、新しい環境へ向かわなければならぬ力強い意思とが浮かんでいた。

この日、今までわたしの人生にあつたすべての負担が消え去つた。人間とは勝手なもので…消え去つてしまえば…それは懐かしく思えて…そのうち笑い話になってしまう。それほど…些細なことであつたかと思ひに思つてしまう…。

視界の白や耳鳴りはあれから後も少し残つたものの、白のヒトガタは…病院で目を覚ました時からまったく見えなくなった。思い返せば、橋の上で見たのが最後だった。今は心も体も健康そのもので、

今振り返って考えても…あれはなんだったのかな？？と、不思議でならない。幻覚の類にしては、はつきりと見えていたし、もちろん本物であるはずもない。

わたしは…吊り橋の上で体を揺すったとき…初めて自分の力で人生に抗おうとした。わたしの命を終わらせて…次に控えている新しい命になるうとして…その決断に成功した。その代償として…ほんのわずかな自信を手に入れた気がする。

(きつと…この小さな自信が…白いもやや耳障りな音…白のヒトガタを消したんだ…)

わたしは納得に似た回答を導き出す。

…これから先…何かが起こったとき…わたしは自分の力で解決できるだろうか…。この疑問を最後に…このすべてが解決された日は…過ぎ去ろうとする。天井の星空を見ながら…以前の夜と同じく…心地好く…すつと寝入ったのだった。

九月になっても暑い日は続く。下校…帰途の道を二人で歩く。

「…わたしって、すごく弱い…弱い。でも、少しだけ自分の力が生まれたみたい…。これから先に何かがあったとき…大丈夫かどうかは不安だけど…でも頑張ってみる」

わたしが小声ながらも力強く言うと、文ちゃんはアイスを食べながら答えた。

「ほれより朱里？ふぁんとうに食べなくてよかったの？？アイス…」

言って、口にあるアイスを飲み込んで続けた。

「…その生まれた力をさ…育てればいいだけじゃない？簡単じゃん。…ていうか、私もいるし、何度でも助けるわよ」

文ちゃんはグツと拳を握って続ける。

「こちとら…とっくの昔にそう誓ってるんだから！」

彼女はそう言って…食べ終わったアイスのバーを折った…。

わたしは文ちゃんと一緒に市電に乗り込む。市電に映る景色は…昔見た、綺麗で色明るい様を保っている。人々の活き活きとした表情や、空気が揺らぐほどの太陽の光、美しく構築された人工の建物や橋、道路などの建造物、…すべてがわたしの人生の一部。そう思った。見えるもの、聞こえるもの、嗅げるもの、味わうもの、触れるもの…すべてがわたしの人生の一部。

わたしは文ちゃんの手に触れてみる。「??」となっている彼女を見る。

「どうしたの？」

と、問う彼女の言葉を聞いた。そして、それを幸せに思う感情がわたしに生まれる。それから…もう一度思う。これこそが人生だと。これこそが生きているということであると。

秋口になって、少し涼しく…肌寒くなった頃…夕方にふらりと散歩に出ていくと…ふと近所の公園が目に入る。

(子供のころ…、ここでもよく文ちゃんと遊んだなあ…)

シーソーやブランコを見て、懐かしく思う。夕方の公園には、近所の奥様方とボールで遊んでいる子供たち、犬の散歩をするおじいさん、ベンチには同じ年くらいの女の子が座っていて、中学の時…私も着ていた体操服の格好の中学生もいる。

公園のその雰囲気、思わず懐かしくなり、何の気なしにブランコに座って、体を揺らしてみた。子供のころと同じように…鉄が擦れてキーキーと悲しげに鳴くブランコは…秋の夕暮れ空によく似合っていた。

あれからわたしは…文ちゃんや兄と楽しく毎日を送っていた。心配していた父のお世話も病院のスタッフが行ってくれるおかげで、わたしは週に二、三回通院して…父に会って、話をしては…たまに食事を食べさせればそれでよかった。介助の負担が無くなり、心に余裕を取り戻すと、わたしも叔母も父への愛情を取り戻したというのだから…現金なものだと…少々の自己嫌悪は残った。

看護師さん達は、さすがに専門の人である…彼らの熱心な看護と介助の成果があつて、父の調子は幾分か上向き加減になっていた。もちろん完全回復はもう見込めないが、会話に辻褄があつたり、自分で何かをしようとする動作を見受けられたりと…ここにきて状態の改善だと言えるようなことが、いくつかあつたそうだ。

学校生活もすこぶる良好で…今では文ちゃんと一緒に受験勉強に励んでいる。彼女と一緒に京都大学を受ける、というのが目下の目標であつた。京都という都市に…なんとなく憧れたわたしたちは…極めて適当に…志望校を決めた。しかしながら、これだけ高い目標

だと、兄や担任の先生も文句は言わない。こうして二人で遊びつつも…共通の目標を持って…頑張って勉強して過ごす、という毎日を送っていた。

日も暮れようとしている…カラスの鳴き声が聞こえてきた。もう耳鳴り混じりではないし…公園にいる人が、白のヒトガタに見えることもない。空を真っ赤に染める太陽も…キーキーというブランコの音も、くつきりと認識できている。…生きているって素晴らしい…。そう思った瞬間、

「今にも消えそうなほど…儂い顔をしていたのに」

「何があったのかしら」

と、後ろから声が聞こえた。

白のヒトガタ vol.10 (後書き)

こういう解決の仕方を経験した方は多いのではないしょうか。現実
はこんなものですよね。当人が強くなつて解決するなんて、現実で
はそうあることではないかと。

白のヒトガタ vol.11 (前書き)

予備校で再会するとは思わないでしょうねえ。意外な再会というのは田舎ではよくあることなんです。

一瞬(???)となって、振り返るが…すべてを赤に染めるような夕日がバツクになっていて、その言葉の主の顔を確認できない。でも…どこかで確かに聞いたことがある声だ。夕日に照らされていない足元を見ると…白いスカートと黒の編み上げブーツという…洋服の組み合わせが目に入る…。

「…あ…」

思い出す。あの夏の暑い日に…文ちゃんを待ってて…マクドナルドで話した…白のヒトガタ…さんだ…。彼女は、わたしの反応はお構いなしといった感じで…話を続ける。

「別にあなたに用なんてなかったんだけど。でも、これ…あげるわ」

そう言って、彼女はポイとわたしの足もとに何かを投げる。

「あ…」

それは、あの時の白のヒトガタ…さんが身につけていた…蛇が自分の尾を啜えているデザインの指輪だった。

「これ…」

わたしが状況を理解出来ずに、あたふたしていると…彼女は次の言葉を発す。

「…オウロボロスよ。覚えていないかしら？」

わたしはその言葉に反応する。

「お…覚えています。輪廻転生のこと…仏教の言葉、生まれ変わり…解脱…」

言って、矢継ぎ早に続ける。彼女に話したいことはたくさんあった。

「わたしはこの命を捨てて…次の命になろうと…、そう…解脱しよう…して…失敗したんです」

「…でも、人生を歩むコツを得ることができました」

興奮した…わたしのいきなりの告白を聞いて、今度は彼女が(???)となつていようような気がする。夕日のせいで…顔や表情は全然見えないけど…こつちの話を真剣に聞き入ってくれているような…そんな感じがする。

「わたしに…小さな勇気が生まれて、ずっと昔からあった幸せに気がきました。あの時あった辛くて痛い人生…自分では抜け出せなかったけど…その人生は去っていきました…」

「そして…元からあった幸せが残った。あまりの辛さと痛みのせいで…気付けなかった…幸せ」

わたしが話し終わると…彼女は静かにゆっくりと口を開いた。

「…解脱はそういう意味じゃないけど…でもそんなことはどうでもいいの。あの時、わたしはあなたを見て…あなたは近いうちに死ぬと確信した…」

「でも…あなた生きてる。わたしの確信を覆した人は、あなたが初めて…。だから、それあげる」

彼女はそう言って…わたしの足もとにある、蛇の指輪を指差した。ブランコから降りて…指輪を拾う。それは思ったよりも重い。銀色の蛇はとても精巧に、細かくかたどられていた。拾って彼女を見ると、彼女の去っていく後ろ姿が見える。わたしは、これ以上は何も言えずに…黙って彼女の後ろ姿を見続けた。

白のヒトガタ…紡がれる命の輪…人生の山路…オウロポロス…膨張と収縮…輪廻転生……生きるって色々ある。様々な事象…生きるって、本当に面白い…。

この時、わたしは…確かにそう思った。もう一度思い返す。生きることって…面白い…。本当に…。わたしは、生まれてきて…生きている感覚を吟味して…何度も反芻した。

「わたしが、生きることを面白いつて…感じてる…」

そして気付いた…白のヒトガタや、耳鳴りの大本の原因は、わたしが生きること拒絶したことに困ったものだったと。わたしは、文ちゃんと兄の二人をのぞく…すべての人との関わりを拒絶した。そして、自らの人生と存在を否定することによって…、自らの感覚器を閉じて、異質なものと変化させてしまっていたんだ…。そうやって…人生を拒絶して…現実から逃げようとした…。

「きつと…そのせいだ…」

わたしは銀の蛇を指にはめてみた。気持ち悪いくらいにピッタリだ

った…永遠の象徴がわたしの指にある。

「永遠…」

「…こんなわたしに永遠があるのなら…それは文ちゃんやお兄ちゃんへの感謝の気持ち…」

…これだけは永遠に紡ぐ。何があっても。…そう思って、わたしは公園を後にした。

夜になって、ずいぶんと涼しげな風が身に当たる。少し前まであった…まるで心臓の中心を突き刺すような暑さは…消え入るよう過ぎ去ってしまった。…その後に残ったのは、純粹に…涼しげに、親友と共に生きること喜び…という気持ちであった。

白のヒトガタ vol.11 (後書き)

読了有難う御座いました！次章で一応終わりとなります。もう一話分お付き合いいただければ幸いです。

黒のバケモノ vol.01 (前書き)

最終章です。宜しく願いします!!

最初にそれを意識した時の記憶は…定かではない。物心ついた時からこうだったから。

死。みんなはどれくらい死を意識したことある？…死ぬこと、死ぬと思ったこと、死をそばから見たこと…人間に限らず、死はあらゆるものに訪れる。私の頭の中は…死で充満していた。いや…、正確には死への恐れかなあ。私は…日々の生活を強がって送りながらも、心の中では…死への恐れをとてたくさん抱いていた。

「死は怖い」

「死ぬのはイヤ」

「死を見るのもイヤだ」

「死を…命の終わりに触るのが…イヤなの…」

ありとあらゆるものに…いずれ死は訪れる。父にも母にも…大好きな友達にも、ウチで飼ってる犬のトートーにも…。そして私にも。この世にこれほど恐ろしいことはない。…精神的な病とも言えるべきレベルで、私は死を恐れた。目の前で虫や小動物の死骸を見ると、問答無用で吐き上げてしまう…。そして、ガタガタと奮えて半日はへたり込んで…動けなくなってしまふ。そういう私を、クラスの人たちは不気味がつては変人扱いし、こぞって後ろ指を差した。…ただ一人の友人を除いて。

「…あーやーいやーんっ！学校…遅れる…よーんっ！！」

親友の朱里は、いつもウチの家の前で叫ぶ。朝七時五十分。学校までは歩いて十五分くらい。八時十五分の朝の会が始まるのに合わせ

ての時間としては、少々早い。それは私が朝の準備に時間がかかるのを見越してのことだった。彼女が急かさないと、はからずとも私は遅刻してしまう。

「あかりっ！お早うっ！ちょっと待ってっ！」

私は食パンを口にくわえたまま、ランドセルを肩にかける。朱里は、

「…ふふっ、あやちゃんってば…またお寝坊さん…」

言っ、靴先をトントンと地面に当てて、かかとを直す。私は玄関の扉を跳ね開けて、朱里のそばへと駆けていく。

「お待たせっっ！」

朱里の手を掴んで、小走りで行く。

「大丈夫だよ、文ちゃん。…ちゃんと間に合うよ」

彼女は、私に手を引かれて、トットツと前のめりになって歩く。彼女という時だけ…親友である彼女という時だけ、私の心は和らいだ。…こうしている間にも、世の中の何かが確実に死に絶えている。そして、…私の寿命も、他の生きているすべての生命の寿命も減っていつている。…そう考えるだけで…胃液の酸っぱい味が口に思い出されて…吐きあげそうになってくる…。確実に忍び寄る死…そしてそれを恐れる私。恐れに似た感じの思いは、常に私の頭の中のどこかで渦巻いていた。

もちろん…父や母、学校の先生や朱里以外の友達にも、私が話を出来る…あらゆる人に相談した。私は死を恐れていると、死を見る

のが…迫り来る死がイヤだと…。だが誰も私の恐れを理解してくれなかった。…いや、理解しようとしてくれなかった。父や母は、「死ぬこと…それは仕方のないことなんだ。…でもな、文…。それはずつとずつとずつと先のことなんだ。今は何も怖がることはない。精一杯生きて、生きることを噛み締めればいいんだよ」

と笑って、私を元気付けた。先生は、

「文ちゃん？…人や自分が死んでしまうのは悲しいし怖いよね…。でも、それはみんなが経験することなんだよ。先生はお父さんもお母さんも亡くしてしまっただけ…。ちゃんと乗り越えたぞ。…文ちゃんほど強い子だったら、きっと先生より上手く乗り越えられるんじゃないかな…」

と言って、私の苦悩を拭おうとした。クラスメイトは、

「そんなこと心配することないよ。別に、今起こることじゃないじゃん」

「文ちゃんってヘンだよー。病気でもなんでもないんでしょ？元気なら死なないじゃない」

と、素っ気ない返事をくれる。

クラスメイトはともかく、もっともらしい言葉を並べて…私を励ましてくれる両親や先生でさえも…、その実、私の気持ちを理解しようとするしていないことが、子供ながらにわかった。

彼らは今までの人生を通じて身につけた演技力とセリフの巧みさ

を使って…私の気持ちを理解しようと思わずに、私を元気づけようとしていた。…だが、朱里だけは違った。唯一、朱里だけが私の恐れを理解してくれた上で言う。

「…なにも心配ないよ。もし…文ちゃんが死ぬことがあったら…私も一緒に死ぬ…ね」

私が守ってあげる…とは言わないのが彼女らしい。彼女の存在とこの言葉が、今の私の大きな支えになっている。だが、朱里が唯一の支えになっっていると思えば思うほど…朱里の存在が自分の中で大きければ大きいほど…彼女が死んだ時のことを心に思い浮かべて苦しんでしまうのである。いまや彼女の死は、自分の死よりも怖かった。

ジージージーと、セミの鳴き声が聞こえる。朱里と二人で歩いていく通学路。私はひと時の癒しに包まれながら…七月の暑さに汗ばみながら…強い日差しに照らされながら…雲一つない透き通るような青い空を仰ぐ。そうして、学校まで二人トトトと歩いて行った。

死に至る病。五歳児の時の私の場合、とりあえずのきっかけは絶望ではなくて、肺炎だった。

高熱にうなされていた私は、五感を感じなくなり、ただ心を攻められているという状態だった。人の形をしていない私の心が、黒いドロドロ、ヌメヌメとしたゲル状のものに飲み込まれて、それと一体化していく。痛みはまるでない。心地よさもない。思考だけが正常であり、五感には本当に何も感じなかった。…そして私の思考は…幼児ながら、その黒いゲルに絶望と恐怖を感じた。

臨死体験。後の私が人に聞いて調べた話では、光を感じたり、三途の川が見えたり、自分より先に死んだ者と会ったり、トンネルのようなものを抜けたり、死んでいる自分の肉体を見たり、自分の人生のシーンが走馬灯のように思い返ったり… e t c … するらしい。けど、私のそれは伝え聞く話とは随分違っていた。

黒のバケモノ vol.01 (後書き)

臨死体験の経験は無いです。絶対大丈夫というのなら体験してみたいもんです。でもまああれだけ証言に共通性があるということは、何かあるんでしょうねえ。

黒のバケモノ VOI・02 (前書き)

死後ってどうなるんでしょうねえ。生きてる間に解明されないかなあ。

死に臨んでは、心地良さや安らぎを感じる人もいるそうなのだが、私の場合は、絶望から生み出される恐怖以外には何もなかった。黒いスライムのような液状態のものに包まれていく私の精神は、まるで漫画や映画で見るとような…手足を縛られた拷問のようなもので、私に一切の拒否を許さない。そして、私の個という精神や心と呼ばれるものは、黒いゲルと一体化して徐々に消えていく。…これが死か、と思つて、そのまま消えてゆくのか…消えはしないのか…というところまでは覚えていない。

病に犯されて、病床に静かに横たわっている私は…なんとか意識を取り戻して、九死に一生を得たらしい。私が持つこの意識が消えるか消えないか…、という記憶の次の記憶は、随分と飛んでいて…退院後のことしか覚えていない。

身体は五体満足で後遺症は無く、外見は何事もなかったかのように回復していた。しかし、心には死への恐怖が生まれていた。それは死という存在の自覚と、ペットの死や交通事故死した友人という身近の者の死を見る…という実体験を通して、次第に大きくなっていった。

命とはなんだろうか。死とはなんだろうか。痛みとはなんだろうか。死んだ先はどうなっているのだろうか。それらすら私にははっきりとわからない。私は、正体不明の化け物と戦っている。今まで誰も…決して勝てなかった死という名の化け物と。

学校から帰るとき、朱里はいない。彼女は兄と一緒に生徒会に属

しているため、ほとんどの日において、私とは帰宅の時間がずれるのだった。朱里がいなくて、日が暮れようとして、ほんの少し辺りが涼しく、肌寒くなることもあって…私はトボトボと足取り重く歩いていく。そしていつもの公園を前にすると、いつものごとく立ち寄ろうとしてうなだれて歩く。

私や朱里が住む花園という地域…そこは住宅街であるため、いくつかの公園が近くにあった。それなりの広さがあり、遊具や木製のベンチなども設置されているため、近所の幼児連れのお母さんや小学生の遊び場となっている。

辺りを見回す。幼稚園くらいの男女がワイワイと走り回っているほか、ベンチには同じ年くらいの女の子が座っている。犬の散歩をしているお爺ちゃんと、赤ん坊を連れのお母さんたちが井戸端会議をしている。

この公園の風景は毎日のことだった。私も含めて常連さんである。毎日見る顔ぶれ…この名前すら知らない知り合いの人たちも…いずれ時が来れば、死を迎えて…この世から消えていなくなってしまう。

私はまたもやそんなことを考えながら…ブランコに腰掛けて、ゆっくりと体を揺らした。ブランコの鉄の部分は、大変に古ぼけていて錆びている。部品が擦れてキィキィと寂しげな音を立てた。まるで、私の心の痛みの嘆きを音で現わしているかのような…。

何も知らない子供達は、きゃあきゃああと騒いで楽しそうに遊んでいる。ランニング姿のおじいさんは、犬が行きたい方向とは別の方向へ犬を引っ張りまわしては、公園内を散歩する。立ち話に花が咲くお母さんたちは、子供が足にまとわりついて遊んでいるのも無視

して、世間話に集中している。…そしてベンチに腰掛けて、公園内の人の様子を寂しげな表情で見る女の子…彼女は私と同じで学校帰りなのか、脇に赤いランドセルを置いていた。小学生くらいに見えるが…私は彼女を学校で見たことはなかった。

おぼろげな意識で公園内を見渡しながらも…心は死への恐怖で満たされている。もはや自分で自分が病気だろうと判断できるほど…私は死を恐れている。しかし、これも自覚していることだが、私は心の芯は強く、勝気で負けず嫌いな性格だった。私は体も大きいし手足も長い。幼稚園や小学校の低学年の時など、同級生はもちろん、上級生の男子とケンカして勝つほどの負けん気の強さと腕っぷしを持っていた。私自身、そんな男に負ける気もしなければ、足元を見せるつもりもなかった。そして、十一歳になったその私が最近考えることは…この死の恐怖を克服することだった。

「濱中文vs死…」

ボソリと独り言を言う。ふと視線を感じて…その先を見ると、ベンチに腰掛けた寂しげな目の少女がこちらを見ていて…バチリと目が合った。私は目を逸らして、考え事を続ける。

…人はみんな死ぬ。不死などありえない。死を克服するなんて…私でなくても不可能に違いない。…ではどうするか。死を取り除くのではなく、死の恐怖を取り除くしかない。死を恐れなくなれば…私は死を意識することもなく、いざ臨終の時になっても、取り乱さなくてすむかもしれない…。

「…でも…どうやって…??」

私は、あまりにも敵が大きいことを…改めて意識して涙が出てきた。

…他人が行っているのは、死そのものを今の自分には起こりえないものだと思えて、何も考えていないだけだ。死を恐れていないのではなく、自分は死に縁がないものだと思っている。何の根拠もないのに…刻々と迫っている寿命の切れる時を、自身には来ないものだとして、楽観視しているに過ぎない。

「幸せな人たちだなあ。……なぜ私は気づいちゃったんだろ…」

子供たちがキャッキヤと遊ぶ声に。かき消されてしまうほどの小声でそう呟く。

あの黒いドロドロとした液体に飲み込まれるのだけは…もう二度と体験したくない。たとえその先に待っているのが天国だとしても…私はあれには二度と…触れたくない。

「…あや…ちゃん…」

名を呼ばれて、うつむいていた顔を上げると…そこには朱里がいた。

「…もう日も暮れるのに…暑い…ねー」

朱里は笑顔でそう言う。私は、

「うん。生徒会、もう終わったの？」

と返答する。彼女は、

「…うん」

と答えて、

「…帰る」

と、私に手を差し出した。

私はブランコのチェーンを持っていた手を外して、朱里の手を握った。彼女は、よいしょ！と、私を立ち上がらせるように手を引っ張る。

…辺りを見回すと、お母さんたちは子供を連れて帰ろうとしているし、犬の散歩のおじいさんはすでにいなかった。きゃあきゃあど騒いでいた子供たちも二、三人に減っている。…ただ木製のベンチに腰掛けてこつちを見ている少女だけは…私が来たときのまま、まるで彫像のように動かずに、こちらを見たままだった。公園を後にしようとする。朱里は、

「…あやちゃん、また…死ぬってコト考えてた??」

と、心配そうな表情でたずねる。

「うん…少しね」

私がそう答えると、彼女はきつく私の手を握り締める。

「…気休めにもならないけど…私はずっと…一緒にいるよ。…あやちゃんと…」

言って、

「…死ぬときも…きつと死んでからも…ずっと…」

続ける。

黒のバケモノ vol.02 (後書き)

子供って妙な価値観や概念に捉われて悩んだりしますよね。近所の
子供がノストラダムスとか2012年予言やらで泣くほど悩んでま
したけど。今時ノストラダムスって。

黒のバケモノ vol.03 (前書き)

悩みに対して流されるのか立ち向かうのか、この差異が文さんと朱里さんの違いですが、結果どうなるかはどちらの選択肢が正しいなんて無いんですよね。

私は彼女の気持ちが好きだった。でも…それと死への恐怖とは話が別だ。私は自分のためにも、そして私を心配してくれている朱里のためにも、死の恐怖への対処法を考えなければならぬ…と強く心に思った。

「…あーやーやーちゃん！…おはよーっ！！」

朱里が来た。私はいつものごとく朝食を口にかき入れて、ランドセルを肩にかける。

「行つてきますっ！」

お母さんに言つて、朱里の手を掴んで学校へ向かう。

「…あやちゃん、ちゃんと宿題やった??…算数の…」

朱里が言う。

昨日家に帰つてから、一応は手をつけた…算数の宿題。最近は、学校や公園にいる時だけでなく、家に帰っても死についてはかり考えている。…ただ、内容が少し変わった。

今までは、純然な恐怖の心だけだったが、昨日…公園で考え込んだ後は、恐怖への抵抗の心が、少なからず生まれていた。私はなんらかの手段を見つけて、この恐怖心に打ち勝つ。そう考えると…具体的には何も策がなくとも、少しだけ恐怖心が和らいた気がした。

「うん、一応やったよ。黒川先生に怒られたくないもんね」

笑って答える。朱里は私の…少なからずも明るくなった顔を、ホツとした表情で見ていた。

学校が終わる。朱里は今日も生徒会の用事で居残りだ。私は昨日よりは幾分か軽い足取りで、学校を後にした。公園の前を通る。…今日も寄っていいこう。

今日は、例のごとく井戸端会議のお母さんたちと、子供たち…昨日いた幼稚園児のかわりに、中学生くらいのお兄ちゃんたちが、数人でサッカーをして遊んでいる。犬と一緒に公園をぐるぐる回って散歩するおじいさんもいる。…木製ベンチには、昨日目が合った女の子もいる。脇に赤いランドセルを置いて、白いワンピースを着て…大きな麦藁帽子を被っている。靴は男の子が履いていそうな黒くて大きいスニーカーだ。

彼女は公園に入ってきた私をちらりと見た後、足をブラブラさせて、公園にいる人を見ている。…また瞬間目が合った。私は特に気かけずに、いつものごとく、ブランコに腰掛けてユラユラと体を揺り動かした。…ブランコもいつものごとく、キィキィと泣いている。私もうつむいて考える…そう、いつものごとく。

…死への抵抗…か。…そもそも、人は自分がいつ死ぬかなどわからない。死病を患ったとしても、自分の死期はおおまかにしかわからない。健全な人間ならば、普段は自分の死なんて意識しない…。

原因だって様々だ。病気で死ぬ人もいれば、寿命で死ぬ人もいる。事故で死ぬ人もいれば、殺される人もいる。自殺する人だっている。

赤子の時に死ぬ人もいれば、百年を超えてから死ぬ人もいる。死へ至るプロセスがわからない。…それはまったくのランダムで、人間の意思も希望も介さない。

まるで目に見えない…人間より上位の存在に首根っこを掴まれて…痛ぶられているかのような…不条理なシステムだと思った。ここまで思考して、まるで抵抗手段を思いつかないことに絶望する。絶望は更なる恐怖を生む。私はどうすれば…。

空は夕暮れ。日が赤く染めている。…カラスが寂しげに鳴いていた。

「ううう…。グスツ…」

私は死のことを考えて泣き出す。…いつかは必ず消える命の炎。…消えたくない、消えるのを見たくない…。

肺炎で死にかけた際に生まれた死への恐れ…その死の恐怖を大きく増進させたのは、ペットの死と友人の死だった。トートーは、私が三歳の頃から飼っていた犬だ。彼は私といつもじゃれあい、兄弟がいなくて両親は共働きという…私の家での良き遊び相手だった。…でも、私が九歳の時に、病気で亡くなってしまふ。両親はこれを機会にと、私に生命のあり方と死のあり方を教えた。私は子供ながら、薄っすらとした知識はあったが、実際に身近な存在の死を目前で体験して、死の恐ろしさを知った。

…ほんの数時間前まで、確かにそこに存在したトートー。しかし…今は、それはトートーではなく、トートーの抜け殻の肉片になっ
てしまっている。大好きだった存在との別れの悲しさもあったが…
それよりもとにかく不明と謎に包まれた死の存在が怖かった。

「ああ…トートーは、きつとあの黒いドロドロしたものに包まれて…這い上がることが出来なかったんだ…」

私が言うつ独り言に両親が答える。

「トートーは、お空の上の天国に行つて、幸せに暮らしているのよ。いずれはみんなそこに行くの。そこでまた幸せに暮らすのよ」

…私は両親の言葉を鵜呑みにはできなかつた。あの黒い液体に包まれた先に、そんなものがあるとは思えなかつた。死はどれだけ考えても…どれだけ勉強しても解明できない…なのに、それは確実にはつきりとこの人生の最後に存在する。…回避する方法はない。…せめて、いつ来るのか…その後はどうなるのか…どういう意味があるのか…わかつていさえすれば…、まだ心が落ち着くというのに

もう一つ…、友人の死は私に理不尽さを教えた。ほんの一年ほど前の話だ。小学校に入学して以来…私は朱里とその友人…薫君と三人で学校に通っていた。卒業までずっとそうなるはずだった日常…そうなるはずだったのに、不条理な死は、躊躇いもせず彼を襲つた。

当時通学路にあつた、建設中の病院の看板が落下し、数歩先にいた朱里と、靴紐を結び直していた私との間にいた…彼を直撃したのだ。…朱里は前を見ていたため、その瞬間を目にはいかなかったが、靴紐を結び直して前を見た私は…その瞬間を目撃した。彼が死に喰われる瞬間を、至近距離で経験した。友人が…友人だった物…に変わる瞬間の出来事。…今の今までそこにあつた命が、なんの前触れもなく消える出来事。…予想も抵抗も覚悟もできない出来事。…私はそれを間近で見た。

一瞬の惨劇が、目に焼きついたショックより先に：友人を一瞬にして失った悲しみより先に：他にも落下物がないかなどの心配より先に：私に、死に対する疑問を生まれさせた。

「…なぜ彼なの？」

あの時、なぜ私でなく、朱里でもなく、他の誰でもなく：彼だっただろうか。そして、心の底から：この理不尽を恐れる感情が一気に吹き上がってきた。こうしてる間にも：死を誘発する何かが、私や私の周囲の人に迫っていて、ポンと命を消し去ってしまうかもしれない。一瞬先に用意されているという可能性を否定できない：確かな死の存在が、私を恐怖のどん底へと突き落とした。

死への恐れ、永遠の別れからくる悲しみ、その際に生じるであろう肉体的な痛み、これらを恐れることから生じる精神的な苦しみ：死に関することすべては、総じて私を脅かした。

この深くて重い死への恐れ：は、私にノイローゼをもたらした。薫君の死によつて、私の死への恐れは、ますます酷くなって、恐怖のあまり夜中に泣き叫んだり、吐いたり、痙攣したり、失神したりした。また、微熱が収まらずに、ストレスから顔や手足が麻痺したりもした。

黒のバケモノ vol.03 (後書き)

近年ようやく精神的な病気への理解が広まってきました。精神的な病気は偽る人が多く、そんなせいで印象が悪いのでしょうか、本当に患っている方にとってはとても迷惑な話なんじゃないかな。

黒のバケモノ vol.04 (前書き)

薫くんの話は実話を元にしています。看板が落ちてきたわけですが、もう数十年前の話、当時では大して話題にはなりませんでしたが、今だったら左の人たちの格好の餌食になりそうな話です。

…朱里に連れられて…かろうじて、学校にだけは行っていたが…
両親も私を見かねて精神科医やカウンセラーに診せる始末だった。
数ヶ月かかって…精神科の医師とカウンセラーの治療、両親や朱里
の支えで、私はどうにか日常に復帰したが…それ以来、思考の中の
ほとんどは、死への恐怖で埋め尽くされてしまった。

「…あや…ちゃん…」

呼ばれて我にかえる。朱里が目の前にいる。朱里は笑顔で私の手を
引いて言う。

「…帰ろ、…あやちゃん」

私は朱里にたずねる。

「朱里、薫くんのこと覚えてる？」

朱里は悲しげな表情を作って答える。

「…もちろん…覚えてるよ」

彼女は私の心情を察しながらも、何を言っているのかわからない…
けども、それを私に悟らせたくない…という態度を取る。朱里は嘘
が下手だ。でも、そんな朱里の気遣いが嬉しかった。朱里はいつも
私に優しい。

「いいの。なんでもない。ごめんね、朱里…」

朱里は、泣きそうな目で返答した。

「私こそごめん…ごめんね…なんにもしてあげられなくて…」

私は、昨日とは逆に…朱里の手を引いて帰ろうとする。ふと公園を振り返った。時刻は六時半…昨日、公園を後にした時間よりも遅い。公園にはもう人はいない。ただ、木製のベンチに少女が座っているだけだ。

（あの子、いつも長い時間一人で座って、いったい何をしているんだろう???でも、それは私も一緒か…）

私は登校の時と同じように、朱里と手を繋いで家に帰った。

来るべき死への抵抗手段…。相手の正体がわからない以上は為す術がない。夜、枕に突っ伏して考える。暑い…今夜は熱帯夜だ。この晩の私は、死への恐れへの抵抗手段を見つけることはできなかった。

「明日…誰かに聞いてみよう」

そう、自分でわからない以上、誰かに頼るしか手段はない。そう思った。

次の日…セミはこごぞとばかり、ジージーと鳴いている。一昨日も昨日も今日も…雲一つない快晴だった。今日は早起きできて、両親と一緒に朝食が取れる。

「ねえ、お父さん？とてもとても怖いものがあってさ、自分でそれに打ち勝とうと思つとき、お父さんならどうする？？」

朝のお父さんはいつも機嫌が悪い。お父さんは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに、

「うーん」

と考え込む。私の朝食を持ってきた母が、笑って答える。

「相手はなに？…怖い夢とか？お化けとか？」

私は、薫君が亡くなったときのノイローゼの事を考えて、両親に心配かけないようにと誤魔化した。

「うん、そんなものかな。とにかく得体の知れないものなの」

私は精一杯の作り笑顔をする。考え込んでいた父が答える。

「お父さんだったら、とにかく戦ってみるかな。戦ってみて、勝てそうになかったら…一度逃げて、また準備してから戦えばいい」

と笑って言った。

…恐怖心とは常に戦っている。負けるのは時間の問題…今の状態では、とても勝てそうにない。準備すると言っても…私に出来ることとは限られてる。今まで散々思考してきたけど、準備としてまったく新しい次元の方法を用意するか…まったく別の力を用いるか…しかない。

「…あーやーちゃーん!…おはよう〜っ!…」

朱里だ。

「ほらほら、朱里ちゃんが迎えに来てるわよ。早く行ってらっしゃい」

お母さんが私のランドセルを持ってきてそう言う。私は、

「うん、お父さんありがとう!」

と、できるだけ元気な声で言っ、玄関に出る。父は心配そうな顔つきをしていたが、私がリビングを出るときには、笑顔で手を振って送ってくれた。いつものごとく、朱里と手を繋いで学校へ向かう。

「あやちゃん、おはよう」

朱里は上機嫌だ。私は朱里にも問う。

「ねえ、もしもね、朱里にね…とてもとても怖いものがあったさ、自分でそれに戦って勝つって決めたとき…朱里ならどう戦う??」

朱里はその一言で気付く。

「…死ぬことのこと…だよな?」

私は黙ってコクリと頷いた。朱里は少しの沈黙の後、静かに言った。

「…ごめんね、私にはわからない…。でも、死じゃなくて…ただ、とても怖いものと戦うんなら…私なら…勇気を振り絞ってチャレン

ジしてみたい…。たとえそれで失敗したとしても…精一杯やったんなら…後悔はしないと思うから…」

そう言っつて、朱里はもう一度、

「じゅめんね」

と、付け足した。

そうだ。確かに自分の全力をもって戦えば…なにかしら光が見えてくるかもしれない。今までは恐れるがあまり、腰が引けてしまっていたのかもしれない。

「朱里…私、死への恐怖を克服しようとしているの。ただビビってばかりじゃ、人生ずっと暗いままだもん」

「…朱里にはたくさん迷惑かけてて…、ずっとすつと…。私が恐怖に打ち勝つまで、こうして手を繋いで、一緒にいて欲しい」

朱里は笑って答える。

「…うん、…私、あやちゃんなら勝てると思う。…だってあやちゃんくらい強い人…わたし、他に知らないもの！」

言っつて、

「…それに…わたしはずつとあやちゃんと…一緒にいるよ！…だから急ぐことない…どうなつても…わたしたちはずつと一緒…だから」

私は素直にその言葉を受け入れた。

「ありがとう…、ありがとう、朱里…」

学校に着く。上履きに履き替えて教室へ行く。朝の会が終わって、職員室に行く先生をつかまえた。

「先生、黒川先生っ」

担任の黒川先生はとても静かで、大人しいお爺ちゃん先生だった。怒るときや叱るときもとても物静かで、語りかけて諭すように怒るので…生徒からは優しいお爺ちゃん先生だと言われて、慕われていた。

「あ、あ〜…なんだい??濱中さん…」

先生はゆっくりと私のほうを向いて、ゆっくりと返答した。先生が持つ独特のゆったりさは、朱里が持っているのんびりとした雰囲気とよく似ている。口調のテンポも同じ感じだった。

「私、先生に質問があるの」

先生は??…なにかな?、という顔で私を見る。私は、

「先生…は、死ぬの怖いですか?死ぬのが怖くてたまらない時…、自分でその恐怖に打ち勝とうとするとき、先生はどうしますか?」

と、ストレートに…正直に質問した。先生は私の心や恐れのごことは知らないはずだ。だから遠慮なしに聞ける。彼はしばらく考えて、ゆっくりと口を開いた。

黒のバケモノ vol.04 (後書き)

黒川先生のモデルの方に最近またお会いしましたが、非常に高位な学位をお取りになって大出世されてました。どれだけ年をとっても、積み重ねていくと評価されるものですねえ。見習って頑張りたいです。

黒のバケモノ vol.05 (前書き)

「死は恐れるものではなく、むしろ喜ぶべきもの」というのはかの諸葛孔明も言ったとされるそうです。死をどう捉えるのか、どう対処していくのかというのは、人類永遠のテーマと言えるでしょう。

「あ…あ…、…そうだね」

また間をおく。

「…僕も…死ぬのは怖い。…だけどそれは人なら…命を持つものなら、誰でもが…そうなる運命だよね…」

「あ、あ…昔…僕の先生…先生の先生はね…。死は怖がるものでも、避けるものでもないと言っていたんだ…。死は、その人が精一杯生きた結果だから…むしろ人生を全うしたことを…喜ぶべきものだよね…言っていたよ…」

言葉をつむぐ。ゆっくりと。

「…だから濱中さんも…物事の死は恐れるものでない…と考えたらどうか…?」

先生はそれだけ言うと、微笑して職員室へと去っていった。私は一人残されたまま、先生の言葉について考えていた。

「死は…その人が精一杯生きた結果…」

でも、人生は…薫君や、彼よりもっと短い人もいる。生きたいと願いながらも、悔いを残しながら亡くなっていく人も大勢いるはずだ。それなのに、精一杯生きた結果つてのはおかし…。それに、現に私自身が死を恐れている…気が狂いそうなほど…。恐れるべきものではない、喜ぶべきものだ…と、言われて…ハイ、そうですね

などとは、到底納得できない…。

「でも…人によつては精一杯生きて…胸を張つて死んでいく人もいるはずだ…」

その差は何からできるのだろうか…。幸せに人生を送る人、恨みながら人生を送る人…、特に何も考えずに人生を送る人…。私は精一杯生きて…満足して死んでいくのかなあ？？…それはわからない。私の死の時まで、誰にもわからない。

授業が終わる。放課後になつて、私は早々と学校を後にした。朱里は今日も生徒会の用事があるので、下校は遅い。私が公園にいれば、きつと今日も立ち寄つてくれるだろう。朱里がいない…一人で歩く過程は、私にとつて…とても辛くて心が痛む時間になる。

いつもの公園に着く。木製ベンチに座っている少女が見える。

(あの子も毎日いるなあ…。私より先にいて、私が帰るときもまだベンチにいる…)

公園に入る際に…またバチリと彼女と目が合う。すぐに目を逸らし、ブランコまでとぼとぼと歩く。子供たちのかくれんぼの声が聞こえる。

「はーちー!!くうーうー!!じゅうーうう!!もういーかいつ!!?」

「まーーただよー!!」

お母さんたちの井戸端サミットも開催中だ。幼児たちも砂場ではし

やいでいる。…犬の散歩のお爺ちゃんもいる。互いの歩道が交差するため、ブランコに辿り着くまでに、彼に接近する。最も近くなつたところで、

「…お爺ちゃんは、死ぬのって怖くないですか??死への恐怖と戦つたことありますか??」

と、私は彼に唐突に問うた。

今にして思えば、当時の私の恐れは、人に問うこと…人との接触で癒されている部分が確かにあつた。私の問いを聞いたお爺ちゃんは、不思議な顔で私を見つめた…。そして神妙な顔つきに変わる。

「…俺はお嬢ちゃんより早く死ぬだろうねえ…。でもな、不思議と死は恐れておらんわい。人間は死ぬのを恐れるものなのかもしれない。でも、昔から偉い学者さんや宗教者たちが、死についての話をしてるからな」

「そんな偉い人たちの話を聞いていると、不思議と恐れはなくなるもんだよ…」

そう続けて、

「お嬢ちゃんには難しい話かもしれないけどな。…気になつたんなら、学校の先生にでも聞いてみるとええ」

私がお礼を言うと、お爺ちゃんはニツコリ笑つて、犬の散歩に戻る。…そうか…きつと昔にも、私と同じ辛い思いをした人がいたんだ…。そういう偉い人たちは、すぐ勉強して…きつとこの恐怖心を克服した…それが宗教とか、倫理や道德というお勉強の元になつたのか

もしれない。

…今度ウチに来るお坊さんにも聞いてみよう。…勉強すれば、どこかにこの恐怖心を克服する方法があるかもしれない。…それだけでなく、理解さえできれば…自分で対策を思いつくかもしれない。

私はいつものごとくブランコをキーキー鳴らして、体を前後させた。希望の光が少しだけ見えたせいかな…今日は幾分か気分が軽い。でも…今から勉強してだなんて、遅すぎるんじゃないだろうか。なんたつて、この恐怖心は…今にも私の心を黒く覆ってしまいそうだったから…。それに、あの憎き死というものは、こうしてる今にも…私にガツンと襲い掛かってきてもおかしくない…。

私はブンブンと首を振って、冷静さを取り戻す。朱里や両親がいなければ、今頃私は狂ってしまっただろう。それでなくとも…四六時中、死の事ばかり考えてて…いまや、まったく知らない人まで話しかけて相談する始末だ。

「私は…どうなっちゃうのかな…」

頭を抱えて独り言を言う。もう死ぬなら…いつそのこと、今バツサリと欲して欲しい…。そして、またあの黒いゲル状のものに覆われて…。そう考えると…頭痛がして、吐き気がしてきた…。

(…しまった…想像しすぎた…ううう、気持ち悪い…頭が痛い…)

彼女と話したのは、その時が初めてだった。

「…あや…ちゃん」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「朱里…」

朱里が来てくれた…。私は少し気分が良くなって、うつむいていた頭を戻して、彼女を見上げた。…だが、そこには朱里はいなかった。…代わりに、いつも木のベンチに座っている少女がいる。

黒のバケモノ vol.05 (後書き)

ウチの近くには公園がまるで無いのでこの話を書くために取材に行きました。写真を何枚か撮ったのですが、我ながら超不審者。男性だと公園に一人でいるだけで不審者扱いされてもおかしくない世の中ですからねえ。

黒のバケモノ vol.06 (前書き)

うーん、死ってなんなんでしょうねえ。

漆黒のワンピースに赤いリボン。黒のソックスに、こないだも履いていた大きい…まるで男の子が履くようなスニーカー…。赤のランドセルを背負って…ワンピースとは正反対の色の白くて細い手足は、この外気温に相反して…とても冷たげだった。私は思わず、

「???…あなただれ???」

と、問うた。彼女はスツと、ストレートで真っ黒の髪をかきあげて耳にかけると、

「文ちゃん…私ともお話ししようよ」

と、語尾を歌うようにと言って、隣のブランコに座る。隣のブランコもキーキーと音を立てて揺れる。私の音よりも幾分か…明るくて余裕がある音…。私はためらわずに言った。

「…あなたは死ぬの怖くない???…死の恐怖って感じたことある?」

彼女は私を見て、微笑して答える。

「私は感じたことない。…でも知っているわ」

(感じたことないけど…知っている?…バカみたい)

「感じたことないのに…知ったような口きかないでっ」

…自然と感情が高ぶり、私は強い口調で言った。彼女は、私を見な

がら言葉を紡ぐ。

「悪かったわ。…でも本当のことなの」

言って、続ける。

「あなた、こんなに怯えて…。触れたことあるんでしょ？自分か、他人の死に…」

彼女は微笑したままだったが、口調は極めて真剣だった。

「私は知っているよ。…解決法」

…解決法??その言葉を聞いて、理解して…私は目を見開いた。…私が、望んで望んで望んで望んで望んで望んでいることを…この子が知っている!??

私は藁にもすがる思いで、彼女にすべてを打ち明ける。涙ながらに。肺炎のこと、トートーのこと、薫君のこと、ノイローゼのこと、死への恐怖のこと、黒い液体のこと、なんとか抵抗したいということ、支えになっっている朱里と両親のこと…すべてを、まるで神に懺悔しているかのように…名前も知らない少女に話す。彼女は、私を見ながら黙って話を聞いていた。私は哀願した。

「…本当に解決法があるんなら…教えて欲しい。私は死に…打ち勝ちたい」

彼女は私を見つめたまま、少し間を置いていった。

「あなたが考えているとおり…死からは逃れられない」

「でも、あなたが考えているとおり…死への恐怖は克服することができる」

言って、

「…死と同じものになるのよ」

と、付け足した。彼女が言っている言葉の意味がわからない。

「ど、どういふこと??」

彼女は続けた。

「あなたが死そのものになればいいのよ。…つまり、死と同化しろってこと」

(言っていることが矛盾している。死を恐れているのに…死ね…と
言っているの??)

「…別に死ねと言ってゐるわけではないわ」

彼女は私の思ったことをピタリと当てると、溜息を交じえて返答した。

「…難しいことを言っても、きっと理解できないだろうから、簡単に方法だけ言っわ」

言って、続ける。

「あなた…もう一度、その黒い液体に満たされなさい。…今度は逆らわずに…でもそれに負けないようにして…逆にその液体を取り込んでしまうような…そんな心持ちで満たされるの」

(う…それは…)

「そうすれば…とにかくそうすれば、解決すると思うの」

彼女は、途中の詳しい説明をしようとしたけど…やっぱりやめた…という感じで、話を切り上げた。

…初めて聞いた具体的な対策法。そう言えば、私が質問した人たちはみんな…抽象的な物言いばかりで、具体的な話は何もしなかった。彼女の言葉には…意味こそよくわからないけど、なにか真に迫る感じで…どこか頼れるような力強さがあつた。

「でも…私の恐怖のほとんどは、あの黒い液体にあるの…。あれにもう一度触れるなんて…」

彼女は、

「あはは」

と笑って、返答した。

「あなた、さっき自分で自分は強いって、言ってたじゃない」

「きつと…次にその黒い液体と対面した時が、あなたの人生の正念場になる…」

「だけれど…なるようにしかならない。あなたは…きつと…」

彼女はそれだけをゆっくりと言って…微笑したまま、急にスクと立つ。ブランコの鎖がうねってシャンシャンと鳴く。ふと公園の入り口を見ると、朱里の姿が見えた。木製ベンチに座っていた少女は、朱里をチラッと見る。そして、

「じゃね…あなたの健闘を祈っているワ」

と、朱里がいる方とは反対側の出口に向かって歩いていく。私は、

「…あ、ちよつと待って！」

と、止めたが…彼女は後ろ向きそのまま、手を少し上げて振って…そのまま公園を後にした。ちよつと彼女が公園を出て行くくらいの時に、朱里が私のそばまで来る。

「??? あやちゃん??? 今のだあれ? お友達??」

私は彼女ともつと…もつと深い話がしたかった。…そして詳しい話をして欲しかった。初対面にもかかわらず、私の苦悩を理解してくれた少女…。なんだかんだ言っ…具体的な抵抗方法を教えられた今、私の心には希望が生まれていた。今まで何の対策手段もなかったけれど…、一つ抵抗の手段ができたと思えば…、自然と心の恐れが薄れていった。

「いや、知らない子なんだけど…」

朱里は???となっていた。私は朱里の手を取って、

「さ、帰るっ…」

と促す。朱里は、私の気が晴れている表情を見て、喜んで私の手を引く張る。そして、家まで先導するように走った。

ベンチの少女と話をしてから数日…あれ以来、彼女は公園には来ていない。もう公園には来ないな…と、直感めいたなにかしらを感じる。

給食を食べた後の昼下がり、黒川先生の発するゆっくりの静かなトーンによる授業を聞くのは、ある意味苦痛だ。…眠くてたまらない。朱里は、私の前の席で熱心に授業のノートを取っていた。

…でも、少し前は死について考えていて…眠くなるなんて状態じゃなかった。あの少女と話して、その晩に考えをまとめた。それ以来の私の思考は、ここ数年では初めてというくらい安定していた。

次にあの黒い液状のものに出遇ったら…気持ちをしっかり持ったうえで、逆らわずに、逆にそれを取り込むような心持ちで一体化する。ベンチの女の子の話では、それで死と同じものになれて、死への恐怖心を取り除くことができる…はずだ。

それはそれで恐ろしいことだったが、私は我がことながら、自分は根本の部分では芯が強いと思っっている。黒い液体に怯えながらも逆にその瞬間を待ち望んでいる挑戦的な自分がいることに気付いていた。ここ数日の心の安定は、そうした強い心の面と、具体策の実行へ賭ける希望が作り出しているのだろう。

「確かに。次が…私の生命の正念場になるわ」

黒のバケモノ vol.06 (後書き)

死や不幸への恐れがあり、それへどう対処するかの方法があると思います。その方法は本当でも嘘でもいいんですよね。本人が信じて不安や恐れが軽減される事に価値があるんです。それが宗教なんですねえ。

黒のバケモノ vol.07 (前書き)

ランダムに人が集まる公園なんかでも常連のメンバーとか、コミュニティみたいな感じが出来てますよね。人付き合いって不思議。

ポツリと言う。朱里が（??）と振り返る。私は笑って、

「なんでもないよ」

と、小声でささやく。朱里も少しだけ微笑んで前を向き直す。

あの黒い液状のものこそが、死そのものなんだと思う。人が死神だとか、臨死体験だとかを説明するとき、きつとあれと同じものを体感して、それを語っているに違いない。体験者の表現方法の違いで、言葉尻に差異が生まれるだろうけど…きつと同じものだ。

あれを逆に取り込む。私に…できるのかなあ?…しかし、一旦なにか策ができれば強気になれる。今までのノイローゼや苦悩は、死があまりにも強大な上に、謎に包まれていて…何もなす術がなかったことが原因だったのではないか、と今は思う。それは一つ策ができただけで、現状は何も変わらないのに、こんなにも強気でいられる実感から確信できたことだった。

帰り際に公園の入り口を通る。いつものメンバーがいる。ただ…木製のベンチには誰も座っていないかった。もう…この公園にも用はない。私のやるべきことは、もう決まってしまったのだから。

ベンチの彼女が言った抵抗策を聞いて以来、私の心の比重は変わった。死への恐怖心が百パーセントだったのに…今では、逆にそれを取り込んでやろうと、黒の液体を待ち望む気持ちが六割くらい、死への恐怖が四割くらい…となった。もちろんその四割も、時が経つにつれて和らいできたし、相変わらず私を心配して支えてくれる

朱里の存在で、そのほとんどがかき消されていた。

表面上は、私の異常性は解消されたように見えるに違いない。事実：気は随分と楽になっていた。しかし、黒の液体の再来を待ち望む気持ちは、日に日に強くなっていく。

(…次に対峙したとき…私はアイツを取り込んで…死と同じものになって、恐怖を取り除くんだっ！)

またしばらくたつと、これが私の思考のほとんどになった。そして、これが私の生きる目的となった。

「今日も何も起こらない…」

「今日もアイツには会えなかった」

「今週もアイツが来るような機会はなかった」

「今月も何もない…」

私はアイツとの対峙を待った。ただひたすら待つ。黒いゲル状のアイツは、私の死のすぐそばにいる。私が死に接近するとき…また現れるに違いない。…いつまでも…待ってやる。

一年後…。

「…あやちゃん…もうすぐ…だよー」

夏休みを利用して、学校の行事で海へ行く。保護者会と生徒会、学校が組んでの行事だが、自由参加のため、出席人数は各クラスの半数程度になる。当の私も去年は、

「行きたくないーっ」

と、駄々をこねて欠席していた。

毎年このような企画が催されて、今年は生徒会の提案で海になった。天草は牛深町の海水浴場に向かっている。少し距離はあるが、車に乗って日帰りで十分に行ける距離にある。

最近の私は…周囲からはとても元気になって、本来の勝気で強気の姉御肌の文に戻った、などと言われている。だが、内心はかつて何も変わっていない。今でも、まず第一にアイツに再会して…と考えているし…一人になって、ふと死への恐怖に怯えて震えていることもある。しかし、たまに…ずっとこのままでもいいかもしれない…と思うほど、思考や感情は一応の安定を保っていた。私をもっとも近くで見ている朱里も、未だ心配はしてるものの、

「あやちゃんが…元気だから…私…嬉しいんだ…」

と、ここ一年…ことがあることに言っ。

彼女は私を支え続けてくれた。彼女の存在は、私にとってなくてはならない存在のままだった。たった今も私の横に座っている彼女は、

「…去年…あやちゃん来なかった…から」

「今年は…一緒だね！…私、あやちゃんが元気だから…嬉しいんだ！」

と、また似たようなことを言っている。…思えば、私は朱里に迷惑をかけっぱなしだ。黒のアイツと片が付いたら、彼女に恩返ししな

きや。これもこの一年間、ずっと思い続けてることだった。

「…朱里…ありがとう…」

まだ片はついていない…ボソツと独り言のように言った。彼女は微笑を返事として返してくれた。

八月の前半、日差しは強く、雲一つなく晴れていた。海の浜辺には、すでに大勢の人々がごった返している。日差しの他に、パラソルや水着にある多種多様な色が目を奪う。はしゃいで泳ぐ小さな子供達の声が聞こえてくる。私たちは、とりあえず水着に着替えて、昼食を取ることにした。気が早い子は、すでに海に泳ぎに出ているが、朱里と私はビーチパラソルの下で寝そべっていた。…朱里も私もろくに泳げなかったからだ。朱里が言う。

「…去年も…その前の年も…泳ぐ練習しようって言ったのに…忘れてたね…」

「泳げないけど…水辺で遊ぶくらいはできるし、まあいいじゃない」

私は、んーっつと伸びをしながら答えた。

「食っちゃ寝、食っちゃ寝ってのも悲しいから…少しは海に出ますか」

そう言っつて、朱里を誘って海に入る。ボールや浮き輪を持ってきて、足がつく程度のところで遊ぶ。

今日は本当に日差しが強い…でも、海の水はそれを失わせるくらい…適度な温度で私たちを包む。独特の塩辛さが口の中を刺激す

る。…海に入るといのは、これでしか味わえない体感の具合がある。

そこらじゅうにいる人たちの間をぬって、少しずつ深いところに移動しながらも、その体感を味わう。海の中は…あの黒いゲルとは正反対で、なにかしらの感覚がある。…とても心地良い。

私は精神を集中して…私に触れて、私を満たしている海水を…逆に取り込むような心持ちになってみた。目を瞑って、聴覚と味覚を無視してみる。海の触覚だけが残る。

(…似てる？あの時と似てる…かな…)

私は心を強く集中させて…体を動かさずに、心を動かしてみた。周囲の水を取り込んで、私のものにするように…。体は水面に浮く。

「…なんだ、これで足を動かしたら、泳げるんじゃないの??」

集中が途切れた私は…水への浮き方を学んでいた。遠くから朱里が叫ぶ。

「…あやちゃーんっ！あまり遠くへ行くと…危ない…よっ！」

「わかってるーっ！」

私は大声で答えて、さらに数時間同じようなことを繰り返した。

四時ごろになって、ようやく浜辺にあがる。朱里は驚いたような表情で私を見る。

「…あやちゃん…？泳げるんだ？？」

私は少し得意げになって、

「ううん、すこし浮き方がわかっただけ」

と答える。

「体の力を抜いて静かにしてれば、勝手に浮いてきたんだ。あとは足をバタつかせれば、ちよつとずつ前に進むみたい…」

朱里は普通に感心している。

「…私もやってみる！！」

と、海に向かっていった。私はその姿を笑って見て、パラソルの下へ戻る。

うちの小学校の子供たちが、海から上がって一休みしていた。引率の親の一人が、

「正ちゃんと卓ちゃんの姿がさつきから見当たらなくて…。文ちゃん、よかつたら朱里ちゃんと一緒に探してきてくれないかしら？…遠くに行つてないといいんだけど…」

と、かき氷を食べながら…他のお母さんたちと話しながら言う。彼女は私の返事を聞くよりも早く、話題へと戻つていった。…またく世のお母さんたちは、どうしてこつちも話好きなんだろう。私は、

「うん、わかつたー」

と返事して、トボトボと海へ向かっていった。ふと海面を見ると…
朱里がガボガボと溺れていた…。

黒のバケモノ　v o l ・ 0 7（後書き）

溺れるでガボガボという擬音は高橋留美子先生が使うんですけどっけ
？あかねを連想しました。

黒のバケモノ vol.08 (前書き)

そう言えばもう何年も海に入ってませんねえ。海水浴でなくとも釣りで行ったりとチャンスは少なくないはずなんですけども。

「…いないねー」

テトラポットの上から、一通り浜辺を見渡しても、二人の姿は見えなかった。

「…あの岩場の向こうにでも…行ったのかな??」

朱里が指差した先には、浜辺を仕切るかのように岩がある。それが人が登れそうなくらいのもので、岩盤というほどのものでもない。

浜辺を挟んで…指した岩の逆側が今いる場所で、テトラポットが多数置いてあり、ここでも浜辺を仕切っている形になっている。浜辺の後方には道路があるのだが、高いところにあるため、階段を介さないと道路側には行けない。階段の前にはお母さんたちが陣取っている。いくら話に夢中でも、そこを通ろうとすれば気付くはずだ。

テトラポットの仕切りの向こう側は…ずっと浜辺が続いているが、ここから見渡せて、人がいるスペースもある。そこかとも思っていたが、見当たらなかった。

「うん、あの岩場のほうしか…思い当たらないね」

私は朱里に答える。

「行ってみようか」

朱里の手を引っ張って、浜辺を横断する。彼女は辺りを見回しながら

らついてくる。岩場に着くと、手ごろな場所に手や足をかけて、よいしょ！と、気合を入れてよじ登った。

「岩に体をぶつけないよう注意して」

私は朱里にそう言っつて、先に登り、朱里を上から見る。その時だった。

「あ、…あやねーちゃんっつ…！」

私は後ろから呼ばれて、すぐに振り向く。そこには正ちゃんがいた。岩場はそこそこの距離続いていて、数メートル先にある岩の上に彼はいた。彼は焦った口調で、叫ぶように言う。

「た、卓ちゃんが…海に落ちて溺れてるんだっ…！助けて！あやねーちゃんっ…！」

彼が指し示した先にある海面には…男の子がもがいてる姿があった。足を滑らして落ちた??その海場は深そうで、岩に当たって弾ける波は、とても強そうだった。私はすぐさま岩場の下にいる朱里に、

「朱里ッ…！卓ちゃんが溺れてる！私はどうにか…助けるから、朱里は大人の人、呼んできてッ…！」

と早口にまくし立てるように言う。朱里は、

「…わかった…！！…あやちゃん気をつけてっ…！」

と答えて、焦った様子で砂浜をパラソルの方へと走っていく。それを確認すると、

「正ちゃん、下がってて！何があっても…ここを動いちゃダメよ！」

と言い放って、すぐに…卓ちゃんの場所を確認して、岩場から数メートル下の海面に飛びこむ。鼻をつまんで、足を抱きかかえて丸くなって…。

「ザブンツッ！！」

耳の聞こえ方が水中のものになり、視界が薄くなる。卓ちゃんは数メートル先で、ゴボゴボともがいていた。水着の上に着たＴシャツが水を吸って急激に重くなる。

(…しまった…脱いでくるべきだった…)

しかし、そんなことを考えてる暇はない。卓ちゃんの位置を再確認して…体を浮かして手足をばたつかせてみる。波が辺り一面の海を掻き混ぜて、思っように進めない…。が、少しずつ、少しずつ卓ちゃんに近づく。

私が待ち望んだ瞬間…黒いアイツとの再会は…その直後だった…。なんとか卓ちゃんに近づいた私は、彼を抱きかかえる…しかし、彼はパニック状態のまま、私のＴシャツにしがみつき暴れ出した。

「卓ちゃんっ！！もう大丈夫だからっっ！落ち着いて！！暴れないでっ！！」

大量の海水を飲みながらも、彼を落ち着かせようとする。が、それは無駄な行為だった。彼が暴れるのをなんとか押さえつつも、岩場

のほうへ近づこうとする。

…その時、一際大きな波がザブンと押し寄せ、私と暴れる卓ちやんを大きくさらった。私はその波にのまれて…上半身を背中から岩盤に、したたかに叩きつけたのだった…白くなる視界の中で…なおも彼は暴れていた…。私は大量の水を口に含んで…すべての感覚が遠くなっていた。…これが私の海中救出劇の最後の記憶となった。

私は自分の体を失っていた。…触感や視覚は何もなく…聴覚も…何も感じない。…だが不思議とわかる。

「…あの時と同じだ」

…私の記憶のほとんどはぼんやりとしていた。だが…一つだけはつきりと覚えていることがあった。アイツとの再会、アイツとの対峙…アイツとの同化…アイツを取り込むッ！！この時が…私が待ち望んでいた瞬間…。

(きつと…次にその黒い液体と対面した時が、あなたの人生の正念場になる…)

もうこの人の顔も、声も、聞いた場所も…思い出せないけど…その誰かさんの言葉が頭に響いて、私は反応した。

「…ここが私の…正念場ッ！！」

心構えを改めて、アイツを持つ。

「わ…私はお前を取り込んで…そして…お前に満たされる…同じ

もの…になってやるッ!!」

心を強く強く強く持つ。もはや…体もないクセに…拳を握りしめる
ようなつもりで気合いを入れる。そしてさらに言葉に力を込めた。

「さあ来いッ!黒のバケモノッ!!」

私はその概念もないクセに…目を見開いたようなつもりで言った。

それは五感を失い、ただ考えるだけの存在となった私の前に現れ
ていた。…すでに。

黒のバケモノ vol.08 (後書き)

後々、妙な夢を見た。。。と表現するような出来事です。

黒のバケモノ vol.09 (前書き)

臨死体験ネタはまたやってみたいですねえ。体験者に取材したりして。

私が気付くと同時に、目の前に出現した…まるで私の認識が…今ここに作り出したかのように。私に体があつたのならば…ゴクリとつばを飲んでいただろう。黒のバケモノと対峙して…思考の中に、恐怖と絶望が溢れ出てくる。…以前と同じように。

私は恐怖と絶望を必死で押さえつけ、心の中を落ち着けて…私は黒のバケモノを飲み込むような、今までに何百回とシミュレーションした心持ちになってみせる。

…黒のバケモノとの近さが徐々に迫る。…ここからが前回とは違う。…なにか雨が降っているかのように水滴のようなものが、ポツポツと思考の中に意識される。私はその水滴を思考から追い出した。「ッッ！邪魔するなッ！」

黒のバケモノとの距離は…近い。今、集中を解くわけにはいかない。思考の果ての切れ端の部分が…黒のバケモノと触れる。触れたところから…徐々に私はヤツを取り込んだ…と、同時に私はヤツに満たされていく…。

今度は…感覚がある…それは心地良いものであった。絶望と恐怖が一気に消え失せた気がした。正常な思考はどんどん薄れていき…今はもう本能と認識しかなかった。知識や記憶、反応、思考…といった心の働きは消えかけている。

「……………やん！……………」

雷鳴のように…心になんらかの認識が割り込んでくる。

(邪魔するなッ)

弱々しく認識に反応する。

「…やちゃんっつ…!!!…!!!…」

立て続けに起こった認識は…今度は私に多大な反応と記憶を蘇らせた。

「…あか…り…???…」

私は懐かしい…昔知っていた何かを連想した。それを思い出しただけで…意識が一気に和らいでいくのがわかる。それは…黒のバケモノの同属になっていく独特の心地良さとは…また別のものだった。…意識の中に存在する私と黒のバケモノが薄くなってゆく。

「…あやちゃんっつ…!!!…」

今度ははつきりと認識できた。

「…朱里」

また水滴のようなものが意識に現れる。それと同時に…その水滴は、もはや意識のほとんどが黒のバケモノと化してしまった私を…強引に引っぺがす。黒のバケモノを洗い流していきながら…。

「…あやちゃんっつ…!!!…」

ノックされてから…しばらく経つと、勢いよく…扉をバタン！と開けて、朱里が病室に入ってきた。彼女は汗だくで、赤い帽子を被って手にはリンゴのかごを持っている。

「あかり…あんだ、まるで赤頭巾ちゃんじゃない…」

私は薄っすら笑って言った。…一夜明けて今日。昨日と変わらないくらいの日差しから、外の暑さは窓から外を見るだけで容易に想像できる。朱里は、

「…うん、お外は暑くてさ…ここは涼しいね…。…寒くない？…大丈夫？？」

と、リンゴを向きながら私を気遣う。

病室…昨日、海で溺れた私は、そのまま病院に搬送され、九死に一生を得た。医者の話では、あそこで一度意識が回復しなければ…悪ければ植物人間状態…というほど危なかったらしい。

背中を岩盤に叩きつけられたことよって溺れた私は、酸素が足りない状態になって、さらに波にさらわれて、何度も岩盤に叩きつけられて…海に沈んでいくところを、黒川先生に助けられたらしい。

先生は朱里に耳元で叫ぶように指示して、的確に応急処置を取り行ってくれたそうだ。私が助けに入った卓ちゃんの方も、器官に多量の海水が入って、危ない状態だったそうだが、同時に病院に運ばれて処置され、命に別状はないとのことだった。

朱里が、

「…はい」

と言って、リンゴの乗ったお皿を手渡す。私はそれを無言で受け取って、口に入れる。確かな味覚が口に広がる。そして思い返す…。

私は、あの黒の化け物と再会して…ベンチの少女の言った通り、ヤツと同じものになるため、ヤツを取り込みながらも…その一部として満たされていった…。でも、途中でそれは遮られた…水滴のようなものが降ってくる認識のあとに…朱里の声が聞こえた。そして…ほぼ同じものと化していた私とアイツは、強引に引き裂かれた…。私の意識には、そう記憶されていた。

「…失敗しちゃったか」

黒のバケモノ vol.09 (後書き)

入院した事はありませんが、病室の雰囲気は好きです。ご老人が集まるのもわかる気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0971w/>

あずさが通る！

2011年11月20日18時57分発行